

### 第3節 古墳と遺物

今回の調査では、10基の古墳を確認した。3号古墳については周溝の一部のみ調査した。4号古墳から9号古墳については墳丘及び周溝を確認し、石室や埋葬施設から遺物が出土した。10号古墳から12号古墳については、石室を確認したのみで墳丘や周溝は確認できず、遺物も微細な土師器以外出土しなかったが、他の古墳との構築技法の類似性、石室の法量<sup>1)</sup>などから古墳として扱うこととした。

#### 1 洞北山3号古墳

**検出状況** 本遺構は、平成26年度の試掘・確認調査（TP2）において確認していた遺構である。本工事において、3号古墳の墳丘及び石室は現状保存されることになり、周溝の外縁のみ調査を行うことになった。3号古墳は横穴式石室をもつ円墳と考えられ、現況で側壁や外護列石の一部と思われる礫を確認できた。

3号古墳の周溝は、以西の古墳の周溝とは異なり、その東西が緩やかに低くなっている。これは、3号古墳が2号古墳とともに、小規模な舌状尾根の頂部に立地しているためである。この付近のIb層にはラミナが観察され、3号古墳西側の旧谷地形を近世以降の崩積性堆積物が埋めることで標高が逆転し、崩落土に含まれていた細かい土砂が流出して舌状尾根周辺に堆積したと考えられる。一方、SD3の北側は、近世以降の崩積性堆積物が流入する前に人為的な造成が行われており（SM1平場）、周溝の北西部は最終的にこの造成土によって埋め立てられていた。

なお、3号古墳東側の発掘区では、土層確認トレンチによって意図せず周溝の掘方を削平してしまったため、土層断面により周溝の立ち上がりを確認した。

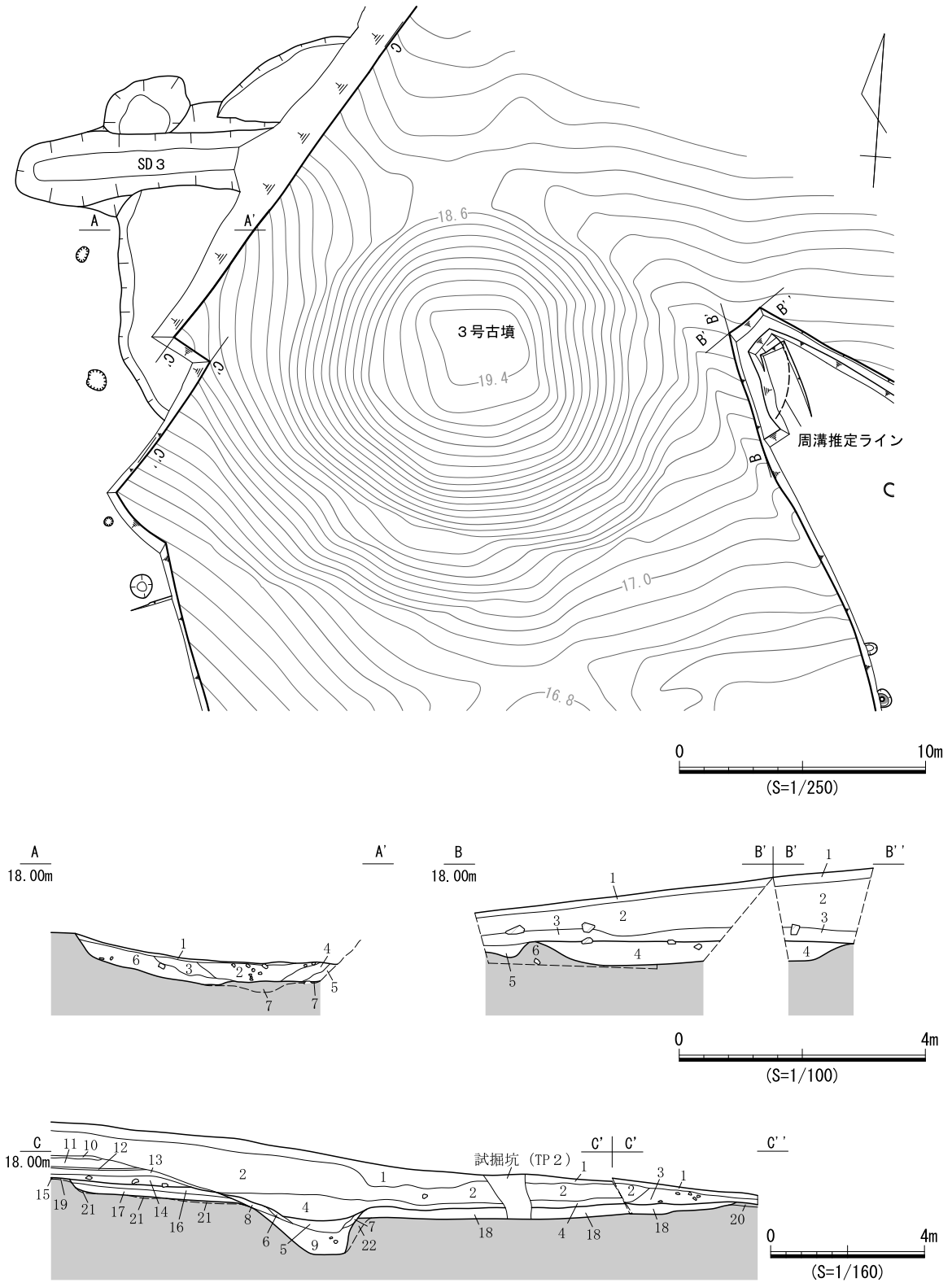
**周溝埋土（第13・14図）** SD3の南側では、周溝上面にI層が流入しており、近世以降の崩積性堆積物が堆積する以前には窪んでいたと考えられる。その下層は旧表土と似た黒褐色土で埋没しており、場所によって礫が多く混じる。墳丘からの流土と考えられる土層（A-A'断面の4・5層）もみられ、自然に埋没したと考えられる。SD3より北側では、発掘区壁面の土層観察から、SD3南側の周溝と同様に、墳丘や斜面上方からの流土によって自然に埋没していたと考えられるが、SM1が造られる段階ではわずかに窪んでいた可能性が高く、造成土によって埋め立てられた。

**周溝（第13・14図）** 掘方は褐色又は黄褐色の砂礫層まで掘り込まれており、埋土との差は明瞭であった。今回の調査では、墳丘側の状況は確認できなかったが、断面形は皿状か、逆台形に近い形状と考えられる。A-A'断面で検出した幅は4.25m、深さ0.84mである。

**洞北山3号古墳の規模** 3号古墳墳頂の海拔は約19.4mであり、3号古墳の周溝底面との比高差は、A-A'断面では3.4m、B-B'断面では3.1mである。また、この古墳の東西の発掘区で確認した周溝から推定される外周の直径は東西約27mあり、今回調査した古墳の規模としては最も大きい。

**出土遺物** SD3の北側から土師器が1点出土したが、細片のため器種不明であり、実測は行わなかった。

**遺構の時期** 時期不明である。なお、洞北山3号古墳は両袖式の横穴式石室とされているが、出土遺物は確認されていない<sup>2)</sup>。



第13図 洞北山3号古墳平面図・周溝土層断面図(1)

## A-A' 断面

- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5～3cmの角礫を10%含む 径10cmを超える角礫を3%含む
- 10YR3/4 暗褐色粘質シルトブロックを10%含む 周溝埋土
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を40%含む 径10cmを超える角礫を5%含む 周溝埋土
- 3 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を25%含む 径10cmを超える角礫を少量含む 周溝埋土
- 4 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20%含む 径10cmを超える角礫を少量含む 周溝埋土
- 5 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5～2cmの角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を5%含む
- 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを5%含む 周溝埋土
- 6 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を1～2%含む 周溝埋土
- 7 10YR5/8 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する 径10cmを超える角礫を10%含む III層 (黄褐色土)

## B-B' 断面

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を40%含む 10YR5/6 黄褐色シルトブロックを10%含む I a層
- 2 10YR4/6 褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む
- 10YR5/8 黄褐色砂礫土 (径5cm以下の砂礫で大部分を構成する) と互層をなす I b層
- 3 10YR2/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を20%含む 径20cmを超える角礫を5%含む
- 10YR2/3 黒褐色粘質シルト土を15%含む II b層
- 4 10YR1.7/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を15%含む 径20cmを超える角礫を5%含む
- 10YR3/3 暗褐色シルトブロックを1～2%含む 周溝埋土
- 5 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20%含む
- 10YR3/3 暗褐色シルトブロックを3%含む 倒木痕
- 6 10YR5/6 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし 径3cm以下の角礫で大部分を構成する 径10cmを超える角礫を15%含む III層 (黄褐色土)

## C-C' 断面

- 1 10YR3/4 暗褐色シルト ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20～45%含む 場所により 10YR4/4 褐色シルトブロックを含む I a層
- 2 10YR5/8 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する
- 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト層 (ややしめる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を10%含む) と互層をなす
- またB05グリッド以東では色調が10YR4/6褐色を呈しラミナが見られる I b層
- 3 10YR4/6 褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を15%含む 径10cmを超える角礫を15%含む
- 10YR3/4 暗褐色粘質シルトブロックを5%含む
- 4 10YR4/4 褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を2%含む 径5cmを超える角礫を2%含む
- 5 7.5YR3/4 暗褐色粘土 ややしめる 粘性あり 径1cm以下の角礫を層状に1%含む SD3埋土
- 6 10YR3/4 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 10YR3/2 黒褐色粘質シルトブロックを少量含む SD3埋土
- 7 7.5YR4/6 褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を少量含む 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルトブロックを少量含む SD3埋土
- 8 10YR4/4 褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 10YR3/2 黒褐色粘質シルトブロックを5%含む SD3埋土
- 9 10YR3/4 暗褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を35%含む 径10cmを超える角礫を5%含む 10YR5/6 黄褐色砂質土を5%含む SD3埋土
- 10 10YR2/1 黒色粘 /3 暗褐色シルトブロックを5%含む II a層
- 11 10YR4/6 褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する 径10cmを超える角礫を5%含む
- BQ9グリッド以南では黄褐色の色調が強くなる また10YR3/2 黒褐色粘質シルト土を10%含む II a層
- 12 10YR2/3 黒褐色シルト ややしめる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 径5cmを超える角礫を1～2%含む
- BQ9グリッド以南では10YR3/3 暗褐色シルトブロックを5%含む II a層
- 13 10YR3/3 暗褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20%含む 径10cmを超える角礫を5%含む II a層
- 14 10YR3/3 暗褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を15%含む 径10cmを超える角礫を20%含む 10YR4/4 褐色シルト土を5%含む II a層
- 15 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む SF1埋土
- 16 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を7%含む 径5cmを超える角礫を3%含む
- 10YR3/3 暗褐色シルト土を3%含む 周溝埋土
- 17 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5～2cmの角礫を5%含む 径10cmを超える角礫を3%含む
- 10YR4/4 褐色シルト土を少量含む 周溝埋土
- 18 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5～2cmの角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を5%含む
- 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを5%含む 周溝埋土
- 19 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 径10cmを超える角礫を5%含む 旧表土 III層 (黒色土)
- 20 旧表土 III層 (土色不明)
- 21 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を5%含む III層 (黒褐色土)
- 22 10YR5/8 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の砂礫で大部分を構成する III層 (黄褐色土)

第14図 洞北山3号古墳平面図・周溝土層断面図(2)

## 2 洞北山4号古墳

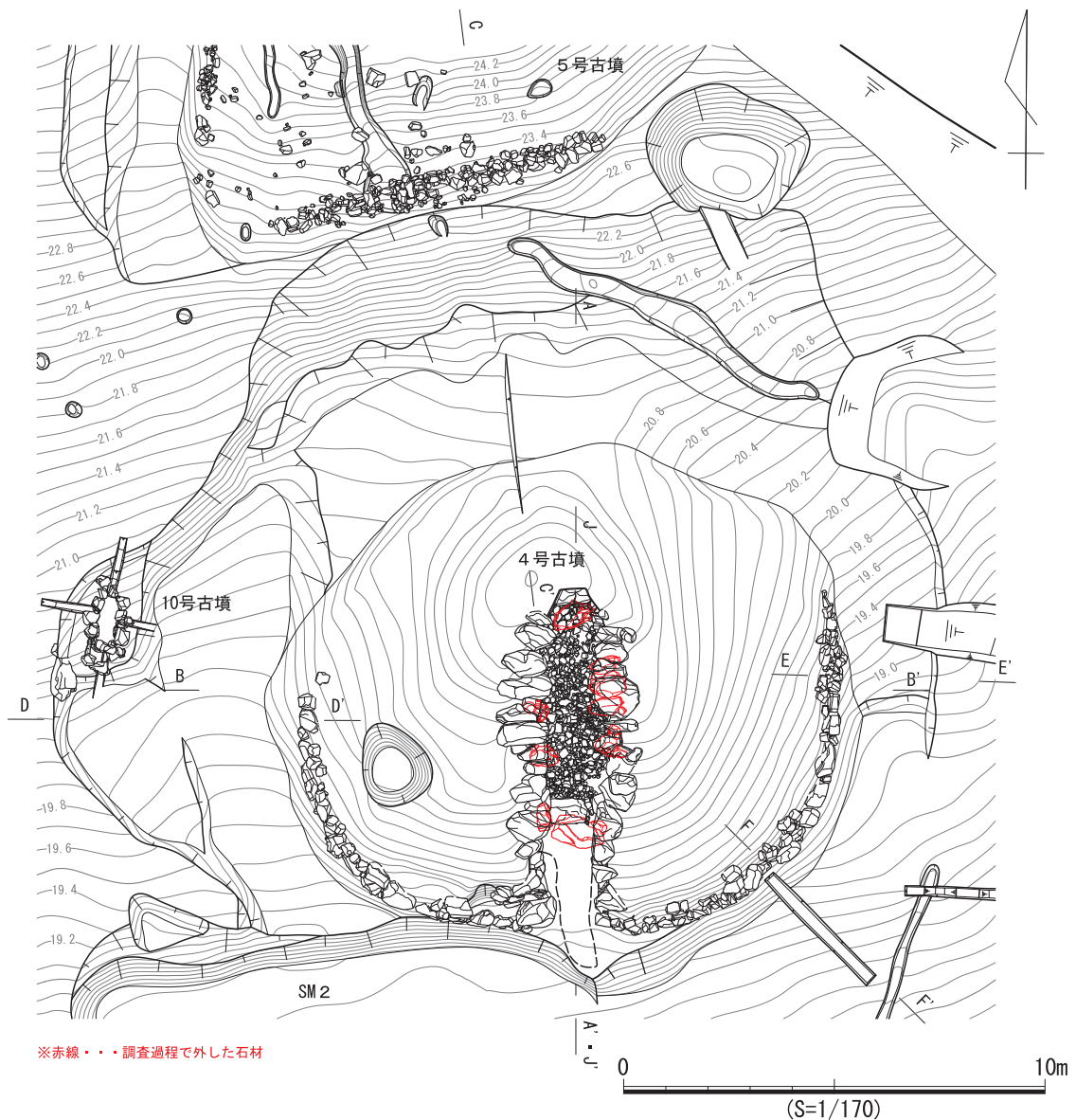
**検出状況** 本古墳は平成27年度調査時の表土掘削中に確認した。5号古墳発見後、その南側の地形が急激に落ち込む状況を確認したため、周溝の存在を想定して慎重に掘り下げを行った。その結果、墳丘の立ち上がりを確認し、これに沿ってI層の除去を行った。墳頂では、最終的にI層によって埋没した石室の側壁が露出したが、羨道より南は墳丘と似た黒褐色土で完全に埋まっており、入口の位置も不明であった。墳端は、墳頂から流出したと思われる堆積(E-E'断面の1・2層、F-F'断面の1・2層)で覆われていたため、これを除去した結果、良好な残存状態の外護列石を検出した。これにより、墳端や石室入口の状況が明らかとなった。

本古墳の東側は、築造時は旧谷地形の底であり、6号古墳などが立地する傾斜面の東端を選地していることになる。斜面上方に当たる周溝北部は、近世以降の崩落に伴うI層が落ち込んだ状態であり、崩落以前には深い谷地形として残っていた可能性が高い。本古墳の南西では、墳端と周溝の一部が近世以前の平場SM2によって削平されている。

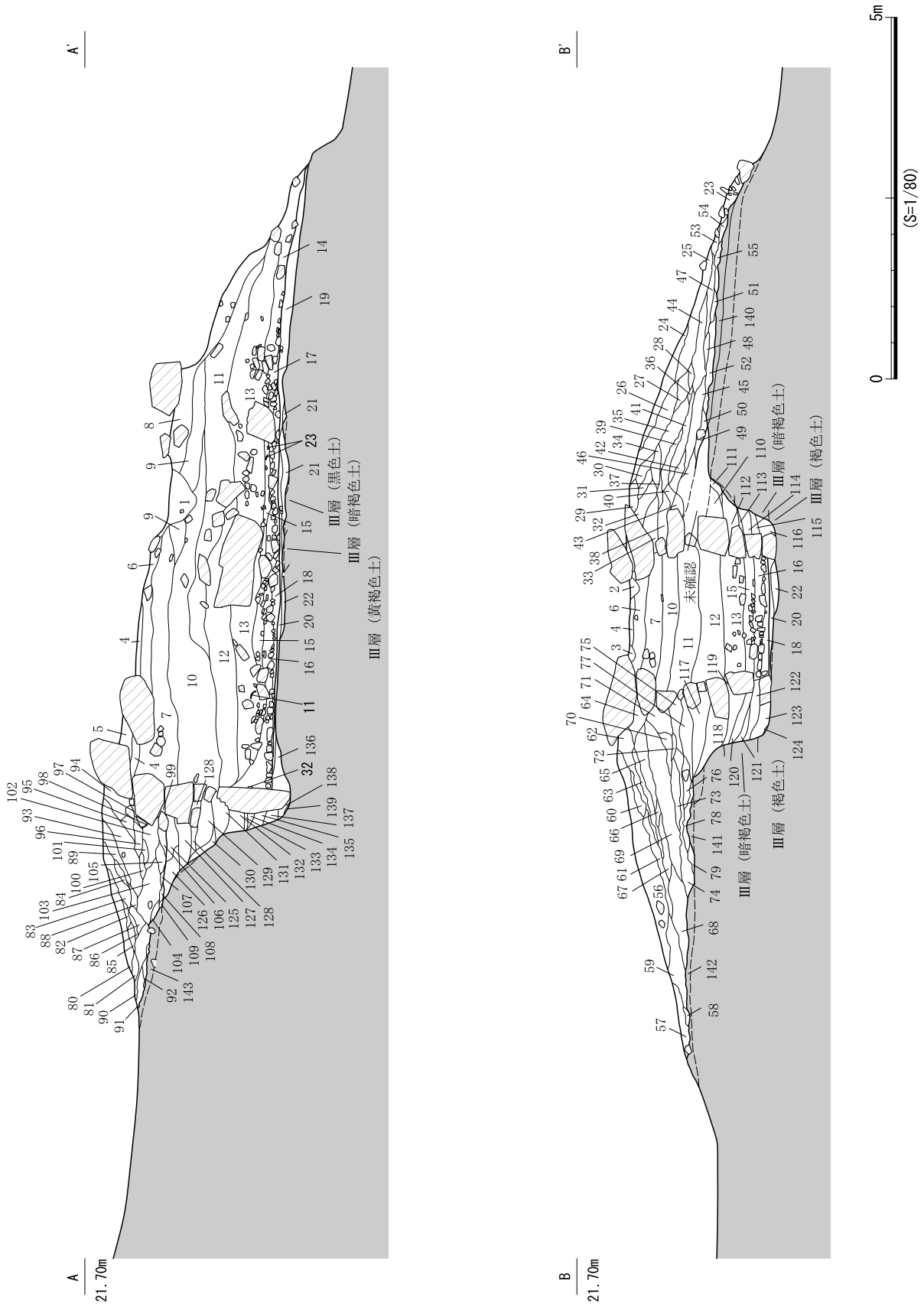
**外部施設(第15～20図)** 墳丘の平面形は、東西にやや長い楕円形で、墳丘規模は盛土の範囲で東西

12.85m、南北 11.45mである。5号古墳の斜面直下に位置し、周溝の西側の一部が10号古墳と重複する。墳頂は石室の側壁が露出しており、盛土のほとんどが失われている。墳頂の海拔は21.51mで、墳端との比高差は、南東側が最も大きく約3.5mある。これは、地形の傾斜が北西から南東に下っているためで、墳丘の形状、周溝、外護列石の配置にもその影響がみられる。外護列石の北端を結んだラインはN-78.5°-Eであり、石室の主軸と直交しない。これは傾斜の強い斜面下方に外護列石を設置した理由によるものと思われる。周溝にも当然ながら同様の傾きがみられ、墳丘築造の基準方位（土木的な理由による方位）が石室の主軸と明白に異なる。

周溝は墳丘南側を除く三方を巡り、幅はC-C'断面で7.52m、D-D'断面で5.85m、E-E'断面で2.33m、深さはそれぞれ1.59m、0.63m、0.35mである。周溝の北端は5号古墳の葺石付近にまで及んでいるが、盛土の末端を掠めるに留まる。西側では、10号古墳の石室掘方を一部削平し歪な形状である。



第15図 洞北山4号古墳平面図

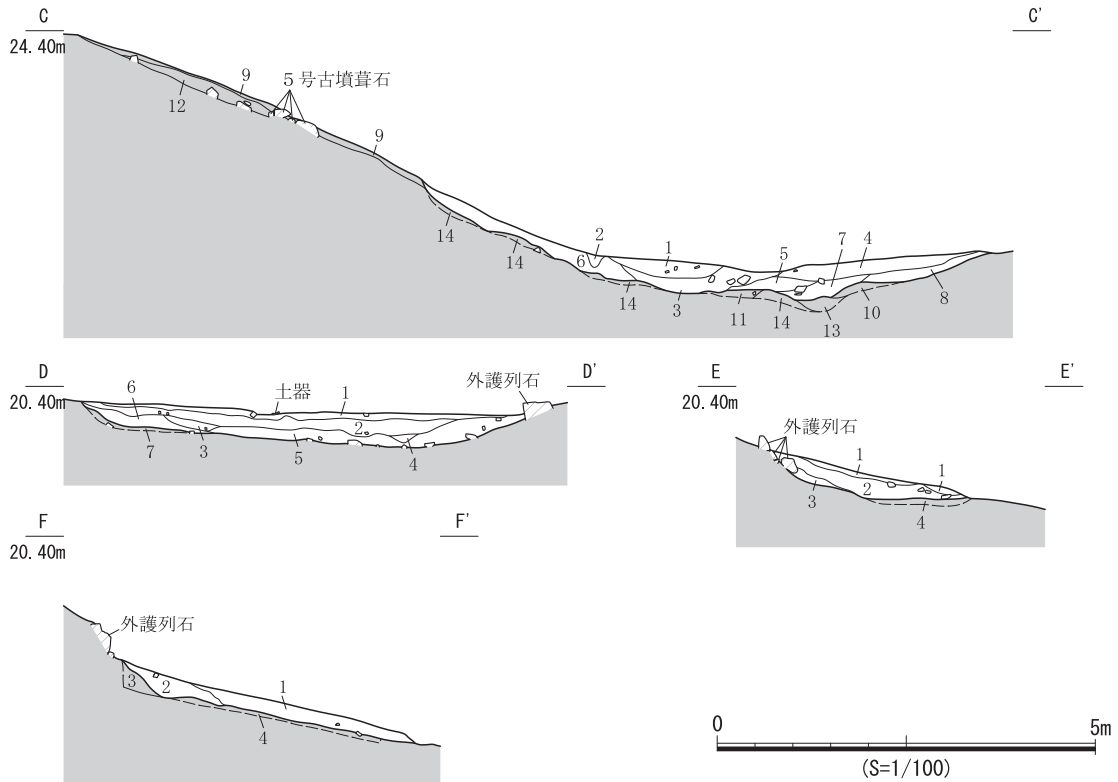


第 16 図 4号古墳墳丘・石室掘方・石室埋土土層断面図(1)



68	10VR3/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性ややあり	径0.5~1cmの角礫を7%含む	填丘盛土
	10VR3/2	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	10VR2/1 黒色粘質シルト	黒色粘質シルト
69	10VR3/3	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性ややあり	径0.5~1cmの角礫を7%含む	填丘盛土
70	10VR2/1	径5cmを超える礫	10VR4/4 褐色粘質シルト	プロックを2%含む	填丘盛土	径0.5~1cm以下の角礫を3%含む
71	10VR4/1	褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を3%含む
72	10VR3/3	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性ややあり	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を7%含む
73	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~3cmの角礫を7%含む
74	10VR3/3	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性ややあり	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を5%含む
75	10VR3/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~3cmの角礫を5%含む
76	10VR1/7/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径10cmを超える角礫を5%含む
77	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~3cmの角礫を5%含む
78	10VR2/2	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径5cmを超える角礫を少量含む
79	10VR3/2	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を15%含む
80	10VR2/2	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を5%含む
81	10VR3/2	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径3cmを超える角礫を少量含む
82	10VR3/2	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を15%含む
83	10VR3/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を5%含む
84	2.5Y2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径5cmを超える角礫を少量含む
85	10VR3/3	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~2cmの角礫を10%含む
86	10VR3/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cm以下の角礫を3%含む
87	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を5%含む
88	2.5Y2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径5cmを超える角礫を少量含む
89	10VR3/2	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を5%含む
90	10VR1/7/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を10%含む
91	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5cm以下の角礫を5%含む
92	10VR3/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cm以下の角礫を1~2%含む
93	10VR3/2	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~2cmの角礫を20%含む
94	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を7%含む
95	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5cm以下の角礫を3%含む
96	10VR3/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径10cm以下の角礫を3%含む
97	10VR1/7/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~2cmの角礫を5%含む
98	10VR1/7/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cm以下の角礫を1%含む
99	10VR1/7/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を7%含む
100	10VR1/7/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cm以下の角礫を5%含む
101	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を10%含む
102	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を10%含む
103	10VR3/2	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~3cmの角礫を10%含む
104	10VR2/3	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を20%含む
	10VR3/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径10cmを超える角礫を3%含む
105	10VR3/1	黒褐色粘質シルト	しまりなし	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を3%含む
106	10VR2/2	暗褐色粘質シルト	しまりなし	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を3%含む
107	10VR2/1	径15cmを超える礫	(裏込め石か)を含む	粘性	填丘盛土	径0.5~1cm以下の角礫を3%含む
108	10VR3/1	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を20%含む
109	10VR1/7/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5cm以下の角礫を3%含む
110	117層と同質	石室掘方埋土	ややしまる	粘性	填丘盛土	径1cm程度の角礫をわずかに含む
111	10VR3/2	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径1cm程度の角礫をわずかに含む
112	10VR2/2	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を3%含む
113	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	しまりなし	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を1%含む
114	10VR3/4	褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径1~3cmの角礫を2%含む
115	10VR3/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を5%含む
116	10VR2/2	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を5%含む
117	10VR3/4	褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~3cmの角礫を2%含む
118	10VR4/4	褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~3cmの角礫を2%含む
119	117層と118層の混合	石室掘方埋土	しまりなし	粘性	填丘盛土	径0.5~3cmの角礫を1%含む
120	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	しまりなし	粘性	填丘盛土	径1~3cmの角礫を1%含む
121	119層と同質	石室掘方埋土	しまりなし	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を7%含む
122	118層と同質	10VR3/1 黒褐色粘質シルト	プロックを7%含む	石室掘方埋土		
123	118層と同質	石室掘方埋土	しまりなし	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を2%含む
124	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を3%含む
125	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を3%含む
126	10VR4/4	褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~3cmの角礫を5%含む
127	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を2%含む
128	10VR3/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を2%含む
129	10VR4/4	褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~5cmの角礫を1%含む
130	10VR3/2	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を3%含む
131	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を1%含む
132	10VR3/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を2%含む
133	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を2%含む
134	10VR3/3	暗褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を5%含む
135	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を10%含む
136	10VR5/6	黄褐色砂礫土	しまりなし	粘性	填丘盛土	径0.5~1cm以下の角礫を1~2%含む
137	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径1~3cmの角礫を2%含む
138	10VR5/4	黄褐色砂礫土	しまりなし	粘性	填丘盛土	径0.5~2cmの角礫を5%含む
139	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cm以下の角礫を1%含む
140	10VR2/2	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cmの角礫を7%含む
141	10VR2/1	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~1cm以下の角礫を5%含む
142	10VR3/4	褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~3cmの角礫を10%含む
143	10VR2/2	黒褐色粘質シルト	ややしまる	粘性	填丘盛土	径0.5~2cmの角礫を5%含む
					径10cmを超える角礫を15%含む	III層(黒褐色土)

第18図 4号古墳墳丘・石室掘方・石室埋土土層断面図(3)



C-C' 断面

- 1 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を7%含む 径10cmを超える角礫を少量含む
- 10YR5/6 黄褐色粘質シルトを斑状に10%含む 周溝埋土
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を多く含む 径3cm大の角礫を少量含む
- 10YR3/1 黒褐色粘質シルトブロックを少量含む 周溝埋土
- 3 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を10%含む 径20cmを超える角礫を少量含む
- 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルトブロックを斑状に10%含む 周溝埋土
- 4 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を20%含む 径5cmを超える角礫を3%含む
- 10YR4/6 褐色土や 10YR3/1 黒褐色土の粘質シルトブロックを5%含む 周溝埋土
- 5 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を7%含む 周溝埋土
- 6 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を20%含む 特に斜面下方に多い
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルトを斑状に5%含む 周溝埋土
- 7 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を10%含む 径10cmを超える角礫を少量含む
- 10YR3/3 暗褐色粘質シルトを少量含む 周溝埋土
- 8 10YR1.7/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む 径5cmを超える角礫を少量含む
- 10YR3/3 暗褐色粘質シルトを少量含む 周溝埋土
- 9 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を10%含む 径10cmを超える角礫を少量含む 5号古墳墳丘流土
- 10 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を7%含む
- 10YR3/2 暗褐色粘質シルトを少量含む 4号古墳墳丘流土
- 11 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を10%含む 径5cmを超える礫を少量含む 径5cmを超える礫を少量含む 倒木痕
- 12 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1mm以下の小礫を極わずかに含む 5号古墳墳丘流土
- 13 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を5%含む 旧表土 III層 (黒色土)
- 14 10YR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を15%含む 漸移層 III層 (暗褐色土)

D-D' 断面

- 1 2.5Y3/3 暗オリーブ粘質シルト しまりなし 粘性あり 径0.5~1cm程度の小礫をわずかに含む 10YR5/6 黄褐色粘質シルトを層状に含む 周溝埋土
- 2 2.5Y2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1~3cmのチャート礫を含む 周溝埋土
- 3 2.5Y2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1~3cmのチャート礫を僅かに含む 褐色土ブロックを2%含む 周溝埋土
- 4 3層と同じ
- 5 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1~3cmのチャート礫を多量に含む 褐色土ブロックを2%含む 褐色土ブロックを2%含む 周溝埋土
- 6 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1~3cmのチャート礫を含む 周溝埋土 III層 (黒褐色土) 類似
- 7 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1~3cmのチャート礫を含む 漸移層 III層 (黒褐色土)

E-E' 断面

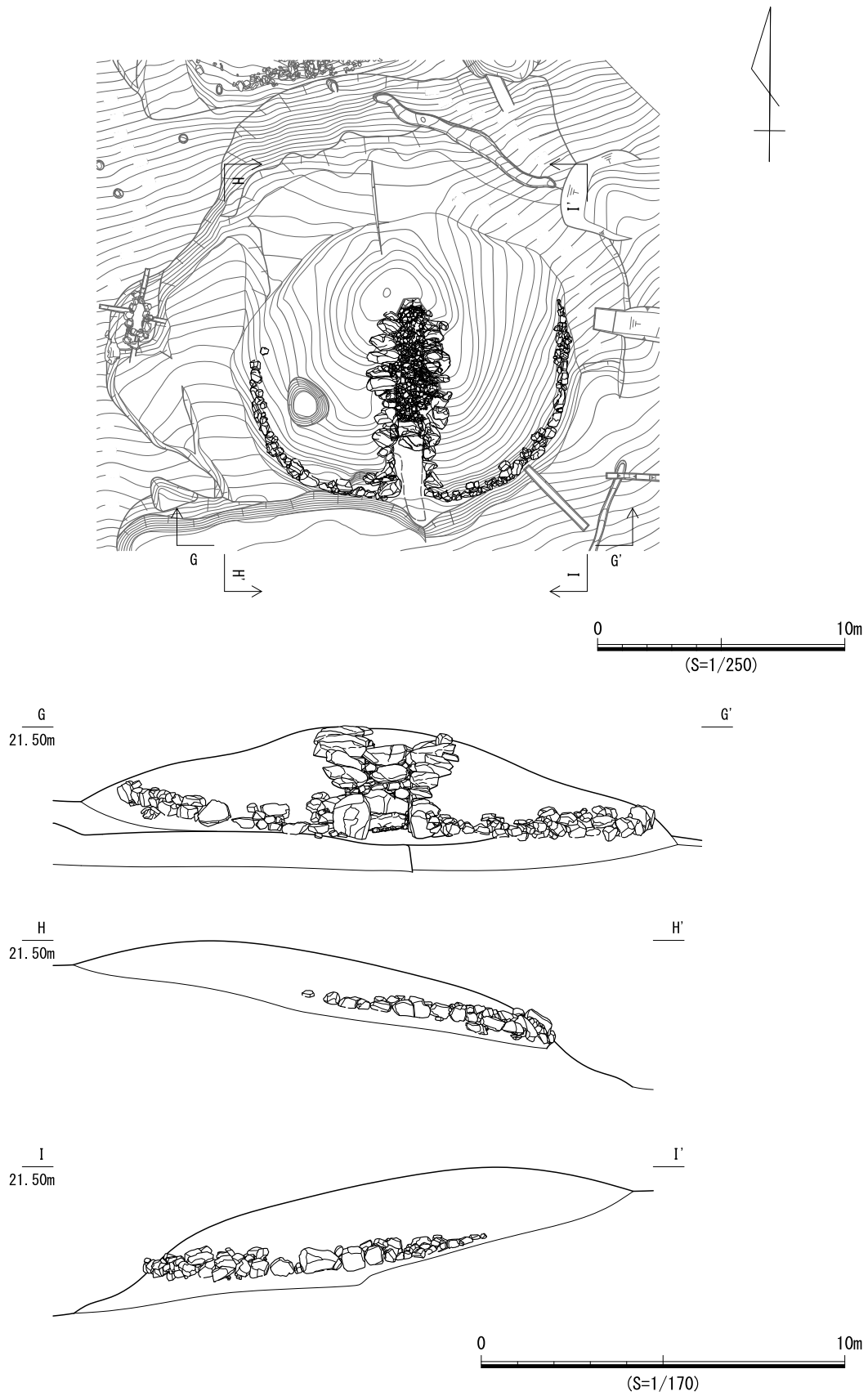
- 1 2.5Y2/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1~3cmのチャート礫を含む 褐色土ブロックを2%含む 周溝埋土
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1~3cmのチャート礫を多量に含む 褐色土ブロックを2%含む 周溝埋土
- 3 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1~3cmのチャート礫を含む 周溝埋土 III層 (黒褐色土) 類似
- 4 2.5Y5/6 黄褐色砂礫層 しまる 粘性なし III層 (黄褐色土)

F-F' 断面

- 1 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1~5cmの角礫を7%含む 墳丘からの流土
- 2 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1~2cmの角礫を5%含む 墳丘からの流土
- 3 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の小礫を2%含む 旧表土 III層 (黒色土)
- 4 10YR2/3 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1~3cmの角礫を3%含む 漸移層 III層 (黒褐色土)

第19図 4号古墳周溝土層断面図





第20図 4号古墳外護列石検出状況

盛土には基盤層に由来する黒褐色土や黄褐色土の互層が観察され、作業単位を示していると推定される。石室付近では石室の目地に土層が対応しており、今回観察した土層のほとんどは石室構築に関わる第一次墳丘の築造に伴うものと考えられる。石室東西側では墳丘下の旧表土(140層・141層)が比較的残っており、第一次墳丘の東西径が検出された墳丘とほぼ同じであることから、主に石室掘方や周溝を掘削した排土を利用して盛り上げたと推定される。羨門付近では墳丘内に外護列石に接続する埋め殺された列石があり(写真10)、第一次墳丘の土留めに伴う可能性が高い<sup>3)</sup>。



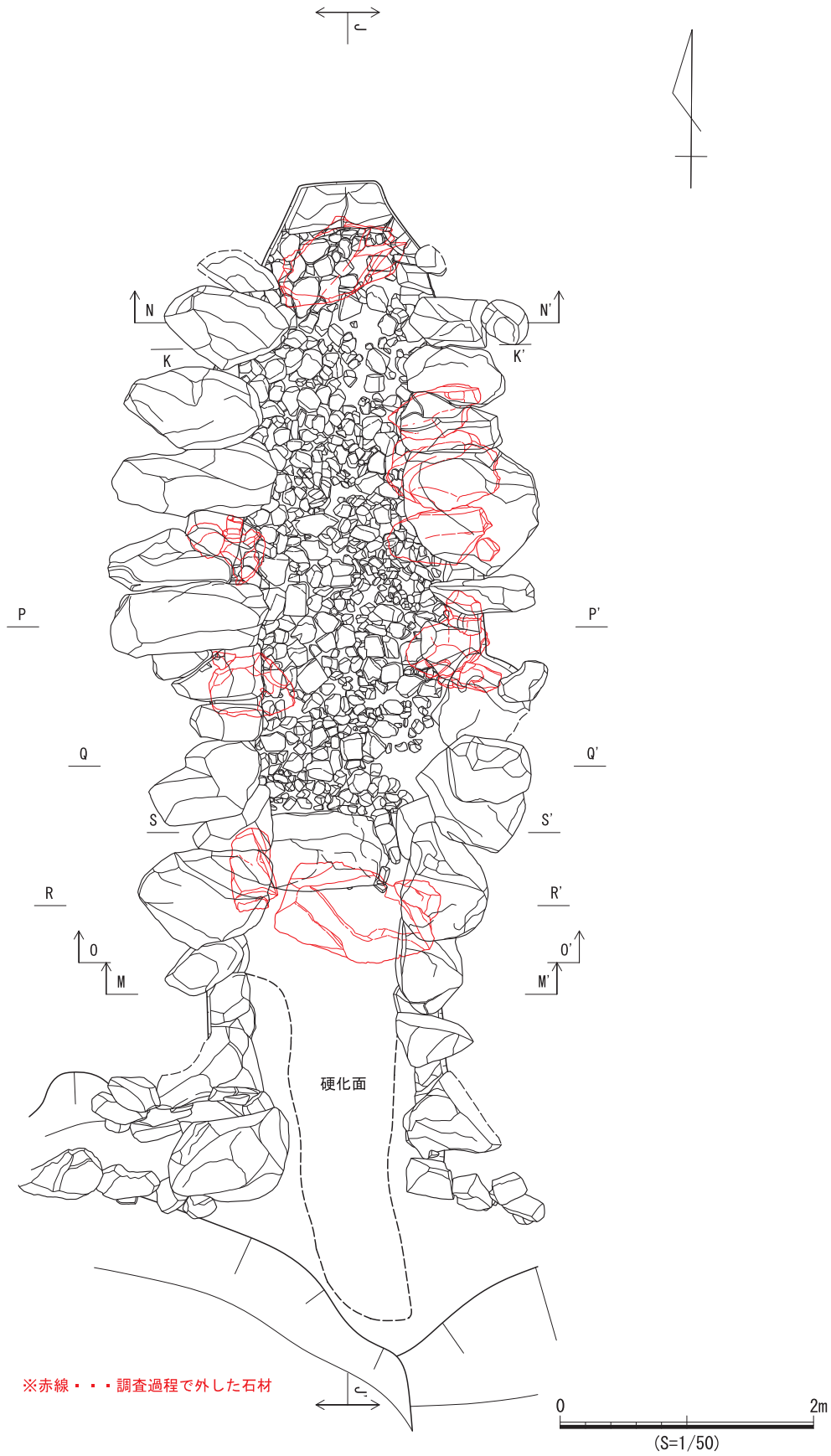
写真10 墳丘内列石(南から)

外護列石は、南東部の低い部分や石室周辺の基底石に、石室の石材に劣らぬ大型礫が使用されており、面を揃えて設置されている。その部分は2～3段積み上げられており、特に石室入口の西側の残存状況が良好であった。南東部では転石が多くみられ、本来はさらに数段積まれていたと思われる。斜面上方へ向かうにつれて段数を減じ、1石が置かれるのみになる。これも、斜面下方の盛土の量が斜面上方に比べて多く、崩落を防止するためと考えられる。なお、外護列石は人為的な盛土の範囲と対応しているが、設置後に周囲の掘削が進んだため、浮いたような状態になっており、その位置は外見上の墳端とは一致しない。

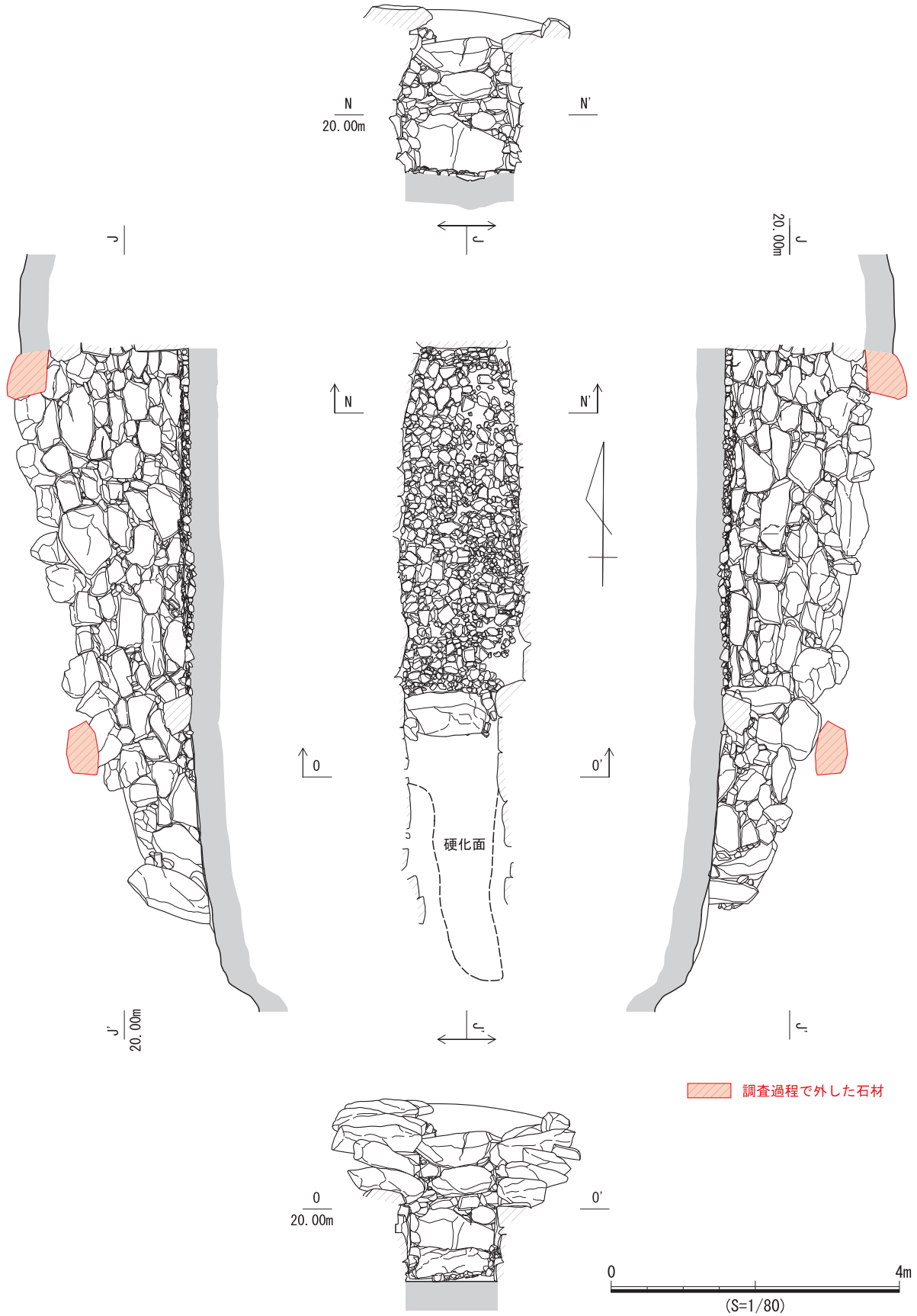
**石室の埋土(第16～18図)** 石室の最上層は、1層の砂礫土が堆積しており、遺物包含層掘削の過程でこれを除去した。その下層には、黒色土や黒褐色土が堆積していたが、表面には小規模な攪乱坑や流水による薄い堆積がみられた。墳頂の高さは、現況地形の標高にほぼ近く、近年まで露出していた可能性がある。6層から13層まで水平な堆積が目立ち、玄室南側には天井石と考えられる大型石材をはじめ、多数の礫が混入していた。これは堆積状況から、古墳を削平した排土で人為的に埋めた土と考えられ、羨道まで連続する様子が確認できた。玄室内は、15層の上面がやや硬化しており、奥壁の南側には小石塚が設置されていたことから、人為的に土を敷いて整地した可能性がある。一方、羨道は流土と考えられるしまりのない土が堆積しており、出土する遺物も床面より高い位置のものが多いことから、追葬の段階で若干埋まっていたと考えられる。

**埋葬施設(第21～25図)** 石室掘方の平面形状は、南側に開口した長方形である。全長8.54m、最大幅4.96m、奥壁付近の深さ1.36mである。掘方の排土は斜面下方を造成した痕跡がないため、石室の裏込めなどに利用されたと思われる。玄室部分の掘方は一段低くなっており、羨道へ延びる溝状の掘り込みが接続している。

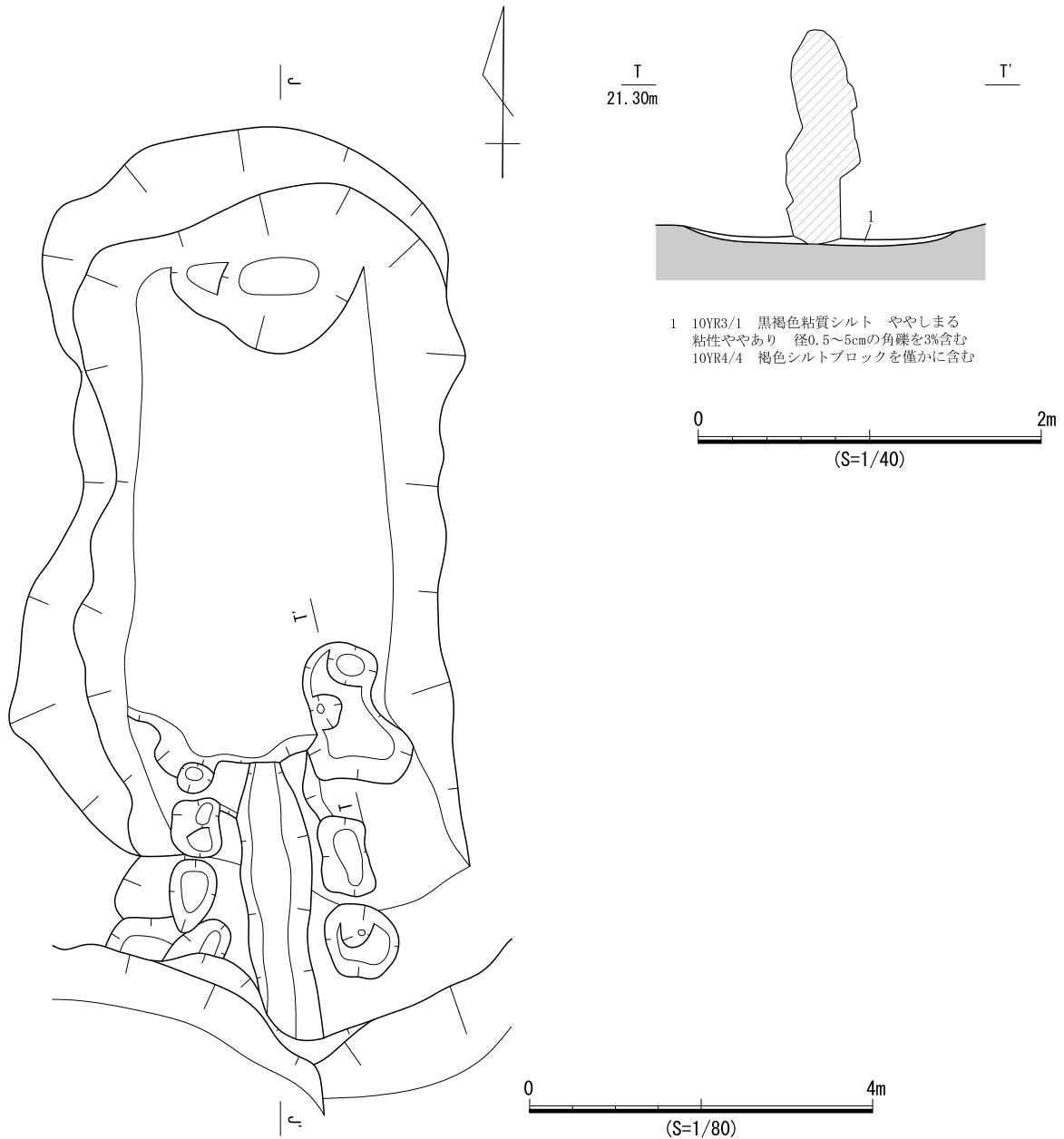
石室は全長8.0m、残存する墓道を含むと8.81mの横穴式石室である。玄室全長4.76m、奥壁幅1.20m、最大幅1.66m、推定天井高は奥壁付近で2.4mである。主軸方位は、ほぼ南北軸と一致する。右側壁に袖をもつ右片袖式の構造である。玄室は、立柱石横の床面に置かれた柵石で羨道と明確に区別される。また、玄室内のみ礫床がみられる。玄室の平面形状は、ほぼ矩形となり、奥壁付近のみ窄まる。奥壁が接する部分の側壁基底石は、扁平な石材が腰石のように立てられており、この形状に影



第 21 図 4 号古墳石室平面図



第22図 4号古墳石室展開図



第23図 4号古墳石室掘方完掘状況・玄室袖部立柱石断面図

響を与えている。石材は羨道部もすべてチャートであるが、奥壁の石材の隙間を埋める泥岩質の礫を1点確認した。

奥壁は、深さ0.2mほどの石材の据付掘方を掘削し、高さ1.02mの扁平な大型石材を立て、その上に長手積みで4~5段積み上げている。この大型石材の頂部は、断面が尖っており、上段の石材とほとんど接していない。また入口からみて右肩下がりの形状になっており、ここに石材を充填することで、その上段を水平に接地する意図がみられる。この大型石材の上から徐々に側壁の持ち送りが始まることから、奥壁の大型石材が構築の基準になっていたと考えられる。奥壁自体も4段目は石材の摂理面の形状を利用して持ち送り風になるように積んでいる。最上段の石材は、南側に大きく移動し

ており、平面及び断面を記録して除去した。

側壁は、奥壁の大型石材や、袖石を基準としたと考えられる。まず奥壁の設置と同時に、袖石及び基底石を設置する。袖石は、高さ 1.25mほどの石材をごく僅かな据付掘方を掘削して立柱状に立て、根元に礫を置くことで安定させている。基底石は、奥壁に接する石材は平積みされているが、その他の基底石は長手積みが多く、礫床敷設時に埋め殺されているものもある。基底石の設置と同時に床面の整地も行われている。次に奥壁と袖石の石材の高さを基準に側壁を積み上げる。様々な大きさや形の石材を利用しており、横目地はきれいに通らないが3～4段積まれている。主に長手積みを多用しており、垂直に立ち上がる。左側壁では平積みもみられる。その隙間を埋めるように小口積みされた小型石材がみられる。この高さは、概ね石室掘方内に収まり、またこの際、掘方や石室北側の斜面を削った排土を裏込めに使用したと考えられる。なお、石室の南側では掘方よりも側壁が高くなるため、第一次墳丘の築造と連動していたと考えられる。袖石に接続する羨道の側壁も同時に積み上げているが、後述のように柵石はその前に設置されていた可能性が高い。持ち送りは床面から高さ 0.9m付近で始まり、上方ほど内側に大きく張り出している。この境は前述の奥壁の状況と連動しており、石室掘方の外に出る部分を境に明瞭である。3～4段積まれており、下段と同様横目地はきれいに通らないが、右側壁では石室掘方の高さに沿って入口方向に斜めに下がる目地を確認できる<sup>4)</sup>。石材は小口積みによって引きを強くして持ち送りを行っている。長手積みされた大型石材がいくつかあるが、これらの石材は奥行きが長手面の幅と同じくらいあり、他の小口積みの石材と同様に引きが強い。奥壁と両側壁の左右コーナー上部には両壁を繋ぐように積む「渡し掛け技法」もみられた。

玄室の床面は、敷石がほぼ全面に敷き詰められた礫床であった。敷石の石材にはチャートが用いられ、左側壁側の方がやや大き目の石材を用いて面を揃えて並べられている。右側壁側はやや小ぶりの石が多く、立柱石北側では礫がない場所もみられた。また、北東角には敷石を敷かず、長軸約 0.16m、短軸約 0.14mの空間が確保されており、土師器甕 28 が据えられていた。さらにその西側の礫床は、大きさや高さを揃えた礫で丁寧に敷かれている。

玄門に設置された柵石は、羨道の幅とほぼ同じ長さの角柱状の大型石材を用いて、羨道と玄室を明確に区別している。この石材の歪な部分には小礫を詰めて隙間のないようにし、柵石の上面を水平にするために、石材の下に根石を並べている。また、柵石の側面に詰め込まれた石

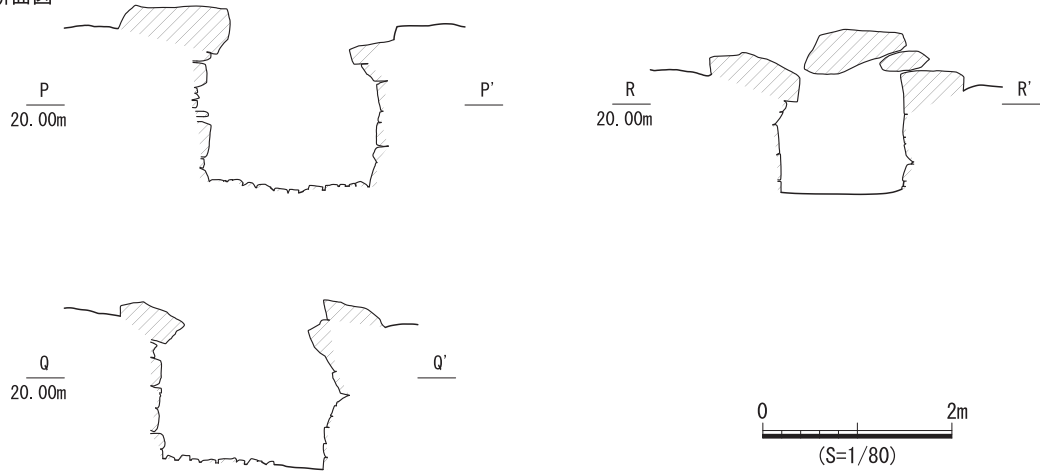


写真11 礫床北東隅の状況（南から）



写真12 柵石と側壁の状況

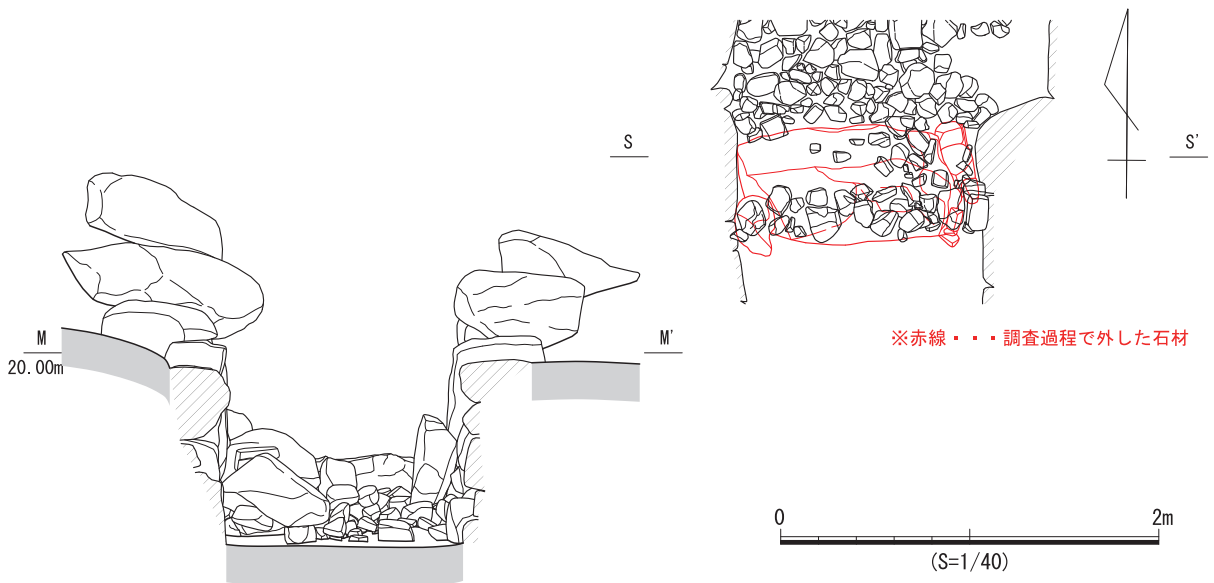
石室断面図



閉塞石検出状況



梱石下検出状況



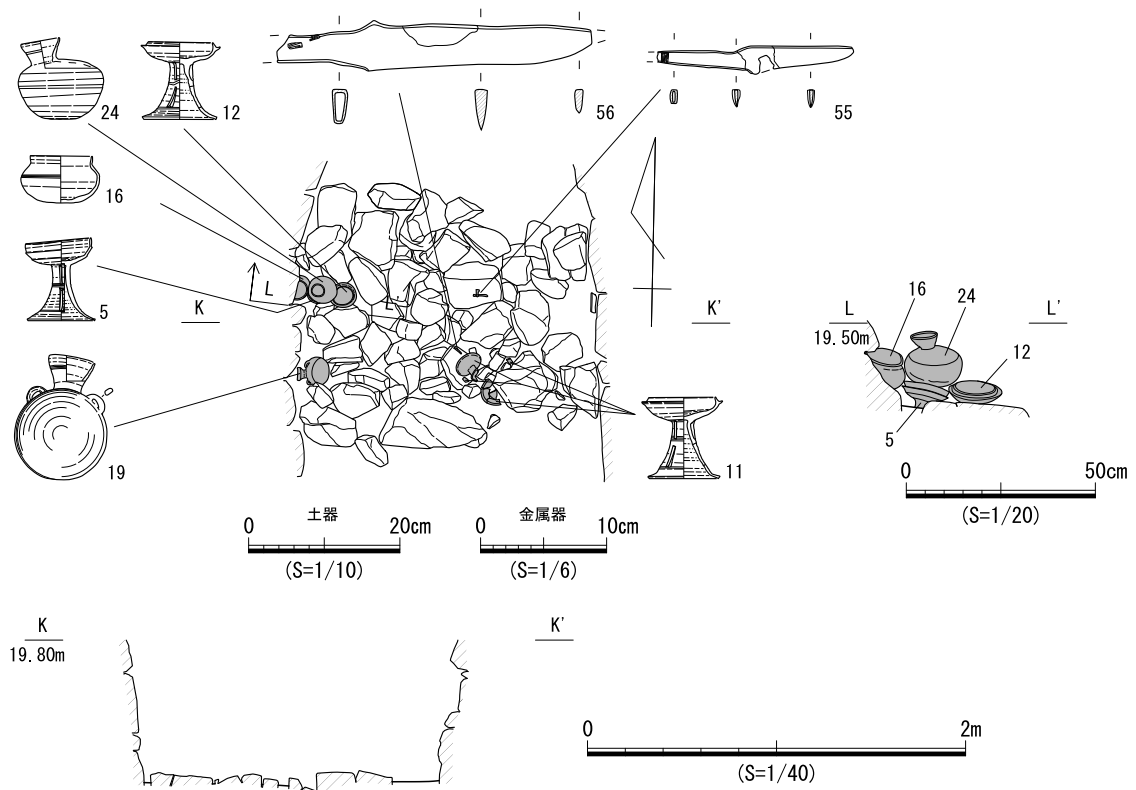
第24図 4号古墳石室断面図・閉塞石及び梱石下検出状況

材に羨道の側壁が噛合っている状況を確認したことから、側壁を積み上げる前に梱石を設置した可能性がある。

埋土 16 層（一部 15 層）の上面で検出した小石槨は、奥壁の約 0.3m 南から入口に向かって南北 1.38 m、東西 1.6m の規模である。16 層は調査段階では分層ができなかったが、奥壁際に土層断面が三角形の状態に堆積しており、硬化もみられないことから、奥壁際の堆積は自然堆積の可能性もある。礫床を埋め立てて礫を並べたと考えられ、南北にやや大きめの石材を配して区画している。右側壁側は区画が明瞭でないため、実際の区画は右側壁に達していなかった可能性もある。底面には、扁平な礫が面を揃えて敷かれている。

羨道の平面形状は長方形で、羨道全長（前庭部含む）3.24m、最大幅 1.28m である。礫床や排水溝はないが、床面の中央部に硬化した部分がみられ、掘方の完掘後には溝状の窪みとなった。この溝は玄室の掘方からつながっており、築造当初に排水目的で掘られた溝を埋め戻した可能性が考えられる。側壁は左側壁に玄室から続く目地が確認でき、右側壁も袖石の高さに目地があることから、玄室と同時に構築されたと考えられる。玄門の上には天井石が 1 石のみ残存していたが、玄室奥壁付近の推定天井高が約 2.4m あるのに対し、床面から天井石下面までは 1.32m しかなく、楣石であった可能性がある。また、この石を基準とすると、羨道側壁は上から 1、2 段の石材が失われている可能性が高い。奥壁と楣石との関係から、天井は奥壁から玄門に向かって低くなっていた可能性が高い。天井石は、石室の埋土中で確認したチャートの大型石材や残存していた楣石の他に 4～5 枚使われていたと考えられ、傾斜の緩い第一次墳丘の斜面を利用して引き上げられたと推定される。

小石槨検出状況



第 25 図 4 号古墳小石槨検出状況



梱石の手前からは、閉塞石と考えられる礫群を確認した。板状の大型礫と、拳から人頭大の礫があり、大型礫は羨道側壁側に寄せたように置かれていた。その他の礫は大型礫の下になっており、当初の閉塞石の基底である可能性がある。以上から、当初は小礫を使って玄門を閉塞していたが、追葬のために礫が除去され、その代わりとして大型礫で閉塞され、その閉塞が再度開封されることによって検出状態に至ったと考えられる。

前庭及び墓道は、立柱状に立てられた入口の二組の大型石材とその南側の平場とした。この部分には天井が掛かっていなかったと考えられる。前庭部は立柱石に挟まれた範囲で、平面位置が羨道の主軸から若干東にずれて狭くなっている。墓道部分はほぼ旧地形を踏襲していると推定され、周囲が掘り下がることによって作出されている。立柱石は石室掘方内に含まれておらず、旧表土に直接穴を掘って立てられている。内側の石材は羨道の側壁にもたれかかる様に置かれており、ここから東西に埋め殺しの列石が延びて外護列石に接続している。

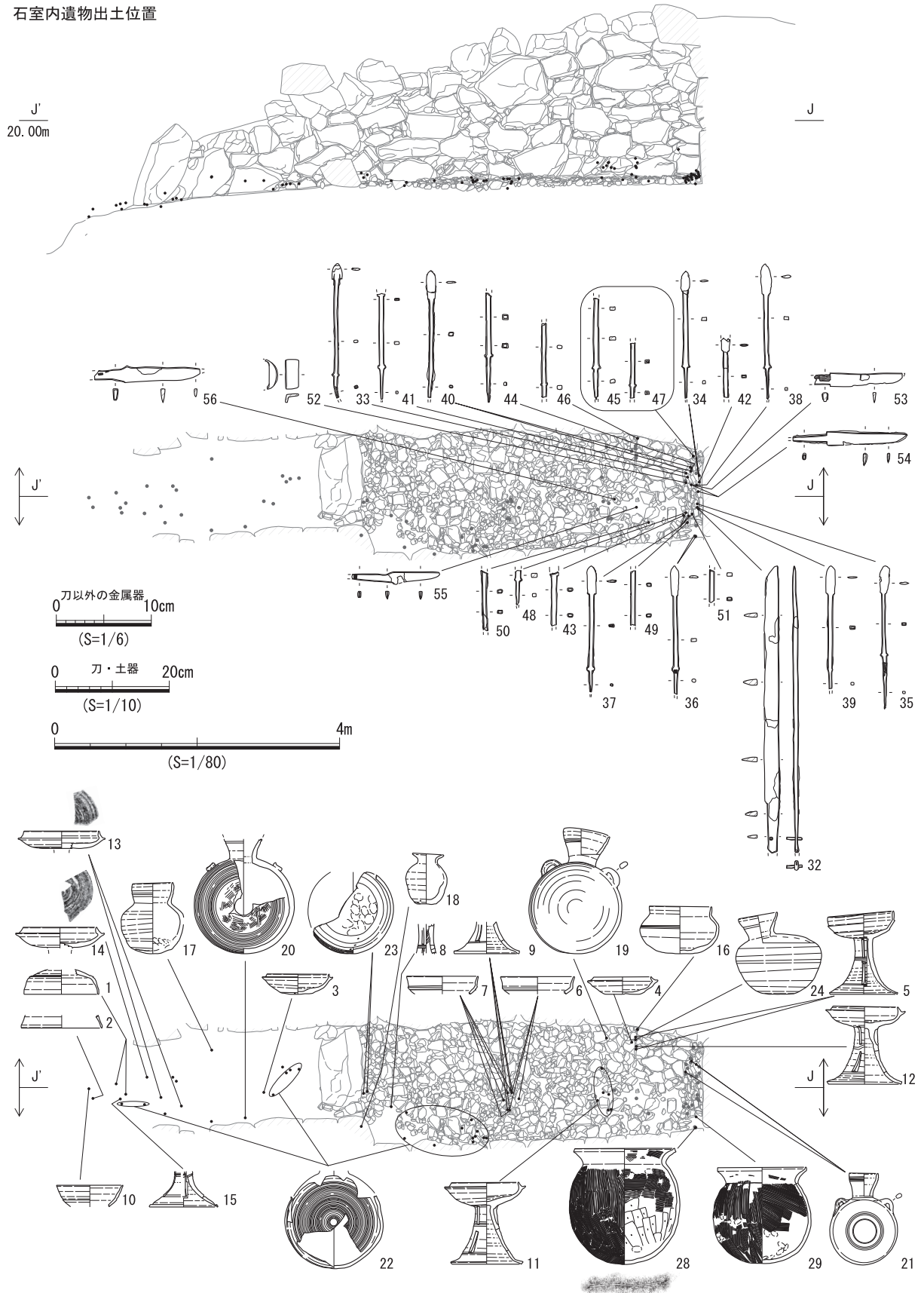
**遺物の出土状況（第25～27図）** 石室内からは、土師器・須恵器・金属製品・石器が出土した。奥壁付近と小石槨にまとまりがみられる。遺物のうちほぼ完形に近い状態で出土した土器は8点である。その他の土器は、石室内出土のもの同士で接合するものが大半で、墳丘南側の遺物包含層から出土した遺物と接合するものが数点ある。

原位置を保っていると考えられるのは、北東隅で並んで出土したほぼ完形の土師器甕2点（28、29）と奥壁に立てかけられた鉄刀32であるが、鉄刀については片付け行為によるものか否か判断できない。小石槨が設置された段階では、奥壁際の甕や鉄刀は16層によって完全に埋没していた。玄室北東角の敷石が敷かれていない場所に据えられた土師器甕28については初葬に伴う可能性が高い。甕内からは鉄鏃36が出土した。また、その甕の西側に寄り添うように据えられた個体29は礫床上に載っていた。この場所は前述のように、丁寧に敷石が敷かれており、祭壇的な役割も考えられる。これまでも美濃地域では、土師器の甕や小型の鉢などが横穴式石室右奥部で出土する事例がいくつも報告されている<sup>5)</sup>が、2個体が並んで出土している例はあまりみられない<sup>6)</sup>。鉄刀32は切先を上に向け、東に傾いた状態で奥壁に立てかけられていた。鉄刀の周辺からは鉄鏃が17点出土した。礫床の隙間に落ちていたものや、前述の土師器甕の内部から出土したものもあり、鉄刀の東側に立てかけられた有機質の靱又は胡禄が腐食し、鉄鏃が散らばった可能性が考えられる。この他、鉄製の刀子53、54や刀装具52、須恵器の提瓶21が奥壁付近から出土した。

玄室中央付近から玄門付近にかけては、遺物が主軸から右側壁側に偏っており、袖石付近で出土した小型特殊壺を除き、破片の状態で出土した。提瓶22は右側壁周辺の礫床上面に破片がまとまっているが、羨道にも破片を確認できた。片付け行為の際か、のちに破碎した破片が何らかの理由で移動したと考えられる。この他に高坏6～9や坏蓋1が礫床上面から出土し、玄門近くでは15層から提瓶23や小型特殊壺18が出土した。

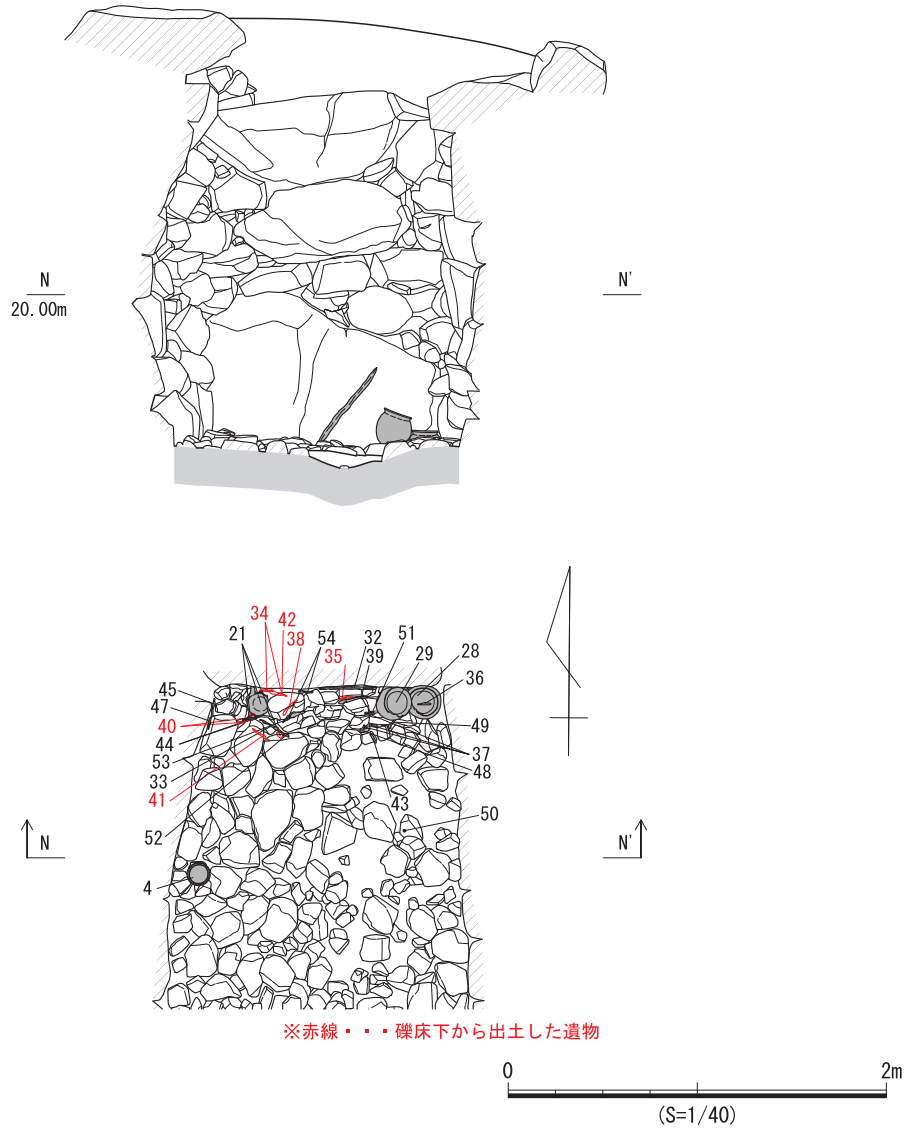
小石槨の敷石の上面からは、須恵器の高坏2点（11、12）・平瓶24・短頸壺16・提瓶19・鉄鏃46・刀子2点（55、56）が出土した。平瓶と短頸壺はほぼ完形に近い良好な状態で小石槨の西隅から出土し、須恵器の高坏5に載せられていた。この高坏の脚は下層の礫床まで達しており、同じ場所の礫床上面から須恵器の坏身4が出土したことから、元々副葬されていた須恵器を再利用した可能性がある。短頸壺内からは鉄鏃46が出土した。小石槨床面の高坏11は横倒しになって割れており、上からの転

石室内遺物出土位置



第26図 4号古墳石室内遺物出土状況

奥壁付近遺物出土状況



第27図 4号古墳奥壁付近遺物出土状況

石などで破損したと考えられる。また、小石塚下層の礫床から出土した坏身4は美濃須衛窯の編年に照らせば、Ⅲ期後半に対応し7世紀中葉に位置づけられる。このことから小石塚の設置は7世紀中葉以降と推定される。

羨道及び前庭からは、須恵器の直口壺17がほぼ完形に近い良好な状態で出土し、その他は提瓶20・高坏・坏身・坏蓋・土師器甕の破片が出土した。床面から浮いているものが多く、出土地点にもまともはみられない。直口壺17は、左側壁の立柱石付近の13層から出土した。提瓶20は破片の状態で、右側壁近くの14層からまとまって出土したが、墳丘南側の遺物包含層からも破片が出土した。

奥壁の石材の隙間を埋める泥岩質の礫は、円柱を縦半分に割ったような形状で、曲面の一部に擦痕と平滑な面がみられるため、砥石の可能性もあるが実測対象とはしなかった。

石室外の遺物については、周溝や墳丘内、石室掘方内から出土した。周溝からは須恵器・土師器・灰釉陶器・山茶碗が出土したが、いずれも破片である。遺物は1点を除き周溝内の北西から西寄りに

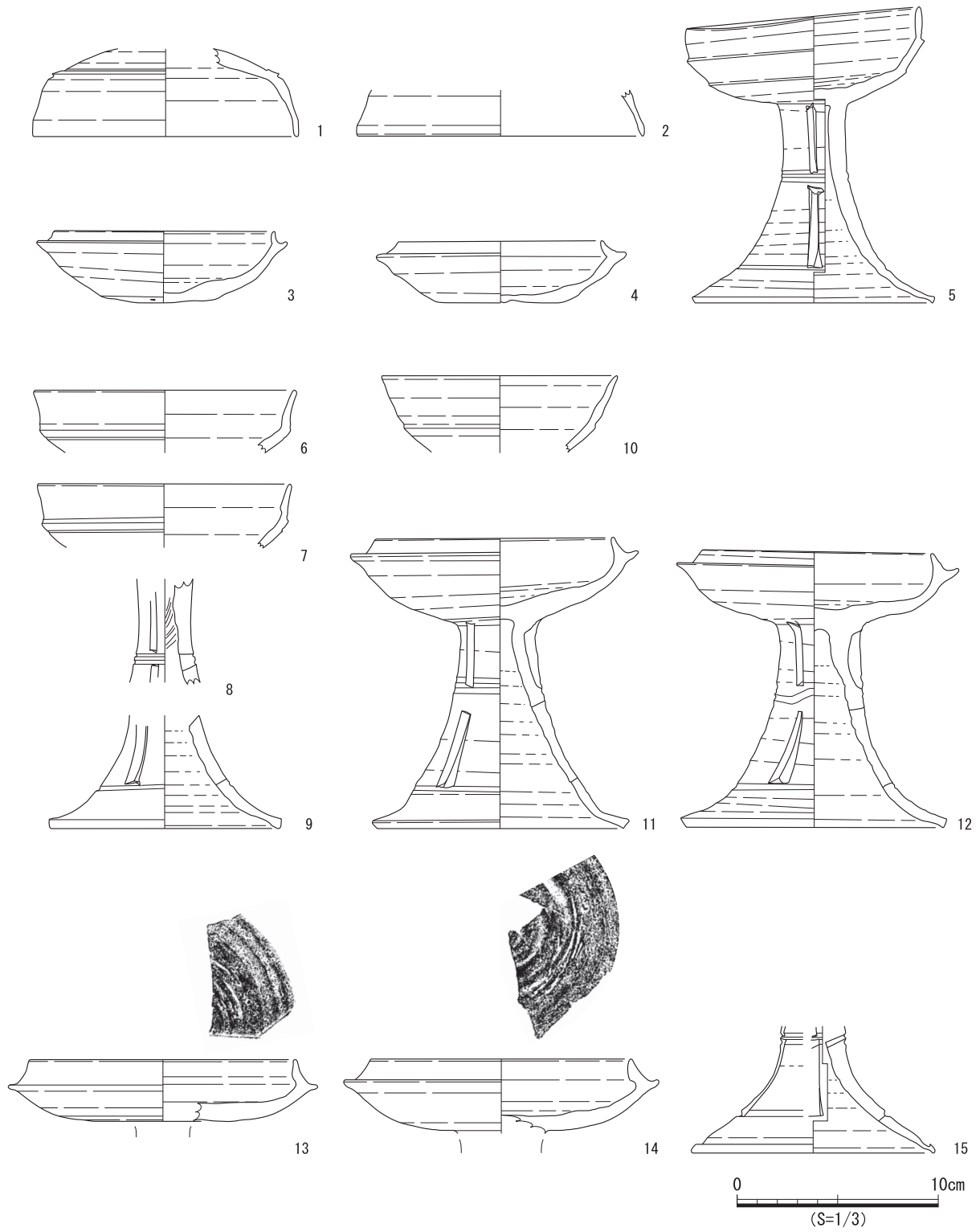
集中しており、周溝埋土上面の遺物包含層に含まれる遺物も同様の傾向にある。須恵器は台付瓶 25、26 と瓶 27 とみられ、土師器については細片であるため詳細不明である。灰釉陶器 30 と山茶碗 31 はそれぞれ 1 点のみが最上層から出土した。墳丘内から 4 点、石室掘方内からは 1 点土師器が出土したが、細片であるため詳細不明である。旧表土に含まれていた可能性が高く、古墳より古いと考えられる<sup>7)</sup>。

**出土遺物（第 28～33 図）** 1～27 は須恵器である。1・2 は坏蓋の破片である。1 の天井部はなだらかな丸みを有し、稜部の上下を凹線状に窪ませて際立たせる。口縁部は直線的に伸び、端部は丸く収める。天井部の大半が失われており、無蓋高坏の坏部の可能性もある。3・4 は坏身である。底部は平坦で、3 は回転ヘラ切り痕が残るが、4 は自然釉のため不明である。受部はいずれも小さく、3 は斜め上方に突出するが、4 は 3 に比べ水平に突出する。口縁部は内傾し、端部は丸く収める。いずれも須衛 65 号窯式に比定される。5～15 は高坏である。5～9 は長脚の無蓋高坏である。5 は、坏部外面には明瞭な 2 条の稜が巡る。脚部は基部から垂直気味に伸びたのち、裾部に向かって強く外反する。透孔は 2 段で二方にあり、上段の透孔は未貫通である。6～9 は出土状況、胎土の色調、器厚などから同一個体と考えられる。坏部外面に 2 条の浅い凹線が巡る。基部付近の内面には絞り込み痕跡が残る。透孔は 2 段で三方にあり、上段の透孔は未貫通である。5 は畿内系で、TK43 から TK209 窯式期に比定される。6～9 は坏部の中位に稜を有し、尾張系の特徴がみられ H15 窯式期に比定される。10 は無蓋高坏の坏部である。坏部の中位外面に極浅い凹線が巡る。11～14 は有蓋高坏である。11・12 は坏部が浅く、受部は小さく斜め上方に突出する。口縁部は内傾して短く、端部は丸く収める。坏部外面には回転ヘラ削り調整を行い、その後ナデ調整を施す。脚部は基部から緩やかに開き、裾部をやや強く外反させる。透孔は 2 段で三方にあり、上段の透孔は未貫通である。いずれも TK217 窯式期の古い時期に比定される。13・14 は有蓋高坏の坏部である。坏部が浅く、受部が小さくほぼ真横に突出するが、14 は端部がやや上向きで丸く収める。13・14 とともに、自然釉などで調整痕は確認できなかった。底部内面には当て具痕が残る。ともに畿内 6 型式に比定される。15 は高坏の脚部である。透孔は 2 段で四方にあったと推測される。裾部はナデ調整によって突線状の稜を有する。16 は短頸壺である。肩部に 2 条の浅い凹線を巡らす。頸部は直立気味に立ち上がりながら口縁に至り、口縁端部は丸く収める。底部から体部下半にかけてヘラ切り後にナデ調整を施し、体部上半から内面にかけては回転ナデ調整を行う。17 は直口壺である。底部はやや丸みを帯びる。頸部は外反気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに内傾し丸く収める。頸部に浅い 2 条の凹線が巡る。底部はヘラ切り後にナデ調整を行う。体部から口頸部の内外面にかけて回転ナデ調整を施す。内面底部にはユビナデの跡が残る。18 は小型特殊壺である。底部はほぼ平坦である。頸部は強くくびれ、強く外反し口縁端部を丸く収める。底部外面はヘラ切り痕をナデ消し、体部下半 3 分の 1 には回転ヘラ削りの痕跡が残る。そこから上方は回転ナデ調整を施すが、ヘラ削り痕との調整境は強いナデによってやや窪む。16 は 7 世紀、17 は畿内系で 6 世紀末から 7 世紀初頭、18 は畿内系と考えられる。19～23 は提瓶である。19 は大ぶりで、口縁部はやや内湾し、端部は丸く収める。頸部の中位やや上方には 2 条 1 組の凹線を巡らす。体部はほぼ円形であり、背面は扁平で腹面は丸く張り出すが、中央部はやや扁平である。肩部に輪状把手がつく。背面から体部側面の 4 分の 1 程度に回転ヘラ削りを施し、体部側面の中位には極浅い 3 条の施文を確認できる。腹面は回転ナデ調整を行う。口頸部は横ナデ調整を施す。20 は、頸部の中位に凹線を巡ら

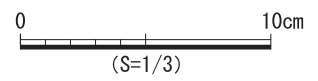
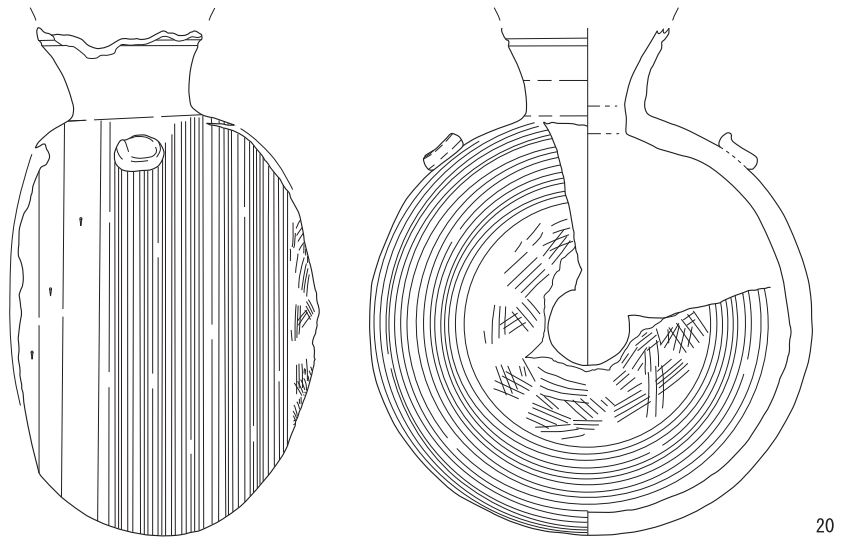
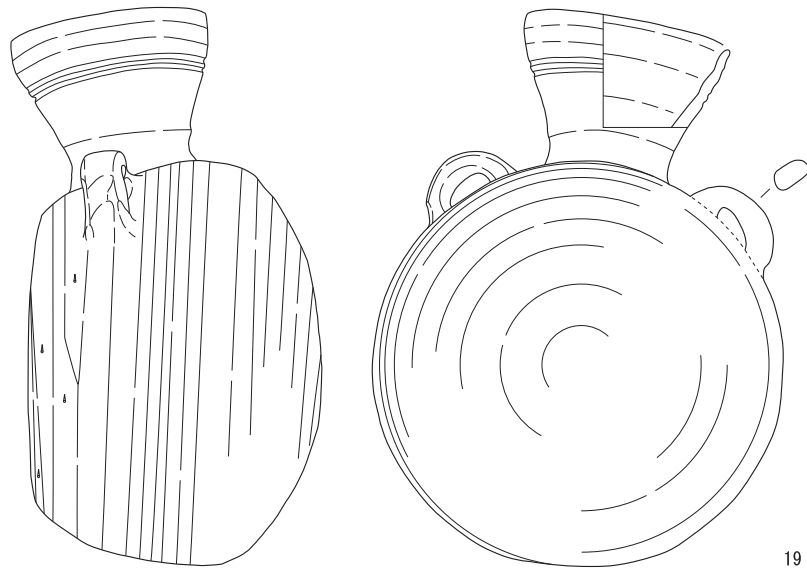
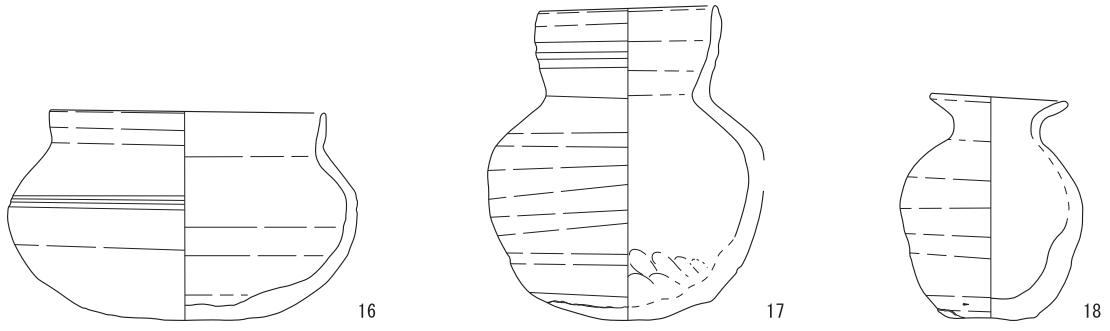
せる。体部はほぼ円形であり、背面は扁平で、腹面は丸く張り出す。肩部にボタン状把手がつく。背面から体部側面の3分の1程度に回転ヘラ削りを施し、体部側面の残りや腹面の3分の2程度にカキ目、腹面の中央部には平行文のタタキ文がみられる。口頸部は横ナデ調整を施す。21は他に比べて小ぶりである。口縁部はやや内弯してのび、端部は丸く収める。頸部の中位やや上方に3条1組の凹線が巡る。体部はほぼ円形であり、背面は扁平で、腹面は丸く張り出すが中央部はやや扁平である。肩部に輪状把手がつく。背面から腹面にかけて回転ナデ調整を施す。背面中央部に二重圏線、腹面中央部に三重圏線が確認できる。口頸部は横ナデ調整を施す。22は、体部はほぼ円形であり、背面は扁平で、腹面は丸く張り出すが中央部はやや扁平である。肩部には把手がわずかに残る。背面から体部側面の4分の1程度に回転ヘラ削りを施し、回転ナデ調整をはさんで体部側面の3分の1程度から腹面にかけてカキ目を施す。また、腹面の肩付近には、極浅い3条の施文もみられる。23は残存部から円形に近い形状であったと推測される。背面は扁平である。背面から体部側面の5分の1程度に回転ヘラ削りを施すが、背面中央はユビオサエによる調整を行う。体部の残りはカキ目を施す。19はTK217窯式併行期の新しい時期に比定され、20・21・23は美濃6型式に比定される。22は6世紀末から7世紀初頭の時期に位置する。24はやや小ぶりの平瓶である。底部はほぼ平坦で、斜め外方に直線気味に広がって立ち上がる。上面は緩やかな円弧を描き、体部上面の中央寄りに口頸部をつける。口縁端部はやや内弯してのび、端部は丸く収める。頸部の中位やや上方に凹線が巡る。底部はヘラ切り後にナデ調整を施し、体部から口縁部まで回転ナデ調整を行う。美濃須衛窯産の須恵器に似るが、近隣の窯でつくられた可能性が考えられる。7世紀前半にあてはまる。25・26は台付瓶の破片であり、同一個体の可能性がある。27は瓶類の口縁部である。28・29は土師器の甕である。いずれも遺存状況がよく、口縁に一部欠損がみられるもののほぼ完形で出土した。28は、底部は丸底で、胴部はほぼ中央で最大に張り出す。全体に均整のとれた丸みを有し、口縁部は強く外反し端部は上方につまみ上げる。胴部外面には全体にハケ目調整を施しており、ハケ目は胴部の上半部と比べて、下半部及び底部の方が細く間隔が狭い。胴部の上半部から下半部、そして底部へと調整順が確認できる。また、内面は上半部に横位のハケ目調整を施し、下半部には縦位のヘラ削り調整を行う。ところどころにユビオサエの痕跡もみられた。口縁部は外面から端部内側にかけて横ナデ調整を施すが、内面には横位のハケ目調整の痕跡が残っている。胴部外面にはところどころ煤が付着する。底部外面中央には長さ約13.5cmのヘラ記号「一」がみられる。29は、底部は丸底で、胴部はほぼ中央で最大に張り出す。器高と胴部の最大径がほぼ同じため、28よりも丸みを有した印象をうけ、口縁部は外傾し端部は上方につまみ上げる。胴部外面には28と同様の調整を施す。ところどころにユビオサエの痕跡もみられた。また、内面には上半部に横位のハケ目調整を施し、下半部は煤が付着しているため調整の確認が難しいが、ユビオサエの痕跡が残る。口縁部は外面に横ナデ調整を施し、内面には僅かに横位のハケ目を確認した。胴部の外面全体と内面下半部に煤の付着がみられる。28・29は、いずれも内堀・井川(1996)によると北野系のA1類の丸底甕<sup>8)</sup>で、美濃地域では6世紀後葉頃からみられるとされる。30は灰釉陶器の瓶類の肩部の破片である。31は山茶碗の底部である。外面には回転糸切り痕が残る。意図的に打ち欠いた痕跡があることから使用後に加工した可能性がある。内面は擦れていないが、高台に若干の擦れた痕跡がみられる。底部外面にはシミ状の黒い跡がみられるが、墨書か否か判然としない。32～56は金属製品である。32は鉄刀である。刃部は一部欠損がみられるが、残りは良好である。切先はふくらみを

もち、ほぼ均一な幅を保ちながら関部に達する。断面形状は楔形である。木質等鞘身に伴う付着物は確認できなかった。関部は片関であり、茎部は茎端に向かって先細るが、端部は欠損しており不明である。断面形状は逆台形である。関部から6cmの位置に、鉄製の目釘が残存する。また、茎部には一部木質が残存する。33～52は鉄鏃で、いずれも長頸鏃である。鏃身部が残っているものは、柳葉形である。鏃身関は大半がナデ関であるが、33は角関である。頸部は細く扁平であり、頸部関は棘状関のものが大半であるが、34・35は台形関である。茎部に木質が残存するものは、33・35・36である。時期は、台形関と棘状関の鉄鏃が併存することから、台形関から棘状関に転換する<sup>9)</sup>6世紀末から7世紀初頭と考えられる。52は鏹である。鉄製で本来は2個1対で装着されていたと思われるが、半分のみである。内面には木質が残っている。形状が32の関部に一致することから、32の一部であった可能性が高い。53～56は刀子である。53・54は、刃部は一部欠損がみられるが残りは良好である。切先はふくらみをもち、やや幅を広げながら関部に達する。断面形状は楔形である。関部は両側に直角の関をもつ。茎部は扁平で端部を欠損している。54はやや厚みがあり、木質が残る。55・56は切先がふくらみをもち、やや幅を広げながら関部に達する。断面形状は楔形である。関部は両側に斜関をもち、茎部は茎端に向かって先細る。いずれも茎端を欠損している。木質がわずかに残る。

**遺構の時期** 出土遺物から本古墳の築造は6世紀末頃と考えられる。石室埋土の堆積状況から、小石槨の設置以前の堆積(15～18層)については、後世に盗掘された形跡がないにもかかわらず、美濃地方における一般的な片袖式の横穴式石室と比較すると、馬具や玉類・耳環などが伴っていない点が特徴的である。閉塞石の状況と、玄室内の遺物出土状況から、本古墳は初葬ののち、2度の追葬を行ったと推測できる。初葬に伴う痕跡としては、玄室北東隅に設置された土師器甕28や閉塞石基底がある。28の西隣の礫床上に寄り添うように置かれた土師器甕29は、28と型的な時期差がみられないことから同時に埋納されたとも考えられるが、設置の仕方が明らかに異なることから、1度目の追葬時に用いられた可能性も考えられる。1度目の追葬が行われた痕跡は、小石槨下の礫床上で出土した坏身4と閉塞石基底の上で確認した板石である。坏身は7世紀中葉に位置付けられるが、礫床上から出土した小石槨で台として利用されていた高坏5が、6世紀末に位置付けられることから、坏身は追葬に伴うものと考えるのが妥当であろう。なお、奥壁付近の鉄刀や鉄鏃がこの追葬に伴うものか、あるいは片付け行為によるものかは検討が必要であるが、鉄鏃については棘状関への転換期のものと考えられることから、追葬より片付け行為による可能性が高い。この追葬後に再び板石を使って玄室が閉塞され、小石槨が構築される段階の追葬で再度あけられたとみられる。小石槨からは、高坏・短頸壺・提瓶・平瓶・刀子などが出土したが、TK43 窯式併行期からTK217 窯式期と時期差がある。このことから、初葬や1度目の追葬に伴う副葬品を再利用していると考えられ、2度目の追葬時期は7世紀後半と考えたい。玄室南側や羨道から出土する須恵器は破片になったものや出土位置が床面より高いものが多く、追葬に伴って動かされた可能性がある。

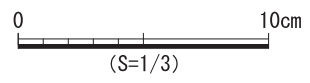
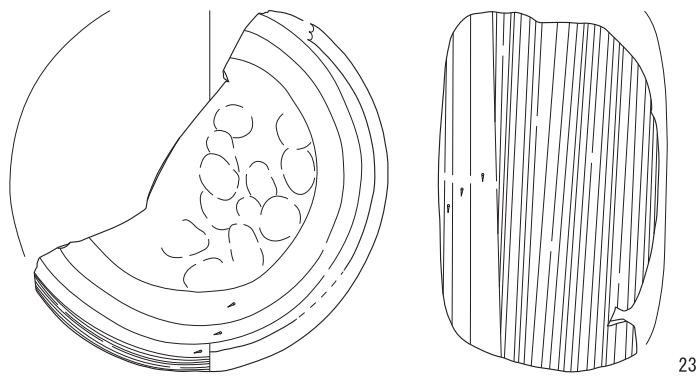
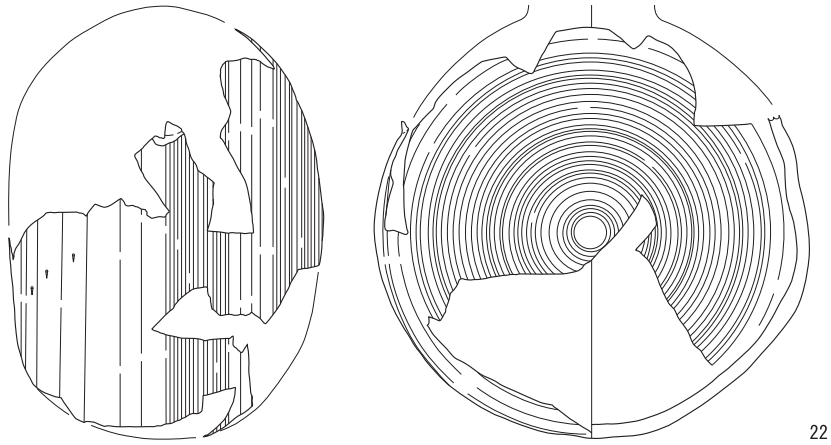
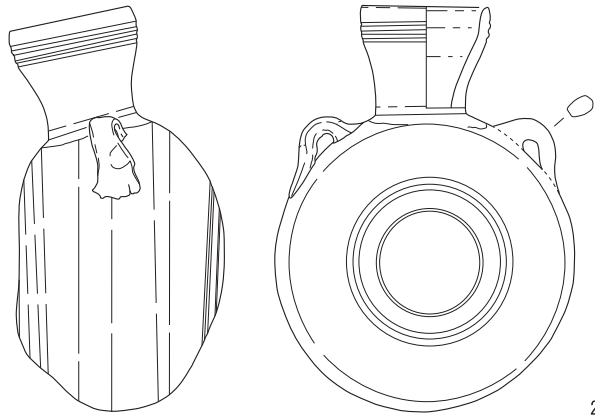


第28図 4号古墳出土遺物(1)

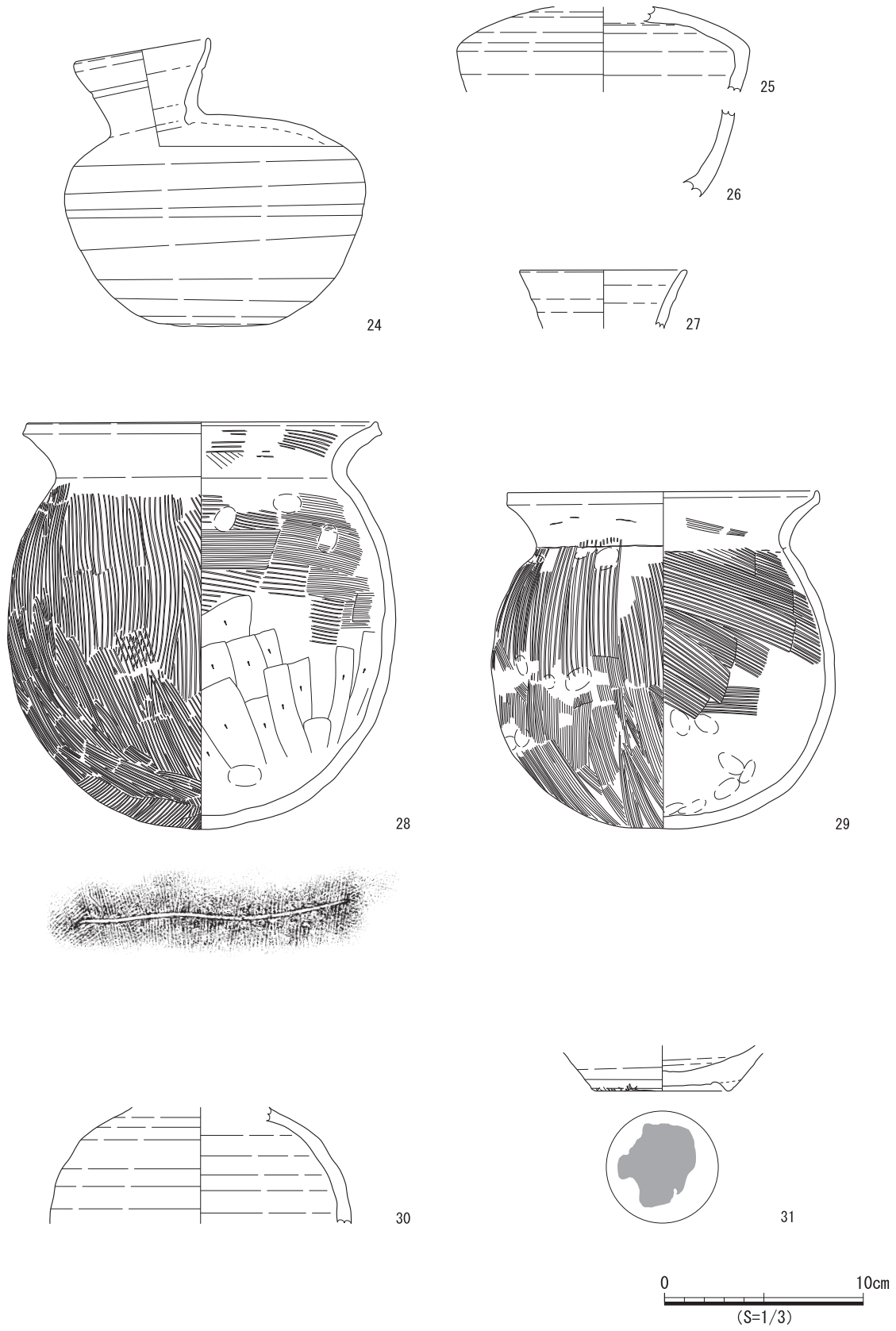


第29図 4号古墳出土遺物(2)

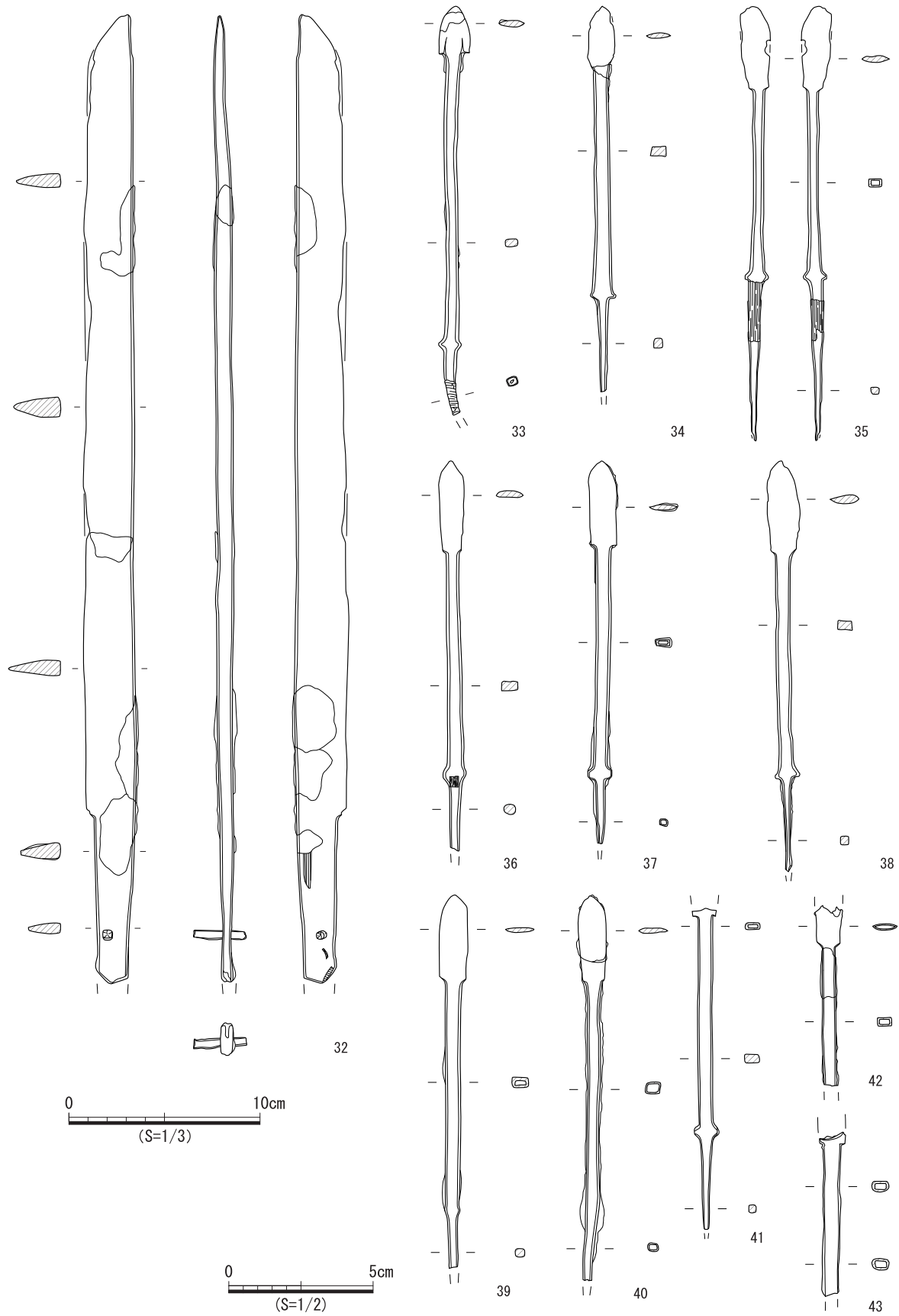




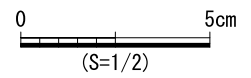
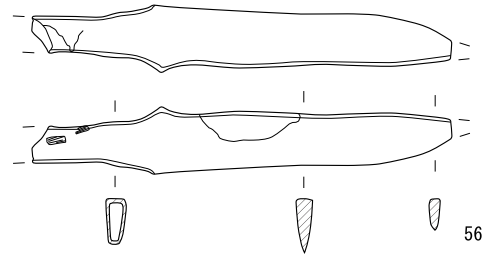
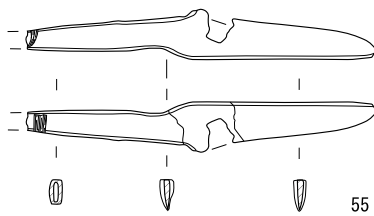
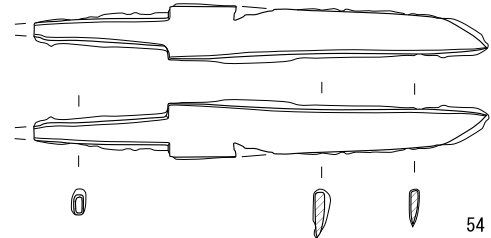
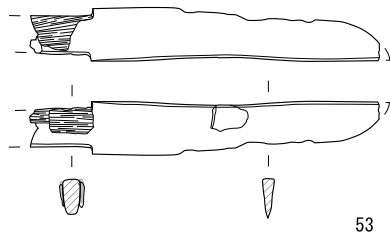
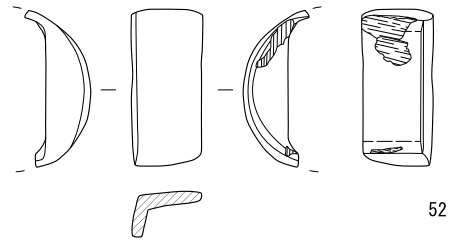
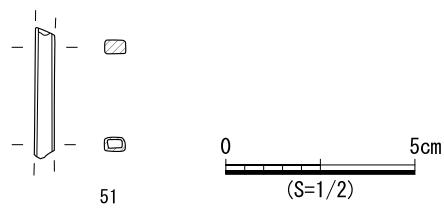
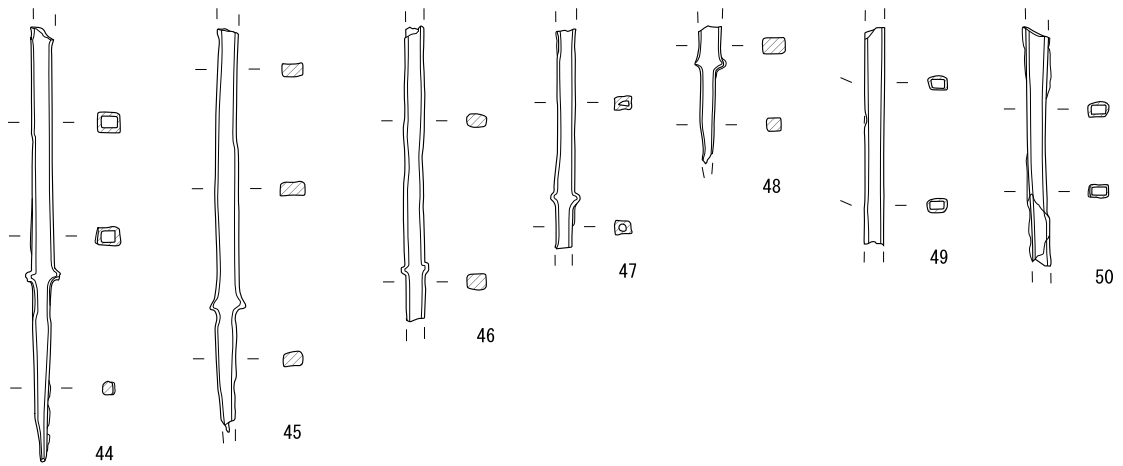
第30図 4号古墳出土遺物(3)



第31図 4号古墳出土遺物(4)



第32図 4号古墳出土遺物(5)



第33図 4号古墳出土遺物(6)

### 3 洞北山5号古墳

本古墳は、北西から南東に向かって傾斜する斜面に位置し、4号古墳の北にあたる。東側は旧谷地形となり特に傾斜が強い。

**検出状況** 本古墳は、平成27年度調査の表土掘削中に確認した。北西から南東に向かい表土掘削を行ったところ、傾斜面に不自然な墳丘らしき高まりを確認し、墳丘の可能性を認識した。墳丘の表面には、水流による溝状の浸食痕跡が数条みられた。

検出当初は、斜面下方で確認した4号古墳同様に横穴式石室を持つ円墳と考えていた。しかし、墳頂部の精査を行っても横穴式石室が露出しなかったことや、柿の根による攪乱で墳頂が判然としないため、さらに掘り下げを行った結果、鉄剣等が出土し、この時初めて木棺直葬の埋葬施設である可能性を認識することとなった。その後、墳頂部の精査を繰り返し行い、鉄剣が出土した埋納遺構や木棺痕跡、墓坑を確認した。また、墳丘南側の斜面からは直線的に並ぶ葺石を確認した。

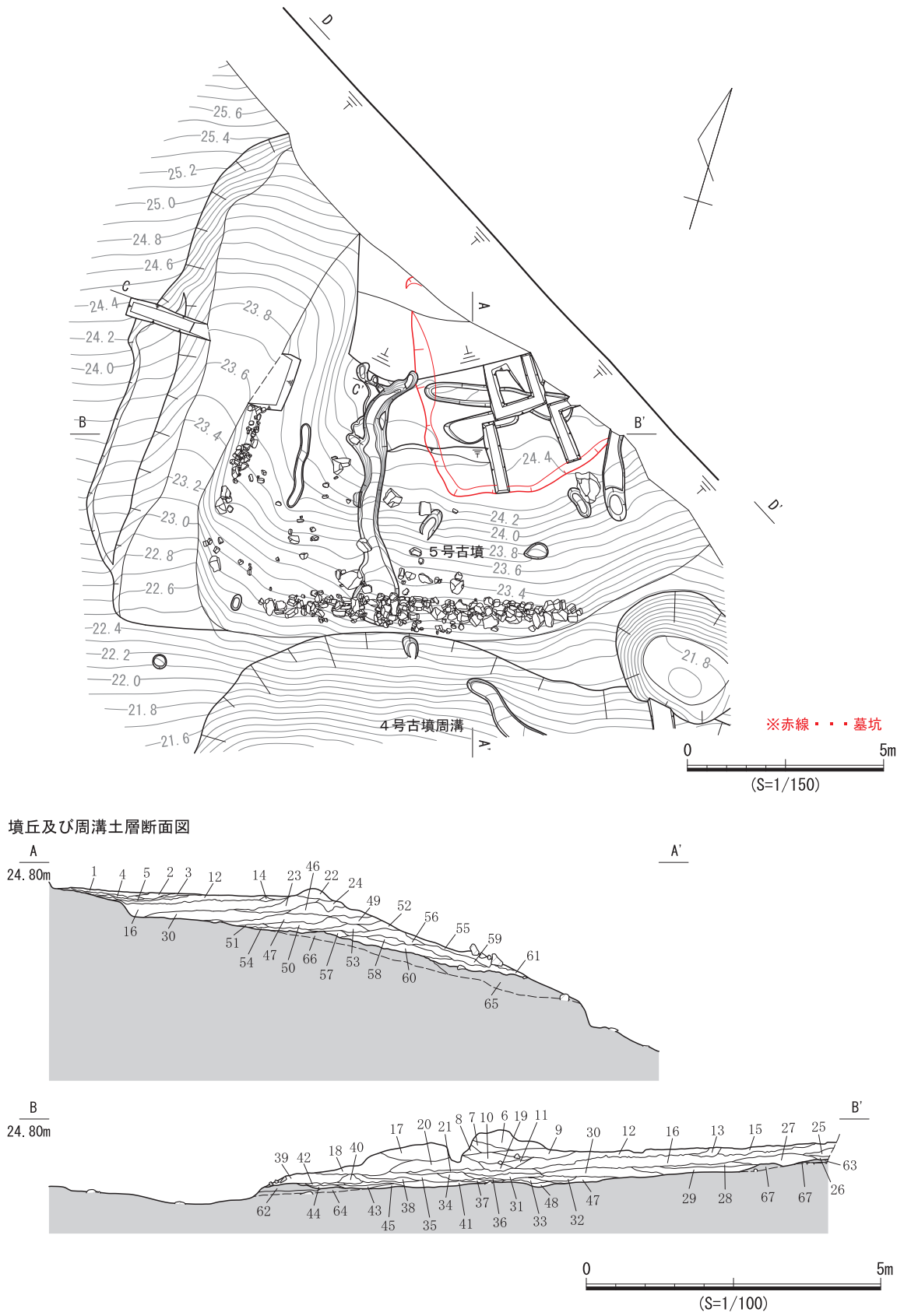
周溝は斜面上方にあたる北西側から検出し、その掘削過程で西斜面の葺石を確認した。当初、墳丘が発掘区北壁付近で東に折れる形状を想定し、盛土北部を基盤層が露出するまで掘り下げたところ、発掘区北壁の土層観察によって礫層と褐色土が互層で水平に堆積している状況から、墳丘盛土であることが判明した。そのため、墳丘西側の周溝は、発掘区の北側へ延びると考えられる。

**外部施設(第34~38図)** 平面形は、北東側が発掘区外に延びるため判然としないが、南斜面の葺石が直線的に配置されることから、方墳の可能性が考えられる。しかし、南斜面と東斜面との境の角が明確でなく、西斜面の葺石と南斜面の葺石の平面的な配置方向が鋭角に交わるなど、方墳とは断じ難い形状をとる。葺石の配置から前方後円墳の前方部である可能性についても考えたが、斜面に立地することから、現状では不整形な方墳とする。検出した盛土で確認した墳丘規模は、残存長で東西約9.7m、南北約8.1mである。

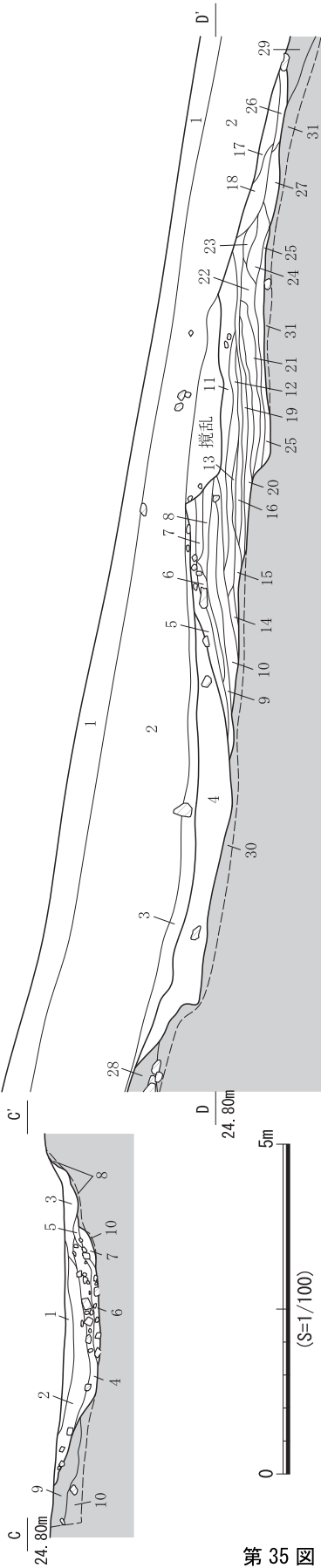
本来の墳頂はI層直下であったと考えられ、発掘区北壁の土層で確認できる墳頂の海拔は25.26mである。しかし、柿の根による攪乱や黒褐色土や砂礫が混じる判別し難い盛土であったため、全体的に掘り下げて調査した結果、盛土を除去してしまい、遺物が出土するまで墓坑の存在を認識できなかった。盛土の範囲は葺石下端までであり、墳丘として構築された範囲と葺石で囲まれた埋葬施設としての古墳の範囲が同一であったと考えられる。発掘区北壁で確認した墳頂と南面盛土端部との比高差は2.42mである。

墳丘は、基盤を2回にわたり削り込んだ階段状の造成の上に構築されていた。この古墳の周囲には、同時期と考えられる遺構はなく、意図的に急斜面の中腹を選地している。

古墳の築造過程は、以下のものであったと考えられる。まず、斜面を南北約3m、東西約10mの範囲で削平して段(以下、「南段」という。)を造成する。東側は発掘区外に延びるため、実際にはさらに広い範囲であった可能性が高い。下方の斜面にその排土を盛って平場を造成する(第34図A-A'断面及びB-B'断面の55~61層)。次に、整地した平場の端部を巡るように土堤を築く(第34図A-A'断面及びB-B'断面の37~54層)。その際、平場の北側は、段切りによって形成された壁面があるため、土堤は北側を除き配置されたと思われる。土堤内部を整地(第34図A-A'断面及びB-B'断面の28~36層)した時点で、南段の上に水平な面が形成される。次に、南段の斜面上方を削平し、再び段(以下、「北段」という。)を造成する。段の規模は、南北約2.5m、東西約4.5mを確認したが、さらに



第34図 洞北山5号古墳平面図・墳丘・周溝土層断面図(1)



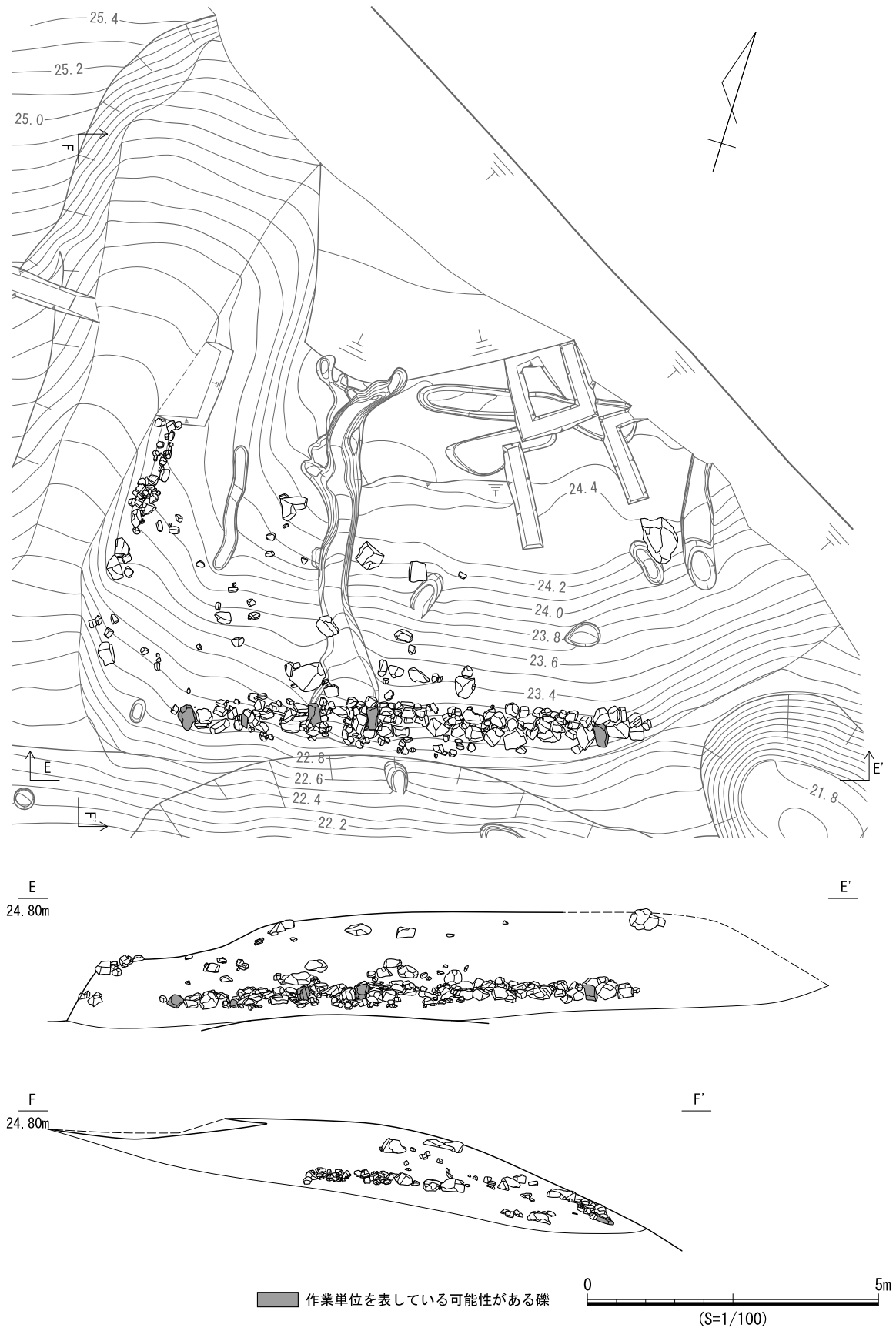
第35図 河北山5号古墳平面図・墳丘・周溝土層断面図(2)

- A-A' 断面・B-B' 断面**
- 1 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を3%含む
  - 2 10VR3/4 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
  - 10VR3/4 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を1%含む
  - 3 10VR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を1~2%含む
  - 10VR3/4 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を1%含む
  - 4 10VR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cmを超える角礫を少量含む
  - 5 10VR3/4 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を7%含む
  - 6 10VR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を15%含む
  - 10VR4/4 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径10cmを超える角礫を10%含む
  - 7 2.5I2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む
  - 8 10VR1.7/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 9 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を15%含む
  - 10 10VR3/4 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む
  - 10VR3/4 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を5%含む
  - 11 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を5%含む
  - 12 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を5%含む
  - 10VR4/6 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を5%含む
  - 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径10cmを超える角礫を少量含む
  - 13 10VR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1~2%含む
  - 14 10VR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を少量含む
  - 15 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1~3cmの角礫を15%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径10cmを超える角礫を5%含む
  - 16 2.5I2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cmを超える角礫を1~2%含む
  - 10VR1.7/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 18 10VR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を5%含む
  - 19 10VR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
  - 20 10VR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む
  - 21 10VR2/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を3%含む
  - 22 10VR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を7%含む
  - 10VR4/6 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を20%含む
  - 23 10VR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を15%含む
  - 10VR4/4 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を10%含む
  - 24 10VR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を10%含む
  - 10VR4/4 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を10%含む
  - 25 10VR2/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 26 10VR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 径5cmを超える角礫を少量含む
  - 27 10VR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を15%含む
  - 10VR3/4 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を15%含む
  - 10VR4/4 褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を15%含む
  - 2.5I2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を7%含む
  - 10VR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を7%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を10%含む
  - 10VR4/6 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を1~2%含む
  - 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
  - 10VR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を1~2%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 10VR4/4 褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
  - 10VR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を少量含む
  - 10VR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を5%含む
  - 径3cmを超える角礫を少量含む
  - 39 10VR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を15%含む
  - 40 10VR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む
  - 10VR4/4 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む
  - 10VR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む
  - 42 10VR4/4 褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を2~3%含む
  - 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を3%含む
  - 44 10VR5/4 灰黄褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む
  - 2.5I3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む
  - 46 10VR1.7/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を15%含む
  - 径3cmを超える角礫を少量含む
  - 47 2.5I3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を少量含む

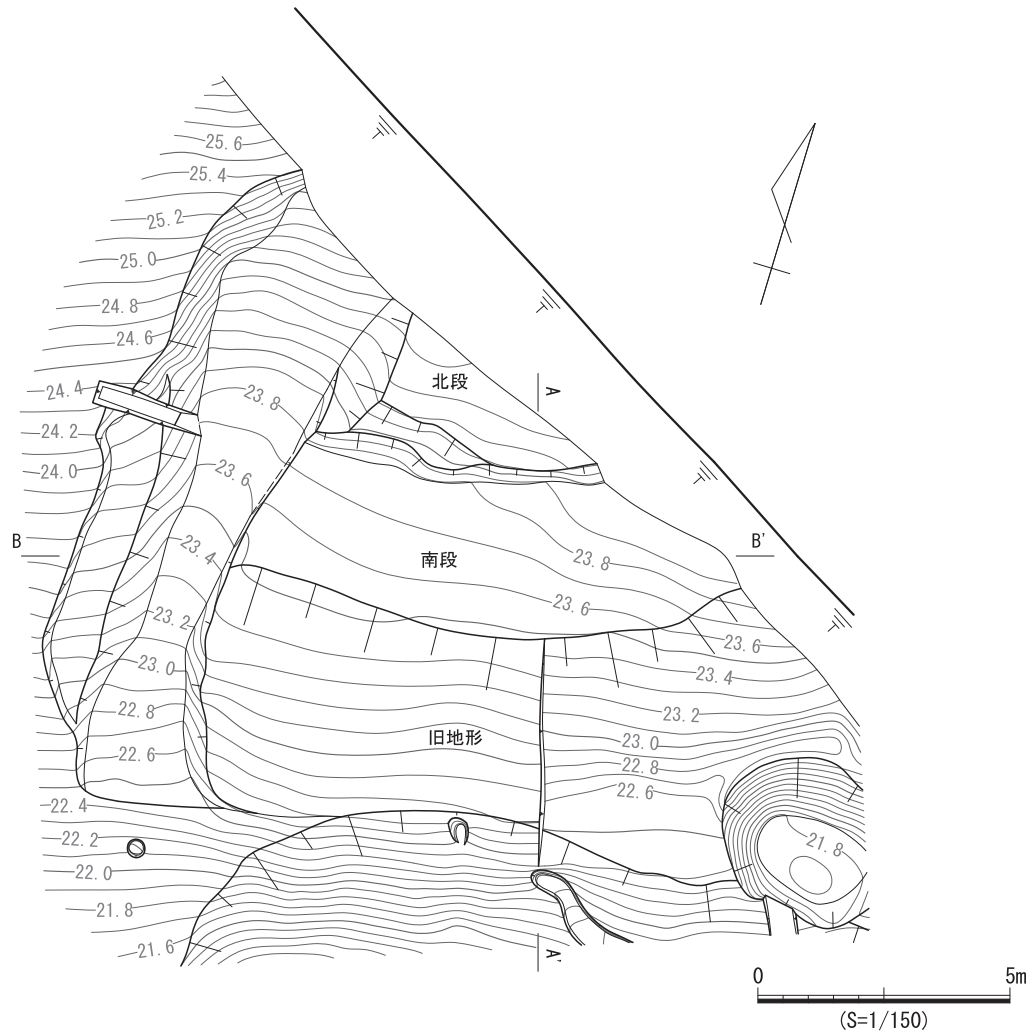
- A-A' 断面・B-B' 断面**
- 48 10VR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を7%含む
  - 49 2.5V2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を15%含む
  - 50 10VR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を15%含む
  - 10VR3/2 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 51 10VR3/2 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 52 10VR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を10%含む
  - 53 2.5V3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を10%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
  - 54 10VR2/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
  - 55 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を5%含む
  - 56 10VR2/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む
  - 57 2.5V2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を2~3%含む
  - 58 10VR1/7/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む
  - 59 10VR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 60 10VR2/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 61 2.5V2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 62 10VR2/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
  - 63 10VR2/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む
  - III層 (黒色土)
  - 64 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
  - 65 10VR2/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1~5cmの角礫を10%含む
  - 66 10VR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を15%含む
  - 67 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む
  - D-D' 断面**
  - 1 10VR3/4 暗褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20~45%含む
  - 場所により 10VR4/4 褐色シルトを含ま Ⅰa層
  - 2 10VR3/8 黄褐色砂質シルト しまりなし 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する
  - 7.5VR5/8 明褐色粘質シルト層 (ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を10%含む) と互層をなす
  - またB05ヶゾット以東では色調が10VR4/6褐色を呈しラミナが見られる Ⅰb層
  - 3 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を15%含む
  - 10VR2/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を15%含む
  - 5 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cm以下の角礫を5%含む
  - 径10cmを超える角礫を10%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト プロックを少量含む
  - 4 10VR2/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト プロックを5%含む
  - 6 10VR2/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cm以下の角礫を5%含む
  - 7 10VR3/3 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む
  - 8 10VR2/2 褐色シルト プロックを5%含む
  - 10VR4/6 暗褐色粘質シルト プロックを5%含む
  - 10VR3/4 暗褐色粘質シルト プロックを5%含む
  - 9 10VR4/4 褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を15%含む
  - 10 10VR2/1 黒褐色粘質シルト プロックを5%含む
  - 10VR3/1 黒褐色粘質シルト プロックを5%含む
  - 10VR4/4 褐色粘質シルト プロックを5%含む
  - 11 10VR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を10%含む
  - 10VR2/2 暗褐色粘質シルト プロックを5%含む
  - 12 10VR4/6 褐色シルト プロックを5%含む
  - 10VR2/1 黒褐色粘質シルト プロックを1~2%含む
  - 13 10VR3/1 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を2%含む
  - 10VR3/4 暗褐色粘質シルト プロックを少量含む
  - 14 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を5%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト プロックを5%含む
  - 15 10VR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を5%含む
  - 16 10VR4/4 褐色粘質シルト プロックを5%含む
  - 10VR3/1 黒褐色粘質シルト プロックを3%含む
  - 17 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を7%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト プロックを少量含む
- C-C' 断面**
- 1 10VR2/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 粒子が非常に細かい 径10cmを超える角礫を少量含む
  - 径0.5~1cmの角礫を10%含む
  - 10VR4/2 灰黄褐色粘質シルトが層上部に15%ほど混じる
  - 2 10VR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 粒子が非常に細かい 径0.5~1cmの角礫を10%含む
  - 径10cmを超える角礫を10%含む
  - 7.5VR5/8 明褐色粘質シルト プロックを少量含む
  - 10VR4/2 灰黄褐色粘質シルトを斑状に20%含む
  - 3 10VR3/1 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1~3cmの角礫を25%含む
  - 4 10VR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 粒子が非常に細かい2層によく似る
  - 径0.5~5cmの角礫を10%含む
  - 径10~20cm大の貫石の脈石と思われ多く含む
  - 5 10VR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
  - 径5cm大の角礫を少量含む
  - 6 10VR3/3 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を10%含む
  - 径10~20cm大の貫石の脈石と思われ多く含む
  - 7 10VR3/2 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
  - 8 10VR4/4 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
  - 9 10VR3/3 暗褐色粘質シルト プロックを少量含む
  - 10VR4/4 褐色粘質シルト プロックを少量含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む
  - 10 10VR3/4 暗褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を15%含む
  - III層 (暗褐色土)
  - III層 (黒色土)
  - III層 (黒褐色土)
  - III層 (暗褐色土)
  - 18 10VR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を7%含む
  - 径10cmを超える角礫を3%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト プロックを少量含む
  - 19 10VR2/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を5%含む
  - 径5cmを超える角礫を少量含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト プロックを3%含む
  - 20 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を5%含む
  - 10VR2/1 黒褐色粘質シルト プロックを少量含む
  - 10VR4/6 褐色シルト プロックを3%含む
  - 21 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を7%含む
  - 径5cmを超える角礫を少量含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト プロックを少量含む
  - 22 10VR4/4 褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む
  - 10VR2/2 黒褐色粘質シルト プロックを5%含む
  - 23 10VR2/3 暗褐色粘質シルト プロックを1~2%含む
  - 10VR3/4 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む
  - 24 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む
  - 径5cmを超える角礫を少量含む
  - 25 10VR2/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト プロックを少量含む
  - 26 10VR2/1 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を3%含む
  - 27 10VR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を1~2%含む
  - 径5cmを超える角礫を少量含む
  - 10VR3/3 暗褐色粘質シルト プロックを少量含む
  - 28 10VR2/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を10%含む
  - 10VR2/3 暗褐色粘質シルト プロックを20%含む
  - 10VR2/3 黒褐色粘質シルト プロックを5%含む
  - 29 10VR2/2 黒褐色粘質シルト プロックを少量含む
  - 径10cmを超える角礫を5%含む
  - 10VR4/4 褐色粘質シルト プロックを少量含む
  - III層 (黒色土)
  - III層 (黒褐色土)
  - 30 10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
  - 10VR3/4 暗褐色粘質シルト プロックを少量含む
  - III層 (暗褐色土)
  - III層 (黒褐色土)
  - 31 10VR4/6 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む
  - 径5cmを超える角礫を10%含む
  - III層 (褐色土)

第36図 河北山5号古墳平面図・墳丘・周溝土層断面図(3)





第37図 5号古墳葺石検出状況



第38図 5号古墳墳丘下造成状況

発掘区外に延びる。その排土を利用して再び土堤の設置とその内部の整地を繰り返す（第34図A-A'断面及びB-B'断面の1～27層）。これにより、北段から続く水平な面が形成される。土層断面からは、2段目以降の土堤を、1段目の土堤より少し内側にずらすことで、墳丘の傾斜面を作出する意図が感じられる。やや傾斜の強い南斜面では、土堤の位置が西側の土堤ほど内側に入らないことがわかる。北段から続く平場の端部に設置された3段目の土堤（第34図A-A'断面及びB-B'断面の6～8層、22層）に囲まれた範囲が墓坑であった可能性が高い。先述のように、遺物が出土するまで墓坑の存在を認識できなかったこと、発掘区北壁の土層断面からも盛土後に墓坑を掘り込んだ形跡がみられないことから、構築墓坑<sup>10)</sup>状に盛土する過程で埋葬行為が行われたと推測される。発掘区北壁の土層観察から、最終的な盛土は土堤を設けず被せたと考えられる。

葦石は南面と西面で確認した。南面は墳丘裾部で、幅1m、東西8mの範囲にわたって検出した。拳大から人頭大のチャート礫が用いられているが、東西方向の目地は確認できない。縦長の扁平な面を有した礫を0.9～1.2m間隔に設置しており、作業単位を表している可能性がある。この葦石の斜面上方でもいくつかの礫がみられ、南面全体が葦石で覆われていた可能性も考えられるが、斜面下方の4号古墳の周溝内には目立った転石はなかった。西面では、墳丘の南西角から北へ約5mの範囲で確

認した。1～2段程度しかなく、周溝への転石を踏まえても南面と様相が異なる。C-C' 断面の土層には、転石の可能性のある礫を多く観察できるが、発掘区北壁面の土層断面では、周溝底面近くに目立った礫が観察されないことから、以北では葺石が省略されていた可能性も考えられる。

南面と西面の葺石は、約  $74^\circ$  の鋭角に交わり直交しない。前方後円墳の前方部のようにもみえるが、葺石の様相から、南からの外観を意識したものの地形の制約を受けたため、平面形が歪んだと考えられる。墳丘の断ち割り調査で、葺石と盛土の端部が一致していることが判明し、葺石が墳丘の範囲を示している可能性が高い。また、南面と西面では葺石基底部の高さが異なっている。基底部の位置からは南面の葺石が南段に伴う一次造成に対応しているのに対し、西面の葺石は北段に伴う二次造成に対応している。このことから、葺石は平場を造成しながら設置された可能性が高く、土留めとして設置された可能性も考えられる。

周溝は墳丘西側で確認した。幅 5.03m、深さ 0.60m で、墳丘に沿って南北方向に直線的に設置されており、北側は発掘区外である。南端は墳丘南端と一致し、流失したためか斜面の傾斜に合わせて自然に消滅する。埋土は旧表土に似ており、斜面上方や墳丘からの流土によって埋没したと考えられる。埋土中からは遺物は出土しなかった。断面は逆台形に近い形状で底面は平坦である。底面は旧表土下の黄褐色砂礫土や褐色土が露出している。

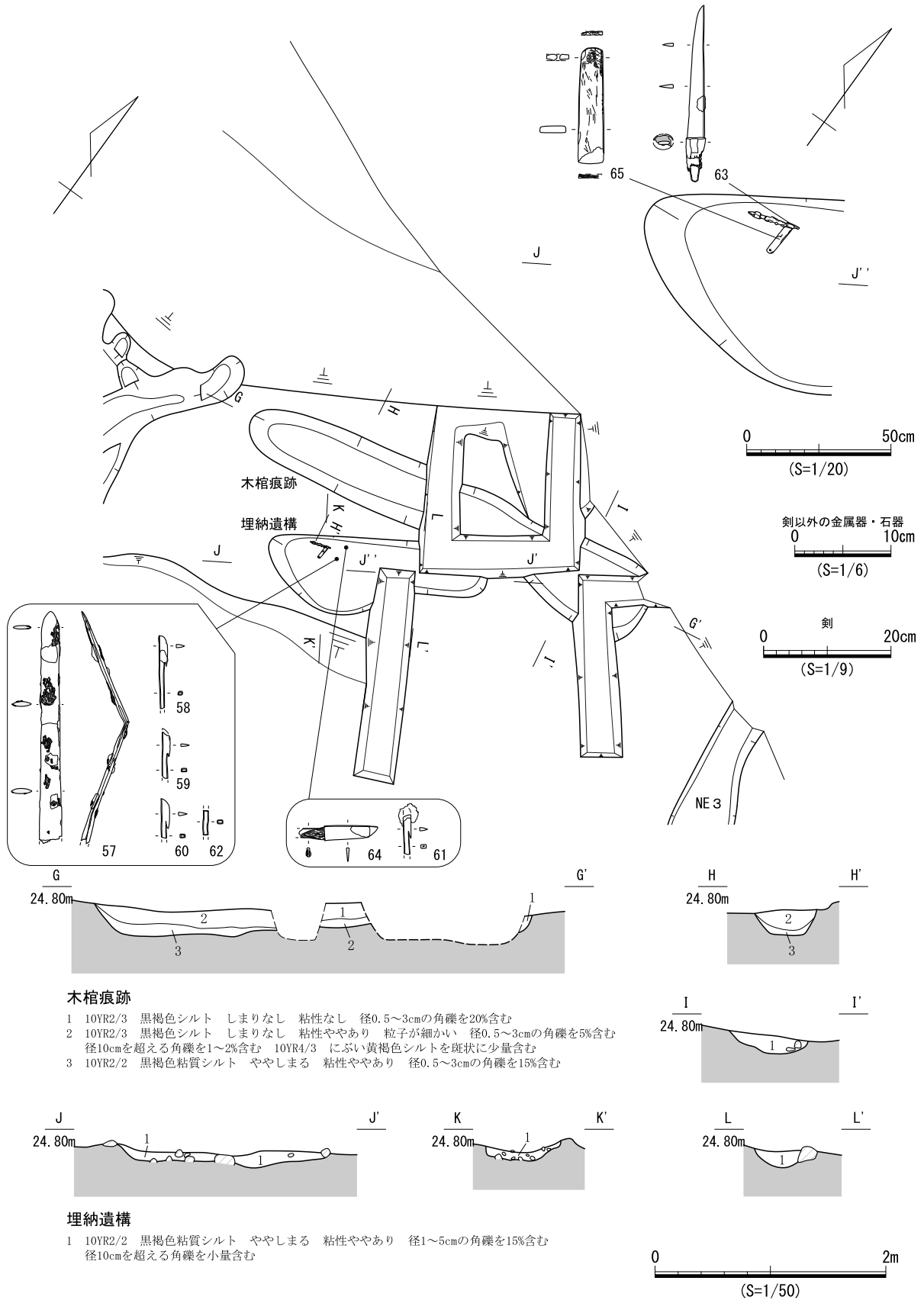
なお、墳丘の南東側も若干平場になっているが、ここには直径 2 m 以上の倒木痕があるため、平場が古墳に伴うものかどうかは不明である。

**埋葬施設（第 39・40 図）** 本古墳は、今回の調査で唯一木棺直葬による埋葬を行ったと考えられる。墓坑は、当初北側の盛土を誤認して掘りすぎたため、平面形が南西―北東方向に主軸をもつ方形に近い形状と判断した。しかし、最終的に墳頂の大部分を占め、北西―南東方向に主軸をもつ方形の形状であることが分かった。東側と北側の大部分は発掘区外である。前述のように、墳丘築造に伴う 3 段目の土堤を利用し、その内部を墓坑とした可能性が高い。墓坑内には木棺痕跡と埋納遺構を確認した。墓坑の主軸方位は埋納遺構と直交するが、木棺痕跡や南面の葺石とは異なる。これは、墓坑の構築が墳丘築造と連動しており、土堤の設置が斜面の向きに影響を受けたためと考えられる。埋土は、砂礫混じりの黄褐色土ときめ細かい黒褐色土の水平な互層堆積（第 40 図 M-M' 断面、N-N' 断面、O-O' 断面の 1～11 層）が観察された。木棺痕跡と埋納遺構を埋めた土層は、発掘区北壁（第 35 図）の 11 層と 12 層に対応すると思われる。

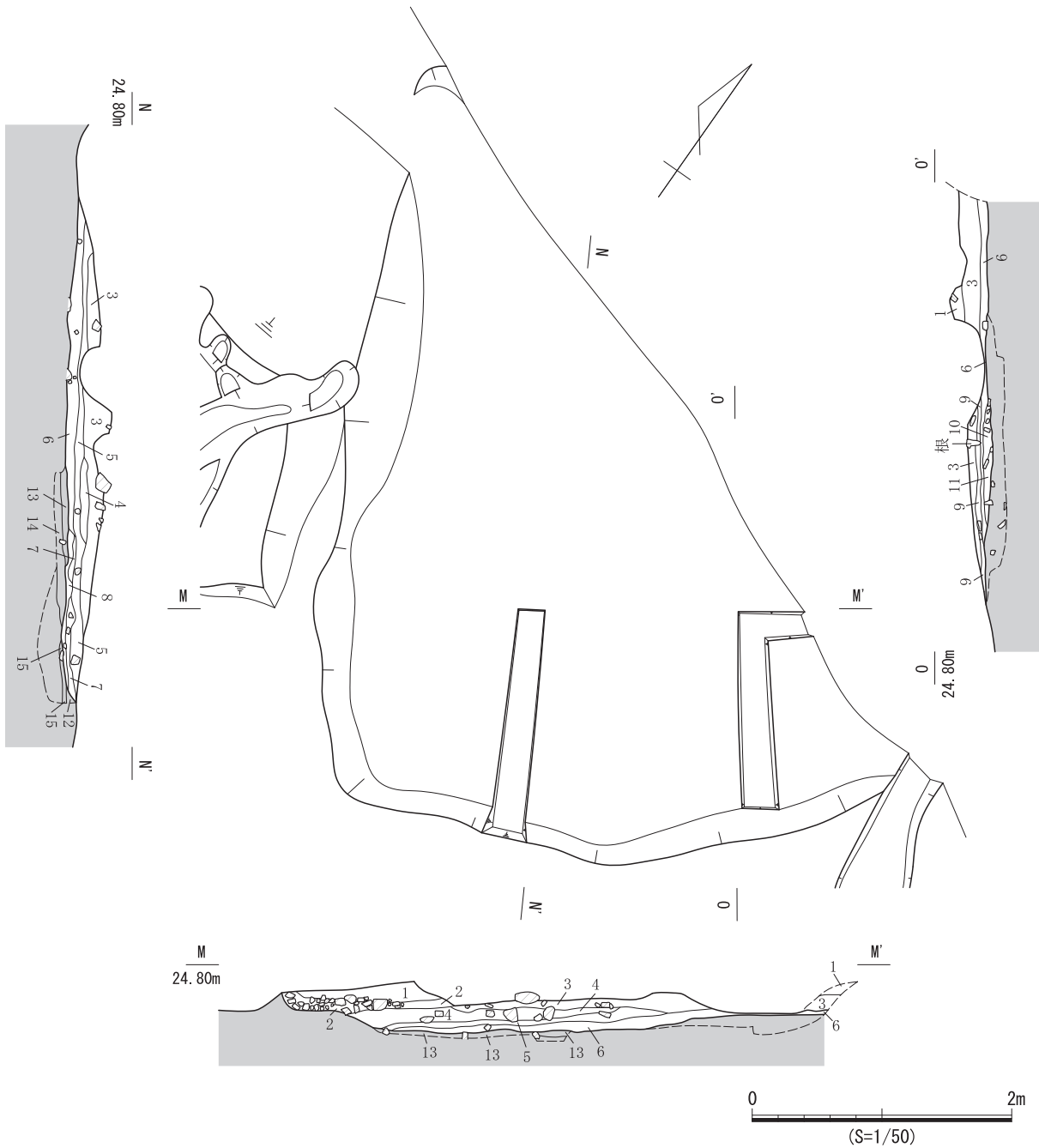
木棺痕跡は、埋納遺構掘削後に行った墓坑の土層確認や再精査により確認した。平面形は東西に細長く、東端はやや幅広で隅丸な形状であるが、西端は丸く収める。長軸 3.81m、短軸 0.53m、深さ 0.30m で、主軸方位は N- $80.5^\circ$  -E である。主軸方位が南面の葺石とほぼ平行するが、前述のように検出した墓坑の主軸とは直交しない。長軸方向の G-G' 断面から、3 層はややしまりがあり途中で消失していることから、墓坑の土を見誤っている可能性がある。2 層は H-H' 断面から断面形状が半円に近く、1 層も 2 層と同様にしまりのない土層であることから木棺痕跡と考えた。底面の海拔が埋納遺構よりも低く、北段と一体となった平場の高さに近いことから、木棺の設置は墓坑に伴う土堤の設置とほぼ同じ段階で行われたと考えられる。なお、この遺構から遺物は出土しなかった。

埋納遺構は、平面形は東西に細長い、西側が幅広く不整形である。長軸 1.91m、短軸 0.69m、深さ 0.21m で、主軸方位は N- $58^\circ$  -E である。木棺痕跡や南面の葺石とは主軸方位が異なる。断面形

提磔及び鹿角装刀子出土状況(拡大図)



第 39 図 5号古墳木棺痕跡及び埋納遺構平面図・土層断面図・埋納遺構遺物出土状況



- |   |   |
|---|---|
| <p>1 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径3cm程度の角礫を1%含む</p> <p>2 10YR6/6 明黄褐色砂礫土 ややしまる 粘性なし<br/>径1~15cmの角礫を30%含む</p> <p>3 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径1~30cmの角礫を15%含む</p> <p>4 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり</p> <p>5 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径1~5cmの角礫を1%含む</p> <p>6 10YR4/4 暗褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり<br/>径1~2cmの小礫を10%含む</p> <p>7 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり<br/>径1~2cmの小礫を5%含む</p> <p>8 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径1cm程度の小礫をわずかに含む</p> <p>9 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径1~5cmの角礫を10%含む</p> | <p>10 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり<br/>径1~5cmの角礫を3%含む</p> <p>11 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径1~5cmの角礫を5%含む</p> <p>12 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径0.5cm程度の小礫を1%含む 墳丘盛土</p> <p>13 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径1~2cmの小礫を3%含む 墳丘盛土</p> <p>14 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径5cm程度の角礫を1%含む 墳丘盛土</p> <p>15 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径1~5cmの角礫を1%含む 墳丘盛土</p> |
|---|---|

第40図 5号古墳墓坑埋土土層断面図・完掘状況

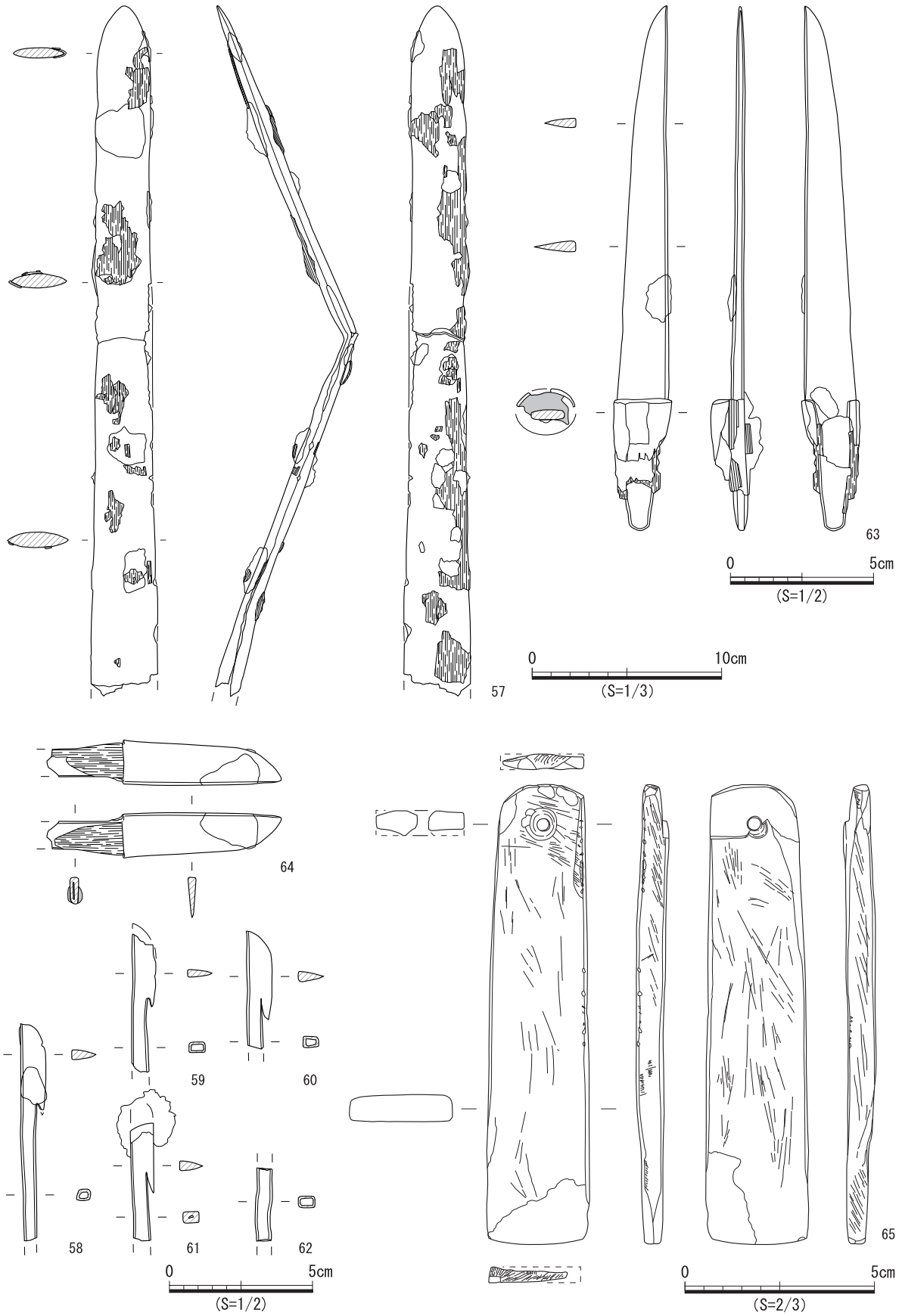
状は浅い皿状で、底面は墳丘に含まれる礫が露出しており、意図的に整地したような状況はみられなかった。遺構の東側が西側に比べてやや深い。西寄りから鉄剣・鉄鏃・刀子・提碁が出土した。底面の海拔は木棺痕跡よりも高く、第34図B-B'断面では墓坑の土堤の上端とほぼ同じ高さであることから、墓坑内を土堤の高さまでほぼ埋めた段階で遺物を埋納したと考えられる。鉄剣出土後に行った出土地点周辺の精査により、粒子の細かい赤みがかかった土が堆積する範囲を確認し、当初は木棺痕跡と判断した。しかし、墓坑の断ち割りや再精査を行う過程で、遺構範囲が東側に続くことや底面が出土位置より下がることが判明したため、再度主軸を設定し直して掘削した。最終的に、遺物がまとまって出土したこと、発掘区北壁の土層観察から、追葬したような状況は考えにくいこと、木棺痕跡とは重複しないことなどから、現時点では木棺痕跡に付随する埋納遺構と推測している。

**遺物の出土状況（第39図）** 埋納遺構から鉄剣・鉄鏃・刀子・提碁が出土した。遺物は全て遺構の西寄りから出土した。鉄剣57・鉄鏃58～62・刀子64は大型掘削具での作業中に出土したため、出土状況図は作成できなかったが、発見時には鉄剣の切先は西を向いていた。刀子63は、遺構掘削中に提碁65とともに出土した。刀子の切先と提碁の下端が接するように出土し、刀子には柄部分に明瞭な鹿角が観察された<sup>11)</sup>。

墳丘内から土師器が出土したが、細片であるため詳細不明である。

**出土遺物（第41図）** 57～64は金属製品である。57は鉄剣の刃部である。刃元付近で折れており、関部から茎部は欠損している。切先から19cmの位置でくの字に屈曲する。切先は明瞭なふくらみを持ち、次第に幅を広げる。断面形状はレンズ形で、全体に幅が広く重厚な作りである。表面には鞘身の木質が付着している。屈曲が、埋納前の意図的な行為によるものか、土圧によるものかは判断できない<sup>12)</sup>。58～61は片刃箭式の鉄鏃である。切先にふくらみを持ち、片刃形の鏃身部は腸袂を経て頸部に至る。腸袂の深さは3～7mmと浅い。いずれも頸部は欠損しているが、幅が狭く厚みも薄い点が類似する。また、62が頸部の一部であることから、58～60は長頸鏃であったと推測する。63・64は刀子である。63は、刃部が細身で長く、関が両側にみられる。茎端は角が取れて丸みを帯び、鹿角が片面に比較的残る。64は、関が両側にみられる。茎端を欠き、木質が両面に残る。65は提碁である。材質は粘板岩と考えられる。上端部は一部欠損がみられるが残りは良く、片方の角が取れて丸みを帯びる。平面形は短冊形で、中央下寄りでも最も幅が広く、両端はわずかに窄まる。側面形はおおむね均一の厚みであるが、研磨によって下端に向かって窄まる形態である。各面ともよく研磨され平滑であり、幅の広い両面は、中央より下半がやや波打つが、研磨による減りによるものと考えられる。また、所々に擦痕が認められる。上端中央から1cm下に直径約0.8cmの孔が穿たれている。孔は両面穿孔で、片面の孔の一部が欠損している。孔の内面に使用に伴う磨痕は確認できなかった。孔の周囲にのみ横方向の擦痕が目立つ。穿孔が欠けた面の下半分には鉄錆が広く付着しているが、この面は出土した際に下を向いており、下端には63の刃部が接していたため、63の錆が流出し付着したものと思われる。

**遺構の時期** 入江文敏（1998）によれば、古墳から出土する提碁は朝鮮半島の古墳から出土する佩碁に起源を持ち、威信材の一つとして副葬する思想は古墳時代中期（TK208型式前後）に日本に渡ったとされる。また、鹿野壘（2006）は奈良、大阪の古墳から出土した提碁について集成し、前期の古墳からの出土事例はなく、中期になって古墳に埋納されるようになり、後期の事例が多いと述べている。しかし、木棺直葬を埋葬施設とする古墳からの出土事例に絞ってみると、古墳の時期は5世紀前半か



第41図 5号古墳出土遺物

ら6世紀後半まで時期幅があるものの、共伴する遺物に須恵器を伴わない事例は5世紀代に限られる。本古墳についても、他の古墳が埋葬施設に横穴式石室を採用しているのに対し、唯一木棺直葬であることや、出土遺物に須恵器を伴わない点など共通する要素がみられる。一方、共伴する片刃箭式長頸鏃は、刃部が小さく頸部も細い。県内で出土する5世紀代の片刃箭式の鉄鏃は、刃部が大きく、短頸鏃のものが主流であり、長頸鏃のものは5世紀末葉に認められるものの、6世紀前葉から6世紀中葉にかけては認められず、6世紀末葉に再び認められるとされる<sup>13)</sup>。このことから、遺構の時期は5世紀末葉と6世紀末葉以降の2時期が考えられるが、4号古墳の築造時期が出土遺物から6世紀末葉と推測され、横穴式石室を採用し須恵器を副葬する埋葬形態がすでに確立していることから、同時期にあえて埋葬形態の異なる古墳を築造することは考えにくい。また、本古墳群では横穴式石室を採用する古墳が一定の間隔を保って築造されるのに対して、本古墳と4号古墳とは距離が近く、4号古墳築造後に築造したとは考えにくい。以上から、5世紀末葉にさかのぼると断定はできないものの、4号古墳築造よりは古いと考えられる。

#### 4 洞北山6号古墳

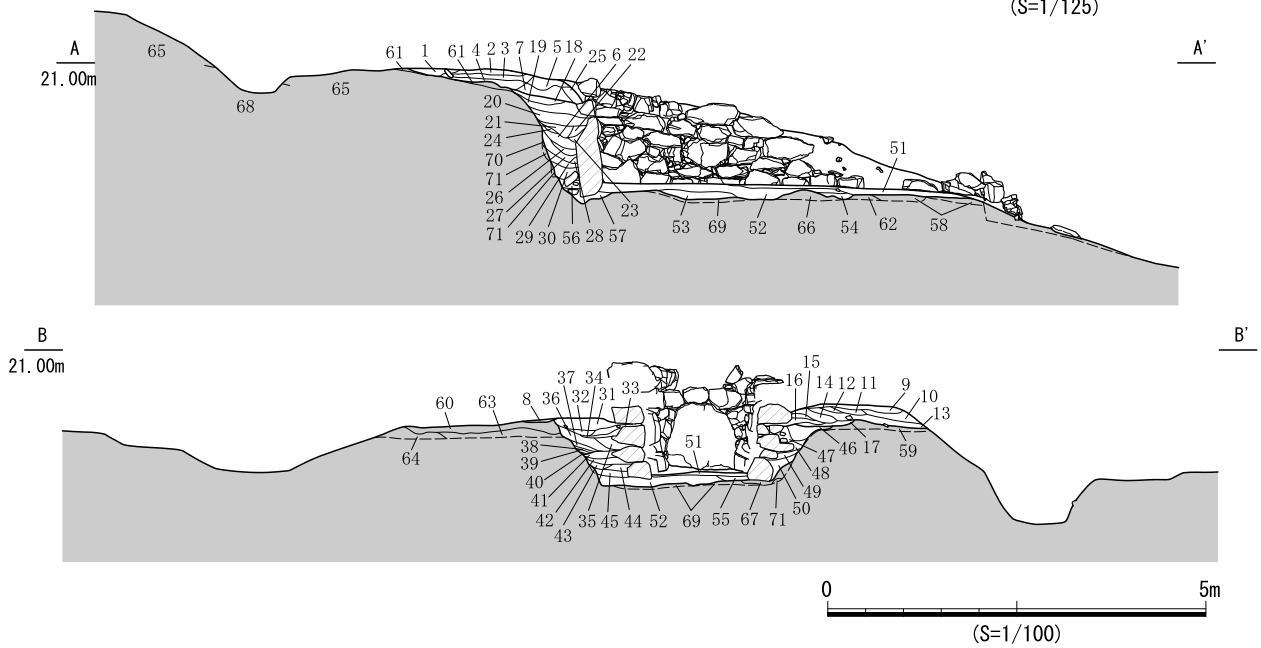
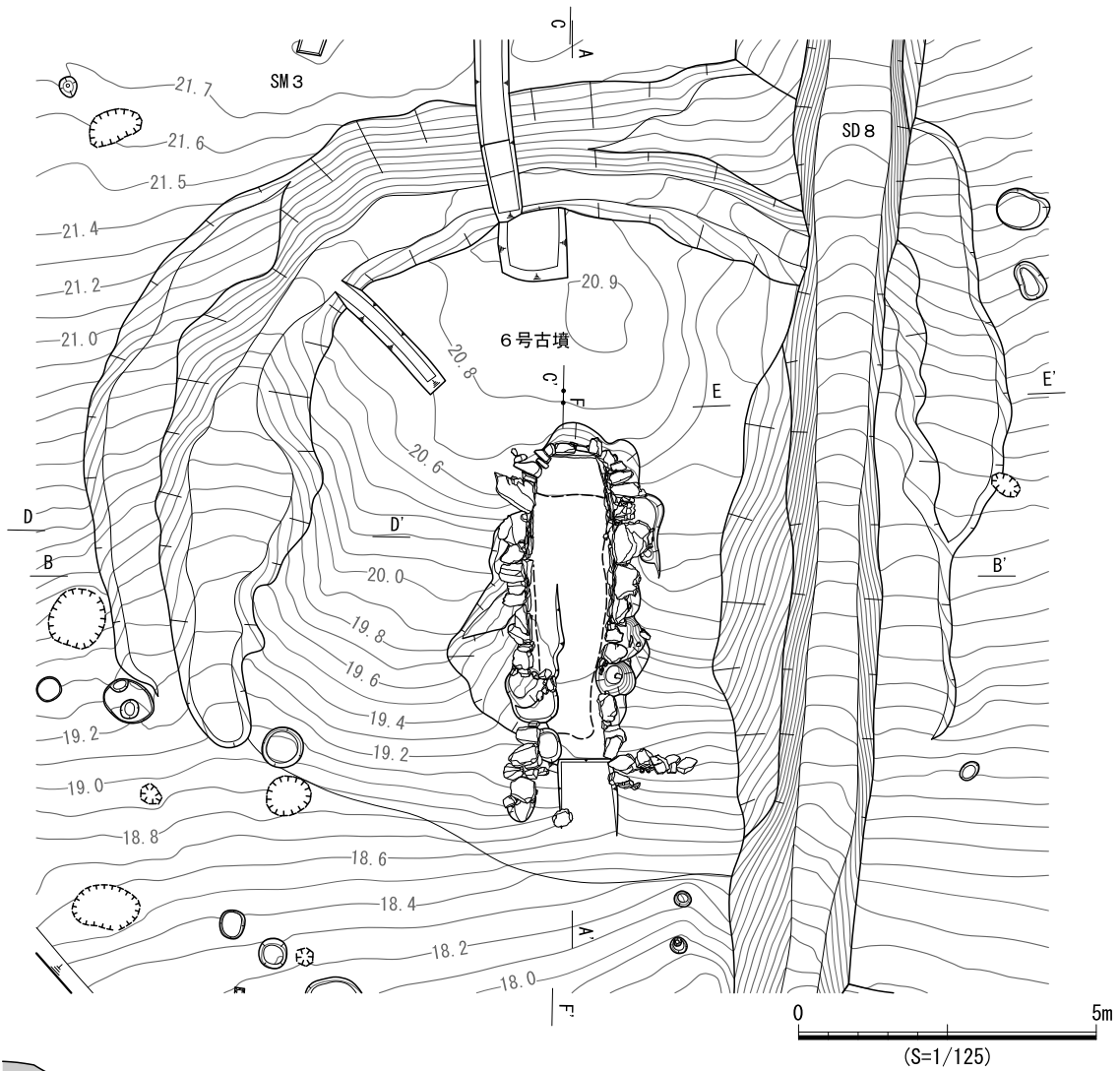
本古墳は、4号古墳・5号古墳と同じ旧谷地形の西側斜面に位置し、4号古墳とは周溝間の最短距離が1.9mと近接している。

**検出状況** 本古墳は、平成26年度の試掘・確認調査のTP6において周溝の一部を確認し、その存在が認識されていた。平成27年度調査の表土掘削中に、I層直下で奥壁及び側壁の一部を確認したことで、埋葬施設の位置を把握した。しかし、奥壁最上段の礫が表土付近に突き出て、重機掘削によって原位置から動いたため、この石材については取り外して調査を行った。調査の過程で、本遺構の北側にあるSM3(平場)の存在が明確になり、その斜面下方がIIa層に覆われていることが判明したため、人力でこの土を除去しながら検出作業を進めた。ただし、墳頂にはII層がなく、I層直下が検出面となった。これはSM3が造成された際、平場より高かった墳頂を削平したためと考えられる。ほどなく、側壁の石材を確認したが、玄門付近ではかなり下層までビニール片が混じる堆積土(第45図3層)があり、近年攪乱を受けたことが判明した。また、墳丘東部がSD8によって削平されており、その掘方断面を観察して南端の範囲を確認することができた。周溝は、SM3がIII層(黄褐色土)まで削平していることから比較的明瞭に判別可能であり、当初はSD8の西側、第4期の表土掘削後にSD8の東側を調査した。

なお、当初設定した主軸が動いた奥壁石材を基準にしていたため、石室埋土掘削後に再設定した。そのため、石室埋土土層断面図と石室展開図の主軸が異なっている。

**外部施設(第42~44図)** 墳丘の盛土は、墳頂ではSM3の造成に伴い石室掘方上端から石材1段分まで削平され、また墳丘東部ではSD8によって削平されている。そのため、残存状況は悪い。本来の平面形は、比較的残りの良い西側の状況や周溝の形状から円墳と推測される。残存する盛土を計測した墳丘規模は、南北7.54m、東西7.21mである。ただし、周溝C-C'断面の7層と8層は、露出した墳丘下の基盤を取り巻くような状態で検出したため周溝埋土と誤認して除去したが、土層図や完掘状況などから、墳丘盛土の基底部であった可能性が高い。周溝を含めた古墳規模は南北13.4m、東西14.73mであり、これは今回の調査で確認した横穴式石室を持つ古墳の規模としては、3号古墳、4号古墳に次ぐ大きさである。また、石室の南側は旧表土が露出しており盛土は残存していないが、玄室



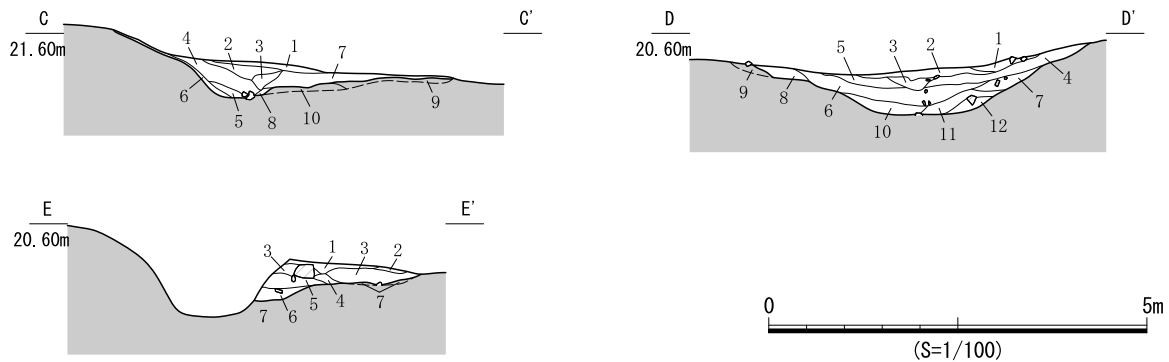


第42図 洞北山6号古墳平面図・墳丘・石室掘方土層断面図(1)

- 1 2.5YR2/1 黒色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を10%含む 10YR4/6 褐色シルトブロックを斑状に少量含む 墳丘盛土
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を5%含む 10YR5/8 黄褐色粘質シルトブロックを斑状に5%含む 墳丘盛土
- 3 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを少量含む 墳丘盛土
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む 10YR4/4 褐色粘質シルトブロックを少量含む 墳丘盛土
- 5 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を7%含む  
10YR4/6 褐色粘質シルトブロックや10YR3/4 暗褐色粘質シルトブロックを斑状に5%含む 墳丘盛土
- 6 10YR2/3 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1~2cmの小礫をわずかに含む 墳丘盛土
- 7 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を3%含む 10YR4/6 褐色シルトブロックを3%含む 墳丘盛土
- 8 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を1%含む 10YR3/4 暗褐色シルトブロックを層状に含む 墳丘盛土
- 9 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1~3cmの角礫を2%含む 10YR4/6 褐色シルトブロックを10%含む 墳丘盛土
- 10 10YR2/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1~2cmの角礫を2%含む 10YR4/6 褐色シルトブロックをわずかに含む 墳丘盛土
- 11 10YR2/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1~2cmの角礫を2%含む 10YR4/6 褐色シルトブロックを15%含む 墳丘盛土
- 12 10YR2/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1~2cmの角礫を2%含む 墳丘盛土
- 13 10YR4/6 褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1~5cmの角礫を5%含む 10YR3/2 黒褐色シルトブロックを5%含む 墳丘盛土
- 14 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~5cmの角礫を1%含む 10YR4/6 褐色シルトを層状に含む 墳丘盛土
- 15 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 10YR4/6 褐色シルトブロックを1%含む 墳丘盛土
- 16 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径1~5cmの角礫を1%含む 10YR4/6 褐色シルトを層状に含む 墳丘盛土
- 17 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 10YR4/6 褐色シルトブロックを3%含む 墳丘盛土
- 18 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cm程度の角礫を7%含む 10YR4/6 褐色粘質シルトブロックを1~2%含む 石室掘方埋土
- 19 10YR2/3 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を15%含む 径5cmを超える角礫を少量含む  
10YR4/6 褐色粘質シルトブロックを7%含む 石室掘方埋土
- 20 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を少量含む  
10YR4/6 褐色粘質シルトブロックを10%含む 石室掘方埋土
- 21 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を1~2%含む 10YR4/6 褐色粘質シルトブロックを少量含む 石室掘方埋土
- 22 10YR4/6 褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を1~2%含む 10YR2/3 黒褐色粘質シルトブロックを3%含む 石室掘方埋土
- 23 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を1~2%含む 10YR4/6 褐色粘質シルトブロックを10%含む  
10YR2/1 黒色粘質シルトブロックを少量含む 石室掘方埋土
- 24 10YR1.7/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を2%含む  
上層との境に10YR4/6 褐色粘質シルトブロックを25%含む 石室掘方埋土
- 25 10YR4/6 褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む 径3cmを超える角礫を少量含む  
10YR2/2 黒褐色粘質シルトブロックを10%含む 石室掘方埋土
- 26 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む 10YR4/4 褐色粘質シルトブロックを7%含む  
10YR2/1 黒色粘質シルトブロックを3%含む 石室掘方埋土
- 27 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む 径3cmを超える角礫を少量含む  
10YR3/4 暗褐色粘質シルトブロックを少量含む 石室掘方埋土
- 28 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を1%含む 石室掘方埋土
- 29 10YR4/4 褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を15%含む 径3cmを超える角礫を5%含む  
10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを10%含む 石室掘方埋土
- 30 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む 10YR4/4 褐色シルトブロックを少量含む 石室掘方埋土
- 31 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径1~5cmの角礫を3%含む 10YR4/6 褐色シルトブロックを10%含む 石室掘方埋土
- 32 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径1~5cmの角礫を3%含む 10YR4/6 褐色シルトブロックを10%含む 石室掘方埋土
- 33 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径1~5cmの角礫を1%含む 石室掘方埋土
- 34 10YR3/3 暗褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む 10YR4/6 褐色シルトブロックを斑状に10%含む 石室掘方埋土
- 35 10YR2/2黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む 10YR3/3 暗褐色シルトブロックを斑状に15%含む  
10YR4/6褐色シルトブロックを少量含む 石室掘方埋土
- 36 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径1~5cmの角礫を3%含む 10YR4/6 褐色シルトブロックを10%含む 石室掘方埋土
- 37 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を5%含む 10YR3/3 暗褐色シルトブロックを3%含む  
10YR4/6褐色シルトブロックを1~2%含む 石室掘方埋土
- 38 10YR4/4 褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む 10YR2/1 黒色粘質シルトブロックを少量含む 石室掘方埋土
- 39 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を3%含む 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを1~2%含む 石室掘方埋土
- 40 10YR4/4 褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を5%含む 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを少量含む 石室掘方埋土
- 41 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を5%含む 10YR 4/6褐色シルトブロックを斑状に15%含む 石室掘方埋土
- 42 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を3%含む 径5cmを超える角礫を少量含む  
10YR3/3暗褐色シルトブロックを少量含む 石室掘方埋土
- 43 10YR1.7/1 黒色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を3%含む 10YR4/6 褐色シルトブロックを15%含む 石室掘方埋土
- 44 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を少量含む 10YR4/6 褐色シルトブロックを3%含む  
10YR3/3暗褐色粘質シルトブロックを1%含む 石室掘方埋土
- 45 10YR4/6 褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む 石室掘方埋土
- 46 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を15%含む 10YR4/6 褐色シルトブロックを斑状に20%含む  
10YR2/2黒褐色粘質シルトブロックを3%含む 石室掘方埋土
- 47 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む 石室掘方埋土
- 48 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を3%含む 石室掘方埋土
- 49 10YR1.7/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を3%含む  
10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを少量含む 石室掘方埋土
- 50 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む 10YR4/4 褐色シルトブロックを斑状に5%含む 石室掘方埋土
- 51 10YR2/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む 整地土
- 52 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~5cmの角礫を15%含む 整地土
- 53 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を1%含む 整地土
- 54 10YR2/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む 10YR4/2 灰黄褐色シルトブロックを3%含む 整地土
- 55 10YR4/6 褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を2%含む 10YR3/2 黒褐色シルトブロックを3%含む 整地土
- 56 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 均質 奥壁掘方埋土
- 57 10YR5/6 褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 10YR2/1 黒色シルトブロックを3%含む  
根石と思われる径15~20cmの角礫を含む 奥壁掘方埋土
- 58 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~30cmの角礫を5%含む 旧表土 III層 (黒色土①)
- 59 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を2%含む 旧表土 III層 (黒褐色土①)
- 60 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を2%含む 旧表土 III層 (黒褐色土①)
- 61 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1~2cmの角礫を20%含む 漸移層 III層 (黒褐色土①)
- 62 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を2%含む 漸移層 III層 (暗褐色土②)
- 63 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を5%含む 漸移層 III層 (黒褐色土②)
- 64 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を5%含む 漸移層 III層 (暗褐色土①)
- 65 10YR5/8 黄褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1~5cmの角礫を20%含む III層 (黄褐色土)
- 66 10YR5/6 黄褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1~5cmの角礫を5%含む III層 (黄褐色土)
- 67 10YR4/6 褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む III層 (褐色土)
- 68 10YR2/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径1cm程度の角礫を3%含む III層 (黒色土②)
- 69 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 均質 III層 (黒褐色土③)
- 70 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む III層 (黒色土②)
- 71 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む III層 (黒褐色土③)

第 43 図 洞北山6号古墳平面図・墳丘・石室掘方土層断面図 (2)

周溝土層断面図



C-C' 断面

- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を1%含む 10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロックを25%含む
- 2 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を1%含む 10YR4/6 褐色粘質シルトブロックを7%含む
- 3 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を5%含む 10YR4/6 褐色粘質シルトブロックを10%含む
- 4 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を15%含む
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルトブロックを15%含む (特に斜面上方に多い)
- 5 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を15%含む 10YR4/4 褐色シルトブロックを3%含む
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を10%含む
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を10%含む
- 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを10%含む 10YR4/6 褐色シルトブロックを5%含む 墳丘盛土か
- 8 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を10%含む 10YR4/6 褐色シルトブロックを5%含む 墳丘盛土か
- 9 10YR2/1 黒色粘質シルト土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む 墳丘盛土
- 10 10YR5/8 黄褐色砂壤土 しまる 粘性なし 径5cm以下の角礫を5%含む III層 (黄褐色土)

D-D' 断面

- 1 10YR5/6 黄褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 径15cmを超える礫を数個含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト ややしまる 粘性あり 径0.5~3cmの角礫・亜角礫を3%含む
- 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを5%含む 粒子が細かい
- 3 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を7%含む 10YR3/4 暗褐色粘質シルトブロックを2%含む
- 4 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1~5cmの角礫を10%含む 10YR4/4 褐色シルトブロックを3%含む
- 5 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性あり 径0.5~1cmの亜角礫を2%含む 10YR4/4 褐色粘質シルトブロックを5%含む
- 6 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を7%含む 径10cm大の角礫を数個含む
- 7 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1~5cmの角礫を7%含む 径10cm大の角礫を数個含む
- 8 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 10YR3/4 暗褐色粘質シルトを2%含む
- 9 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む
- 10 10YR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を7%含む 10YR3/1 黒褐色粘質シルトブロックを2%含む
- 11 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を5%含む 10YR3/4 暗褐色粘質シルトブロックを5%含む
- 12 10YR3/4 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を5%含む 径10cmを超える角礫を数個含む

E-E' 断面

- 1 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を7%含む 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルトブロックを斑状に5%含む
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
- 3 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~5cmの角礫を15%含む 径30cmを超える礫を含む
- 4 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を7%含む
- 5 10YR2/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む 径5cmを超える角礫を2%含む
- 6 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1~3cmの角礫を15%含む 径5cm以上の角礫を5%含む 10YR3/4 暗褐色粘質シルトブロックを少量含む
- 7 10YR3/4 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を15%含む 径5cm以上の角礫を5%含む III層 (暗褐色土)

第44図 6号古墳周溝土層断面図

と羨道・前庭の規模や位置関係から斜面下方へ流出したと考えられる。残存する墳頂の海拔は 20.94 mであり、墳丘南側の傾斜変換点との比高差は 2.54mである。墳丘盛土と石室掘方埋土は明確に分かれており、今回検出した墳丘盛土の大半は第一次墳丘に伴う。これらは、残存する石材の上から1~2段目に対応している。土層はレンズ状に細かく分層でき、石材を積み上げながら盛土を行った作業単位を示すと考えられる。なお、盛土基底部分(周溝 C-C' 断面7層)下の基盤は水平に近い平場となっていたことから、第一次墳丘築造には、石室背後の斜面を削平した排土も使用したと推測される。

周溝は墳丘の南側を除く三方を巡る。墳丘南側では周溝は確認できなかったが、基盤の傾斜変換がみられることから、削平された可能性が高い。周溝規模は、いずれも残存値であるが、周溝 A-A' 断面で幅 2.23m、深さ 0.93m、周溝 B-B' 断面で幅 4.48m、深さ 0.72m、周溝 C-C' 断面で幅 2.19m、

深さ 0.43m である。埋土は自然堆積であり、斜面上方から流入したと考えられる。検出面の最上層まで自然に埋没しており、SM3 が造成された時点でほぼ埋没していたと推測される。完掘した周溝は内側が深く、外側が浅い 2 段掘りになっている。これは、まず第一次墳丘の築造に伴って広く浅い周溝が掘削され、その後第二次墳丘築造のために墳丘周囲を深く掘り下げた結果と考えられる。

石室の羨門では東西に延びる列石を検出した。列石は羨門も含め東側で 1.49m、西側で 0.56m 残存している。2 段の積み上げが確認でき、4 号古墳同様、本来は第一次墳丘の前面に積み上げられていたと考えられる。第一次墳丘の土留めの役割を持つと推測され、最終的には埋め殺されたと思われる<sup>14)</sup>。

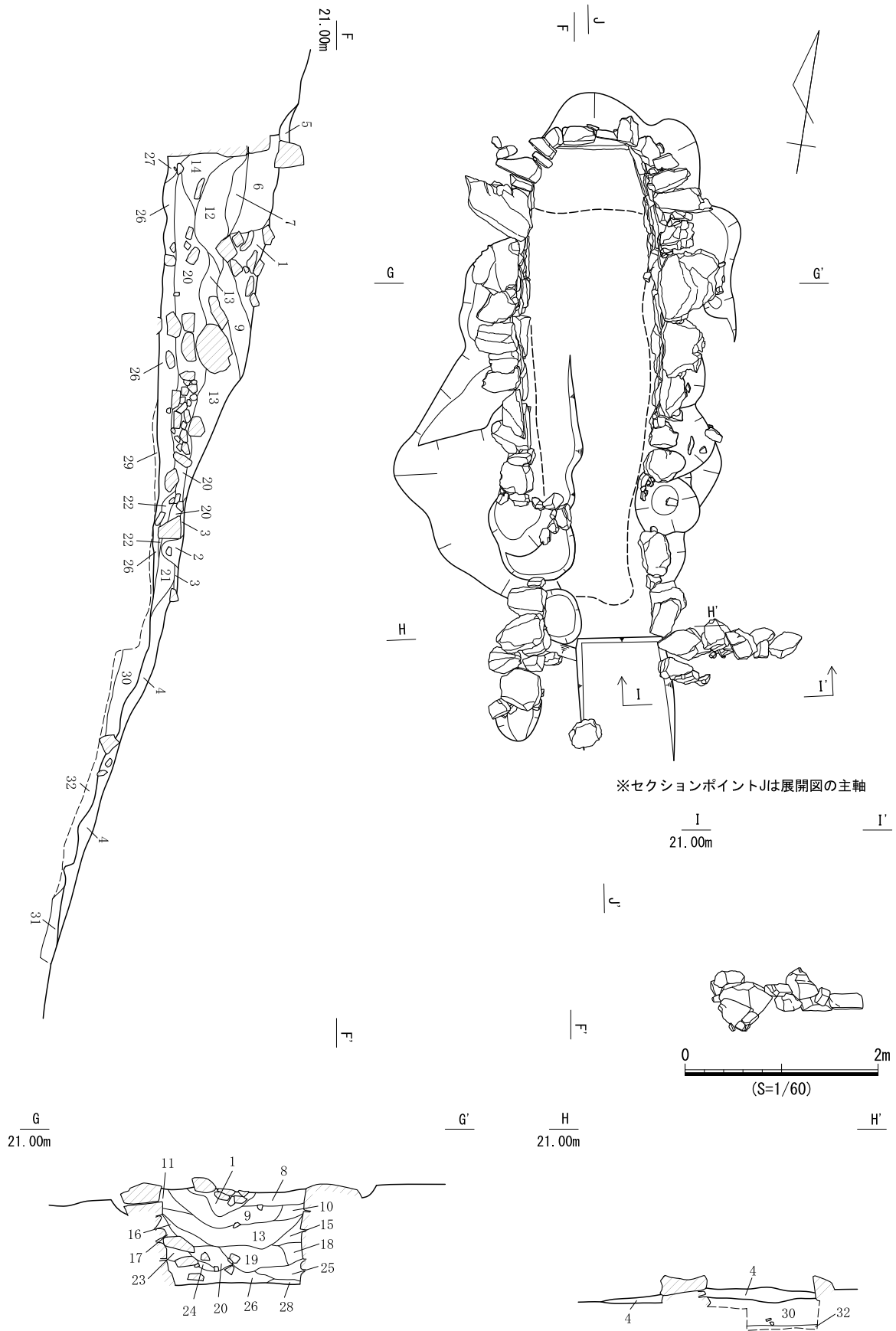
**石室埋土 (第 45・46 図)** 埋土の最上層は、I 層に由来する黄褐色砂礫土や、暗褐色土、褐色土が堆積し旧表土に比べて明るい。1 層から 13 層は、最低でも 5 回以上の人為的な掘削と埋め戻しに伴う土と考えられる。3 層にはビニール片が混入し、石室脇には柿木の切株もあったことから、掘削や埋め戻しには近年の果樹栽培に伴うものもある。18 層から 23 層はほぼ同時期の堆積と考えられる。20 層には大量の礫が混入しており、大型礫も多い。側壁の一部が埋土中に落ち込んだものと推測され、奥壁側には崩落石が少なかったことから、後世に墳丘が削平された際、石室内に石材を落とし込んで埋めたと考えられる。24 層から 28 層は、しまりがなく均質な埋土が大半を占め、奥壁や側壁付近の土層断面が三角形をなすことから自然堆積によるものと思われる。26・27 層中からは副葬品と考えられる遺物が出土した。これらの遺物は追葬に伴う可能性もあるが、片付け行為などはみられないため、初葬の段階ですでに暗褐色土が堆積していたと考えられる。

**埋葬施設 (第 42・43・45～48 図)** 石室掘方の平面形状は、南側に開口した長方形である。全長 5.06 m、最大幅 3.69m、奥壁付近の深さ 1.3m である。掘方の排土は掘方南側の斜面に置き、掘方底面から続く平場の造成に利用されたと思われる。

石室は残存長 5.34m の横穴式石室である。玄室全長 3.8m (推定)、奥壁幅 0.88m、最大幅 1.31 m、奥壁付近の高さ 1.35m で、主軸方位は N-10° -W である。奥壁は 3 段、側壁は最大で 6 段残存する。一見無袖式の様相を示すが、石材の抜き取り痕から、両袖式若しくは擬似両袖式の構造をもつ石室である。なお、抜き取り痕周辺の埋土からはビニール片などが出土したことから、石材が抜き取られたのは近年と考えられる。玄室の平面形は奥壁から入口に向かい約 3.8m の位置が最も広くなる胴張りの形状である。石材は全てチャートである。石室底面には礫床はなく貼床がみられ、貼床面は入口方向に向かって約 1.5° 傾斜している。また、排水溝は確認できなかった。

奥壁は、床面からの高さが 0.84m ある大型石材とその上に 2 段が残存する。奥壁の大型石材は、接地する部分が平らではなく、その形に合わせて据付掘方を約 0.3m 掘削し、根石を置いて設置されている。2 段目の石材は上面の高さを揃え、外側の 2 石は両側壁に渡し掛けられている。3 段目の調査過程で除去した石材は長手面を正面に向けていたが、残りの石材はいずれも小口積みされており、2 段目と同様に渡し掛けを意識して配置されている。このような石材配置のため、全体的に隅丸な印象を受ける。なお、2 段目、3 段目は後述する側壁の第 3 段階、第 4 段階の構築にそれぞれ対応する。

両側壁には 3 本の横目地が通る。下から 2 本目の横目地が奥壁の大型石材の高さに対応する。まず、奥壁設置後の整地と併行して基底石を設置する (第 1 段階)。奥壁に接するやや高さのある石材は、やや開き気味に配置しており、石室の形状に影響を与えている。他の石材も内側の面を揃える意識が



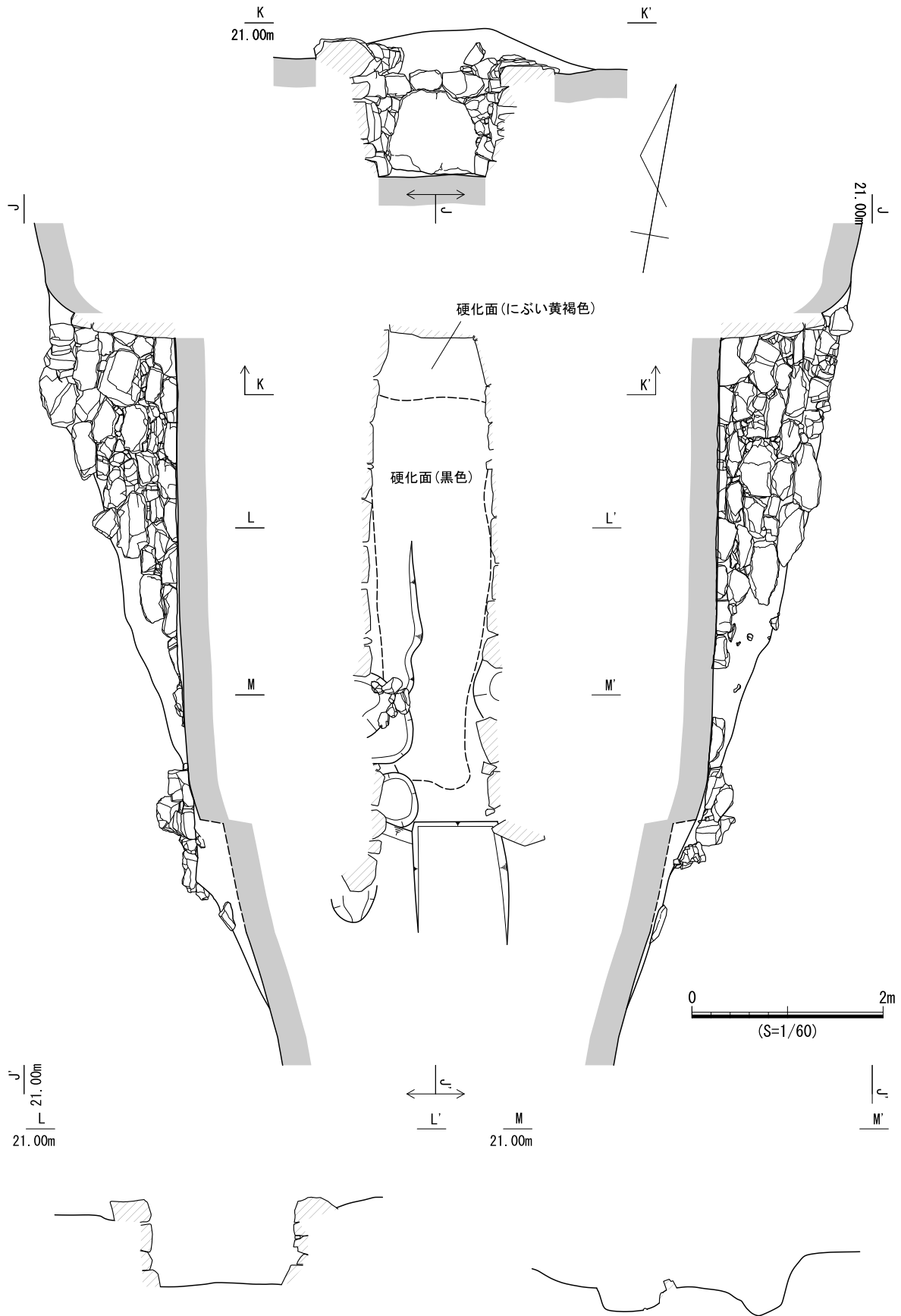
第45図 6号古墳石室平面図・石室埋土土層断面図(1)

- 1 10YR4/6 褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径10~40cmの礫を多量に含む 下層との境界付近ではにぶい黄褐色(10YR4/3)を示す
- 2 10YR5/6 黄褐色砂礫土 ややしまる 粘性なし 10YR4/2 灰黄褐色シルトブロックを40%含む 径10cm以下の角礫を15%含む
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を5%含む 11層と比べ礫の混じりが少ない
- 4 10YR3/2 黒褐色粘性シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫・亜角礫を5%含む
- 5 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 10YR4/4 褐色のシルトブロックを少量含む 径0.5~1cmの角礫を2%含む
- 6 10YR3/4 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 10YR5/6 黄褐色シルトブロックを1%含む 径1~3cmの角礫を10%含む
- 7 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 10YR5/6 黄褐色シルトブロックを2%含む 径1~3cmの角礫を7%含む
- 8 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
- 9 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫・亜角礫を15%含む
- 10 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 19層よりしまりなし 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を5%含む
- 11 10層と同質
- 12 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 10YR5/6 黄褐色シルトブロックを10%含む 径0.5~1cmの角礫を5%含む
- 13 10YR3/2 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を20%含む 径20cmを超える礫を数個含む
- 14 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルトブロックを15%含む 径0.5~2cmの角礫を3%含む 径20cmを超える礫を数個含む
- 15 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を10%含む 10YR3/4 暗褐色シルトブロックを少量含む
- 16 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を15%含む 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトを少量含む
- 17 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を10%含む 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトを少量含む
- 18 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を10%含む
- 19 10YR3/4 暗褐色シルトブロックを少量含む(20層と同時期の埋土か)
- 19 10YR3/2 黒褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径1~3cmの角礫を30%含む
- 19 10YR3/3 暗褐色シルトブロックを少量含む(20層と同時期の埋土か)
- 20 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1~3cmの角礫を15%含む 径30cmを超える礫を多量に含む
- 21 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む 20層に類似するが大きな礫の混入はない
- 22 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を少量含む 20層に類似するが礫の混じりが少ない
- 23 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を10%含む
- 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト土を少量含む(20層と同時期の埋土か)
- 24 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を3%含む
- 25 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む
- 10YR3/4 暗褐色シルト土を少量含む(25層と同時期の埋土か)
- 26 10YR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む
- 27 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトを少量含む 径0.5cm以下の角礫を10%含む
- 28 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
- 29 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 上層よりしまりあり 粘性ややあり 10YR4/4 褐色シルトを少量含む 径1~3cmの角礫を15%含む 整地土
- 30 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルトブロックを10%含む 径0.5~10cmの角礫・亜角礫を15%含むが斜面下方では少ない 旧表土 III層(黒色土)
- 31 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルトブロックを5%含む 径0.5~3cmの角礫・亜角礫を2%含む III層(黒褐色土)
- 32 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルトブロックを10%含む 径0.5~3cmの角礫・亜角礫を10%含む 径10cmを超える角礫を少量含む III層(黒褐色土)

第46図 6号古墳石室平面図・石室埋土土層断面図(2)

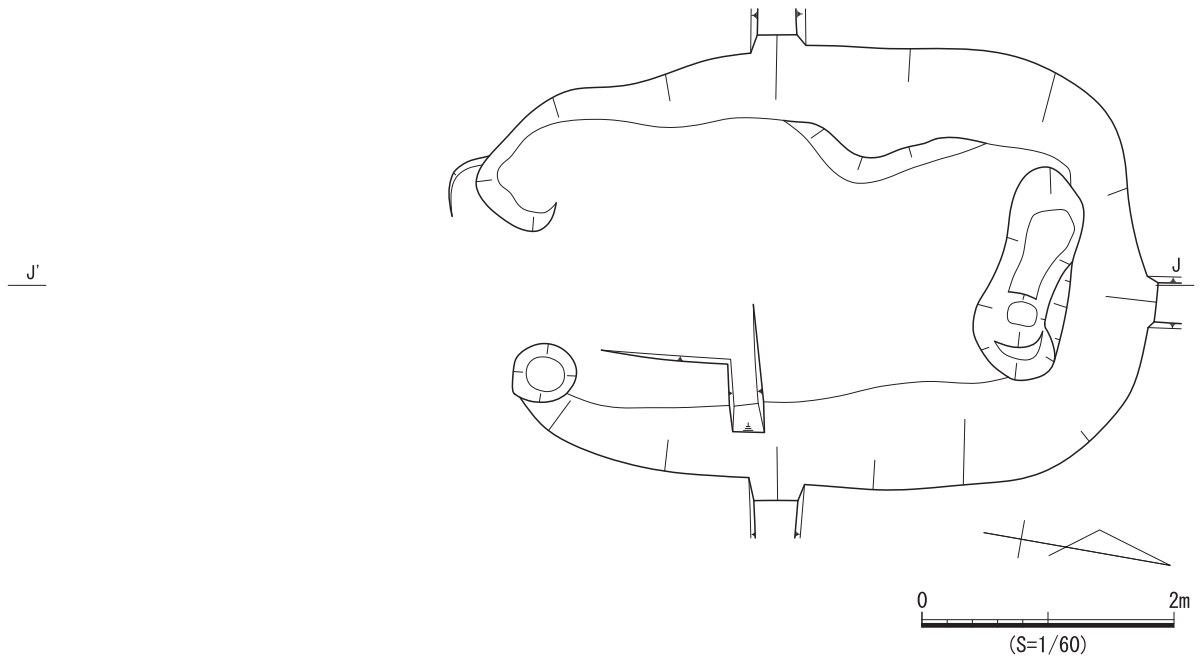
伺えるが、上面の高さは揃わない。なお、袖部の立柱石が失われているため、奥壁から羨道にかけての構築の運動性については検証できなかった。第2段階に属する石材は、やや外傾しながら1~3段の積み上げがみられるが、大きさに統一感がなく横目地が通らない。これは、まず石室掘方上端までの積み上げを目的としており、石材の大きさに拘らず、隙間を埋めるように積み上げたためと考えられる。また、右側壁では第2段階上面の目地が入口に向かい斜めに下がるのを顕著に観察できるが、これも石材の積み上げが石室掘方を基準とするためと推測できる。なお、左右の側壁で第2段階上面の目地の高さが異なるのは、石室掘方が斜面に直交して設置されており上端の高さが異なるためである。裏込め(18~50層)には掘方の排土が利用されていると考えられ、旧表土下層の基盤に由来する黄褐色土が縞状に混じる。掘方内は長手積みが多いが、石材裏のスペースに余裕があるためか、小口積みもみられる。

第3・4段階は、共に石材上面の高さを揃えながら奥壁と連動して一段ずつ積んでいる状況が確認できる。長手積みが目立ち、持ち送りはそれほど強くない。この段階で第一次墳丘が築造される。床面には礫床はみられず、奥壁設置後の整地に伴う0.05~0.2mの敷土(第42図52~55層)が、奥壁から玄門と推定される抜き取り痕跡の手前まで堆積している。この堆積は非常にしまっている。また、敷土の上層にも黒色土の硬化した堆積(第42図51層)を確認した。この層の北側は極薄い堆積であったため、床面の清掃時に削れてしまったが、平面では、奥壁の0.6m南から羨道にかけて確認した。羨道及び前庭は玄門の石材が抜き取られ、入口は流失しているため遺存状態は悪い。図面計測は抜き取り痕から南側で行った。残存規模は羨道長(前庭を含む)1.54m、最大幅1.10mである。石材は基底石の一部が残存するのみで積み上げの状況は不明である。平面形は入口側がわずかに「ハ」



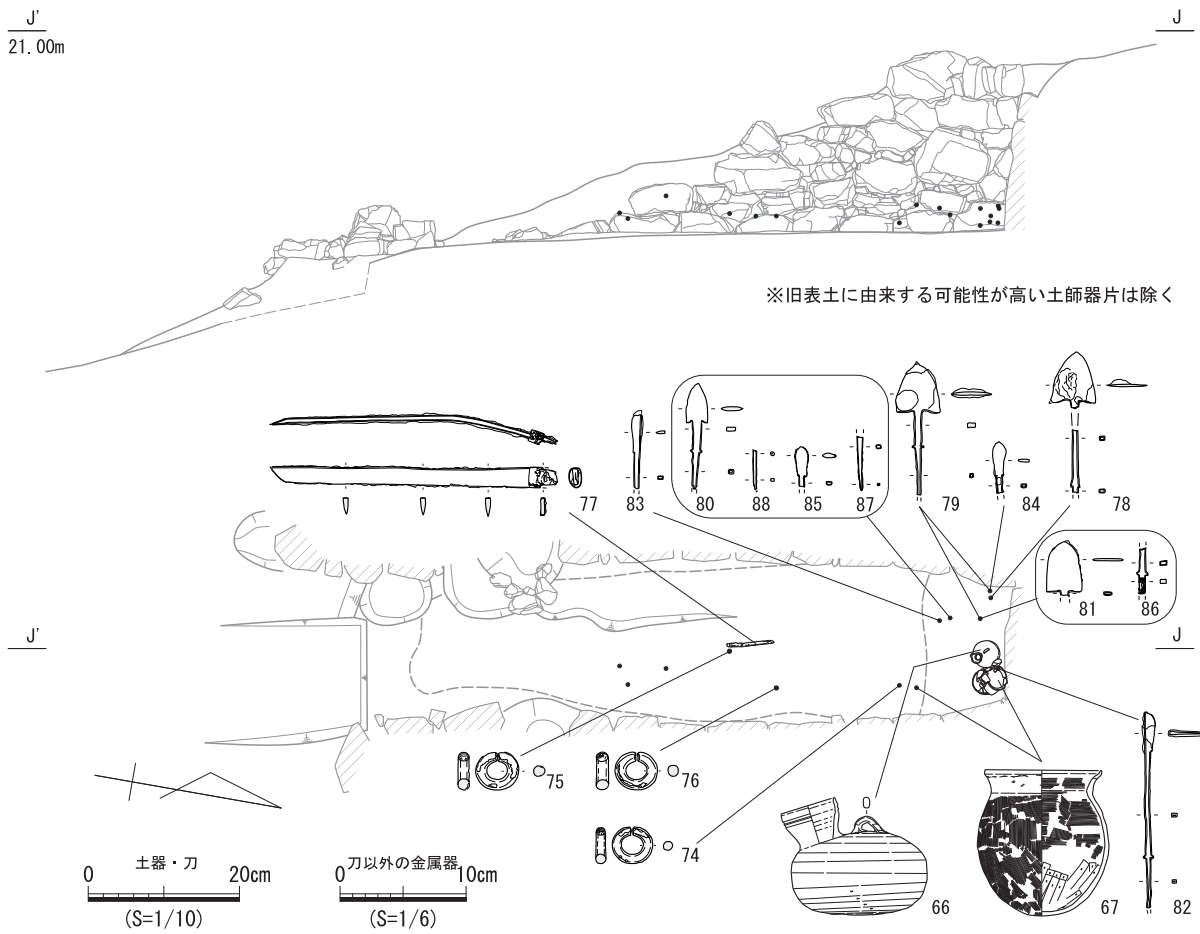
第47図 6号古墳石室展開図・断面図

完掘状況



石室内遺物出土状況

J'  
21.00m



第48図 6号古墳石室掘方完掘状況・石室内遺物出土状況



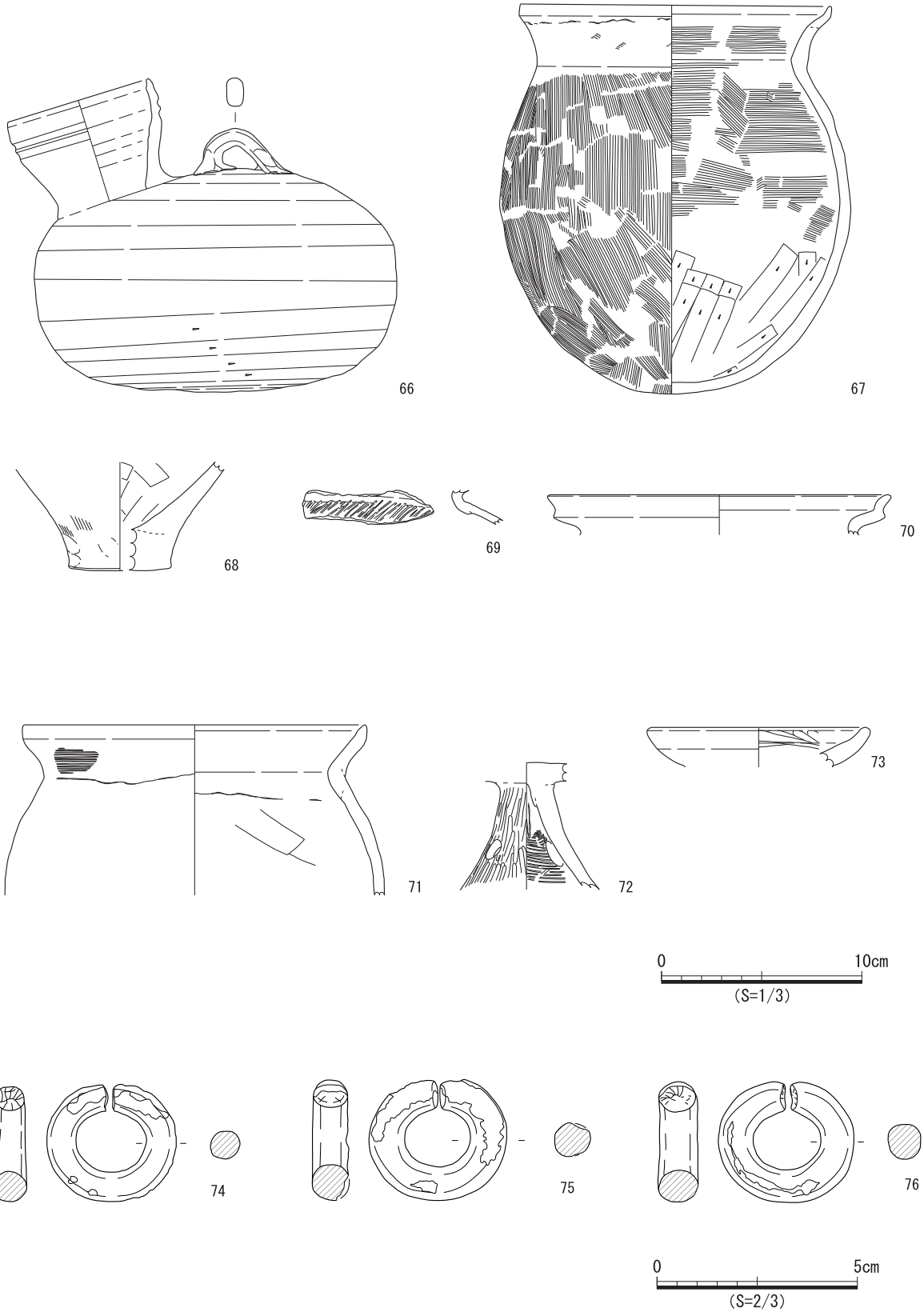
の字状に開く。羨道は玄門から基底石2～3石分と考えられ、その南側が東西に延びる列石に接続する。左側壁にはその南側にもう1石残存しており、前庭である可能性が高い。墳丘除去後に検出した石室の掘方内には羨道や前庭は含まれておらず、その基底石は旧表土上面に直接置かれている。石室の規模や推定される墳丘盛土の角度から考えると、本来前庭は掘方の排土を利用して盛り上げた整地土上に設置されており、のちに流出したと考えられる。

規模や形状に類似点の多い上城田寺古墳群第4支群5号墳から類推すると、重機掘削時に動いた奥壁の石材を含め、奥壁付近は天井付近まで残存していると考えられ、その高さは約1.5mある。天井石の高さと、前述の石室背後の平場はほぼ一致することから、第一次墳丘はこの平場から下方の斜面全体を覆うように盛られ、第一次墳丘頂部と平場を含む平坦面が形成され、この平坦面を作業ヤードとして利用し、天井を架構した可能性が考えられる。

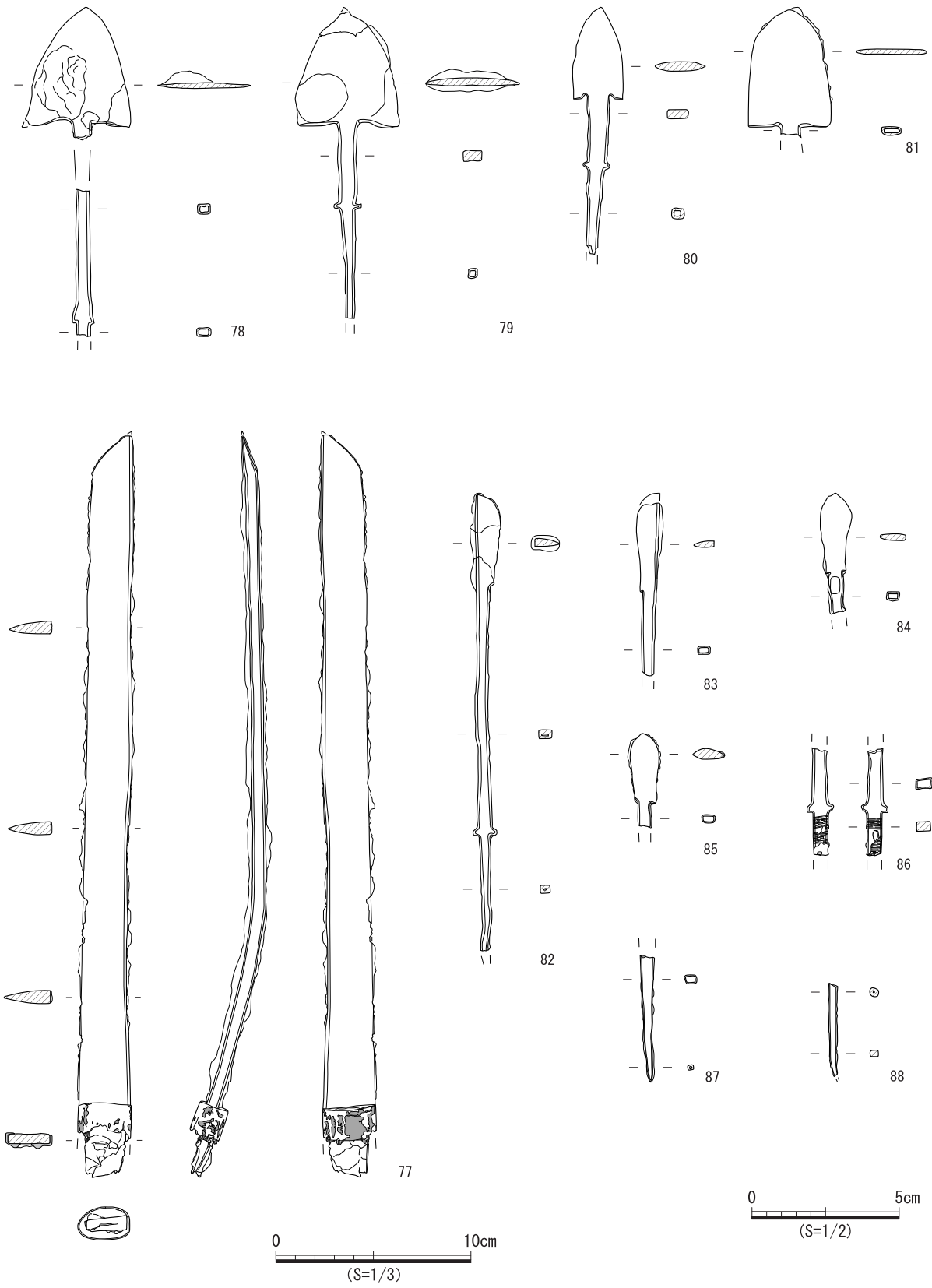
**遺物出土状況(第48図)** 石室内からは、須恵器・土師器・金属製品が出土した。実測対象としたのは、須恵器平瓶1点66・土師器甕1点67・耳環3点(74～76)・鉄刀1点77・鉄鏃11点(78～88)である。平瓶と甕は玄室の北東隅に2点並んで配置され、甕が玄室の角に置かれていた。一方、鉄刀と耳環2点は、崩落した側壁石材の除去後に出土した。玄室のほぼ中央から出土し、鉄刀の切先は奥壁の方を向いていた。耳環は鉄刀のすぐ脇と東側から出土したほか、奥壁から約0.5mの位置でも出土した。耳環の出土位置にはまとまりがなく、原位置を保っているかどうかは不明である。鉄鏃は平瓶、甕の周辺から出土したが、一箇所にまとまった様子はみられなかった。いずれの遺物も副葬品と考えられるが、硬化した床面上層の自然堆積と考えられる26層中から出土しており、初葬段階のものかどうかは不明である。また、平瓶・土師器甕以外は原位置を保っていない可能性もある。

この他墳丘内や石室、周溝埋土から弥生土器・土師器が出土したが、大半が磨耗した細片であり、墳丘築造や埋没する過程で流入したものと思われる。比較的残りの良い68～73は壺・甕・高坏・鉢の破片である。

**出土遺物(第49・50図)** 66は須恵器の平瓶である。底部は平坦で、斜め外方に丸みをもって立ち上がる。上面は緩やかな弧を描き、体部上面の偏った位置に口頸部をつける。口縁端部はやや内弯してのび、端部を丸く収める。頸部の中位やや上方に2条の凹線が巡る。また、体部上面の中央付近には輪状把手を貼り付ける。底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。体部の下半部にヘラ削りを行い、体部の上半部から口頸部にかけてナデ調整を施す。体部の上半部から口頸部にかけて自然釉が剥落した痕跡が残る。畿内系の明るい色調の須恵器で、畿内6型式に比定される。67～73は土師器である。67は甕である。底部は丸底で、胴部ほぼ中央で最大に張り出すが強くなく、器高が胴部の最大径より長いため、ややシャープで胴長な印象をうける。口縁部は外傾し、端部は上方につまみ上げる。胴部外面には全体にハケ目調整を施しており、胴部の上半部から下半部、そして底部へと調整順が確認できる。また、内面は上半部に横位のハケ目調整を施し、下半部には縦位のヘラ削り調整を行う。口頸部は外面から端部内側にかけて横ナデ調整を施すが、内面には横位のハケ目調整の痕跡が残っている。胴部外面にはところどころ煤が付着する。北野系のA1類の丸底甕である。68は壺の底部である。外面にユビオサエ、内面に板ナデ調整が残る。69・70は、S字状口縁台付甕の頸部から体部の破片と口縁部である。口縁部はB類である。71は受口系口縁台付甕の口頸部から体部の破片である。口縁部内側に平坦面を有する。全体的に摩滅が激しいものの、頸部にわずかながら横ハケと輪積痕が、内面に



第49図 6号古墳出土遺物(1)



第50図 6号古墳出土遺物(2)

は体部の上方に輪積痕が残る。廻間 I 式期後半のものに似る。72 は高坏の脚部である。外面にはヘラミガキを施し、内面には横ハケと成形時の絞り込み痕が残る。2 孔 1 対の円孔が 2 方向に穿たれている。73 は鉢の口縁部と推測される。器厚が厚く、端部は丸く収める。外面は摩滅により調整不明であるが、内面にミガキ痕跡が残る。74～88 は金属製品である。74～76 は耳環である。74 は銅芯銀板張、75・76 は銅芯金板張である。いずれも端部に折り目を観察できる。75 と 76 は大きさが同じで、断面の径もほぼ一致することから一対のものと推測される。74 は他の 2 つに比べやや小ぶりである。77 は鉄刀である。刃部は一部欠損するが残りは良い。切先はふくらみをもち、均一な幅を保ちながら、切先から約 25cm の位置でくの字状にゆるく屈曲して関部に達する。断面形状は楔形である。木質等鞘身に伴う付着物は確認できなかった。釦が残るため、関部は確認できないが釦部分の断面形状から片関と思われる。茎部は欠損しているが、釦の内側に木質が残存する。釦は鉄製で、金鍍金を施す。刃部の屈曲が意図的なものか否かは不明である。78～80 は短頸鍬である。78・79 は、鍬身部が三角形で、わずかながら腸袂をもつ。頸部は幅が広く扁平であるが、78 は折れており、鍬身部側と頸部のみとの断面形が異なり接合しなかったため、別個体の可能性もある。頸部関は 78 が台形関、79 は棘状関である。80 は、鍬身部が長三角形で、わずかながら腸袂をもつ。頸部は幅が広く扁平である。頸部関は棘状関で、茎端は欠損している。81 は鍬身部が三角形で、大きさは 78・79 と 80 の中間程度である。頸部も幅が広く扁平であるため短頸鍬の可能性が高い。82～88 は長頸鍬である。82・83 は、鍬身部が片刃形である。頸部が細く、82 は頸部関が棘状関である。84・85 は、柳葉形の鍬身部である。棘状関をもつものが多いが台形関のものも共伴することから、時期は台形関から棘状関へ移行する 6 世紀末葉～7 世紀初頭頃と考えられる。

**遺構の時期** 出土した平瓶は 6 世紀末～7 世紀初頭に比定でき、土師器甕、鉄鍬も同時期のものである。しかし、土師器甕 67 は 4 号古墳出土の土師器甕 28・29 に比べ、胴部の張りや調整技法の差異からやや後出的な印象をうけることから、本古墳の築造時期は 4 号古墳に若干遅れ、7 世紀初頭と考えられる。

## 5 洞北山 7 号古墳

本古墳は、4 号古墳や 6 号古墳などと同一斜面上に位置するが、旧表土の傾斜角度は約 17° で、4 号古墳や 6 号古墳の所在する場所に比べやや傾斜の強い斜面上方に築造されている。6 号古墳や後述の 8 号古墳とは、一定間隔の距離を保ってほぼ一直線上に並び、その中央に位置する。

**検出状況** 本古墳の調査は、平成 27 年度に南東側、平成 28 年度に北西側について実施した。

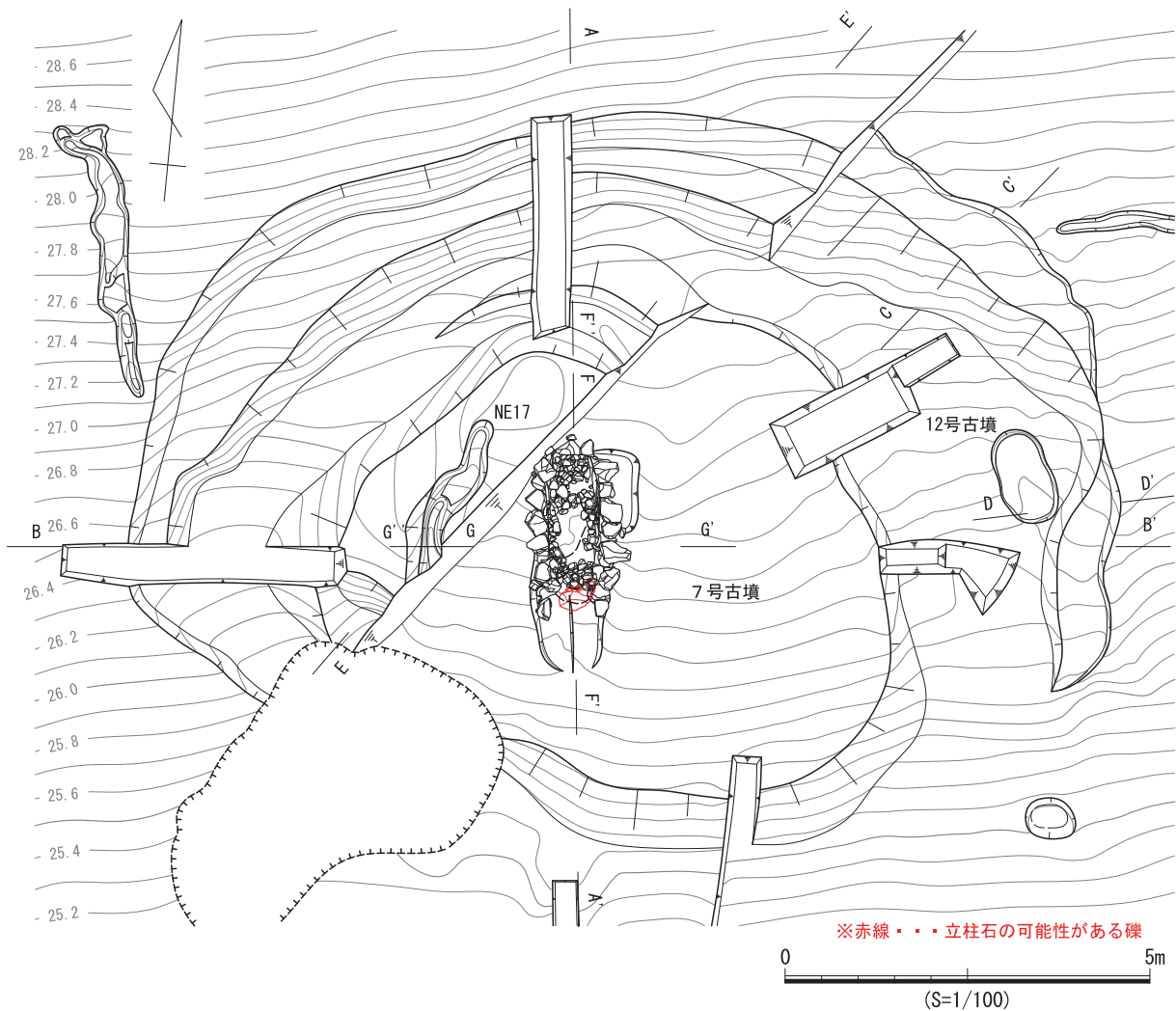
平成 27 年度調査では表土掘削中に黒褐色土の墳丘を確認した。しかし、検出当初は墳丘盛土のしまりがないことや、石室が露出していなかったことから墳丘とは認識できなかった。そのため黒褐色土の掘り下げを行った際に石室を確認し、古墳であることが判明した。側壁上部を意図せず破壊してしまったものもあり、墳丘が約 0.2m 程度残った面で検出作業を行った。墳丘東側の周溝は、当初重複する 2 条の溝として検出した。その後、墳丘の範囲を把握し、ともに墳丘を取り巻くような形状をとっていることから周溝と判断した。上位の溝（第 52 図 C-C' 断面及び D-D' 断面）は極浅く、埋土は周溝の埋没最終段階の堆積と考えられる。なお、洞北山 12 号古墳は上位の溝完掘後に検出した遺構である。

平成 28 年度調査では、周溝の外側の上端となる傾斜変換点が明瞭ではなく、また周溝埋土と旧表

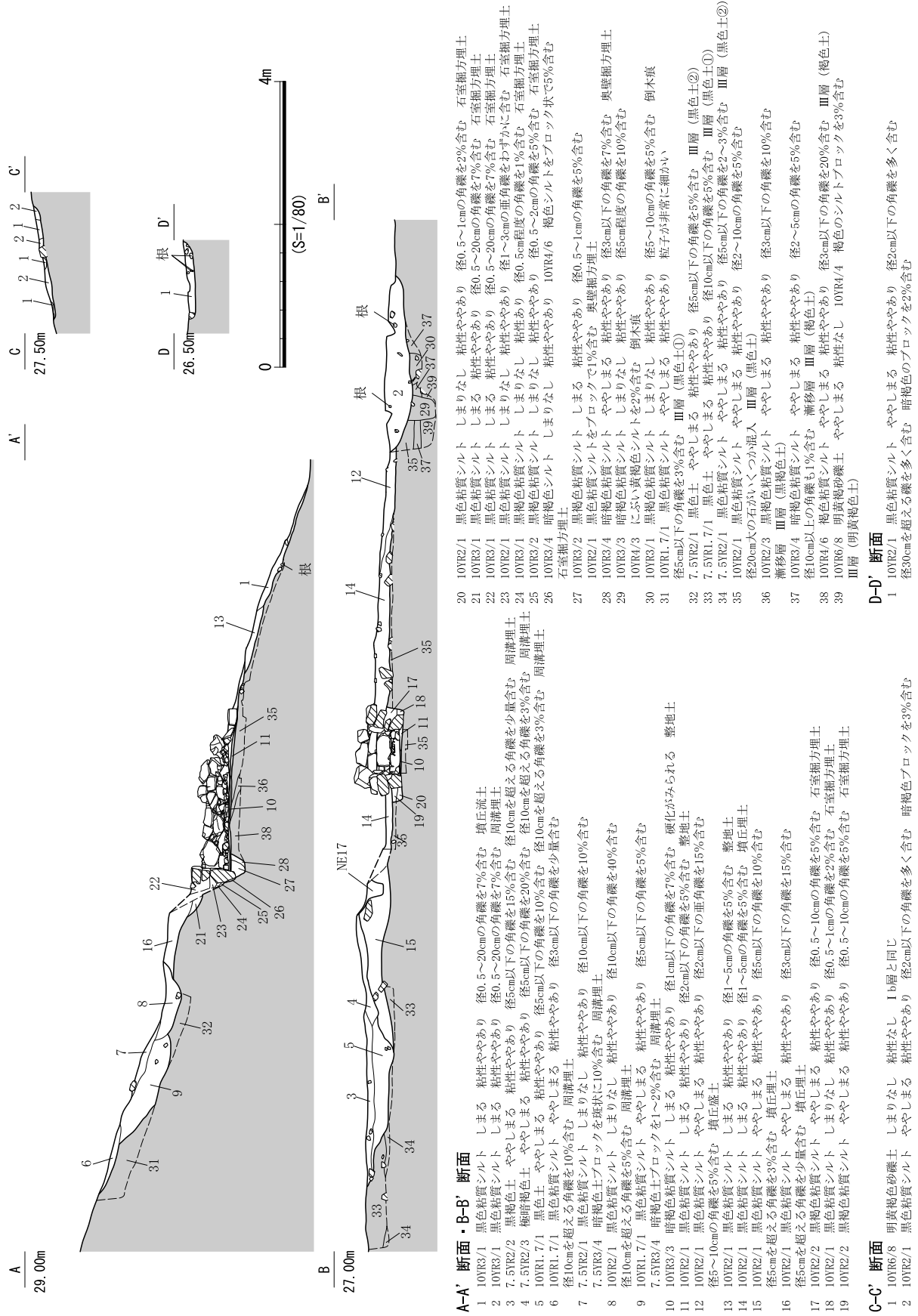
土との色調も非常に類似していたため遺構検出が困難であったが、平成27年度の遺構平面図と照らし合わせながら遺構検出を進めた。墳頂には水流による溝状の浸食痕跡がみられた。

**外部施設(第51～53図)** 墳丘の平面形は、北東側から南西側にかけて浸食や攪乱によって大きく損なわれており、全体的に不整な形状である。しかし、周溝の平面形状から、本来は東西方向に長い楕円形と考えられる。墳端に外護列石は確認できなかった。墳丘の規模は、残存する盛土の範囲で南北5.23m、東西8.42mである。また、墳丘頂部の海拔は27.05mであり、墳丘南側の傾斜変換点との比高差は約2mである。

墳丘盛土は、主に旧表土に由来する黒色土を盛っており、他の古墳で確認した黄褐色土に由来する土はみられない。石室周囲の堆積(第52図14層)は石室の構築に伴う第一次墳丘の可能性があり、墳丘西側の15層、墳丘北側の16層も同様である。盛土基底部下の基盤が水平に近いことから、第一次墳丘の盛土には周溝だけでなく石室掘方周辺の旧表土も利用した可能性がある。なお、15層は周溝を掘削した掘方を再度埋めるように盛られている。12層は第二次墳丘に伴う盛土と考えられ、墳丘確認時に石室の石材が露出していなかったことから、第53図の10層も第二次墳丘の可能性もある。しかし、28年度の調査では、周溝埋土と色調や礫の混じり方が酷似しており、他の盛土と比べしまりも

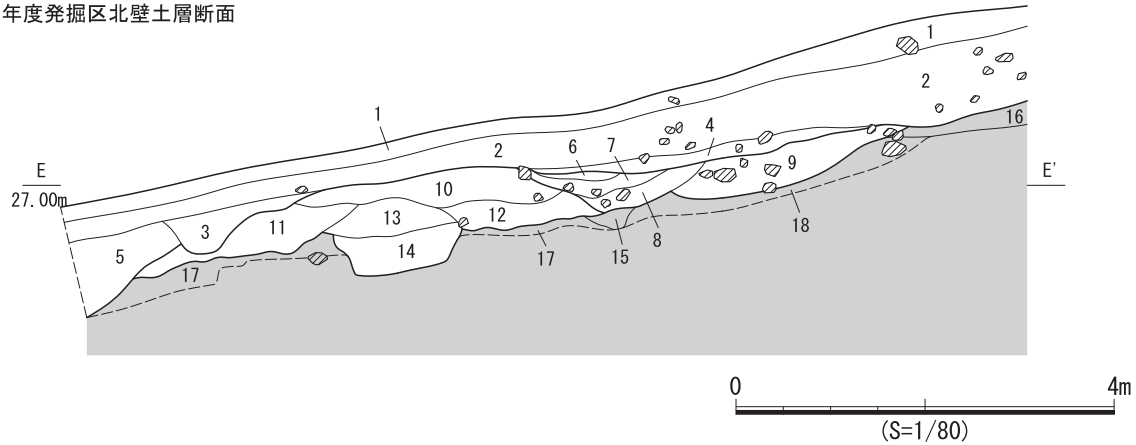


第51図 洞北山7号古墳平面図



第52図 7号古墳墳丘・石室掘方・周溝土層断面図(1)

H27年度発掘区北壁土層断面



- 1 10YR3/4 暗褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20～45%含む 場所により 10YR4/4 褐色シルトブロックを含む I a層
- 2 10YR5/8 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト層 (ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を10%含む) と互層をなす またB05グリッド以東では色調が10YR4/6褐色を呈しラミナが見られる I b層
- 3 10YR4/6 褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を5%含む  
10YR5/8 黄褐色砂質土を層状に含む 10YR2/2 黒褐色シルトを層状に含む NE17埋土
- 4 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5～3cmの角礫を15%含む 径5cmを超える角礫を5%含む  
10YR4/6 褐色粘質シルトブロックを層状に15%含む II b層
- 5 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を25%含む  
10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを斑状に10%含む 周溝埋没後にできた溝に堆積した土砂
- 6 10YR1.7/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を3%含む 径5cmを超える角礫を少量含む  
10YR3/3 暗褐色シルトブロックを少量含む 周溝埋没後にできた溝に堆積した土砂
- 7 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20%含む 径10cmを超える角礫を5%含む  
10YR2/1 黒褐色粘質シルトブロックを5%含む 周溝埋没後にできた溝に堆積した土砂
- 8 2.5Y2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を10%含む 径10cmを超える角礫を10%含む  
10YR3/3 暗褐色シルトブロックを少量含む 周溝埋没後にできた溝に堆積した土砂
- 9 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5～2cmの角礫を7%含む 径10cmを超える角礫を15%含む  
10YR3/2 暗褐色粘質シルトブロックを1～2%含む 周溝埋土
- 10 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を15%含む 径5cmを超える角礫を5%含む  
10YR3/3 暗褐色シルトブロックを3%含む 墳丘盛土
- 11 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5～2cmの角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を3%含む  
10YR2/3 黒褐色粘質シルトブロックを少量含む 墳丘盛土
- 12 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5～2cmの角礫を15%含む 径5cmを超える角礫を少量含む 墳丘盛土
- 13 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を15%含む 径5cmを超える角礫を3%含む  
10YR3/3 暗褐色シルトブロックを3%含む 石室掘方埋土
- 14 未確認のため土色等不明だが、第52図の23層から26層に対応すると思われる 石室掘方埋土
- 15 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を15%含む 径10cmを超える角礫を5%含む
- 16 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5～3cmの角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を10%含む  
10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを3%含む 旧表土 III層 (黒色土)
- 17 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5～2cmの角礫を10%含む  
10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを5%含む 漸移層 III層 (黒褐色土)
- 18 10YR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を15%含む  
径10cmを超える角礫を10%含む 10YR4/6 褐色シルトブロックを少量含む 漸移層 III層 (暗褐色土)

第53図 7号古墳墳丘・石室掘方・周溝土層断面図(2)

なかったことから削ってしまい、記録に残すことができなかった。

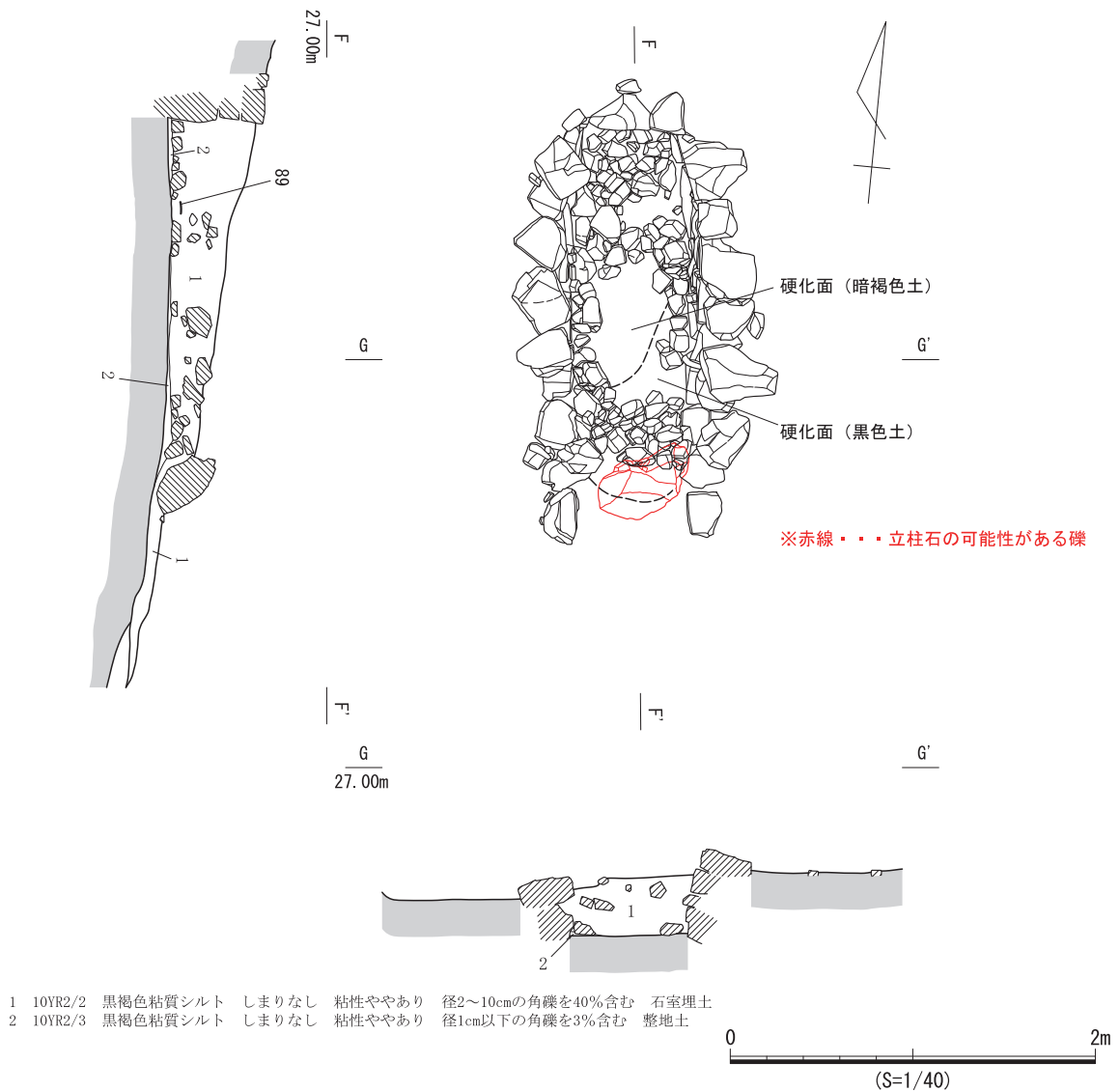
周溝は、墳丘の南側を除く三方に巡る。墳丘南側には周溝はないが、盛土南側の基盤層が露出した位置に傾斜の変換点がみられることから、削平された可能性が高い。周溝の幅は西側2.89m、東側2.4m、深さはそれぞれ0.4mと0.24mである。また、北側は墳丘裾部が削られているため、残存長で1.55m、深さは0.72mである。埋土は旧表土や墳丘盛土に由来する黒色土から黒褐色土で、自然堆積によるものと考えられ、斜面上方から流入したと考えられる。平成28年度調査の周溝A-A'断面からは、周溝がほぼ埋没した段階で、周溝及び墳丘裾部を挟む溝(周溝A-A'断面8層)を確認した。この溝は0.1m以下の小礫を大量に含む埋土で埋没しており、墳丘北東部から南西部にかけて続いている。検出時には周溝埋土の最上層と誤認して記録を残すことができなかったが、第53図の5～8層がこれに対応する堆積である。平成27年度調査では、本来の検出位置から0.4m程度掘り下げた状態で調査を行ったため、墳丘南側の詳細は不明であるが、本古墳は、東北東から西南西方向に緩やかに傾斜する斜面に位置しており、溝は斜面を流れる水流が墳丘に堰き止められ墳丘裾を挟んだものではないか

と推測する。

**石室埋土 (第54図)** 玄室から羨道にかけて、黒褐色土の単層で埋没していた。しまりがなく、小礫の混じりが多いが、天井石のような大型礫は確認できなかった。土層下部では、礫床上の遺物を包含していた。人為的な埋め戻しによるものか不明である。

**埋葬施設 (第52・54～56図)** 石室掘方の平面形状は、奥壁側が丸く、南側に開口したかまぼこ形である。全長 3.02m、最大幅 1.85m、奥壁付近の深さ 0.82m である。排土は斜面下方に積んで平場の整地 (第52図 13層) に利用したと考えられる。

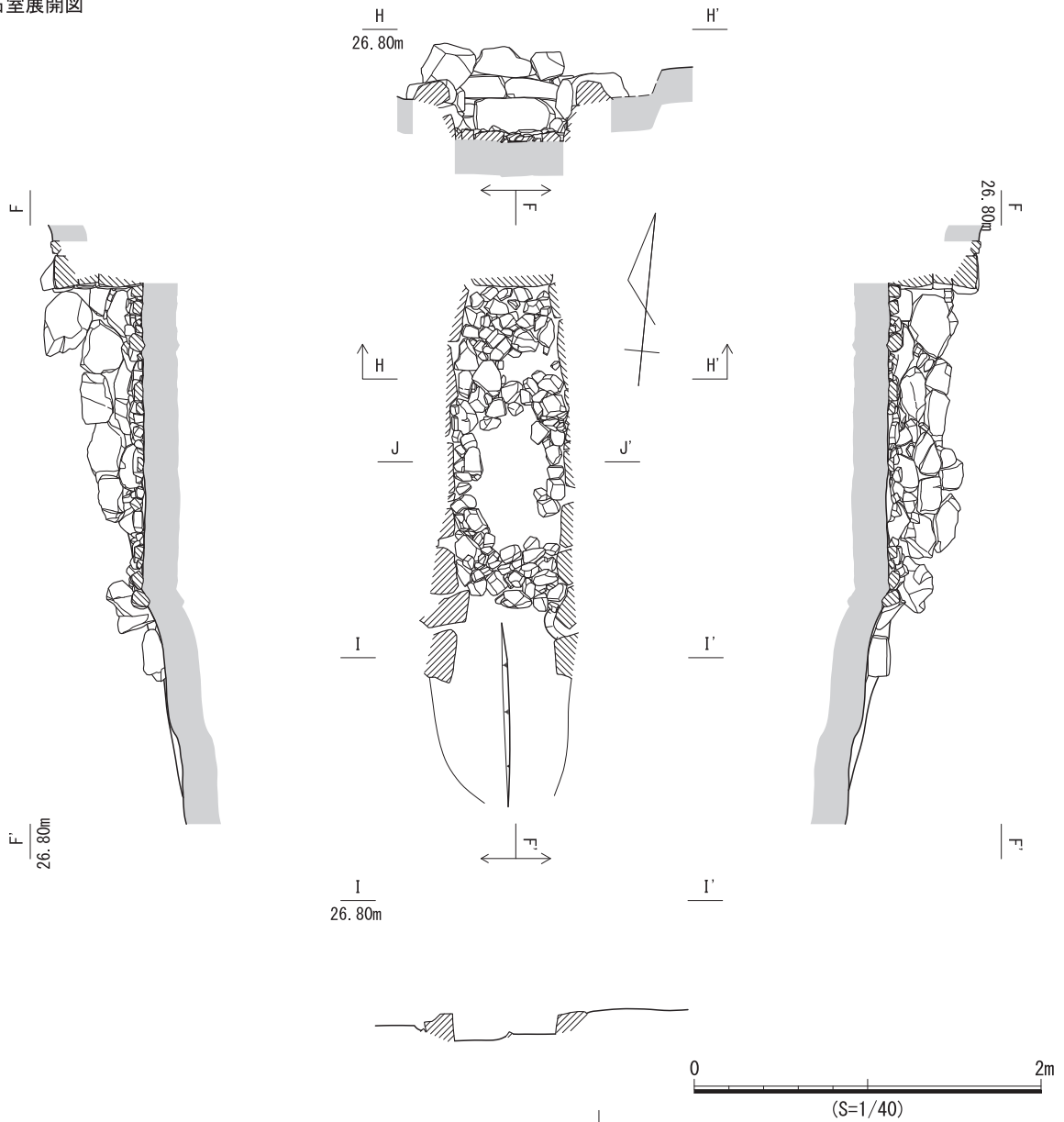
石室は残存長 2.29m の横穴式石室である。玄室全長 1.76m、奥壁幅 0.45m、最大幅 0.64m、奥壁付近の高さ 0.52m で、主軸方位は N-6° -W である。奥壁は3段、側壁は最大で3段を確認した。一見無袖式の様相を示すが、礫床の状況から玄室と羨道を区別することができる。また、礫床南端に位置する左側壁の石材が立柱状でやや内側に配置されること、右側壁には摂理により割れた基底部分や石材が抜けた痕跡があり、羨道床面上で検出した大型礫が、そこから倒れ込んだ立柱石の可能性があ



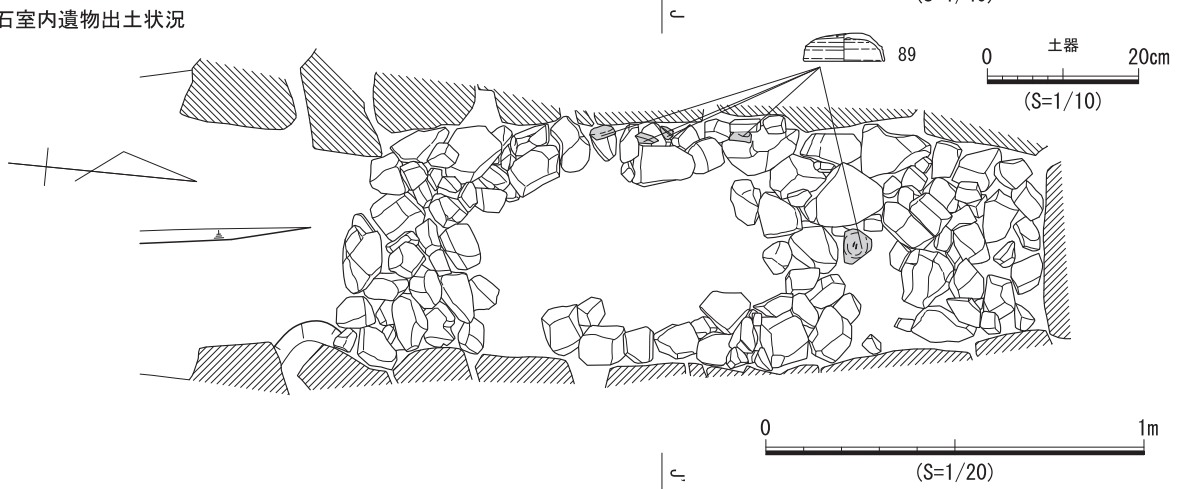
第54図 7号古墳石室平面図・石室埋土土層断面図



石室展開図



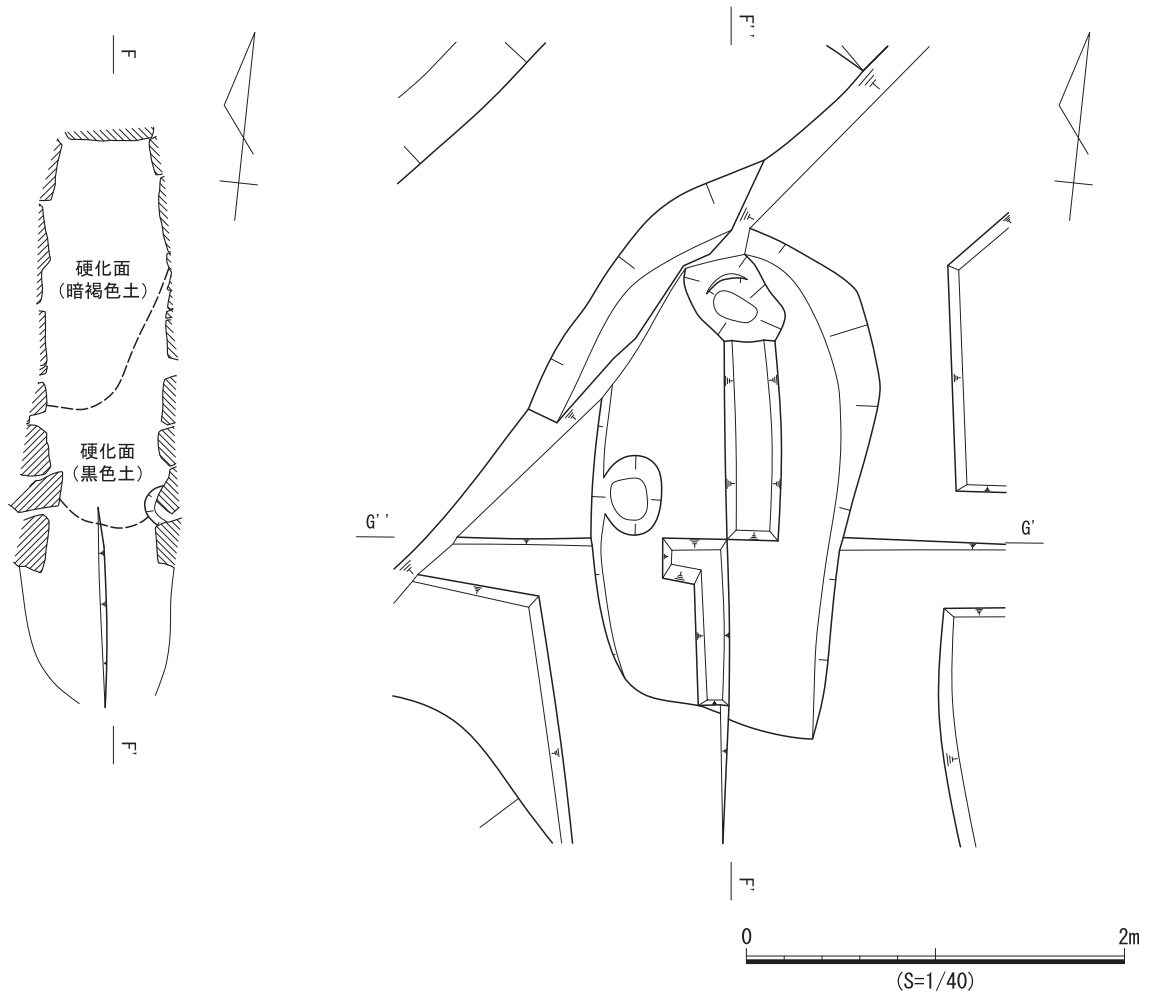
石室内遺物出土状況



第55図 7号古墳石室展開図・石室内遺物出土状況

礫床下床面検出状況

完掘状況



第56図 7号古墳礫床下床面検出状況・完掘状況

ることから、両袖式若しくは擬似両袖式の構造をもつ石室である。玄室の平面形は矩形であり、奥壁部分のみ窄まる形態をとる。玄室の床面には幅0.1~0.2mのチャート礫が敷かれているが、中央部が大きく抜けている。羨道には礫床はみられず、排水溝は確認できなかった。石材は全てチャートである。

奥壁は1段目に、礫床からの高さ0.2m、幅0.47mの扁平な角礫の平坦面を内側に向けて立てている。この石材は掘方底面を約0.2m掘り下げたのち、一度埋め戻してから設置している。また、奥壁面のほぼ中央に設置されており、北東と北西隅に僅かに隙間ができるため、小口面の幅が0.1mほどの小礫を充填している。2段目は、上面の高さを揃えるように2つの石材を長手積みで設置している。3段目も2石を積むが、左側は長手積み、右側は小口積みになっている。ただし、1段目から3段目まで石材の奥行きはいずれも0.2m前後で、持ち送りはみられない。

側壁は、3段階の構築手順が観察できる。まず、第1段階では奥壁設置後に床面に整地土（第52図10・11層）を充填しながら石室内側の面を揃え基底石を設置する。玄門の立柱石袖石もこの段階で設置したと思われる。整地土だけで安定しない石材は据付底面を掘り下げて掘って設置している。第

2段階では、石室掘方の高さまで石材を積み上げる。右側壁は石材の大きさに拘らず、隙間を埋めるように1～2段積んでいる。この上面の高さは、奥壁の2段目上面の高さと一致している。左側壁は右側壁よりも大型の石材を多く用いており、2段目の上面の高さが、奥壁の2段目の高さとはほぼ一致する。奥壁付近ではこの高さまでが石室掘方内に収まるが、玄室中ほどから南では掘方の外に出る。この上面の高さで横目地が通ることから、側壁は第一次墳丘の積み上げと連動して設置されたと考えられる。その後、さらに第一次墳丘を築造しながら3段目の石材を積み上げたと考えられる(第3段階)。なお、積み上げには右側壁では小口積みが目立ち、左側壁では長手積みが目立つが、石材の奥行きは0.3m前後のものを選んでおり、奥壁と同様に持ち送りはみられず、奥壁部分との隅角でも渡し掛け技法はみられない。また、玄室から羨道にかけての構築の連動性については検証できなかった。

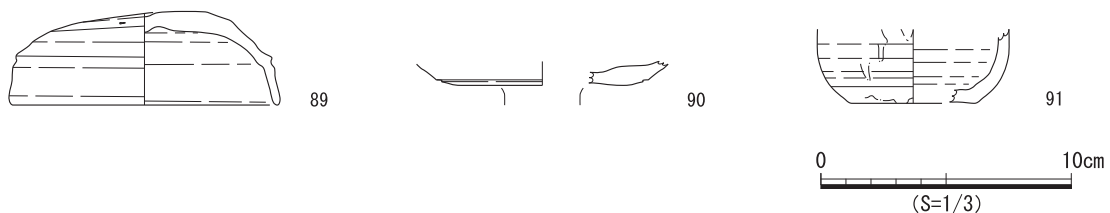
礫床は、しまりの無い黒褐色土(第54図2層)の上面に石材上面が水平になるように敷かれている。礫床面下層の硬化した堆積(第52図10・11層)は若干羨道側へ下がる傾斜がついており、石室構築当初から礫床を敷設し床面が水平になるよう企図していた可能性が考えられる。礫床は基底石設置以降に敷設されているが、天井架構後に作業することは困難な天井高と考えられることから、天井石架構前の可能性がある。

羨道及び前庭は玄門から南側とした。該当する基底石は左右1石ずつしか残存していないが、石室掘方の状況から南へ伸びていた可能性が高い。残存長0.53mであるが、掘方残存部を含むと1.2mである。また、最大幅は石材南端付近で0.59mである。床面は基盤層が露出した状態で、南端部に整地土(第52図13層)がみられる。玄室との境に段差はなく、羨道の床面は南へ向かって緩やかに傾斜している。

**遺物出土状況(第55図)** 礫床上から須恵器の杯身蓋89が出土した。同一個体が5つに割れており、最も大きい破片以外は左側壁側へ寄せたような位置で出土した。片付け行為の可能性もあるが、詳細は不明である。墳丘からは、須恵器と灰釉陶器の破片が出土した。

**出土遺物(第57図)** 89・90は須恵器である。89は、天井部は2分の1まで回転ヘラ削りが認められる。天井部と口縁部との境の稜は、上下部をナデて短く突出する。口縁部は外傾して下り、端部は丸く収める。H44～H15号窯式期に比定される。90は、高坏の坏部の破片か。91は灰釉陶器の小瓶の底部から体部の破片である。底部に回転糸切り痕が残る。

**遺構の時期** 出土した須恵器は6世紀末～7世紀初頭のもと考えられるが、古墳の規模は同時期の遺物が出土する4号古墳・6号古墳と比べ小さく、石室も小石室に近い様相である。また4号古墳・6号古墳より傾斜の急な斜面上方に立地していることから後出的な印象が強く、本古墳の築造時期は7世紀初頭の後半と考えられる。



第57図 7号古墳出土遺物

## 6 洞北山8号古墳

本古墳は、4号古墳や6号古墳などと同じ斜面上に造られており、7号古墳の約10m上方に位置する。旧表土の傾斜角度は約19°と、7号古墳より傾斜が急である。本古墳北側の発掘区壁面では、I b層の端部を確認することができる。また地形的には、西側に僅かながら尾根の頂部を確認できることから、今回確認した同一斜面に築かれた古墳の中では、本古墳が最も北西に位置している。

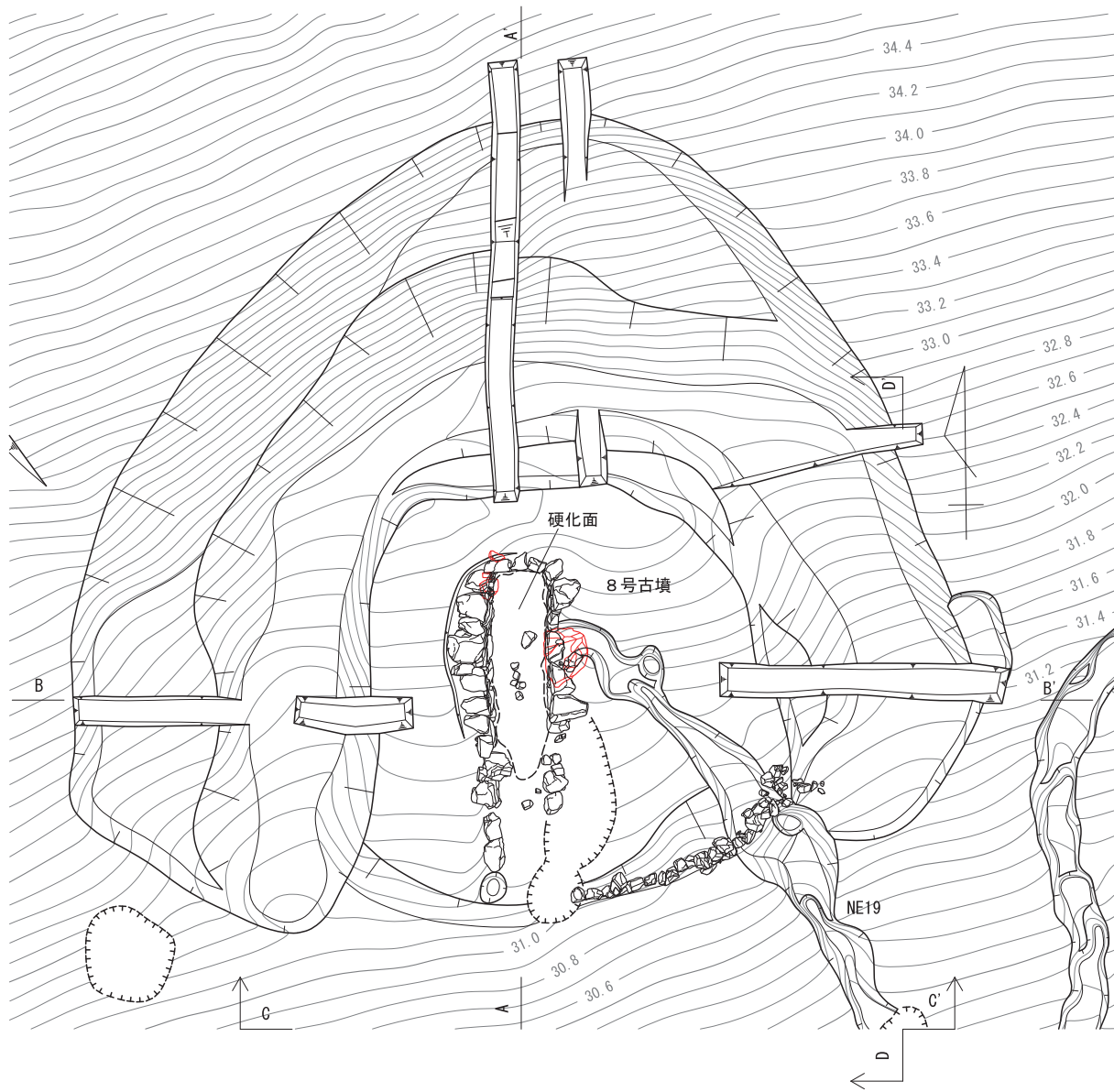
**検出状況** 平成28年度調査の表土掘削時に確認した。表土掘削前の段階では、目立った礫の露出はなかったが、I層の堆積が比較的薄く、重機掘削によって幅0.5mを超える礫を動かした際にその礫より南側で、南北方向に直線的に並ぶ複数の礫を確認した。斜面上方には周溝外縁と思われる傾斜変換点もみられ、礫の露出している辺りはやや平坦であったため、埋葬施設の存在を想定して慎重に掘り進めた。礫周辺及び礫より西側の遺構検出を先行して行い、石室と周溝を確認し古墳であることが判明した。天井石は残っておらず、右側壁に比べ左側壁の残りが良好であった。重機掘削により動いた礫は、石室内部に落ちた礫と判明した。また、墳丘南東部には外護列石が一部残存しているのを確認した。

周溝の北西側では外縁にあたる傾斜変換点が比較的明瞭であるが、北から東にかけては不明瞭で、また旧表土と遺構埋土が極めて類似していたため検出が困難であった。石室奥壁から1～2m北側では、埋土中に径0.2～0.3mの礫が集積しているのを表土掘削時に確認した。別遺構の可能性も考慮したが、先行して掘削を行った周溝西部の土層断面に類似する礫を含む堆積層が観察できたため、周溝埋土の一部と判断した。

**外部施設(第58・59図)** 墳丘の平面形は、石室の東側に比べ西側及び北側の幅が狭く、やや不整な形状である。7号古墳と同様に墳丘北側に礫が集積していたことから、墳丘が水流によって浸食された可能性があり、周溝の形状から本来は円形であったと推測される。墳丘の規模は、残存する盛土の範囲で、南北8.42m、東西5.71mである。墳頂の海拔は32.66mで、墳丘南東部に残存する外護列石の外側との比高差は1.98mである。墳丘盛土は第一次墳丘築造に伴うものと推定され、厚いところで約0.2m残存しているが、大半は流出していた。左側壁入口付近では、掘削した堆積層の下から羨門立柱石の掘方の可能性がある土坑を確認したため、墳丘南西側では盛土は残っていなかった可能性が高い。

周溝は墳丘南側を除く三方に巡る。斜面下方の墳丘南側では、外護列石の外側に明瞭な掘削痕跡は認められなかった。周溝は、西側から北側にかけて内側が深く外側が浅いが、地形的に急斜面であり、上段については人為的な掘方ではなく、雨水等による浸食で斜面が崩落したものと判断した。埋土は斜面上方の旧表土や基盤層の土と類似しており、自然堆積によるものと考えられる。西側から北側にかけてみられた礫を含む堆積は墳丘北東から北側に比較的大きな礫が集積し、西側に向かって徐々に小さな礫が混じっていた。そのため周溝がある程度埋没した後に斜面上方からの流水の向きが墳丘によって遮られ、北東方向から南西方向に向かって流れ、それに伴い堆積した層ではないかと推測する。

墳丘南東側には長さ約3.5mに渡って外護列石が残存していた。多くは1段であるが、最大3段積み重なっている箇所もある。外護列石のみられなかった石室入口の右側壁付近は近年に攪乱されたと考えられ、外護列石もそれに伴い失われたと推測される。また、墳丘東部では墳丘上を流れた水流の痕跡がみられ、列石の周囲が削り取られているが、礫自体は原位置を保っていると思われる。この水

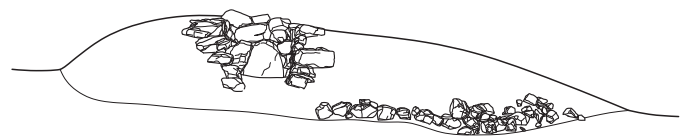


※赤線・・・調査過程で外した石材

外護列石検出状況

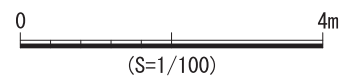
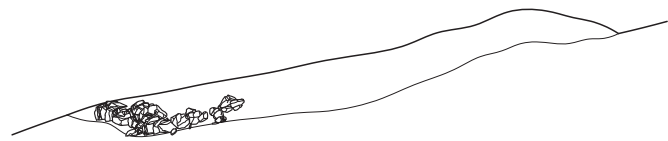
C  
33.00m

C'



D  
33.00m

D'



第58図 洞北山8号古墳平面図・外護列石検出状況



- 1 7.5YR1.7/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり 径30cm以下の角礫を25%含む 周溝埋土 径30cmを超える角礫を15%含む 7.5YR3/2黒褐色土プロックを1~2%含む 墳丘盛土
- 2 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む
- 3 7.5YR2/3 極暗褐色土プロックを3%含む 周溝埋土
- 4 7.5YR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む
- 5 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む
- 6 7.5YR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 周溝埋土 径1cm以下の角礫を3%含む
- 7 7.5YR2/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を30%含む 周溝埋土
- 8 7.5YR1.7/1 黒色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径20cmを超える角礫を10%含む 7.5YR2/3 極暗褐色土プロックを少量含む 周溝埋土
- 9 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を20%含む
- 10 10YR1.7/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む
- 11 10YR2.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20%含む 塹地土
- 12 10YR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を15%含む 塹地土
- 13 10YR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む
- 14 7.5YR2/3 黒褐色土プロックを3%含む 塹地土
- 15 7.5YR1.7/1 黒色土プロックを少量含む 墳丘盛土
- 16 7.5YR2/2 黒褐色土プロックを少量含む 墳丘盛土
- 17 10YR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む 10YR2/3 黒褐色土プロックを1~2%含む 墳丘盛土
- 18 7.5YR2/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を25%含む 墳丘盛土
- 19 7.5YR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む 墳丘盛土
- 20 7.5YR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を7%含む 墳丘盛土
- 21 10YR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を10%含む 墳丘盛土
- 22 10YR2/3 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を7%含む
- 23 7.5YR1.7/1 黒色土プロックを少量含む 石室掘方埋土
- 24 10YR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む 10cmを超える角礫を5%含む 石室掘方埋土
- 25 10YR1.7/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を15%含む 石室掘方埋土
- 26 10YR1.7/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を20%含む 石室掘方埋土
- 27 7.5YR2/3 極暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を3%含む 径10cmを超える角礫を7%含む
- 28 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 根痕跡
- 29 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む III層 (黒褐色土①)
- 30 10YR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を1~2%含む III層 (黒色土)
- 31 7.5YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む III層 (黒褐色土)
- 32 7.5YR3/4 暗褐色土プロック少量含む III層 (黒褐色土②)
- 33 7.5YR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を3%含む III層 (黒褐色土)
- 34 10YR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を少量含む III層 (黒褐色土)
- 35 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む III層 (暗褐色土)
- 36 10YR2/3 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性なし 径5cm以下の角礫を30%含む 古墳築造以前の倒木痕
- 37 5YR1.7/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を10%含む 古墳築造以前の倒木痕
- 38 10YR2/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 10YR2/3 黒褐色土プロックを5%含む III層 (黒色土①)
- 39 10YR1.7/1 黒色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む 径10~30cmの角礫を5%含む III層 (黒色土②)
- 40 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む 径10cm以上の角礫を少量含む III層 (黒褐色土)
- 42 7.5YR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を15%含む III層 (黒褐色土)

第59図 8号古墳墳丘・石室掘方・周溝土層断面図

流の痕跡より東側ではまとまって礫が確認できるが、以西の外護列石の並びから外れるものが多く、原位置をとどめているものはほとんどないと推測される。一方、墳丘南西側では外護列石は確認できず、掘方もみあたらなかった。先述のように墳丘盛土の流出に伴う可能性もあるが、旧地形が北西から南東に向かって傾斜しており、築造段階で斜面下方に当たる南東部のみに外護列石を設置した可能性がある。なお、外護列石は旧表土上に設置されており、その外側は大きく削り込まれた様子はみられなかった。

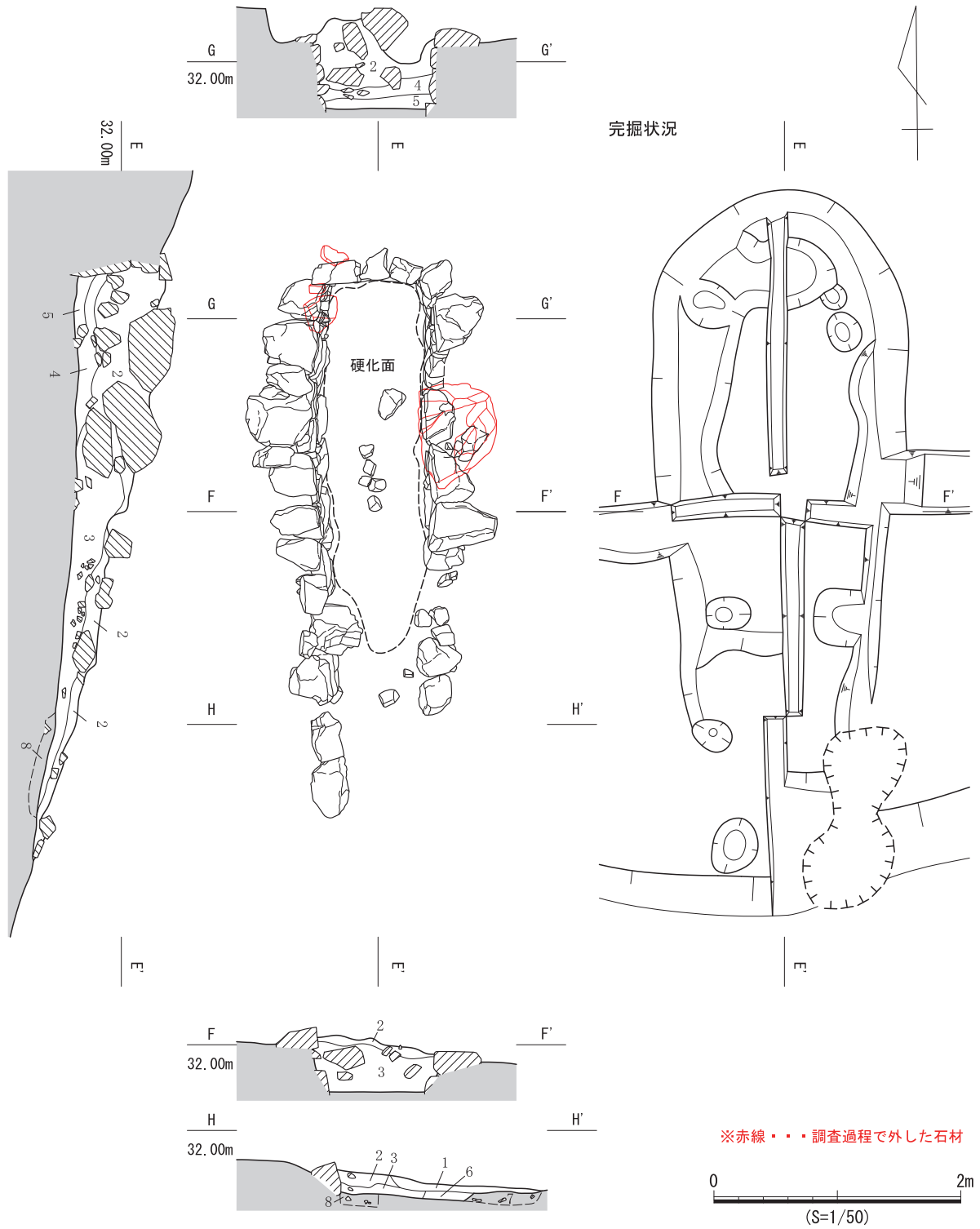
**石室埋土 (第 60 図)** 埋土は2層に大型礫をはじめ、多数の礫が混入していた。礫の混在状況などから人為的に埋めた土と考えられ、羨道まで同じ堆積が確認できた。3・4層は2層に比べ礫の混入が少なく、しまりのない土である。奥壁付近では旧表土に類似する黒褐色土(5層)が堆積していた。土層断面の形状が三角形であることから自然堆積と考えられ、奥壁手前で出土した副葬品と考えられる遺物はこの層中から出土した。

**埋葬施設 (第 59~61 図)** 石室掘方の平面形状は、奥壁側が丸く、南側に開口したかまぼこ型である。全長 4.53m、最大幅 2.07m、奥壁付近の深さ 0.76mである。排土は、斜面下方に積んで平場の整地に利用した(第 59 図 13 層)と考えられる。

石室は、残存長 4.38mの横穴式石室である。玄室全長 2.64m、奥壁幅 0.65m、最大幅 0.80m、奥壁付近の高さ 0.78mである。主軸方位は N-3°-W で、他の古墳同様に南北軸に近い。玄室の平面形状は矩形であり、胴張りはみられず奥壁付近でやや窄まる。玄門は右側壁の石材が失われ、左側壁の立柱石はやや内傾しているものの、基底石の平面形では石室内側に突出していない。このことから石室の構造は、玄門で玄室と羨道を区切る意識はあるものの、結果的に無袖式になったと判断した。石材は全てチャートである。

奥壁は最大4段を確認した。石室掘方底面を 0.15mほど掘り下げ、床面からの高さ 0.5m、幅 0.7mほどの、扁平で頂部がやや丸みを帯びた大型石材を立てており、左右の隙間を埋めながら側壁に渡し掛けるように礫が積まれている。大型石材の頂部で一旦高さを揃え横目地が通り、その上に長手積みで2段積んでいる。石材の奥行きはいずれも 0.3m以内に収まり、最上段に持ち送りがみられるがそれほど強くない。奥壁の大型石材の高さは、側壁の作業工程の第2段階に対応しており、大型石材の上部2段が、側壁の作業工程の第3段階に対応している。

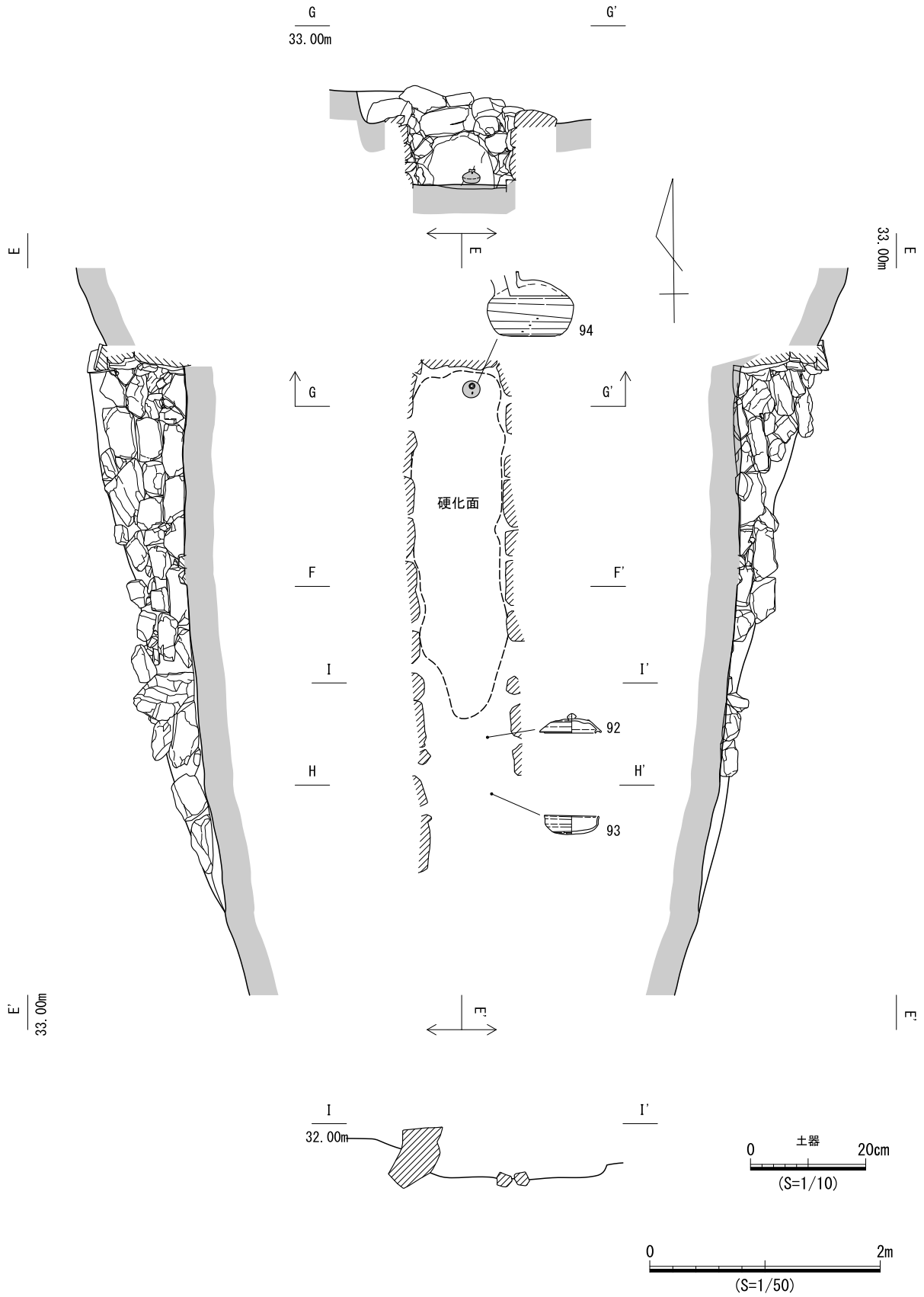
側壁は最大で5段残っており、奥壁付近で最も残りがよい。右側壁の玄門付近から羨道にかけては、基底石が2石残存するのみである。周辺ではビニール片を含む埋土が確認できることから、側壁の石材は攪乱によって近年失われたと考えられる。目地の通りから玄室は3段階に分けて積まれたと考えられ、後述のように羨道構築と連動していた可能性がある。第1段階では、基底石を設置する。基底石の設置に際し、左側壁では石室掘方底面が溝状に掘り下げられ、基底石上面の高さを揃える意図が伺える。右側壁では奥壁付近で若干掘り込んだ痕跡がみられた。左側壁の立柱石もこの段階で設置される。この立柱石は、底面に据付掘方を別途掘削して立てられている。床面からの高さは、奥壁の大型石材とほぼ一致しており、石室構築の基準となったと推測できる。対応する右側壁側でも据付掘方を確認でき、その埋土から拳大の礫が数個出土したが、根石か立柱石の残骸かは判断できなかった。左側壁の立柱石は内傾しているが、すぐ北側では石材が抜けたような隙間があり、石室埋土の掘削作業中に立柱石が動く様子がみられたため、設置当初からの意図的なものではないと推測する。第2段



- 1 10YR2/2 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫15%含む 7.5YR3/4 暗褐色砂礫土を斑状に含む ビニール片・炭化物を含む 攪乱
- 2 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径10cm以下の角礫5%含む 径50cmを超える角礫を多く含む 石室埋土
- 3 10YR1.7/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径10cm以下の角礫15%含む 7.5YR2/3 極暗褐色シルトを少量含む 石室埋土
- 4 7.5YR2/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫10%含む 径15cmを超える角礫を5%含む 10YR2/3 黒褐色土ブロックを3%含む 石室埋土
- 5 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫15%含む 石室埋土
- 6 10YR2/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり 径2cm以下の角礫5%含む 石室掘方埋土
- 7 10YR2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫10%含む III層(黒色土)
- 8 10YR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫15%含む III層(黒色土)

第60図 8号古墳石室平面図・石室埋土土層断面図・完掘状況





第 61 図 8号古墳石室展開図・石室内遺物出土状況

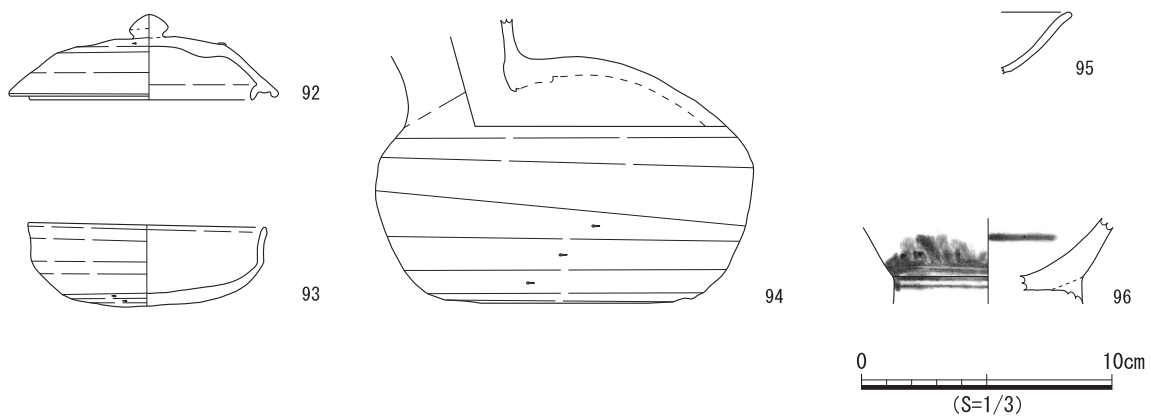
階では、奥壁の大型石材と袖部の立柱石を基準とする高さまで礫を積み上げる。全体的に小口積みが多くみられるが、石材の大きさに統一感はなく、隙間を埋めるように積み上げている。裏込め（第59図22～26層）には石室掘方の排土が利用されたと考えられる。また、石室掘方が比較的浅いため、石材は奥壁付近では石室掘方内に収まるが、玄門付近では基底石しか掘方内に収まらない。左側壁2段目の上面は入口に向かって傾斜する目地が通るが、玄門付近では石材の積み上げが第一次墳丘の築造に連動して積み上げられた（第59図17・20・21層）と考えられる。第3段階では、奥壁付近でも第一次墳丘の構築と連動しながら石材の積み上げが行われた（第59図14～16層・18・19層）。

玄室の中央付近では、拳大から人頭大の礫が数個床面に半分埋まるように検出されたが、規則性がないことから、付属しないものと考え除去した。その他、礫床の痕跡はなかった。玄室から羨道の一部にかけて床面に硬化した様子（第59図10層）がみられた。硬化した範囲は玄室ではほぼ全面にみられるが、羨道では中央付近のみであり、厚さは厚いところで約0.1mあった。

羨道及び前庭は、玄門から南側とした。羨道の規模は残存長1.74m、最大幅0.78mである。側壁は左右ともほぼ基底石しか残っておらず、積み上げの状況は不明である。右側壁に比べ、左側壁の基底石の方が大振りの礫を使用している。基底石の残りがよい左側壁では、平面形が若干東に振っている。石室掘方が羨道の基底石1、2石を含む範囲に及んでおり、左側壁立柱石のすぐ南側に位置する基底石とその上段の礫の高さは、玄室の基底石と2段目の高さにほぼ一致する。このことから、玄室の構築と羨道の構築が連動していた可能性がある。前庭との境は不明である。先述のように残存する左側壁南端の礫の南側に土坑を確認しており、位置的に羨門立柱石の据付掘方の可能性がある。羨道の床面は玄門付近で硬化する様子を確認できるが、入口付近の整地土（第59図13層）に硬化した様子はみられず、入口に向かって緩やかに傾斜している。

**遺物出土状況（第61図）** 奥壁中央手前で須恵器の平瓶94が出土したほか、玄門から羨道にかけて坏身93と坏蓋92が隣接して出土した。調査過程で奥壁付近の床面を埋土の一部と考えやや削り込んでしまったため、図面上では平瓶94が床面から浮いたように見えるが、ほぼ床面直上で出土しており原位置を保っていると考えられる。坏身と坏蓋については、床面直上に近いが攪乱と重複しており、原位置を保っている可能性は低い。また、周溝から灰釉陶器の破片と近世陶器の破片が出土した。

**出土遺物（第62図）** 92～94は須恵器である。92は坏蓋である。天井部はほぼ扁平だが中位からはやや外反しながら直線的に口縁に至る。宝珠つまみをもち、口縁端部は丸くおさめる。口縁内面にかえりを有し、外反しながら口縁端部よりわずかに下方へ突き出す。93は坏身である。底部は扁平だがわずかに丸みを有し、斜め外方へ立ち上がる。中位で張り出したのち、わずかに内弯し、その後外反しながら口縁端部に至る。口縁端部は丸く収める。底部外面には回転ヘラ削り調整を施し、外面に自然釉が剥落した跡が残る。92・93はセットと考えられ美濃9型式に分類でき、美濃須衛窯の編年ではⅢ期後半に比定される。94は平瓶である。底部はほぼ平坦で、斜め外方にやや丸みをもちながら立ち上がり、中位で最大に張り出し、上面は円弧を描いて口頸部に至る。口頸部は体部の一方に寄せられてつけられている。頸部はわずかに外反しながら立ち上がる。口縁部は欠損して不明である。上面のおよそ半分に自然釉がかかる。須衛65号窯式に併行する時期のものとみられ、92・93に比べると若干古い様相である。95は灰釉陶器の碗の口縁の破片である。96は広東碗の破片である。やや厚手で胎土は炆器質である。やや黄味がかった透明釉には細かな貫入が内外面にみられる。美濃窯産のもので



第62図 8号古墳出土遺物

第9小期に位置付けられる。

**遺構の時期** 92・93は7世紀中葉に位置付けられ、94はそれに比べ若干古い様相を示すものの、同時期に埋納されたと推測する。古墳築造の時期は7世紀中葉と考えたい。

#### 7 洞北山9号古墳

本古墳は、今回の調査で確認した古墳の中で最も西に位置する。また、最も近い8号古墳とは周溝間で約18mの距離がある。8号古墳との間には僅かではあるが尾根状の起伏を確認でき、他の古墳とは立地する斜面が異なる。

**検出状況** 平成28年度調査の表土掘削作業で確認した。現況地形では、発掘区1と発掘区2の境となる谷筋の出口付近にあたり、表土掘削前に長辺が1mを超える礫が表出していた。また、調査前地形測量ではわからなかったが、周囲に比べて傾斜が緩やかであったため、古墳の存在も想定しながら表土掘削を行った。表出していた礫はI層に含まれ、斜面上方からの流出に伴うものであったが、表土掘削後に緩やかな墳丘らしき高まりと、いくつかの礫が直線的に並ぶのを確認した。また、斜面上方で傾斜変換点がみられたことから、周溝外縁の上端と考えた。墳丘北から西側の周溝部分を除く範囲について先行して遺構検出を行い、石室を確認し古墳であることが判明した。天井石は残っておらず、左側壁の礫が比較的是っきりと確認できたのに対し、右側壁は入口付近に数石しか確認できなかった。また、この時点では奥壁も一部しか確認できなかったが、これは墳丘北から奥壁付近にかけて斜面上方からの流土が残っていたことによる。墳丘東部は深くえぐれI層が堆積していたが、南東部に外護列石が一部残存していた。周溝外縁に伴う傾斜変換点を墳丘の北側で確認できたが、東側については不明瞭で、旧表土と遺構埋土が類似しており検出が困難であった。

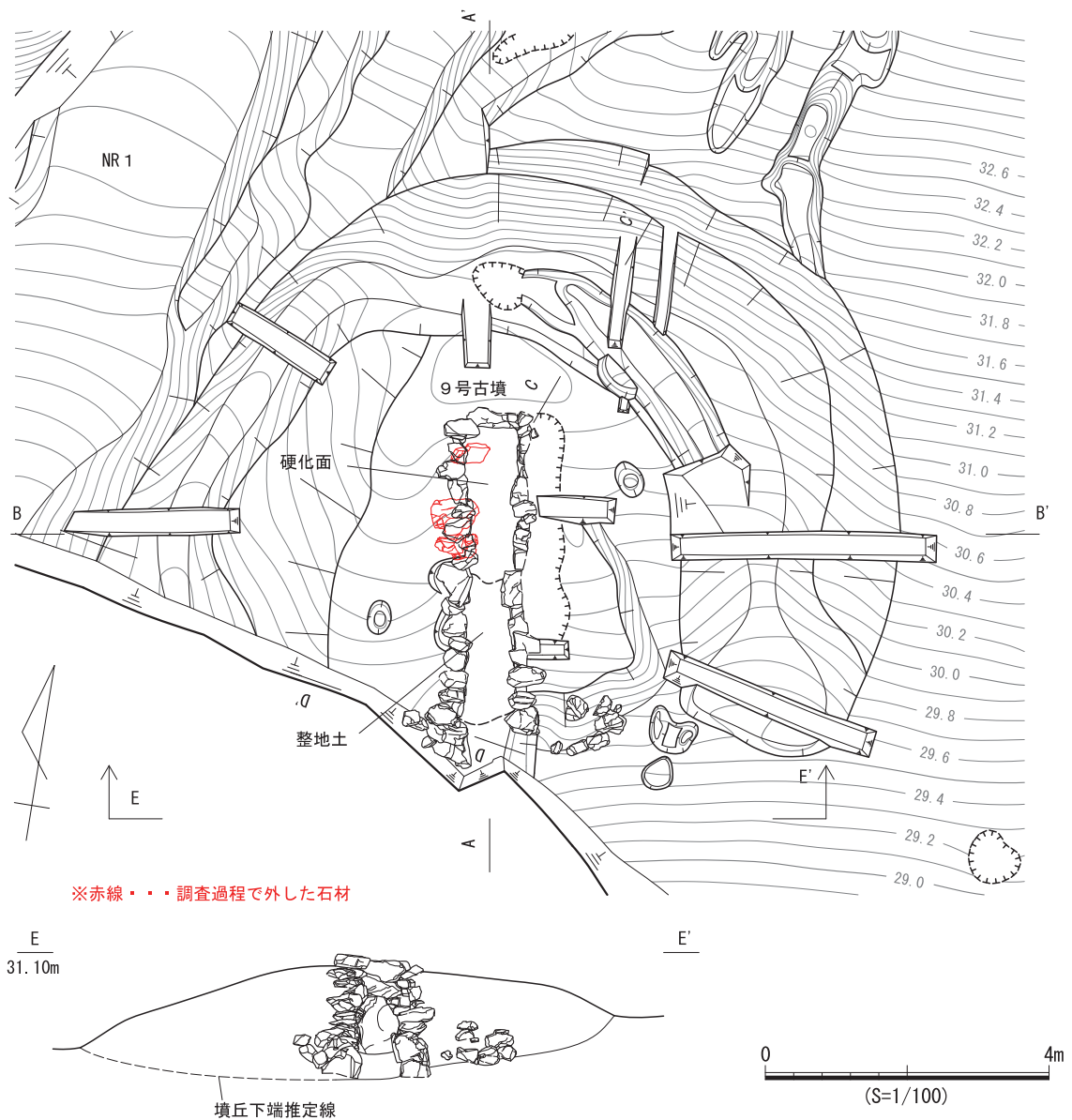
墳丘西部及び西側の周溝は現況の谷NR1によって削平され、砂礫層(Ib層)によって埋没していた。また、外護列石の一部を石室入口の西側でも確認した。墳丘及び周溝の南西端については、発掘区外に延びている。

なお、当初設定した主軸が一部のみ露出した奥壁石材と入口付近の両側壁を基準にしていたため、石室埋土掘削後に再設定した。そのため、石室内土層断面図と石室展開図の主軸が異なっている。

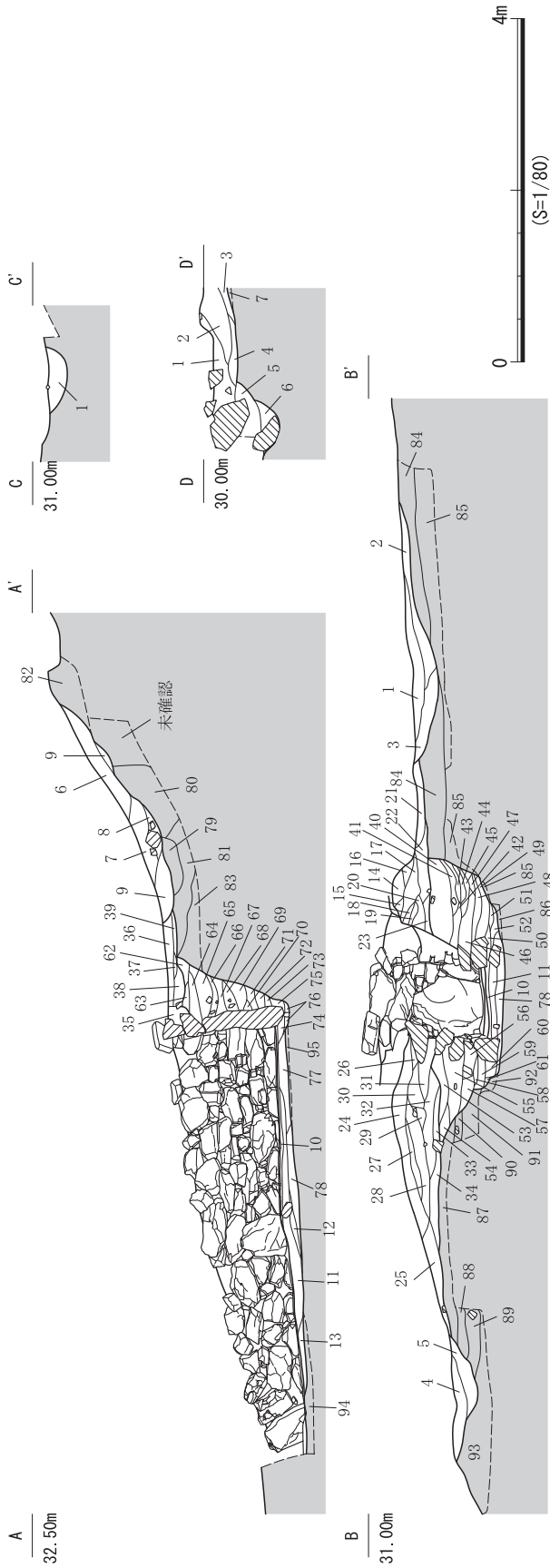
**外部施設(第63~65図)** 墳丘の平面形は墳丘の遺存状態が悪く、墳丘東部が大きくえぐれた形状となっており、西部も周溝とともに大きく削平されているが、周溝の形状から本来は円形であったと推

測される。墳丘の斜面上方にあたる北から西にかけて現況地形は谷筋にあたり、検出時には水流による浸食に伴うと推測される溝が墳丘や周溝と重複していたことから、自然流路の一部が蛇行した際に墳丘を削平したものと考えられる。また墳丘北部についても、後述する配石遺構 SS 1 などによって一部削平されていた。残存する盛土を計測した墳丘規模は、南北 5.94m、東西 6.73m である。墳丘南東部及び南西部では外護列石が残存しており、南東部の外護列石の外側は周溝などの土取りによって削り出されて墳端となっている。墳頂の海拔は 30.93m で、南東部の外護列石の外側との比高差は 1.33m であった。墳頂は側壁の石材が露出しており、第二次墳丘に伴う盛土はほとんど失われている。盛土は旧表土や基盤に由来する黒色土や黒褐色土が観察され、墳丘西部の残りの良いところで厚さ 0.55m である。石室付近では石室の目地に土層が対応しており、観察した土層はレンズ状に細かく積まれていた。大半が石室構築に関わる第一次墳丘に属すると考えられる。

周溝は、墳丘南側を除く三方を巡る。墳丘南側が発掘区外となるため、南西端は確認できなかった。



第 63 図 洞北山 9 号古墳平面図・外護列石検出状況



- A-A' 断面・B-B' 断面**
- 1 10VR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を3%含む 径10cmを超える角礫を少量含む 10VR2/3 黒褐色土ブロックを層上部に3%含む 周溝埋土
  - 2 7.5VR1.7/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を10%含む 径10cmを超える角礫を5%含む 周溝埋土
  - 3 10VR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を20%含む 10VR2/3 黒褐色土ブロックを5%含む 周溝埋土
  - 4 10VR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を3%含む 径10cmを超える角礫を少量含む 10VR2/3 黒褐色粘質シルトブロックを10%含む 周溝埋土
  - 5 7.5VR2/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む 7.5VR3/2 黒褐色シルトブロックを10%含む 周溝埋土
  - 6 7.5VR2/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を7%含む 7.5VR3/2 黒褐色土や7.5VR3/4 暗褐色土を斑状に15%含む 周溝埋土
  - 7 7.5VR1.7/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む 7.5VR3/2 黒褐色土ブロックを少量含む 周溝埋土
  - 8 10VR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径10cmを超える角礫を30%含む 7.5VR3/4 暗褐色土ブロックを少量含む 周溝埋土
  - 9 10VR3/4 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を7%含む 径10cmを超える角礫を少量含む 周溝埋土
  - 10 7.5VR1.7/1 黒色土 しまり 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 7.5VR2/3 極暗褐色土ブロックを3%含む 硬化面
  - 11 10VR2/2 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を20%含む 径20cmを超える角礫を含む 10VR3/3 暗褐色土ブロックを10%含む 整地土
  - 12 7.5VR2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 整地土
  - 13 10VR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 7.5VR2/2 黒褐色土ブロックを5%含む 整地土
  - 14 7.5VR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を10%含む 10VR2/2 黒褐色土ブロックを3%含む 墳丘盛土
  - 15 10VR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を10%含む 7.5VR1.7/1 黒色土ブロックを少量含む 墳丘盛土
  - 16 7.5VR2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む 7.5VR3/2 黒褐色土ブロックを10%含む 墳丘盛土
  - 17 10VR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 10VR2/2 黒褐色土ブロックを5%含む 墳丘盛土
  - 18 10VR2/3 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を5%含む 10VR2/1 黒色土ブロックを3%含む 墳丘盛土
  - 19 7.5VR2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 10VR2/3 黒褐色土ブロックを少量含む 墳丘盛土
  - 20 7.5VR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を少量含む 7.5VR2/1 黒色土ブロックを10%含む 墳丘盛土
  - 21 7.5VR2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 10VR2/3 黒褐色土ブロックを1~2%含む 墳丘盛土
  - 22 7.5VR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を7%含む 7.5VR2/2 黒褐色土ブロックを3%含む 墳丘盛土
  - 23 7.5VR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む 10VR3/2 黒褐色土ブロックを3%含む 墳丘盛土
  - 24 7.5VR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を7%含む 10VR3/3 暗褐色土ブロックを3%含む 墳丘盛土
  - 25 10VR2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を10%含む 7.5VR2/2 黒褐色土ブロックを10%含む 墳丘盛土
  - 26 10VR2/2 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 7.5VR3/3 暗褐色土ブロックを少量含む 墳丘盛土
  - 27 10VR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む 7.5VR2/2 黒褐色土ブロックを3%含む 墳丘盛土
  - 28 7.5VR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径10cmを超える角礫を10%含む 径10cmを超える角礫を少量含む 7.5VR2/2 黒褐色土ブロックを15%含む 墳丘盛土
  - 29 7.5VR2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を少量含む 7.5VR2/3 極暗褐色土ブロックを20%含む 墳丘盛土
  - 30 7.5VR2/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 10VR2/2 黒褐色土ブロックを7%含む 墳丘盛土

第64図 9号古墳墳丘・石室掘方・周溝土層断面図(1)

31	10VR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を10%含む	7.5VR1.7/1 黒色土プロックを少量含む	墳丘盛土
32	7.5VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を10%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを少量含む	墳丘盛土
33	10VR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を7%含む	7.5VR2/2 黒褐色土プロックを3%含む	墳丘盛土
34	10VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を3%含む	10VR2/2 黒褐色土プロックを3%含む	墳丘盛土
35	7.5VR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を2%含む	10VR2/2 黒褐色土プロックを少量含む	墳丘盛土
36	10VR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を7%含む	7.5VR4/6 褐色土プロックを5%含む	墳丘盛土
37	7.5VR3/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を2%含む	10VR2/2 黒褐色土プロックを5%含む	墳丘盛土
38	10VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を5%含む	10VR2/2 黒褐色土プロックを少量含む	墳丘盛土
39	10VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を7%含む	10VR2/2 黒褐色土プロックを少量含む	墳丘盛土
40	10VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を10%含む	10VR2/2 黒褐色土プロックを3%含む	石室掘方埋土
41	10VR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を3%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを少量含む	石室掘方埋土
42	10VR3/4 暗褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を5%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを10%含む	石室掘方埋土
43	7.5VR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を3%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを5%含む	石室掘方埋土
44	10VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を5%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを10%含む	石室掘方埋土
45	7.5VR2/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を1%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを2%含む	石室掘方埋土
46	7.5VR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を5%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを10%含む	石室掘方埋土
47	10VR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を5%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを15%含む	石室掘方埋土
48	7.5VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を5%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを5%含む	石室掘方埋土
49	10VR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を3%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを5%含む	石室掘方埋土
50	10VR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を5%含む	10VR2/2 黒褐色土プロックを2%含む	石室掘方埋土
51	10VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を5%含む	10VR2/1 黒色土プロックを5%含む	石室掘方埋土
52	10VR3/3 暗褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径10cm以下の角礫を15%含む	10VR2/1 黒色土プロックを2%含む	石室掘方埋土
53	7.5VR2/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を10%含む	10VR3/3 暗褐色土プロックを3%含む	石室掘方埋土
54	10VR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を5%含む	7.5VR1.7/1 黒色土プロックを2%含む	石室掘方埋土
55	10VR3/3 暗褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を5%含む	径5cmを超える角礫を少量含む	石室掘方埋土
56	7.5VR2/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径10cm以下の角礫を25%含む	10VR3/3 暗褐色土プロックを10%含む	石室掘方埋土
57	7.5VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を5%含む	10VR4/6 褐色土プロックを少量含む	石室掘方埋土
58	10VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を15%含む	10VR3/3 暗褐色土プロックを3%含む	石室掘方埋土
59	10VR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を25%含む	10VR2/1 黒色土プロックを2%含む	石室掘方埋土
60	10VR2/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を3%含む	10VR2/1 黒色土プロックを1%含む	石室掘方埋土
61	10VR3/4 暗褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を10%含む	10VR2/1 黒色土プロックを2%含む	石室掘方埋土
62	10VR3/4 暗褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を3%含む	10VR2/2 黒褐色土プロックを2%含む	石室掘方埋土
63	7.5VR2/3 暗褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を3%含む	7.5VR3/2 黒褐色土プロックを3%含む	石室掘方埋土
64	10VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を5%含む	7.5VR3/2 黒褐色土プロックを3%含む	石室掘方埋土
65	10VR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を3%含む	10VR2/1 黒色土プロックを10%含む	石室掘方埋土
66	10VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を5%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを5%含む	石室掘方埋土
67	10VR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を1~2%含む	10VR4/4 褐色粘質シルトプロックを3%含む	石室掘方埋土
68	10VR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径10cm以下の角礫を15%含む	10VR4/4 褐色粘質シルトプロックを1~2%含む	石室掘方埋土
69	10VR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を3%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを5%含む	石室掘方埋土
70	7.5VR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を3%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを1%含む	石室掘方埋土
71	10VR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を1%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを3%含む	石室掘方埋土
72	10VR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を2%含む	10VR2/3 黒褐色土プロックを3%含む	石室掘方埋土
73	7.5VR2/3 暗褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を7%含む	7.5VR3/3 暗褐色土プロックを3%含む	石室掘方埋土
74	7.5VR4/4 褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を3%含む	10VR3/3 暗褐色土プロックを2%含む	石室掘方埋土
75	10VR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径10cm以下の角礫を7%含む	10VR3/3 暗褐色土プロックを1%含む	石室掘方埋土
76	7.5VR4/6 褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を2%含む	整地土	
77	10VR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を1~2%含む	整地土	
78	7.5VR2/3 暗褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を1~2%含む	7.5VR4/4 褐色土プロックを1~2%含む	整地土
79	倒木痕 (古墳築造以前)			
80	7.5VR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を10%含む	7.5VR3/4 暗褐色土プロックを20%含む	倒木痕 (古墳築造以前)
81	10VR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を7%含む	10VR2/1 黒色土プロックを2%含む	7.5VR4/6 褐色土プロックを5%含む
82	10VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を10%含む	径10cmを超える角礫を少量含む	10VR4/6 褐色土プロックを少量含む

第65図 9号古墳墳丘・石室掘方・周溝土層断面図(2)

83	10VR2/3 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を1~2%含む	III層 (黒褐色土)	
84	10VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を10%含む	III層 (黒色土)	
85	10VR2/3 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を20%含む	III層 (黒褐色土①)	
86	10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を2%含む	III層 (黒褐色土②)	
87	10VR2/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を5%含む	III層 (黒色土①)	
88	10VR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を7%含む	III層 (黒褐色土①)	
89	7.5VR2/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径5cm以下の角礫を7%含む	III層 (黒褐色土②)	
90	7.5VR2/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径10cmを超える角礫を少量含む	III層 (黒色土②)	
91	7.5VR3/4 暗褐色土 ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を15%含む	III層 (暗褐色土)	
92	10VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を1%含む	III層 (黒褐色土②)	
93	7.5VR2/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり	径3cm以下の角礫を3%含む	III層 (黒褐色土②)	
94	10VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を5%含む	III層 (黒色土)	
95	10VR2/3 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり	径1cm以下の角礫を1~2%含む	III層 (黒褐色土)	

C-C' 断面

- 1 10VR3/3 暗褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を1~2%含む
- 1 10VR4/4 褐色土プロックを3%含む NE26埋土

D-D' 断面

- 1 10VR2/2 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を10%含む
- 7.5VR4/6 褐色土プロックを少量含む 墳丘盛土
- 7.5VR2/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を10%含む
- 径10cmを超える角礫を3%含む 10VR3/3 暗褐色土プロックを3%含む 墳丘盛土
- 10VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む 墳丘盛土
- 7.5VR2/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を3%含む
- 10VR2/2 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 墳丘盛土
- 7.5VR2/1 黒色土プロックを少量含む 径3cm以下の角礫を3%含む
- 10VR1.7/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む
- 10VR2/3 黒褐色土プロックを少量含む 石室掘方埋土
- 7.5VR2/1 黒色土 ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む
- 10VR2/2 黒褐色土プロックを少量含む 石室掘方埋土
- III層 (黒褐色土)

南東部の状況から墳丘南側に周溝は巡っていなかったと考えられる。周溝の規模は A-A' 断面では幅 2.39m、深さ 1.33m、周溝 B-B' 断面の東側では幅 2.99m、深さ 0.46m、同じく西側では幅 1.44m、深さ 0.31m であった。埋土は斜面上方の旧表土や基盤に由来又は墳丘から流出した黒色土や黒褐色土で、自然堆積によると思われる。周溝西側外縁は現況の谷 NR1 によって削平されているが、黒色土の堆積（第 64 図 B-B' 断面 4・5 層）がみられることから、ある程度埋没した後に削平されたと考えられる。北側から東側にかけては外側が浅く、内側は深い。北側の周溝埋土掘削時に SS1 を検出した。また、墳丘裾から周溝底部で検出した溝は、小礫をやや多く含む暗褐色シルトの単層で埋没しており、堆積状況から古墳築造後、周溝埋没以前の早い時期に、水流により削平されたものと推測する。

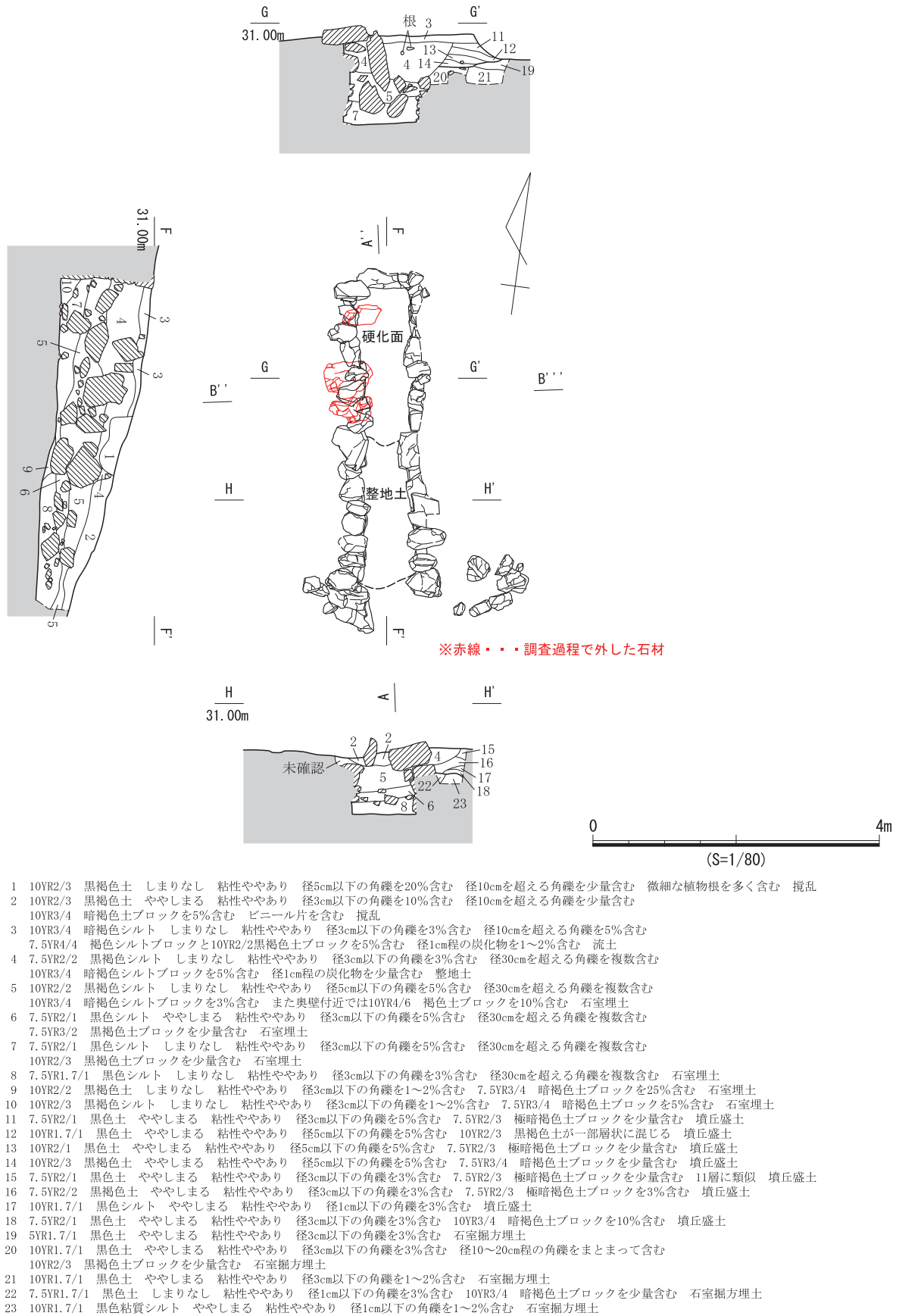
墳丘南東部の外護列石は、約 1.2m に渡って残存していた。遺存状態は良くなく、数石が 1～2 段残存する。墳丘南西部では、左側壁立柱石の西側に数石を確認した。南東部に比べ遺存状態は良く、さらに発掘区外に続くと思われる。

**石室埋土（第 66 図）** 1 層は柿木の根に伴う攪乱である。2 層にはビニール片が混入しており、近年の堆積土と判断した。一方、奥壁から玄室右側壁の広い範囲に掛けて、微細な炭化物が混じる暗褐色シルト層（3 層）が堆積しており、下層には同じく炭化物を含む黒褐色シルト層（4 層）が約 0.45m の厚さで堆積している。3 層は奥壁の北側でも確認できたことから流土と考えられる。墳丘北側で確認した SS1 の下部遺構に大量の炭化物が含まれており、SS1 築造後に堆積したものと推測される。4 層は石室の内外にまたがっていることや、この層の下から右側壁の残存部が検出できたことから、右側壁の石材を抜き取った際の掘方を意図的に埋め戻した可能性がある。5 層以下の埋土は水平な堆積が目立ち、長さ 0.8m を超える大型礫をはじめ多数の礫が混入していた。奥壁付近の 10 層は土層断面が三角形の堆積をなしており、自然堆積によるものと推測する。

**埋葬施設（第 64～68 図）** 石室掘方の平面形状は、南側に開口した長方形である。掘方の規模は全長 5.53m、最大幅 3.51m、奥壁付近の深さ 1.32m で、石室の規模が類似する 8 号古墳と比べ、全長が約 1.2 倍、幅は約 1.7 倍である。周辺の基盤は黒色土、黒褐色土、暗褐色土が厚く堆積しており、下層ほど礫の混じりが少なくシルト質な土壌のため、掘削が容易であったと推測される。排土は玄室や斜面下方に整地土として積んだと思われるが、墓道は発掘区外に延びるため、斜面下方の整地土については不明である。また排土の量が多いため、側壁の裏込めにも利用したと考えられる。石室掘方底面には、奥壁裏側から玄門付近にかけて非常に固くしまった整地土（77・78 層）が敷かれていた。

石室は全長 4.45m の横穴式石室である。玄室全長 2.21m、奥壁幅 0.81m、最大幅 0.90m、奥壁付近の高さ 1.32m である。主軸方位は N-10° -W で、南北軸に近い。玄室の平面形状は長方形で、僅かに胴張りがみられる。基底石の平面形状から擬似両袖式の構造を持つ石室と考えられる。石材は全てチャートである。

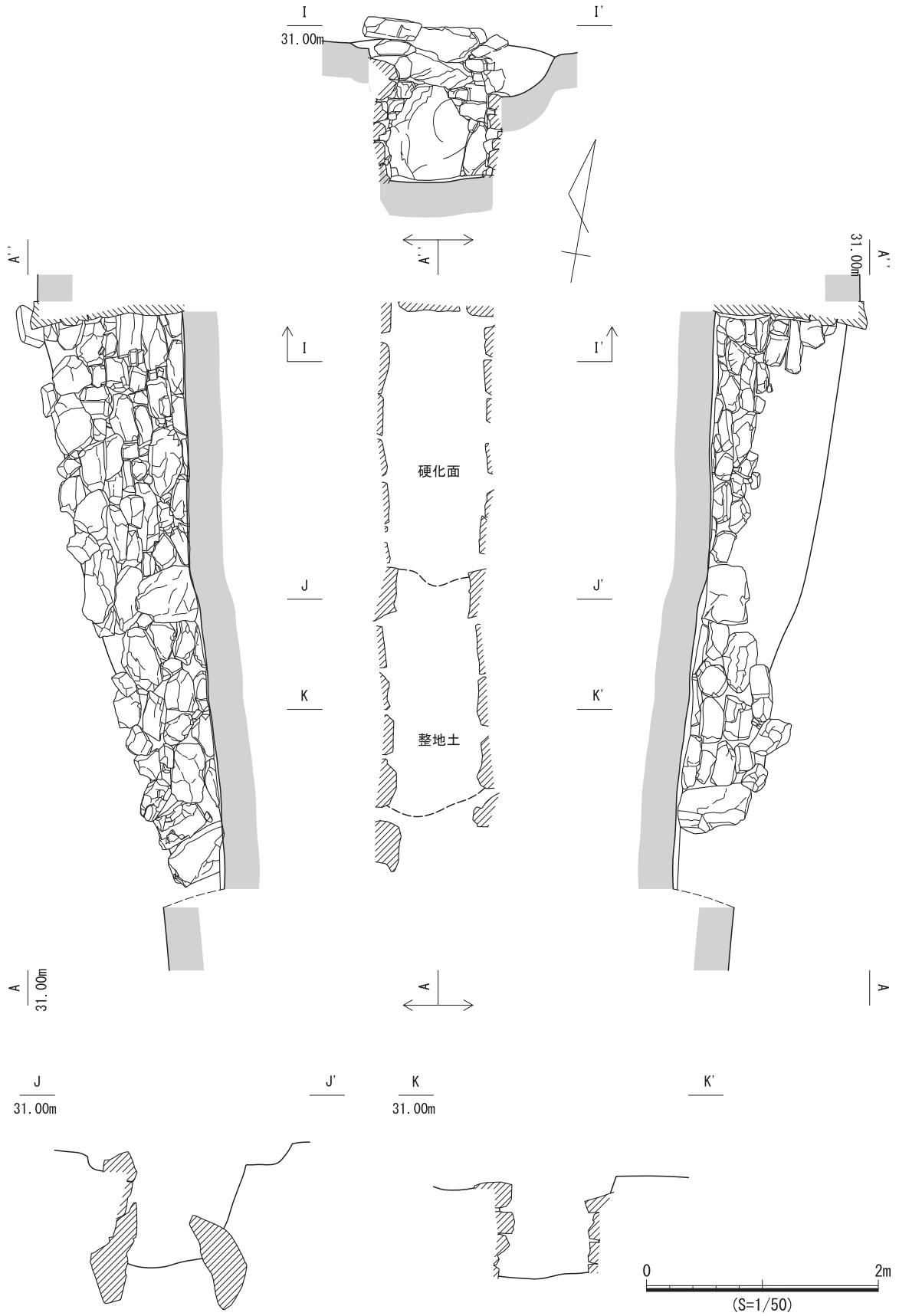
奥壁は最大 6 段を確認した。固くしまった整地土に据付掘方を掘削し、左側に床面からの高さ 0.83m の扁平で頂部が尖った大型石材を配置し、右側にその半分ほどの高さの石材を配置している。正面からみると 2 石の境はほぼ一致しており、また裏からみると互いに向かい合う面が平坦で一致する。このことから 1 つの礫を、意図的に割って配置したと推測できる。これによって奥壁正面は、平坦に整えられている。また、この 2 石は正面からみると左右の肩が下がっており、この部分にそれぞれ 2 段の礫が側壁と渡し掛けるように積まれている。上段が左の大型石材の頂部に揃えてあることから、



第 66 図 9号古墳石室平面図・石室埋土土層断面図

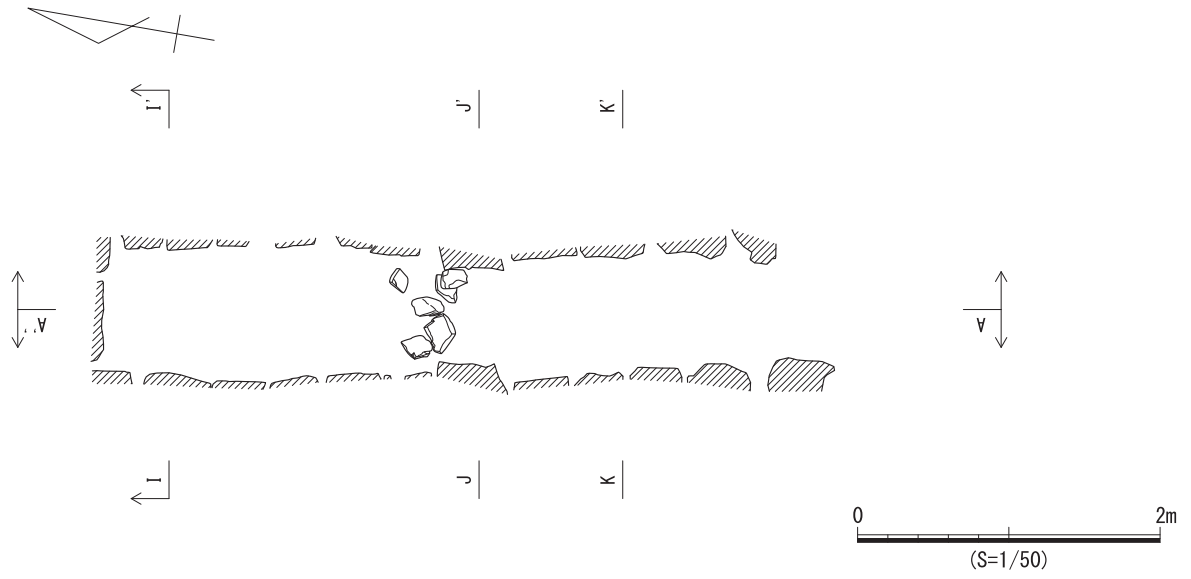
- 1 10YR2/3 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20%含む 径10cmを超える角礫を少量含む 微細な植物根を多く含む 攪乱
- 2 10YR2/3 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 径10cmを超える角礫を少量含む
- 10YR3/4 暗褐色土ブロックを5%含む ビニール片を含む 攪乱
- 3 10YR3/4 暗褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 径10cmを超える角礫を5%含む
- 7.5YR4/4 褐色シルトブロックと10YR2/2黒褐色土ブロックを5%含む 径1cm程の炭化物を1~2%含む 流土
- 4 7.5YR2/2 黒褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 径30cmを超える角礫を複数含む
- 10YR3/4 暗褐色シルトブロックを5%含む 径1cm程の炭化物を少量含む 整地土
- 5 10YR2/2 黒褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む 径30cmを超える角礫を複数含む
- 10YR3/4 暗褐色シルトブロックを3%含む また奥壁付近では10YR4/6 褐色土ブロックを10%含む 石室埋土
- 6 7.5YR2/1 黒色シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む 径30cmを超える角礫を複数含む
- 7.5YR3/2 黒褐色土ブロックを少量含む 石室埋土
- 7 7.5YR2/1 黒色シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む 径30cmを超える角礫を複数含む
- 10YR2/3 黒褐色土ブロックを少量含む 石室埋土
- 8 7.5YR1.7/1 黒色シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 径30cmを超える角礫を複数含む 石室埋土
- 9 10YR2/2 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を1~2%含む 7.5YR3/4 暗褐色土ブロックを25%含む 石室埋土
- 10 10YR2/3 黒褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を1~2%含む 7.5YR3/4 暗褐色土ブロックを5%含む 石室埋土
- 11 7.5YR2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む 7.5YR2/3 極暗褐色土ブロックを少量含む 墳丘盛土
- 12 10YR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む 10YR2/3 黒褐色土が一部層状に混じる 墳丘盛土
- 13 10YR2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む 7.5YR2/3 極暗褐色土ブロックを少量含む 墳丘盛土
- 14 10YR2/3 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む 7.5YR3/4 暗褐色土ブロックを少量含む 墳丘盛土
- 15 7.5YR2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 7.5YR2/3 極暗褐色土ブロックを少量含む 11層に類似 墳丘盛土
- 16 7.5YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 7.5YR2/3 極暗褐色土ブロックを3%含む 墳丘盛土
- 17 10YR1.7/1 黒色シルト ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を3%含む 墳丘盛土
- 18 7.5YR2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 10YR3/4 暗褐色土ブロックを10%含む 墳丘盛土
- 19 5YR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 石室掘方埋土
- 20 10YR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 径10~20cm程の角礫をまとめて含む
- 10YR2/3 黒褐色土ブロックを少量含む 石室掘方埋土
- 21 10YR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を1~2%含む 石室掘方埋土
- 22 7.5YR1.7/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を3%含む 10YR3/4 暗褐色土ブロックを少量含む 石室掘方埋土
- 23 10YR1.7/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を1~2%含む 石室掘方埋土



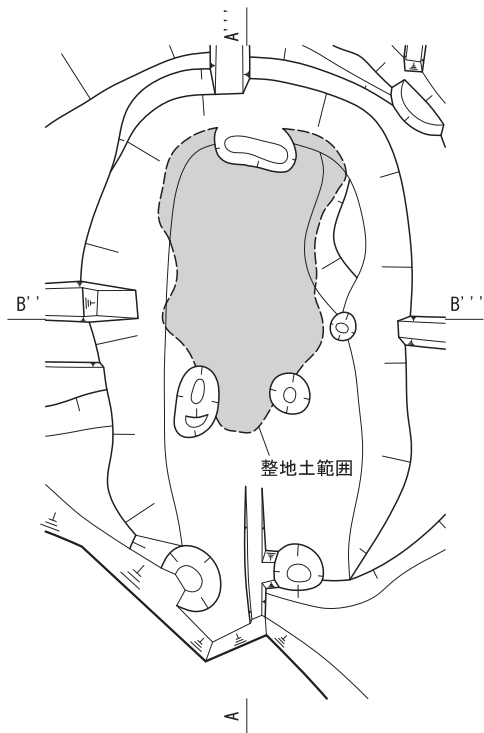


第 67 図 9号古墳石室展開図

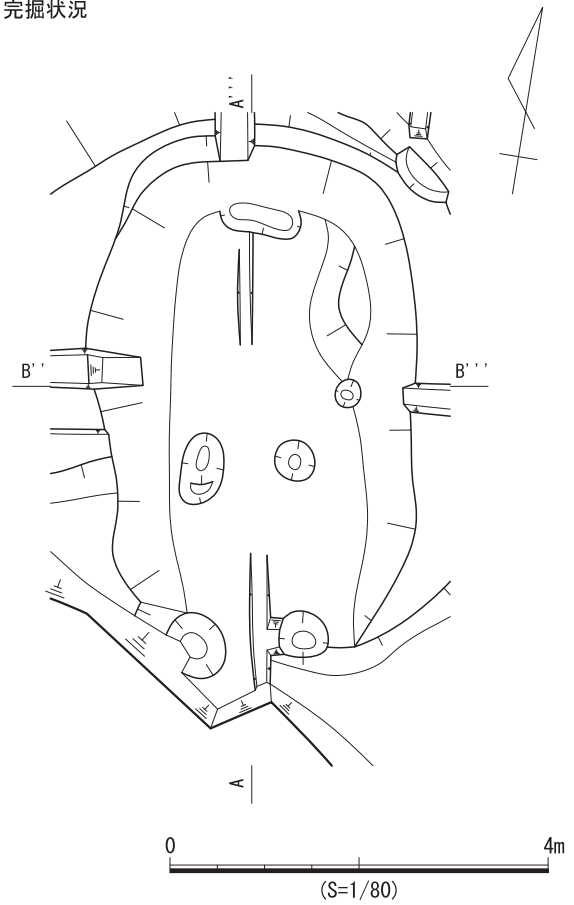
玄室硬化面下の礫検出状況



整地土（77-78層）検出状況



完掘状況



第 68 図 9号古墳玄室硬化面下の礫検出状況・整地土検出状況・完掘状況

この大型石材が構築の基準になっていたと考えられる。その上に大型の礫を長手積みで2段積み上げている。最上段は内傾する節理面の形状を利用して、持ち送り風になるように積んでいるが引きは強くない。

側壁は最大7段を確認したが、右側壁は玄室部分で上部の4～5段が大きく失われている。奥壁の大型石材及びその右側の石材の設置とともに、玄門と羨門に奥壁の大型石材と遜色ない大きさの礫を立柱状に設置し基準としたと考えられる。また、左側壁玄門の立柱石の上に長手積みされた大型礫が、玄室と羨道両方にまたがっていることから、羨道の構築とも連動していたと推定できる。

左側壁は全体的に残りがよいが、上部の一部が極端に内側へ張り出していた。その周囲では柿木の根が側壁の隙間に入り込んでいるのを確認しており、持ち送りの影響もあるが、根によって礫が動いた可能性がある。また、裏込めの土圧の影響も考えられる。残存する側壁は5段階の積み上げ工程を看取できる。第1段階では基底石を固くしまった整地土の上面に設置する。内側の面を揃えて配置されるが、上面は揃っていない。後述のように床面を検出した段階では埋め殺されているものもみられた。次に、第2段階では袖石の高さで横目地が通るため、この高さを基準に2～3段積み上げたと考える。ここまでは長手積みが多用されているが、石材の大きさに統一感はなく、様々な大きさの礫を組み合わせている。第3段階は奥壁の大型石材の高さを基準に1～2段積み上げる。この工程で奥壁と側壁に渡し掛けが始まり、引きを強くした小口積みを採用



写真13 裏込め土の状況（北から）

することでやや隅丸な形状となっている。この段階までがおおよそ石室掘方内に収まる。他の古墳に比べ石室の大きさに対し掘方が大きい。裏込めの土が搗き固められた様子はみられない。また、裏込めの土は、側壁裏側では礫の混じりが多い土が用いられていたが、奥壁裏側では礫の混じりが少ないシルト質の土が用いられ、掘方の北東部で明瞭に境を確認できた（写真13）。第4段階は奥壁の大型石材上の長手積みされた段に対応し、第5段階は調査過程で取り外したため展開図には図示されていないが、奥壁の最上段に対応する。第3段階以降の積み上げは小口積みの割合が増加し、長手積みされた礫も奥行きのあるものが利用され、引きを強くし持ち送りがみられる。

右側壁は奥壁に接する部分が最も残りがよく、基底石はすべて残っているが、埋め殺されているものもみられた。左側壁と同様に5段階の工程に沿って積み上げられたと推測されるが、確認できるのは第2段階の横目地までである。

玄室床面に礫床はみられず、硬化した範囲（第64図10層）を確認した。基底石のいくつかは埋め殺されている状況から、基底石設置後に敷設されたと考えられる。玄室床面はほぼ水平（入口に向かって1.6°傾斜する）に保たれているが、玄門を境に羨道より約0.1m高く造られている。基底石下の固くしまった整地土層（第64図77・78層・第68図）は、奥壁から玄門に向かって緩やかに傾斜している。その上の11層は玄室中央付近から羨道にかけて堆積しており、玄室の床面を水平に整えるため

の整地土である。11層中からは、玄門付近で拳大よりやや大きめの礫数個がまとまって出土した。この礫を境に羨道側が低くなっていると考えられ、南側は緩やかに傾斜して羨道へと至る。

羨道は、玄門から南側とした。規模は、左側壁入口の立柱状の大型石材が原位置を保っていないため不明だが、玄門から右側壁入口の立柱石外縁までの距離で2.24m、最大幅0.82mである。羨道の平面形状は矩形であるが、右側壁の基底石が主軸の方向とほぼ一致するのに対し、左側壁ではやや内側に入るため、入口に向かってやや先細る形状となる。床面は玄室から続く整地土（11層）の堆積が羨道中ほどにかけてみられ、さらに別の整地土（13層）が入口付近まで堆積している。床面は緩やかな傾斜を保ち、玄室南端と羨道南端では0.28mの比高差がある。排水溝は確認できなかったが、排水機能は保たれていたと推測される。なお、基底石は石室掘方の底面の直上に配置され、玄室でみられたような基底石下の整地土は確認できなかった。

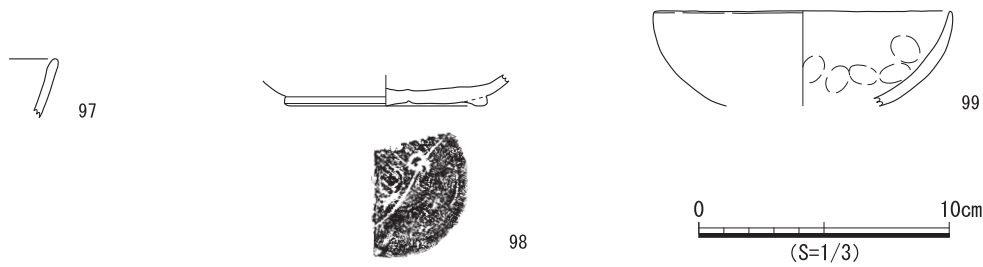
玄門の袖石は左右いずれも床面から約0.5～0.6mの高さがあり、据付掘方を掘削し、平坦面を内側に向けやや内傾して設置されている。上面は頂部から鋭角に傾斜する面を形成し、断面形状は鋭角の一端を下に向けた台形に類似する。袖はそれぞれ1石のみで構成されており、右側壁は袖石上段の礫が失われているため不明であるが、左側壁では袖石上段の礫の長手面が玄室及び羨道の側壁面と揃っており、内側に突出しない。袖石の形状が類似することから、右側壁でも同様の構造であったと推測できる。このような構造をとる理由としては、袖石間の幅が0.61mと狭いため、棺を納める際に必要な幅を確保する意図があったためではないかと推測する<sup>15)</sup>。

羨道の側壁は、先述のように玄室の構築工程と連動して積み上げられたと思われるが、玄室に比べて礫の隙間が大きく、また右側壁では等大の礫を縦に積み重ねた状況が観察でき、拘りは感じられない。石室掘方が羨道入口付近にまで達しているが、2段目以上は掘方の外に出るため、第一次墳丘と連動して積み上げられたと考えられる。

前庭及び墓道は、羨門と考えられる立柱状に立てられた一対の大型石材とその南側の平場とした。前庭は立柱石に挟まれた範囲で、この部分には天井が掛かっていなかったと考えられる。立柱石は床面から約0.65～0.75mの高さがあり、石室掘方の開口部に据付掘方を掘削し設置されている。左側壁では羨門に接する小口積みされた側壁の礫が崩れ、羨門の立柱石が斜面下方の南側に傾いていた。また、右側壁の立柱石の裏側には、1辺0.2mを超える礫が置かれていた。4号古墳や6号古墳でみられた墳丘内埋没石列の一部の可能性もあったが、左側壁側では確認できなかったことや、1石のみであったこと、石室掘方内に収まっていたことから、裏込めの石材と判断した。墓道の南端は発掘区外となるため確認できなかった。

**遺物出土状況** 石室内から須恵器の破片と、土師器の破片が出土した。須恵器は石室埋土上層の4層から出土し、土師器は床面直上の7層と硬化した床面から出土した複数の破片が接合した。

**出土遺物（第69図）** 97・98は須恵器である。97は坏身の口縁部であり、端部を丸く収める。時期は不明である。98は碗の底部である。底部はほぼ平坦で貼付高台がつく。体部は緩やかに立ち上がるようにみえる。底部外面には回転ヘラ削り調整を施し、中央に板目痕が残る。またヘラ記号がみえる。体部及び底部内面には回転ナデが確認できた。高台は低く端部はやや広い面を形成する。時期は猿投窯第V期第2小期はじめ頃に比定できる。99は土師器の碗である。底部は失われており形状は不明であるが、口縁部が内湾ぎみに立ち上がる。次第に先細りながら口縁端部に至り、口縁端部は丸く収め



第69図 9号古墳出土遺物

る。外面は著しい摩滅により調整痕が不明で、内面には明瞭ではないがユビナデとユビオサエの痕跡が残る。時期は不明である。

**遺構の時期** 時期を決定できる遺物がないが、石室に占める羨道の長さが他の古墳に比べても長く、中井正幸（1992）によると、後発的な様相を示している<sup>16)</sup>。石室規模が類似する8号古墳と同時期の7世紀中葉と考えたい。

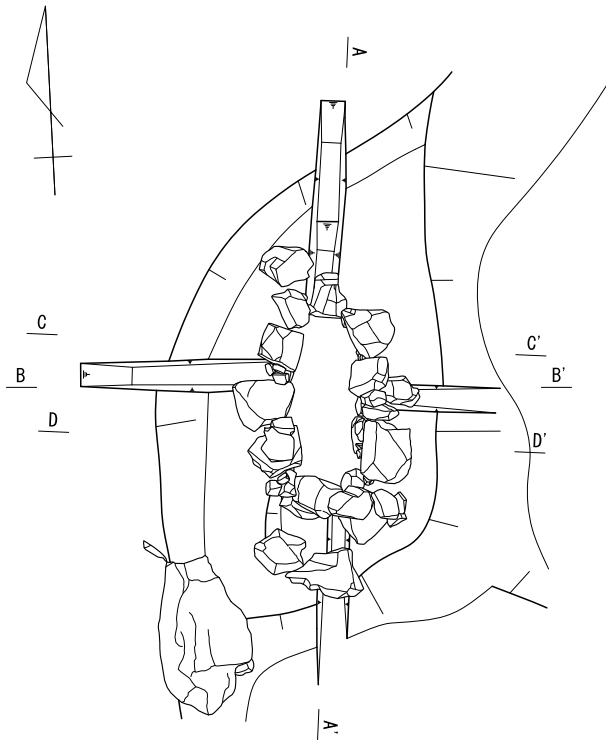
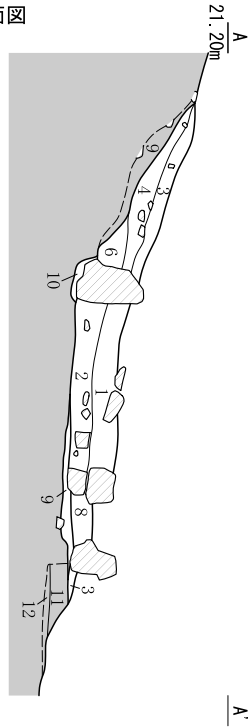
#### 7 洞北山10号古墳

**検出状況** 4号古墳の周溝を検出中に、本古墳の側壁最上段にあたる石材の並びを確認した。検出段階で4号古墳の周溝埋土が石室周辺に堆積していたため、4号古墳周溝との関係が不明であったが、石室周辺の4号古墳周溝埋土は表面のみで、石室の東側から深くなっていることが判明した。また、本古墳石室の掘方が4号古墳周溝によって削平されている状況も確認した。これらのことから、本古墳が築造されたのちに4号古墳が築造され、4号古墳の盛土のために周溝を深く掘削した際に、本古墳石室の掘方の一部を削平したと考える。なお、本古墳に伴う墳丘や周溝は確認できなかった。

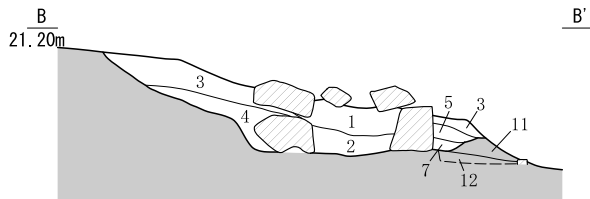
**石室埋土（第70図）** 埋土にはしまりがなく、斜面上方からの流入土（1・2層）と考えられる。

**埋葬施設（第70・71図）** 検出した当初は、12号古墳と同様の竪穴式石室と考えていたが、奥壁の構造や奥壁と側壁が接する部分が窄まる点などは横穴式石室に類似する。石室の長軸はN-5°-Eで、南北軸に近く、4号古墳の主軸方位とほぼ平行する。石室掘方の平面形状は、本来の形は不明であるが、東から南にかけて4号古墳の周溝に削平されているため、東側が直線的で西側に比べて狭い。断面形状は播鉢状であるが、西側では2段掘りしている。掘方の規模は残存部で南北3.38m、東西2.57m、深さ0.89mである。なお、北西部の掘方埋土（3層）中からは、少量ではあるが焼土ブロックの混入を確認した。石室全長は1.86m、最大幅0.50m、奥壁は頂部が尖った礫1石のみで構成され、底面からの高さは0.45mである。奥壁は平坦面を内側に向け、据付掘方を浅く掘って設置している。側壁は基底石の間に隙間が多く、始めからあまり高く積み上げる意図は感じられない。検出時には2段の石積みが残っており、奥壁の高さとほぼ一致する。床面は南側に整地土（9層）がみられ、その上に基底石や、南側の閉塞石材が置かれている。玄門にあたると思われる部分には礫が2段に積まれていたが、右側壁からかかる石が載っているため、構造の一部となっていた可能性は高い。しかし、側壁とは一体化しておらず隙間が空いており、側壁を2段積んだ後に付加したと考えられる。その南側の本来羨道又は墓道にあたる部分には側壁が無く、閉塞石の設置を意図したような不整形な礫が2個置かれている。以上のような状況から、横穴式石室として構築し、入口を塞いだことで竪穴状にみ

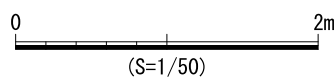
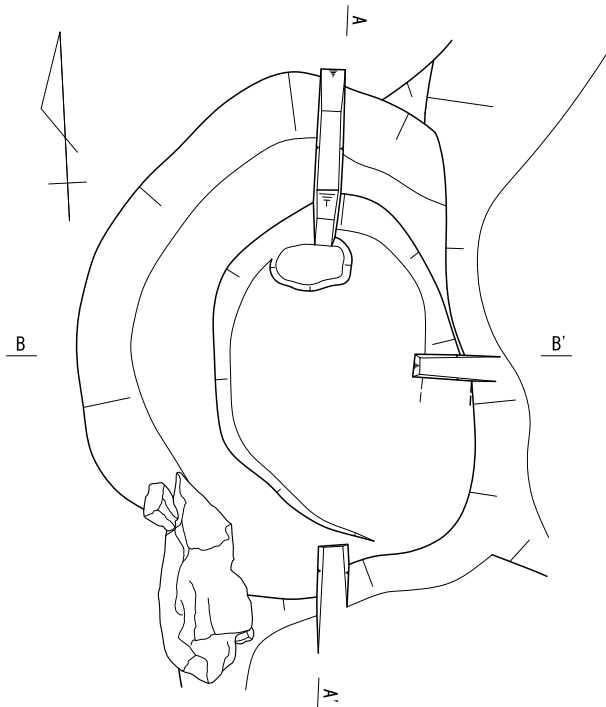
平面図・断面図



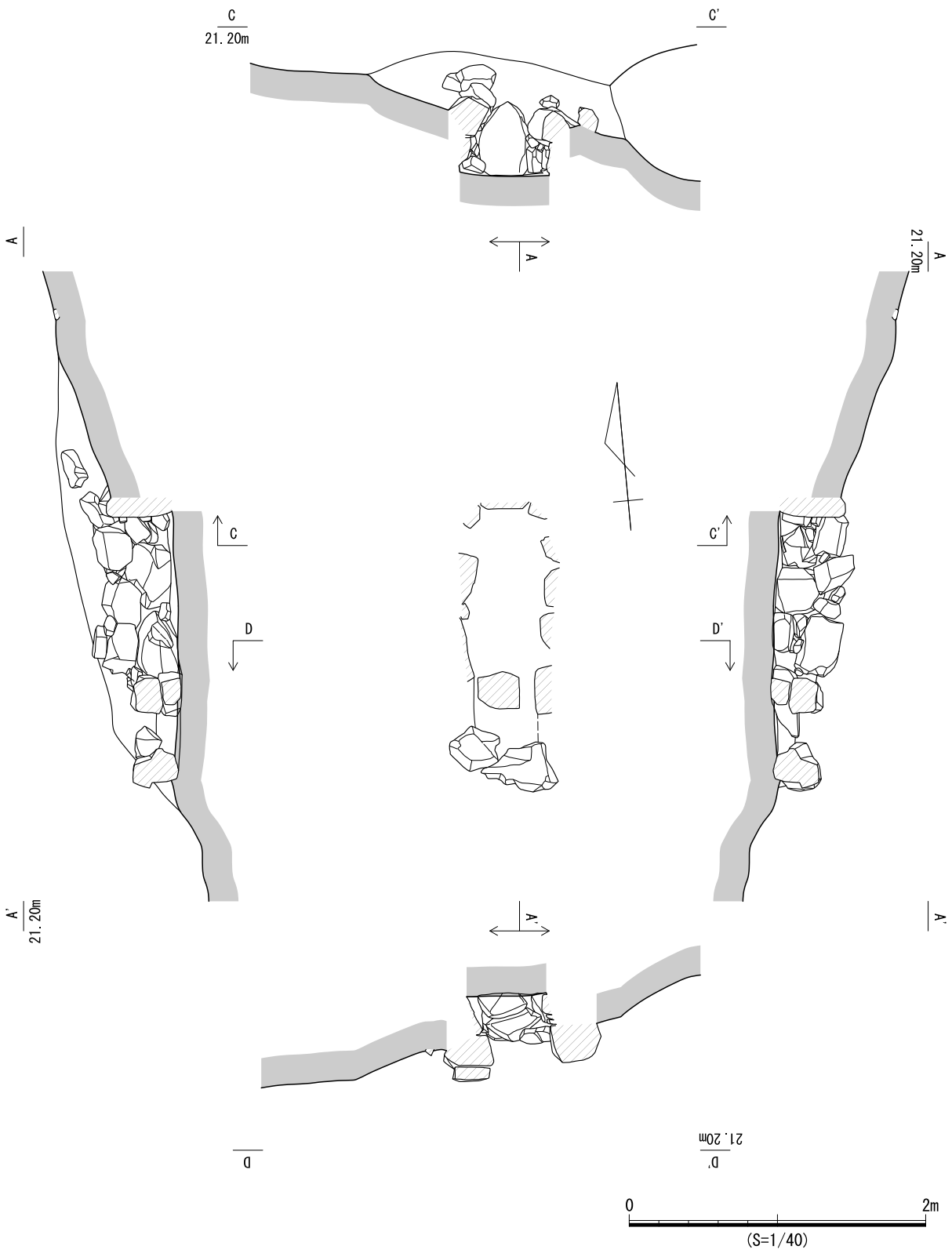
- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり  
径1~2cmのチャート礫を1%含む 石室埋土
- 2 2.5Y2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり  
径5~10cmのチャート礫を5%含む 石室埋土
- 3 2.5Y2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径1~3cmのチャート礫を3%含む 石室掘方埋土
- 4 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり  
径1~10cmのチャート礫をわずかに含む 石室掘方埋土
- 5 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり  
径0.5cm程度のチャート礫を1%含む 石室掘方埋土
- 6 10YR2/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり  
黄褐色ブロックを3%含む 石室掘方埋土
- 7 10YR2/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり  
径0.5cm程度のチャート礫を1%含む 石室掘方埋土
- 8 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径1~2cmのチャート礫を1%含む 羨道部埋土
- 9 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径3cm以下のチャート礫を5%含む  
径5cmを超えるチャート礫を3%含む 整地土
- 10 10YR2/3 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり  
径0.5~1cmのチャート礫を1%含む  
10YR4/4 褐色粘質シルトの基盤層のブロックを含む  
奥壁掘方埋土
- 11 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり  
径2~10mmのチャート礫を3%含む 旧表土 III層(黒褐色土)
- 12 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり  
径2~10mmのチャート礫を3%含む 漸移層 III層(褐色土)



完掘状況



第70図 洞北山10号古墳平面図・石室掘方・石室埋土土層断面図・完掘状況



第71図 10号古墳石室展開図

える小石室と判断した。なお、本古墳南東の4号古墳周溝の底面で、蓋石の可能性のある転石を確認した。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**遺構の時期** 4号古墳周溝の掘削に伴い、掘方の東側や南側が削平されていることから、築造時期は4号古墳築造以前と考えられる。しかし一方で、今回確認した石室を伴う古墳の中では、出土遺物の状況から4号古墳が最も古いと推定され、石室の規模が小さい小石室であることから、本古墳が4号古墳築造以前に単独で造られていたとは考えにくい。

## 8 洞北山11号古墳

**検出状況** AN15 グリッド周辺の旧表土層除去中に確認した。当初、Ⅱ層と旧表土の判別が難しく遺構検出が難航したため、最終的に黄褐色土まで掘り下げた。その結果、平面形状が長方形の掘方と石材の並びを確認した。遺物包含層掘削及び遺構検出の際は判断できなかったが、本古墳の周辺に墳丘の盛土が残っていた可能性がある。

石材は掘方内部のみ残存しており、7号古墳のように南側を整地した上で石材が設置されていた可能性がある。

**石室埋土 (第72図)** 埋土(1～3層)にはしまりがなく、斜面上方からの流入土と考えられる。

**埋葬施設 (第72図)** 石室掘方の平面形状は、南東方向に開口した方形である。全長1.71m、最大幅1.16m、奥壁付近の深さ0.37mである。掘方の掘削土は、他の古墳と同様石室南側の整地に利用したと考えられるが、底面には整地土は確認できなかった。底面は南に向かって3.6°傾斜している。石室は残存長1.00mの横穴式石室である。残存状況は悪い。幅0.6m、奥壁付近の高さ0.25mで、奥壁は2段、側壁は1～2段残存する。主軸方位はN-22°-Wで、斜面の傾斜に直行する。石材は掘方に納まる部分が残存している。石材は全てチャートで、長手積みで設置されており、石材上面を水平にするため基盤層を若干掘りこむなど、上積みのための工夫がみられる。奥壁は7号古墳石室と同様、複数の角礫を用いて側壁と直交するように置かれている。底面には扁平な礫2個が設置されており、棺台の可能性はある。

**出土遺物** 石室掘方から土師器片3点が出土したが、微細で器種も不明である。

**遺構の時期** 遺物による時期の特定は困難であるが、石室の形態は7号古墳に類似しており、7号古墳と同時期に築造された可能性が考えられる。

## 9 洞北山12号古墳

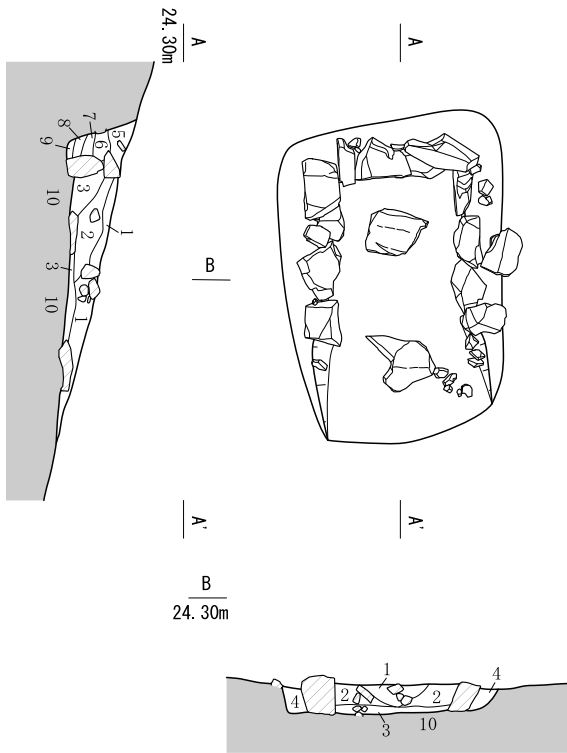
**検出状況** 7号古墳周溝の埋土上層と考えられる溝を完掘した後、7号古墳周溝を検出する過程で本遺構の側壁最上段にあたる石材の並びを確認した。7号古墳周溝の埋土上に構築されており、本古墳に伴う墳丘や周溝は確認できなかった。

**石室埋土 (第73図)** 埋土は単層で、基盤に含まれるものと同じチャート礫を含む。斜面上方からの流入土と思われる。

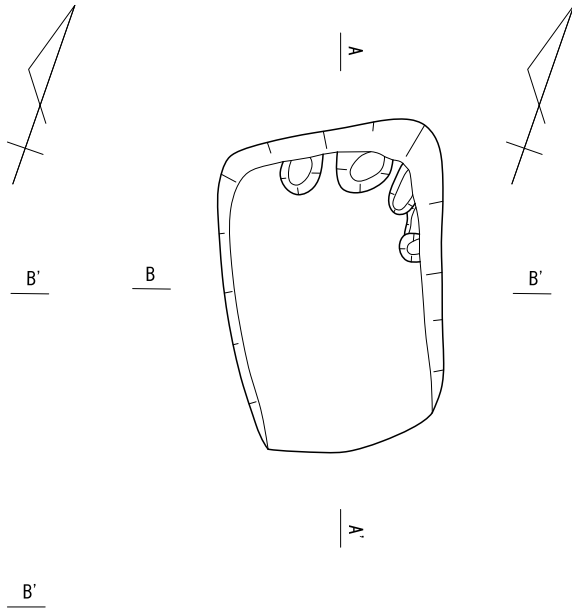
**埋葬施設 (第73図)** 石室掘方の平面形状は楕円形に近い隅丸方形で、全長1.38m、幅0.68m、北壁付近の深さ0.49mである。掘方底面は、7号古墳の周溝底面より深い基盤層まで達しており、石室底面とは異なり検出面の傾斜とほぼ平行する。そのため、底面には整地土(第73図4～6層)を入れてほぼ水平ならした上で、石室を構築している。石室の平面形は長方形であるが、北壁のみやや丸



平面図・断面図

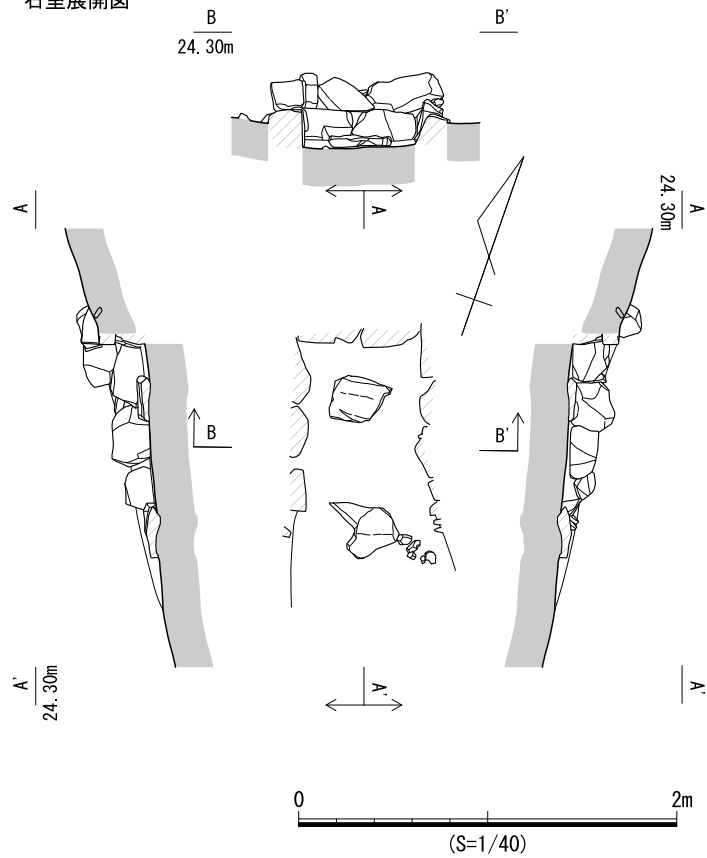


完掘状況



石室展開図

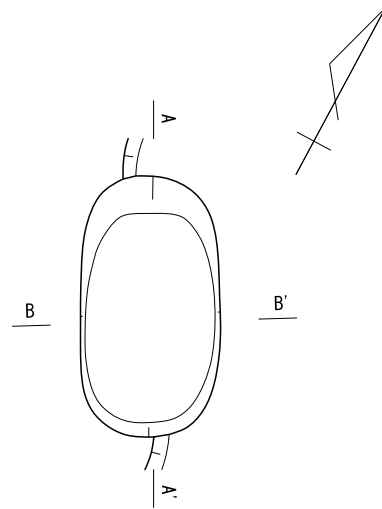
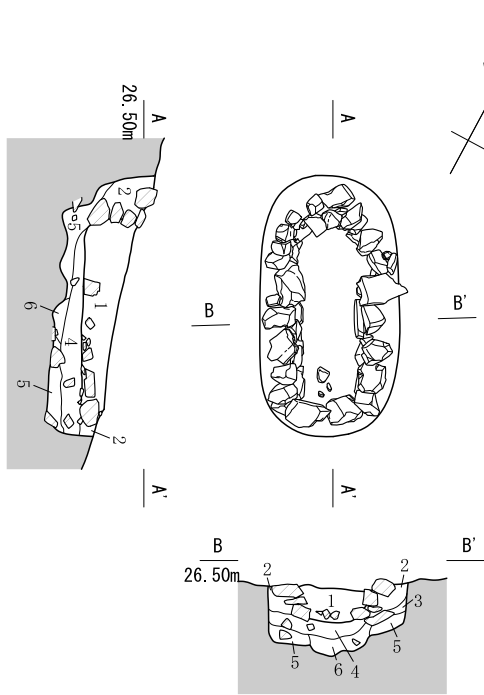
- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径0.5~3cmの角礫を5%含む 径10cm大の角礫を数個含む  
石室埋土
- 2 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径0.5~3cmの角礫を10%含む 径5cmを越える角礫を5%含む  
石室埋土
- 3 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径2~3cmの角礫を10%含む 石室埋土
- 4 10YR2/3 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり  
径1cm程度の小礫2%含む 基盤ブロックを僅かに含む  
掘方埋土
- 5 10YR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径2~3cmの角礫3%含む 掘方埋土
- 6 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径1cm程度の小礫1%含む 掘方埋土
- 7 10YR2/3 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり  
径1cm程度の小礫2%含む 基盤ブロックを僅かに含む  
掘方埋土
- 8 10YR5/6 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし  
径1~2cmの角礫を10%含む III層 (黄褐色土) に類似  
掘方埋土
- 9 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性あり  
均質 掘方埋土
- 10 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまりあり 粘性ややあり  
径2cm以下の角礫を10%含む III層 (黄褐色土)



第72図 洞北山11号古墳平面図・石室掘方・石室埋土土層断面図・完掘状況・石室展開図

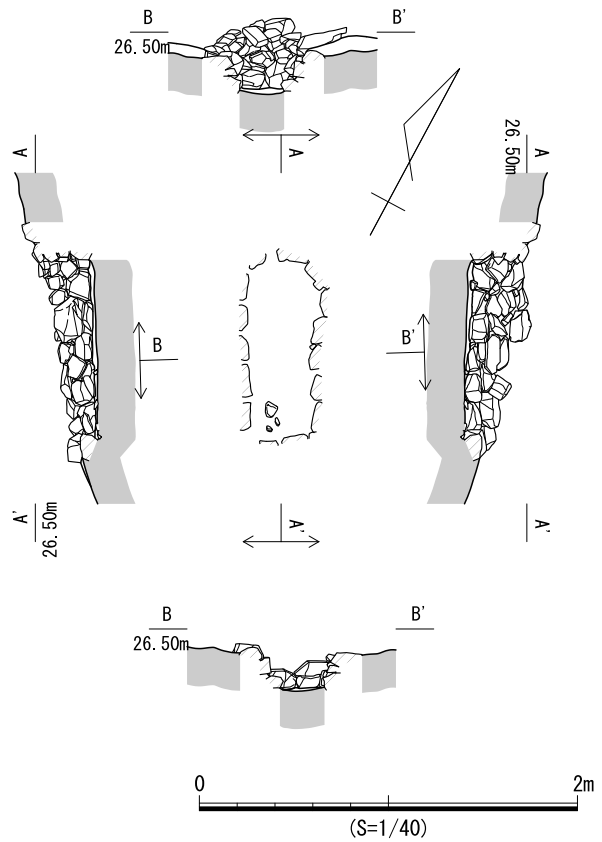
平面図・断面図

完掘状況



- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径5cm以下の角礫を5%含む
- 10YR3/3 暗褐色の粘質シルトブロックを1%含む 石室埋土
- 2 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径0.5~1cmの角礫を2%含む 掘方埋土
- 3 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径0.5~1cmの角礫を2%含む 掘方埋土
- 4 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり  
径0.5~5cmの角礫を5%含む 遺構底面の整地土
- 5 10YR2/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径2cmの角礫を5%含む 10cmを超える角礫を数個含む 整地土
- 6 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり  
径5cmの角礫を15%含む 整地土

石室展開図



第 73 図 洞北山 12 号古墳石室平面図・石室掘方・石室埋土土層断面図・完掘状況・石室展開図

みを帯びる。石室の規模は、内寸で長軸 0.95m、短軸 0.32mである。4面に石積みの壁面がある竪穴状の形態を持ち、最大で4段に積み上げられている。壁面は上方ほど開いており、持ち送りはみられない。蓋石は残存していなかった。石室の長軸は南北軸から若干西（N-28° -W）に傾いており、これは当該地の斜面の傾斜に平行する方向に近い。検出状態で石材の最上段が斜面とほぼ同じ角度で傾斜しているが、石室の底面は北から南へ1.5°程度の傾斜しかないため、必然的に北側ほど石材が多く残る。石材の平らな面を内側に向ける意図はみられるが、全体的に小ぶりで不揃いな印象を与える。特に北壁は、意図的に小ぶりの石を多く使用している。石材の積み上げは長手積みがやや多く、隙間に小口積みの小礫を積む手法を取っており、長手・小口を区別せずに掘方に入る大きさの石材を積み上げたと思われる。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**遺構の時期** 7号古墳周溝の埋土上に構築されており、7号古墳築造より新しいが、出土遺物がないため時期の特定は困難である。ただし、斜面に構築されていることから7号古墳周溝の埋没が早く進んだ状況も考えられ、7号古墳の被葬者と関係のある人物であった可能性がある。また、石室の規模は、服部(1988)の分類によると小石室B類の法量にあたり<sup>17)</sup>、終末期群集墳の様相であることから、7世紀後葉から8世紀初頭頃と考えられる。

注

1) 服部伊久男は、終末期群集墳にみられる石室の構造分類の一つに小石室を挙げている。小石室について「成人の伸展葬に最低限度必要な埋葬空間を有する石室、あるいはそれより小さい法量を持つ石室」と定義して、小石室A・Bに分類している。小石室Aの法量は石室長1.50~2.00m、石室幅0.5m内外で、これよりもさらに規模の小さいものを小石室Bとしている。10号古墳は小石室A、12号古墳は小石室Bの法量に当てはまる。11号古墳は残存する石室長から小石室Bに類似するが、幅は小石室Aの法量よりやや大きい。

服部伊久男 1988「終末期群集墳の諸相」『樞原考古学研究所論集』第9、吉川弘文館 244頁

2) 3号古墳が両袖式石室であることと出土遺物がないことは、『岐阜市史』（史料編 考古・文化財）に拠るが、調査に関する記述はなく、また岐阜県教育委員会の遺跡台帳によれば、「墳丘残存、内部構造露出せず」とある。石室構造及び出土遺物については伝承の可能性がある。

3) 土生田純之は、各地の墳丘内埋没石積施設の実例を挙げ、「墳丘内に埋没する石積施設は、主として石室と同時並行に構築する横穴式古墳の中核となる主要部を形成する第1工程に伴うものである」と述べている。

土生田純之 2003「横穴式古墳構築過程の復元」『古墳構築の復元的研究』、雄山閣 76頁

4) 成瀬正勝(1999)は、美濃地域における横穴式石室の側壁積石技法について、側壁下段部を長手積みし、上段部を小口積みするものをB類とし、積石技法と目地及び石室掘方は密接な関係にあることを指摘している。

5) 横穴式石室の奥壁隅に土師器を据える古墳については、深谷淳(2011)が集成しており、玄室右奥隅（深谷の論文では左隅）に土師器の甕や小型の鉢などを置く例は、近隣では船来山110号墳、同134号墳、同218号墳のほか、岐阜市の七反田番場山7号古墳や、各務原市のふな塚古墳、山の前1号古墳、同2号古墳、関市の塚原9号墳、同10号墳、同12号墳などにみられる。

6) 可児市の次郎兵衛塚5号墳では、奥壁右隅で土師器甕3個体がまとまって出土した例がある。また、船来山古墳群の235号墳では奥壁隅からの出土ではないが、「奥壁前には完形の土師器甕2個体が床に伏せた状態で並べてあり、その間から耳

環1点が出土している」と報告されている。

長瀬治義 1994「第5章 川合古墳群」『川合遺跡群』（「川合北部土地区画整理事業」に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書）、  
可児市教育委員会 359頁

恩田裕之 2007「第3章 発掘調査の成果」『船来山古墳群』、岐阜西開発株式会社・財団法人岐阜市教育文化振興事業団  
60頁

- 7) 土生田は、古墳構築の各工程の段階で儀礼が実施され、「墳丘構築完成後に儀礼を実修できない個所、墳丘の基底部をはじめ墳丘内部や石室の裏込め部等からも儀礼に用いられた遺物—須恵器・土師器などの土器や鎌（実用に向かないものが多い）、鏡など出土するのであり、時には火を焚いた痕跡が発見されることもある」と述べている。石室掘方内から出土した土師器はそうした儀礼に伴う可能性も否定できないが、破片1点しか出土していないことから、可能性は低いと考える。  
土生田純之「日本における古墳構築技術の土木考古学的研究」『専修考古学』第15号、専修大学考古学会 114—115頁
- 8) 土師器甕29については、内面下半部のヘラ削り調整痕が煤によって確認はできなかったが、井川祥子氏に実見していただきA1類の範疇として良いとご教示いただいた。
- 9) 水野敏典（2013）によると、長頸鎌の頸関部は後期2段階（6世紀後半）に、ほぼ齊一的に棘状関を採用し、編年の大きなメルクマールになるとされる。また、高田康成（2001）によると、美濃地域においても6世紀末葉になると、頸関部が台形状から棘状突起へ変化し、この変化は短期間に行われたとされる。
- 10) 墳丘の土層観察から、構築は概ね「西日本の工法」（青木 2003）に類似した工法がとられている。また、傾斜地にもかかわらず、水平を意識したつくりの特徴がある。
- 11) 群馬県渋川市の金井東裏遺跡で発見された「甲を着た古墳人」（6世紀初頭）は腰に鹿角装刀子と提碁を装着しており（杉山 2015）同じセットが古墳から発見されたことは非常に興味深い。
- 12) 福島県中島村教育委員会（2014）によると、福島県中島村の四徳田古墳からは茎部が欠損した3振の鉄刀が出土し、副葬される以前に切断された可能性が指摘されている。また、そのうち1振は、刀身部分に木質が残存した状態で、くの字に折れ曲がって出土している。土圧等の影響も考えられるが、屈曲が1ヶ所であることから、副葬時に曲げられていた可能性が高いとされている。本古墳から出土した鉄剣も、茎部の欠損とくの字に折れ曲がる点が類似する。茎部については、欠損部位が遺構内から見つからなかったことと、掘り返された痕跡がなかったことを考えると埋納前に意図的に切断した可能性も考えられる。
- 13) 高田（2001）によると、短頸片刃式は遊塚古墳（大垣市）や龍門寺1号古墳（岐阜市）で出土しており、5世紀末葉の長頸鎌は野7号古墳、6世紀末葉の長頸鎌は船来山113号古墳（97号古墳の間違い）で出土している。野7号古墳出土の鎌は腸袂がみられず、本古墳出土のものより鎌身部が一回り大きく、頸部もやや太いものもある。船来山97号古墳出土のものは頸部が細く、全長20cmを超えるものもみえる。また、各務原市埋蔵文化財調査センター（1999）によると、各務原市の蘇原東山9号古墳は木棺直葬の円墳であるが、主体部から片刃式長頸鎌が出土しており、本古墳出土のものと形・大きさも類似する。相伴する須恵器から5世紀後葉の築造と考えられている。
- 14) 前掲3)
- 15) 袖石の礫は、長辺が0.8～1.0m弱ある。これは奥壁に次ぐ大きさであり、側壁上部まで1石で袖を形成することも可能である。しかし、埋没している部分が0.3～0.4mほどあり、意図的に深く埋めていることから、袖を低く構築することに何らかの意図があったと考えられる。
- 16) 中井（1992）は、岐阜県内の横穴式石室を集成して構造的な分類を行い、石室の編年試案を提示している。構造変化をたどる要素として、①奥壁の形態と石材の使い方と大きさ、②側壁の形態と石材の使い方と大きさ、③石室縦断面形の形状（立

柱石と楣石・鴨居石の関係)、④平面形の形状(羨道の長大化)を挙げており、首長墳だけでなく群集墳においても石室が細長くなる傾向を指摘している。

17) 服部は、畿内の例をもとに、小石室B類が終末期群集墳を構成する石室の構造的・形態的変遷の中で最末期の形態として把握でき、また木炭の使用など複次葬的な要素が認められる例もあることから、次代の火葬墓へと続く新しい様相を帯びた墓であるという側面についても指摘している。また、時期については、出土遺物が限られるが、7世紀第4四半期から8世紀初頭頃とみている。

#### 第4節 古墳以外の遺構と遺物

今回の調査では、古墳以外にも焼礫集積土坑及び炉跡、竪穴建物、配石遺構、道路状遺構、火葬施設、溝、平場のほか、土坑を確認した。その大半は平成27年度発掘区内のおおよそ標高30m以下の緩斜面から山裾にかけて分布しており、平成28年度発掘区では、目立った遺構は少なかった。また、全般に遺物を伴う遺構が少なく、出土遺物も破片が多いため、時期を特定できる遺構は少ない。ここでは、古墳以外の遺構と遺物についてまとめる。

##### 1 焼礫集積土坑・炉跡

平成27年度の調査において、2・3号古墳東側のDC13~14グリッド及びDD13グリッドで被熱した遺構を4基確認した。土坑の底面から壁面が被熱したものと、検出面で被熱した痕跡が残るものがある。土坑については、中世の火葬施設の可能性を考え、SL1から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、縄文時代早期中葉との結果を得た(第4章第2節)。

##### SL1~4 (第74・75図)

**検出状況** 2・3号古墳が所在する舌状尾根の東側の緩やかな斜面の中腹に位置しており、西から東に向かってやや傾斜する。Ⅲ層上面で検出した。SL1は当初検出したプランが実際よりも大きく、南東部で掘方の一部を削平してしまった。SL3及びSL4は西側が発掘区外に広がる。なお、SL1~SL3については調査時に土坑と考え、半截又は四分割して調査したため、礫の出土状況図は作成できなかった。

**遺構の内容** SL1は、北西側半分の掘方が比較的明瞭で、平面形は隅丸方形で北の隅部がやや出っ張っており、断面形は皿状である。北東-南西方向に長軸を持ち、長軸1.04m、短軸1.02m、深さは0.40mである。埋土は2層からなり、上層は黒色でしまりがなく、幅約5~10cmの礫が多く混入し、少量ながら幅20cmを超える礫がみられた。礫は被熱したものとそうでないものが混在しており、被熱した面の向きも一定ではない。また、炭化物を少量含むことから、焼礫集積土坑と判断した。2層は底面にみられた縦横約0.3~0.4mの硬化した範囲に堆積していたもので、黒褐色をなす。1層に比べ礫の混入は少ないものの、炭化物を少量含んでいる。被熱痕跡は底面と壁面の一部で確認した。南東隅部にある約0.4mのチャート礫は、遺構の外周の一部を構成する。遺構内側に面した一部に被熱痕跡が認められる。上端想定ラインは確認した被熱痕跡と残存する掘方の上端を結んだものである。なお、出土した炭化物について放射性炭素年代測定(AMS法)を行った(第4章参照)。

SL2は、平面形はややいびつな楕円形で、断面形は皿状である。南北方向に長軸を持ち、遺構西側がSK13と重複し、これよりも新しい。長軸1.0m、短軸0.76m、深さは0.26mである。埋土はSL1

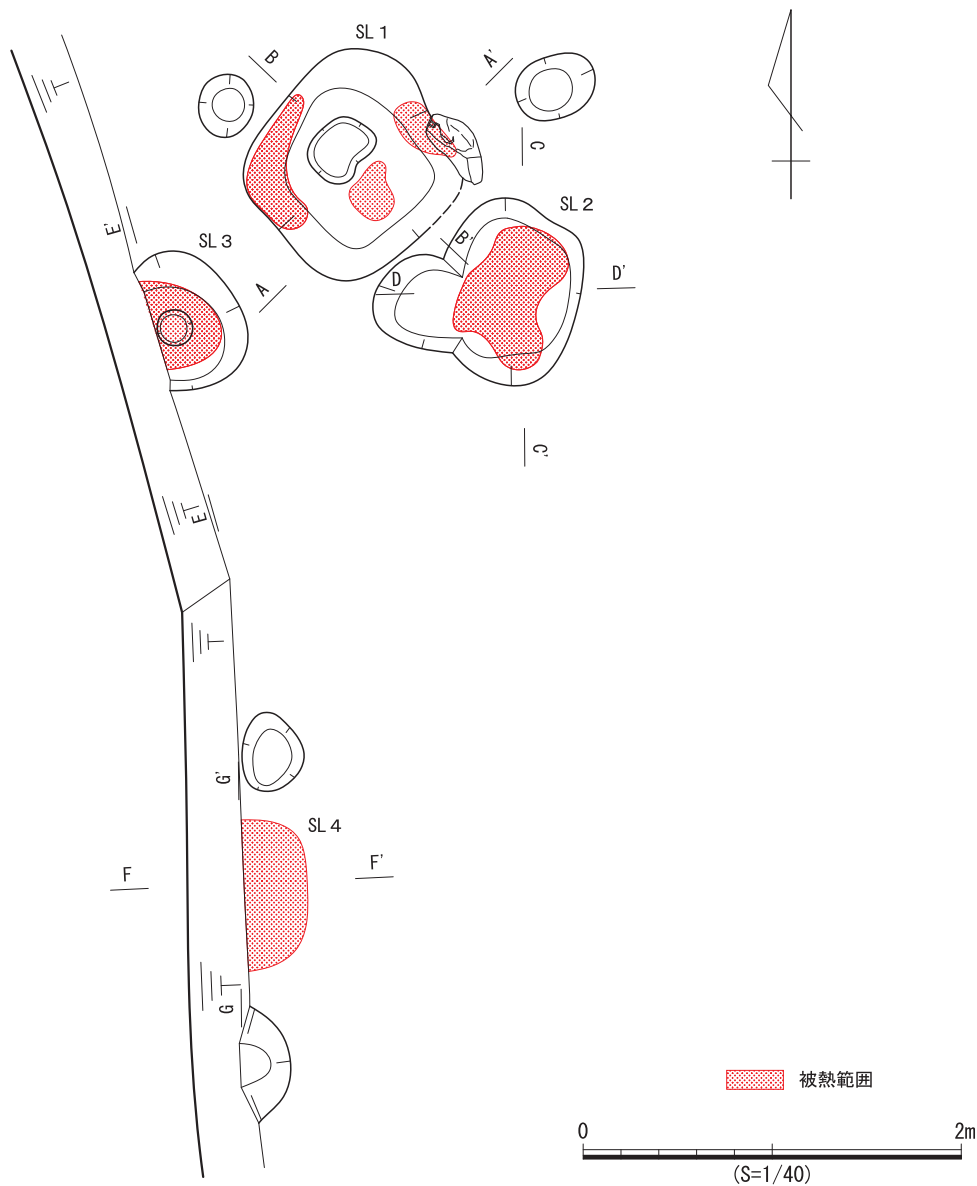
と同様に礫が多く混入し、少量の被熱した礫と微細な炭化物を含むことから、いわゆる焼礫集積土坑である。被熱痕跡は底面全体と壁の一部にみられた。

SL 3は、確認できた平面形はややいびつな隅丸方形に近く、断面形は皿状である。E-E' 断面で幅0.7m、深さは0.18mである。埋土はSL 1・2に比べるとやや小さい礫が多く混入し、少量の被熱した礫を含むため焼礫集積土坑と判断した。炭化物は確認できなかったが、被熱痕跡は底面にみられた。

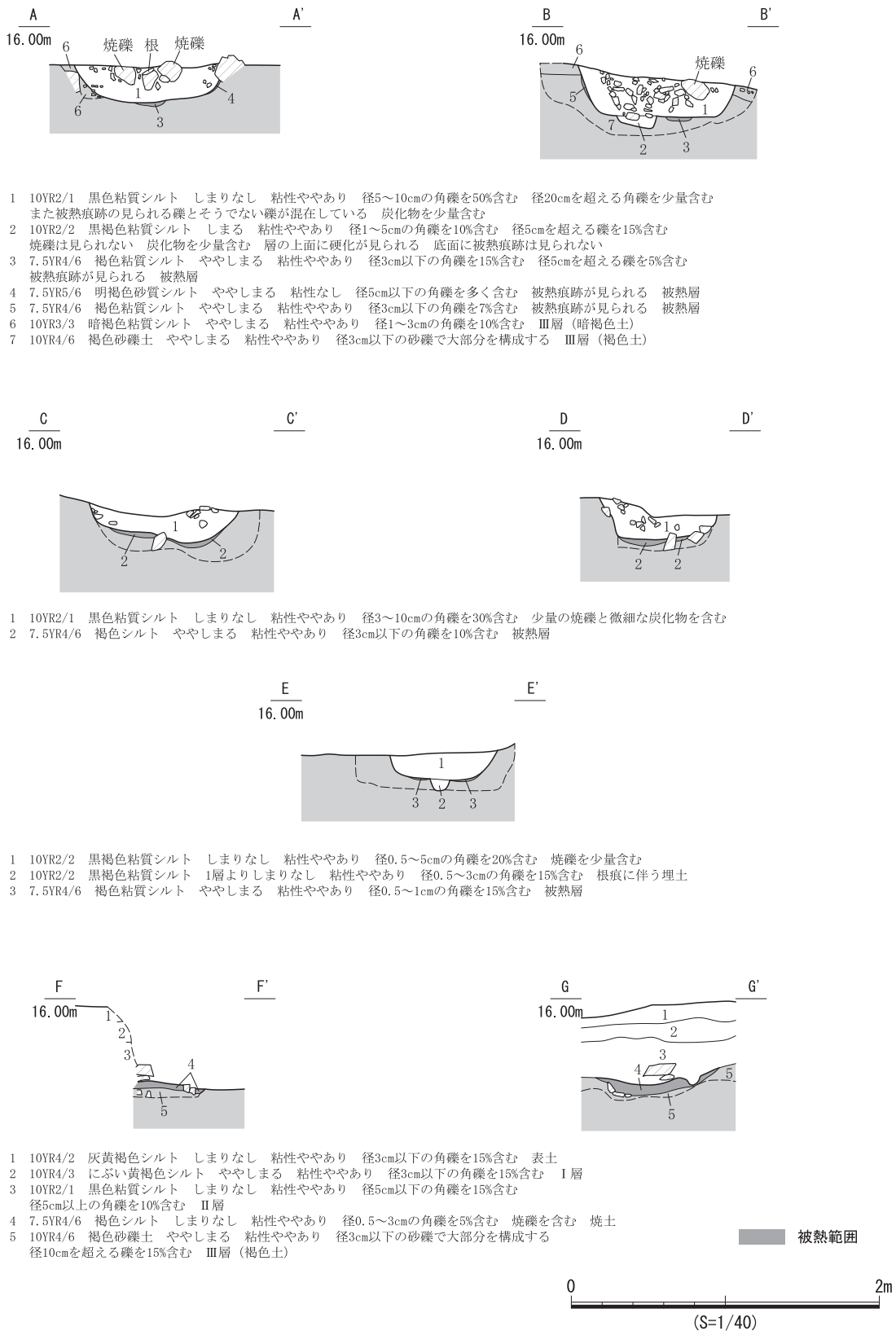
SL 4は、掘方はみられず、基盤層に被熱痕跡を確認した。確認した被熱範囲は隅丸方形に近く、F-F' 断面で0.33m、G-G' 断面で0.8mである。炭化物は確認できなかった。地床炉と思われる。

**出土遺物** いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。

**遺構の時期** SL 1～SL 3については、焼礫集積土坑であるが、埋土の状況や被熱痕跡に類似性がみられることから、同時期の遺構の可能性が考えられる。SL 1から出土した炭化物は放射性炭素年代測定



第74図 SL 1・SL 2・SL 3・SL 4遺構図(1)



第75図 SL1・SL2・SL3・SL4遺構図(2)

で、縄文時代早期中葉という結果を得た。遺構に伴う出土遺物はほかにはないが、2・3号古墳東側の表土掘削時にチャートのRF1点（第110図192）、3号古墳西側のTP2からは試掘・確認調査の際にチャートの石鏃1点（第108図148）が出土した。これらのことも踏まえて、SL1～3は縄文時代早期中葉の遺構と考えられる。また、SL4は地床炉で、時期不明であるが、被熱した痕跡をもつ遺構が狭い範囲で確認できたことから、SL1～SL3と関連性が高いものと思われる。

## 2 竪穴建物

平成27年度調査で、竪穴建物を1軒確認した。

### SI1（第76～78図）

**検出状況** AN13～A015グリッドに位置する。旧表土（Ⅲ層（黒色））と遺構埋土の土色が類似していたため、漸移層（Ⅳ層（黒褐色））まで掘り下げて検出を試みた。周囲と異なる土色・土質ではあったが、明瞭なプランは確定できず、土層観察のためにAM14のグリッド杭からA014のグリッド杭にかけて幅約0.4mのトレンチを掘ったところ、土層断面に直角三角形の掘り込みを確認し、そのトレンチ底面から高坏の脚部103が出土した。再度遺構検出を行い、平面形状が隅丸方形の遺構を確認した。遺構の南側は流出したか、あるいは平場SM3の造成に伴い削平されて残存しておらず、残存する南端は整地土（13層）であることが埋土掘削後に判明した。短軸方位はN-4°-Eである。地形的な制約があることから、入口は南側に設置されたと考えられる。なお、斜面上方に周堤、外周溝は認められなかった。

**埋土** 北壁際の埋土は、土層断面が三角形の堆積を示す。大小さまざまなチャート礫が多く混じり、特に4層で顕著である。堆積状況から、埋土は旧表土及び基盤層に由来する斜面上方からの流土によるものと考えられる。

**壁** 壁は南側に開口するように斜面を方形に掘り込んだと推測され、三方が残存する。壁面はほぼ直立する。北西隅で最も残りが良く、高さ0.77mである。南側は後世の流出若しくは削平によって消失しており確認できない<sup>1)</sup>。短軸に沿ったC-C'断面をみると、北壁の斜面上方に傾斜転換点がみられる。平面形をみると、北壁の西側に比べ中央から東にかけてやや内側へ凹んだようになっており、この傾斜転換点が本来の上端であると考えられる。

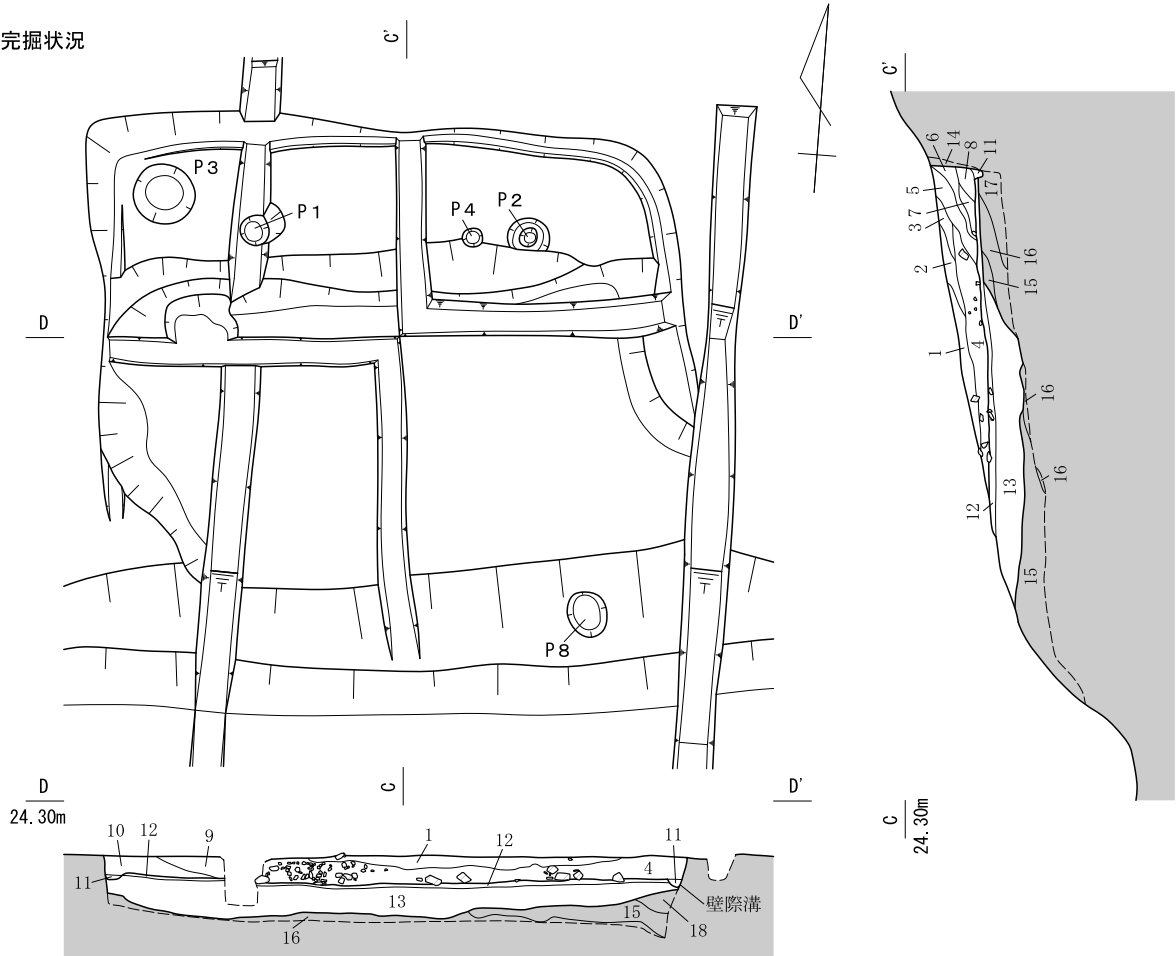
**床面** 斜面下方に向かい、わずかに傾斜するがほぼ平坦である。床面の南側は、流出若しくは後世の削平によって消失している。当初、12層も埋土と考えて掘削したが、C-C'断面及びD-D'断面で、壁際溝が12層上面から掘り込まれていることから、貼床であることが判明した。床面で検出した遺構は、柱穴2基（P1、P2）、壁際溝1条、貯蔵穴と思われる土坑1基（P3）の他、性格不明土坑5基（P4～P8）である。竪穴内の位置関係と埋土の状況からP1とP2を支柱穴と判断した。比較的明瞭な柱痕跡が確認できたが、これに対応する南側の柱穴は確認できなかった。南側の柱穴は整地土上に位置するため基盤層に掘り込まれていなかった可能性もある。壁際溝は三辺を廻り、残りの良い場所でも幅約0.1m、深さ約0.05mと浅い。北西隅では、黒褐色の基盤層と埋土の判別が難しく掘りすぎてしまったが、本来は連続していたと考えられる。地床炉は土層観察でも床面でも確認できなかった。

**貯蔵穴** 建物の北西隅で検出した土坑（P3）を、竪穴内の位置関係、規模、形状から貯蔵穴と判断した。平面形は長径0.64m、短径0.62mのほぼ円形である。深さは0.13m、断面形は半円形であり、2層の堆積は北西方向から南東方向に向かってやや傾斜しているがほぼ水平である。人為的に埋めた

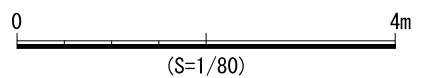




完掘状況



- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性あり 全体に粒子が細かい径0.5~2cmの角礫を2%含む 径10cmを超える角礫を1%含む
- 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを5%含む
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径2~3cmの角礫を15%含む 10YR4/6 褐色のシルトブロックを3%含む
- 3 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を5%含む 10YR3/4 暗褐色のシルトブロックを1%含む
- 4 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を20%含む 場所によって径10~30cm大の角礫をまとまって含む
- 10YR3/3 暗褐色のシルトブロックを3%含む
- 5 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を5%含む 10YR4/3 にぶい黄褐色のシルトブロックを1%含む
- 6 10YR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2~5cmの角礫を5%含む
- 7 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2~5cmの角礫を5%含む
- 8 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を3%含む 10YR5/6 黄褐色の砂質ブロックを若干含む
- 9 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~5cmの角礫を10%含む 4層と同一か
- 10 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を5%含む
- 11 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を3%含む
- 10YR3/4 暗褐色粘質シルトブロックを1%含む 周壁溝の埋土
- 12 10YR2/3 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を5%含む 10YR5/6 黄褐色の砂質ブロックを5%含む 貼床
- 13 10YR4/6 褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を30%含む 場所によって10YR3/2 黒褐色シルトがブロック状をなし、
- 10YR2/1 黒色粘質シルト土が互層をなしている 整地土
- 14 10YR5/8 黄褐色砂礫土 ややしまる 粘性なし 径2~5cmの角礫を5%含む III層 (黄褐色土)
- 15 10YR5/8 黄褐色砂礫土 ややしまる 粘性なし 径2~5cmの角礫を5%含む 14層と同質 III層 (黄褐色土)
- 16 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性あり 径0.5~1cmの角礫を2%含む 10YR3/3 暗褐色粘質ブロックを少量含む III層 (黒褐色土)
- 17 10YR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を3%含む III層 (暗褐色土)
- 18 10YR3/4 暗褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を20%含む III層 (暗褐色土)



第77図 SI1遺構図(2)

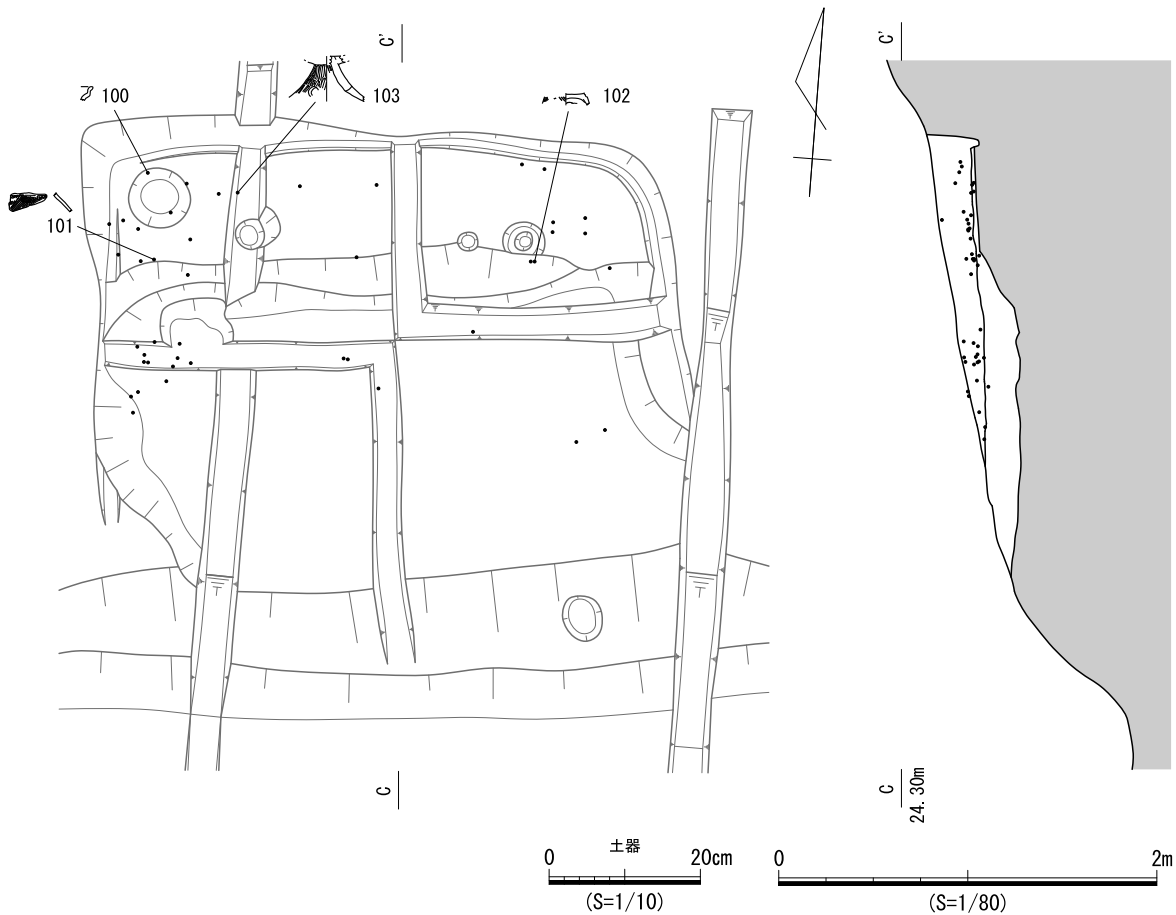
状況は確認できなかった。

**床下** 貼床（12層）の下面では、北側壁面から南へ約1.2mの地点を境として、南に約3.5mの範囲で基盤層とは土色、土質の異なる礫交じりの褐色シルトや黒褐色シルト、黒色粘質シルトの混合土（13層）を確認した。この範囲の南端は床面での遺構検出時に既に露出していた。この範囲の断ち割りを行ったところ、基盤層の黄褐色砂礫土とその下層の黒褐色粘質シルトを約0.3m掘り込んだ一段低い面を検出したため、混合土は整地土であることがわかった。整地土下の掘り込みは北側でやや急な傾斜をなす浅い挿鉢状であり、竪穴建物のプランとは形状が一致しないため、竪穴建物と一連の遺構とは断定できない。しかし、竪穴建物は、挿鉢状の掘方の北及び東西に掘方を広げ、その排土で整地を行ったものと推測される。

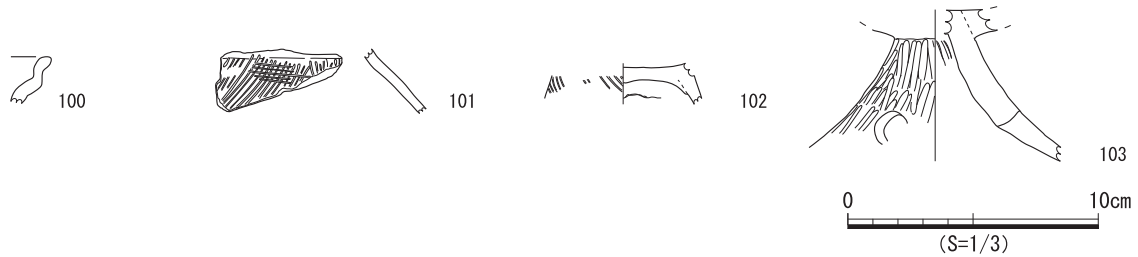
**遺物出土状況（第78図）** 土師器の破片が、建物内のやや北西寄りに集中している。大半は貼床直上から出土しているが、細片ばかりで実測可能なものは少ない。また、貯蔵穴（P3）からは5点出土したが、いずれも細片である。

**出土遺物（第79図）** 100はS字状口縁台付甕B類の口縁部である。内外面とも調整は不明であるが、外面には煤が付着する。101はS字状口縁台付甕の胴部である。外面はタテハケ後にヨコハケ目調整を施し、内面はユビオサエをする。102はS字状口縁台付甕の脚台部である。甕の底にあたる内面は

SI 1 遺物出土位置



第78図 SI 1 遺構図（3）



第79図 SI 1 出土遺物

ナデ調整を施す。脚台部外面にハケを施し、内面はユビナデ調整をする。103 は高坏の脚部である。脚部は緩やかに広がり、外面にタテミガキを施し、内面は成形時の絞り込み痕跡を消すようにナデ調整を行い丁寧に仕上げている。1段3方向の透孔があったと推測される。

**遺構の時期** 埋土出土土器から古墳時代前期の可能性が高いと判断した。

### 3 配石遺構

#### SS1 (第80図)

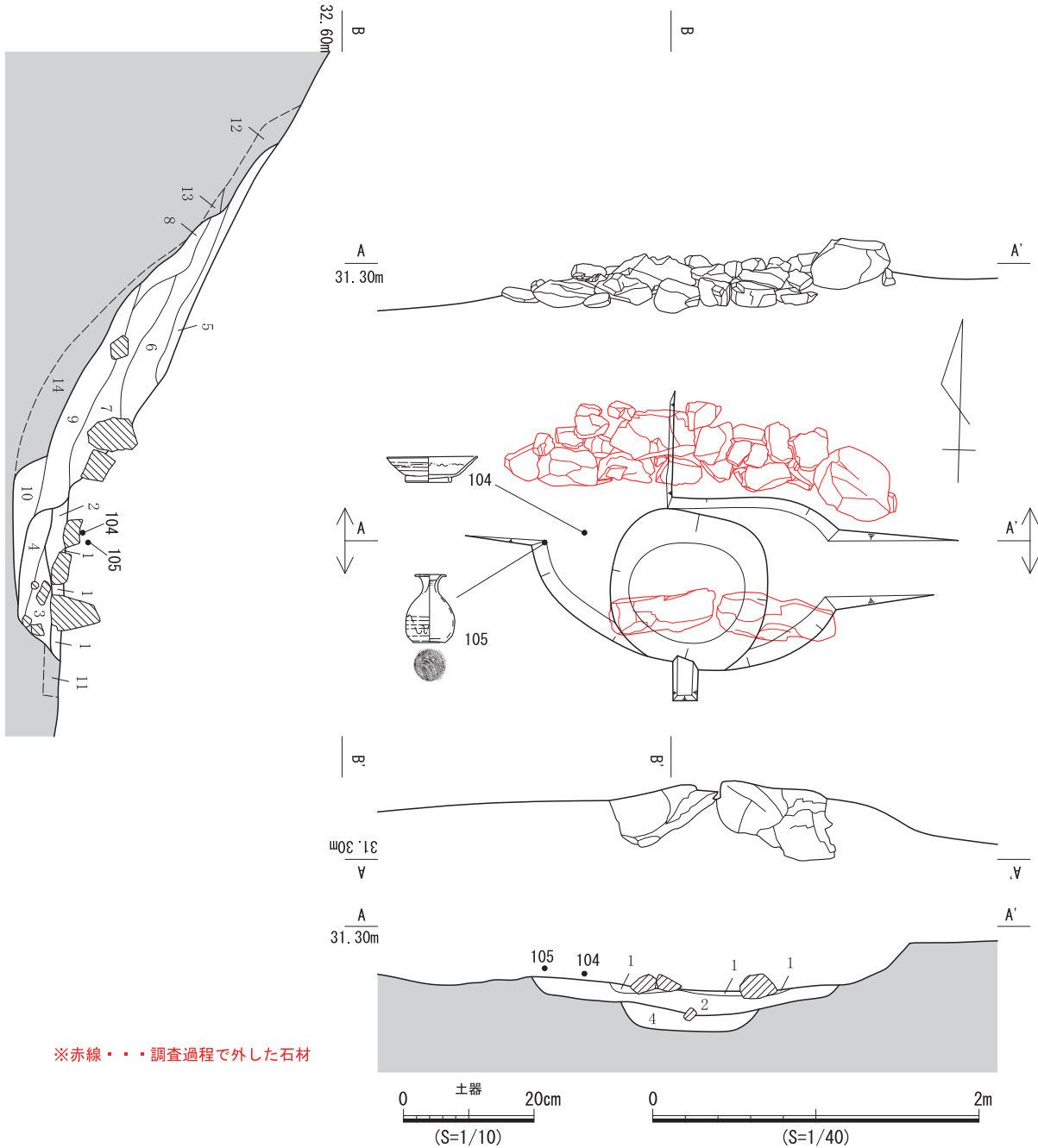
**検出状況** 本遺構は、平成28年度調査でAJ6からAK7グリッドにかけて、9号古墳北側の周溝埋土掘削作業中に、長さ約0.7mの2つの礫（以下、「石列（南）」という）が長手面を下に向け、小口面を向かい合わせるように東西方向に並ぶのを確認した。さらに、その約0.7m北側でも、拳大から長さ0.5mを超す礫が緩やかなカーブを描き帯状（以下、「石列（北）」という）に並ぶのを検出した。石列（北）の東西長は、石列（南）より長い、ほぼ平行に延びており、東西方向に主軸をもつ小石室の可能性を想定した。この時点で石列の間に堆積していた砂礫土はほぼ除去しており、両端ともに開口していた。その後、土層観察によって小石室ではないと判断した。石列（南）は、9号古墳の墳丘と埋没した周溝を削平した平場に設置されており、石列（北）は石列（南）より一段高く、削平された9号古墳周溝埋土中に設置されている。なお、石材はいずれもチャートである。

**平場** 石列（南）が設置された段階では、9号古墳北側の周溝はある程度埋没していた。B-B'断面の土層観察から、7層堆積後に周溝埋土及び墳丘を削平し平場を造成したと考えられる。現場の状況と平面図から、その範囲は石室北側の東西約4m、南北約2mと推測する。

**石列（南）** 東西長1.4m、南北幅0.33m、高さ0.5mで、平面形は東西端をやや南に向け、わずかにくの字状に折れ曲がる。東に全長0.73m、最大幅0.28m、西に全長0.68m、最大幅0.22mの礫を配置する。礫の上面は、他方の礫に向かって互いに傾斜しており、石列の中央が窪んだ形状である。後述する土坑の3・4層上面に配置されており、周囲から流れ込んだと考えられる1層によって、礫の下部が埋まっていた。

**石列（北）** 東西長2.42m、南北幅0.75m、高さ0.44mで、平面形は南側に弦をもつ緩やかな弧を描く。大小20数個の礫で構成され、長さ0.5mを超える大きなものは東端と中央付近に位置している。明確な掘方は確認できず、平場造成によって削平した周溝埋土の斜面（B-B'断面の7層）に貼り付けるように配置される。礫同士が積み重なる様子はあまりみられない。

**土坑** 石列（南）の周囲を囲むように楕円形の浅い掘方を検出した。完掘したところ、底面から隅丸方形の掘方を検出した。楕円形の掘方は東西方向に長軸をもち、長軸1.85m、短軸0.94mである。当初、小石室と考えて石列に挟まれた平場を四分分割して掘削したため、掘方の北西側を記録することは



- 1 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む 径1cm以下の炭化物を少量含む
- 2 7.5YR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む 径30cmを超える角礫を含む
- 3 7.5YR3/4 暗褐色シルトブロックを3%含む 径1cm以下の炭化物を2%含む 焼礫含まず
- 4 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径3~15cm程の角礫を3%含む 径1cm以下の炭化物を3%含む 焼礫含まず
- 5 10YR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を5%含む
- 6 7.5YR1.7/1 黒色土ブロックを3%含む 径1~5cm程の炭化物を15%含む 焼礫含まず
- 7 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を15%含む 径10cmを超える角礫を少量含む
- 8 7.5YR2/3 極暗褐色土ブロックを3%含む 9号古墳周溝埋土
- 9 7.5YR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20%含む 径10cmを超える角礫を少量含む
- 10 10YR2/2 黒褐色土ブロックを3%含む 9号古墳周溝埋土
- 11 10YR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を15%含む 10YR2/2 黒褐色土ブロックを少量含む 9号古墳周溝埋土
- 12 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を20%含む 10YR2/2 黒褐色シルトブロックを25%含む 9号古墳周溝埋土
- 13 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径5~10cm程の角礫を15%含む 9号古墳周溝埋土
- 14 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を25%含む 7.5YR3/4 暗褐色土ブロックを3%含む 9号古墳周溝埋土
- 15 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 径1cm以下の炭化物を少量含む 9号古墳填丘盛土
- 16 7.5YR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を15%含む 径10cmを超える角礫を少量含む III層(黒色土①)
- 17 7.5YR4/4 褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を25%含む III層(褐色土)
- 18 7.5YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 径3cm以下の角礫を少量含む III層(黒色土②)

第80図 SS1遺構図

できなかつた。隅丸方形の掘方は、1辺が約1m弱で南北の辺が楕円形の掘方と一致することや、楕円形の掘方のほぼ中央に位置することから、重複した別遺構ではなく2段掘りされた一連の遺構と考えられる。9号古墳墳丘及び周溝埋土と基盤層を掘り込んでいる。埋土は4層を確認したが、上部の2層は周囲から流入した土砂と考えられる。下部の2層は、1～5cmほどの炭化物を多く含むものの、焼礫や骨片は含んでいない。堆積状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。なお、底面や壁面に被熱痕跡は認められなかつた。

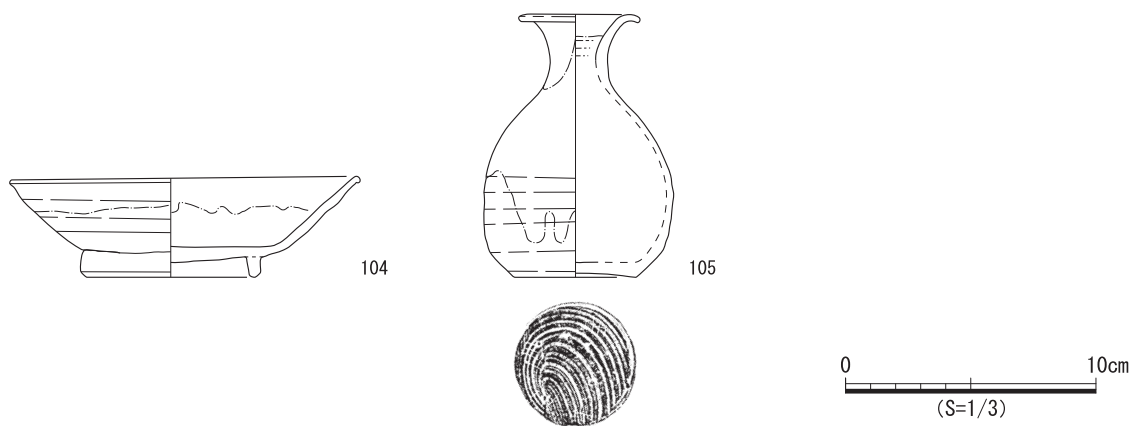
9号古墳の調査時に、墳丘及び石室の北部では、微細な炭化物を含む流土層を確認していた。墳丘上に被熱痕跡はみられなかつたため、土坑内の炭化物が流出した可能性が考えられる。

**遺物出土状況** 石列に挟まれた平場の西寄りから、灰釉陶器の碗と小瓶が出土した。碗は石列の検出時に、流土に伴う礫の下敷きとなり破砕した状態で出土しており、遺物包含層の遺物として取上げたが、土坑埋土のほぼ直上で出土しており、遺構に伴う可能性が高い。また、小瓶は碗より約0.25m西側からほぼ完形の状態出土した。

**出土遺物(第81図)** 104は碗である。高台は直立気味で、外面下半は面取りして内傾させ端部は丸みを帯びる。器高は低く、体部下半及び外底面には回転ヘラ削り痕が残る。施釉は体部中ほどまで漬け掛けしている。105は小瓶である。口頸部は短く、強く外反し、口縁端部を丸く収める。底部に回転糸切り痕が残る。施釉は体部中ほどまで漬け掛けしている。口頸部には古い特徴がみられるが、漬け掛けしていることから10世紀初頭頃と考えられる。

**遺構の時期** 出土遺物から10世紀初頭と考えられる。

**遺構の性格** 遺構の状況から、9号古墳の周溝が埋没した段階で平場の造成が行われ、続いて土坑を掘削している。土坑の上に配置した石材(南)は、蓋あるいは標石の役割が推測される一方で、土坑の斜面上方に配置された石材(北)は、土坑の東西長とほぼ同じ長さで、斜面を覆うように並べられていることから、土砂の流出を防ぐ役割があつたのかもしれない。9号古墳石室の右側壁は、奥壁付近から玄門にかけて大きく失われていたが、石列が石室の北東側1mしか離れていない場所に設置されていること、石室の石材と同じチャートで大きさも類似すること、石室の失われた石材の数を左側壁から算出すると30個弱と推定され、石列に使用されている石材の数に近いことから、石室の石材を



第81図 SS1出土遺物

抜き取って転用した可能性が考えられる。また、土坑内の埋土に大量の炭化物が含まれていたことや、灰釉陶器の碗や小瓶が出土していることから、古墳を「塚」と認識し、何らかの祭祀を行った痕跡の可能性が考えられる<sup>2)</sup>。

#### 4 道路状遺構

平成27年度の調査において、4号古墳の東側に位置する旧谷地形を挟んで、その両側に検出面が固くしまった溝状の遺構を11条確認した。当初は、それぞれ別々の遺構と考えていたが、旧谷地形を挟んで一定の範囲にまとまってみられ、ほぼ一直線上に延びることから、一連の遺構の可能性が高い。いわゆる波板状痕跡や側溝のようなものはみられなかったが、非常に硬化した堆積であるため、道路状遺構と判断した。

##### SF1 (第82～84図)

**検出状況** 旧谷地形の東側では、3号古墳の北西側にあたるBQ5～BR9グリッドで3条の溝を確認し、旧谷地形の西側では、4号古墳の南側にあたるAR17～BR1、BQ1～BQ2、BP2グリッドで8条の溝を確認した。なお、BQ3からBR5グリッドにかけて途切れているのは、旧谷地形の谷底にあたり、流水等によって浸食されたためと推測する。旧谷地形の東側では緩やかな斜面に位置し、SM1に伴う造成面Aの造成土によって覆われていた。これらの溝の長軸は、等高線に対してほぼ平行し、東側は発掘区外に延びる。一方、旧谷地形の西側では、等高線とほぼ平行に延び、AR18～AR20グリッドにかけては、SM2に伴う造成土に覆われていた。なお、AR20グリッドについては、SM2に伴う造成土の堆積状況を確認するため、AR20グリッドの杭からAT20グリッドの杭にかけて土層確認用の畦を残し、東側を先行して掘削した際に、誤って硬化面を有する溝の掘方及び埋土を一部削ってしまった箇所がある。西側はSD8によって削平されている。SD8以西については、遺物包含層掘削時に削平してしまったが、平成26年度に行った試掘・確認調査で、TP5から幅0.5mほどの硬化面を確認していることや、平成27年度の発掘区南西壁面から、類似する硬化した堆積層(第84図I-I'断面及びJ-J'断面の8～11層)を2か所確認できることから、本来はSD8以西にも続き、発掘区外に延びていた可能性が高い。

**遺構の状況** 旧谷地形の東側で確認した規模は東西約14m、南北約6.8mである。3条の溝は、中央の1条を除き概ね直線的に東西方向に延びる。溝は最大のもので、検出長14.15m、幅1.38m、深さ0.45mであるが、西端に向かって次第に浅くなり、他の溝も同様である。断面形はいずれも概ね皿状で、溝ごとにほぼ一定の幅である。埋土は主にⅢ層に由来する黒色又は黒褐色の粘質シルトの単層若しくは2層で構成され、検出面に著しい硬化が認められる。小礫が層上部に集中してみられ、西側に行くほど検出面に小礫が目立っている。

旧谷地形の西側で確認した規模は、東西約27m、南北約6mである。8条の溝は、一部に例外があるものの、概ね直線的に東西方向に延びる。溝は等高線に沿っており、北側ほど標高が高く、南に向かって次第に低くなる。溝は最長で27.92m、最大幅1.89m、深さは最大0.66mである。最も北に位置する溝は、BQ1グリッドで強く屈曲し、北北東方向に延び東端に向かって次第に浅くなる。その南に位置する3条は屈曲せず、これらも東端に向かって次第に浅くなる。その南側には、後世の倒木痕によって攪乱され、向きも不揃いな溝がみられる。この溝も検出面は硬化しており、その西側にある規模の大きな溝の延長線上に位置することから、道路状遺構の一部と考えられ、道路状遺構のほぼ南限にあたる。溝の断面形は概ね皿状であるが、西寄りの最も南に位置する溝は北側の掘方壁面が高く、

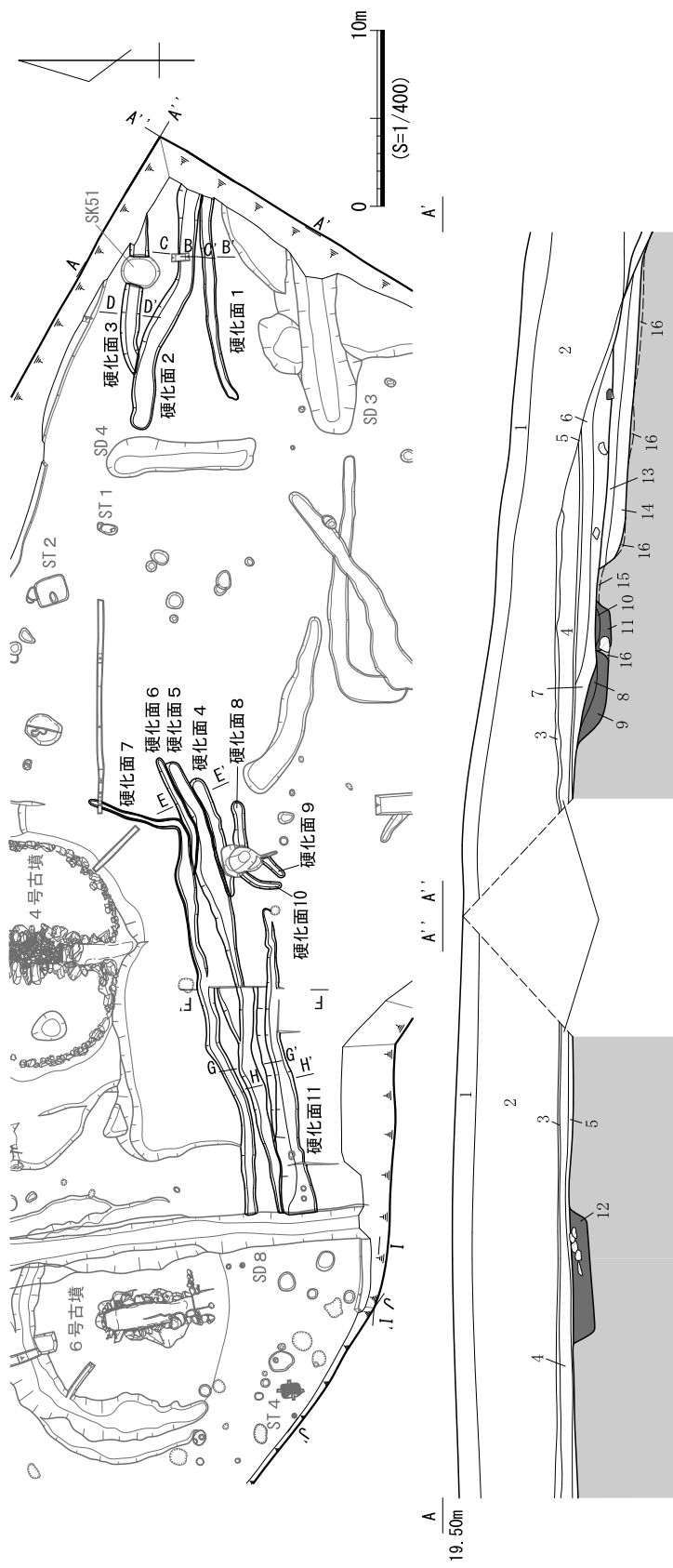
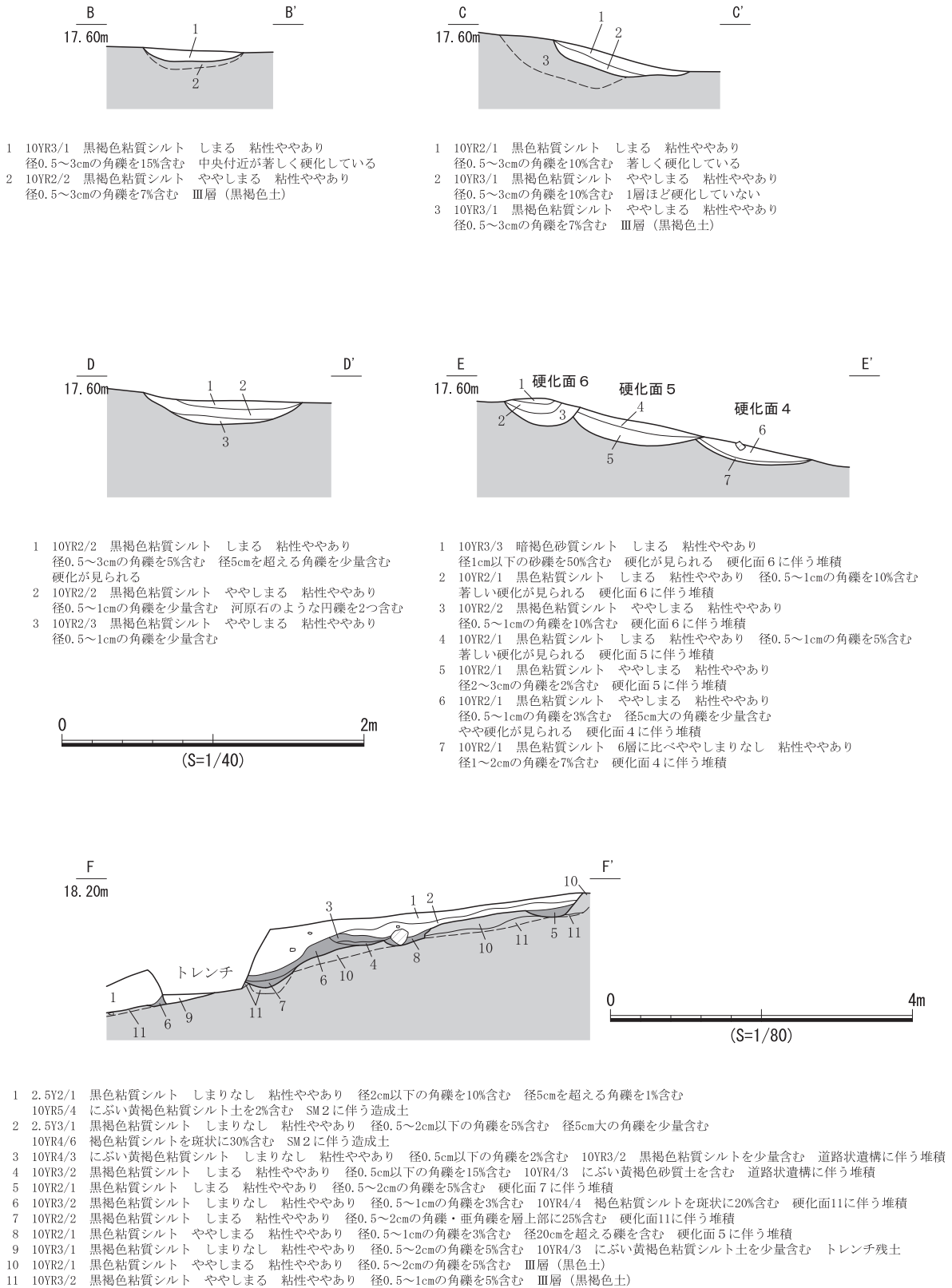


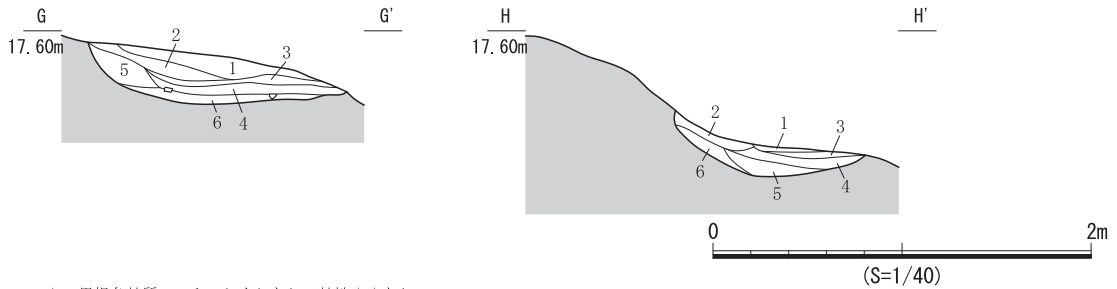
図 82 SF1 遺構図 (1)

- 1 10YR3/4 暗褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20~45%含む
- 2 場所により 10YR4/4 褐色シルトブロックを含む 表土 Ia層
- 3 10YR5/8 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する
- 4 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト層 (やや)しまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を10%含む) と互層をなす
- 5 またB05グリッド以东では色調が10YR4/6褐色を呈しラミナが見られる Ib層
- 6 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む 10YR3/4 暗褐色粘質シルトブロックを斑状に5%含む
- 7 B09グリッド以南では10YR4/2 灰黄褐色シルトを10%含む SM1に伴う造成土
- 8 B09グリッド以南では黄褐色の色調が強くなる。また10YR3/2 黒褐色粘質シルト土を10%含む SM1に伴う造成土
- 9 10YR2/3 黒褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む SM1に伴う造成土
- 10 B09グリッド以南では10YR3/3 暗褐色シルトブロックを5%含む SM1に伴う造成土
- 11 10YR3/3 暗褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20%含む
- 12 10YR2/1 暗褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を15%含む 径10cmを超える角礫を20%含む 10YR4/4 褐色シルト土を5%含む SM1に伴う造成土
- 13 10YR2/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 硬化が見られる 硬化面2に伴う堆積
- 14 8層と同質 硬化面1に伴う堆積
- 15 9層と同質 硬化面1に伴う堆積
- 16 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径10cmを超える角礫を5%含む 硬化面3に伴う堆積
- 17 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を7%含む 径5cmを超える角礫を3%含む
- 18 10YR3/3 暗褐色シルト土を3%含む 3号古墳周溝埋土
- 19 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を5%含む 径10cmを超える角礫を3%含む
- 20 10YR4/4 褐色シルト土を少量含む 3号古墳周溝埋土
- 21 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 径10cmを超える角礫を5%含む 旧表土 III層 (黒色土)
- 22 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を5%含む III層 (黒褐色土) vvvvv

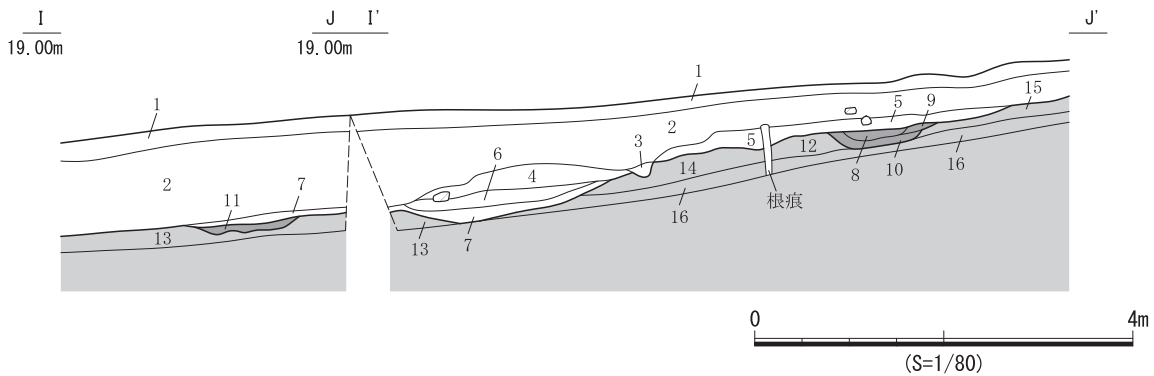




第83図 SF1遺構図(2)



- |  |   |
|--|---|
| <p>1 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり<br/>径0.5~2cm以下の角礫を5%含む 径5cm大の角礫を少量含む<br/>10YR4/6 褐色粘質シルトを斑状に30%含む SM2に伴う造成土</p> <p>2 10YR2/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり<br/>上面に小礫が集中して硬化する</p> <p>3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりなし<br/>粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を2%含む<br/>10YR3/2 黒褐色粘質シルトを少量含む 整地土</p> <p>4 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり<br/>径0.5cm以下の角礫を15%含む<br/>10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土を含む</p> <p>5 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径1~2mmの小礫1%含む 斜面上方からの流土か</p> <p>6 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径0.5~1cmの角礫を3%含む 径20cmを超える礫を含む</p> | <p>1 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径0.5~3cmの角礫を15%含む 径5cmを超える角礫を少量含む<br/>10YR4/6 にぶい黄褐色粘質シルトブロックを斑状に含む</p> <p>2 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1~5cmの角礫を7%含む</p> <p>3 10YR3/4 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性なし 径5cm以下の砂礫を40%含む</p> <p>4 10YR2/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり<br/>径0.5~1cmの角礫を15%含む 特に層上部に集中する<br/>5cm大の角礫を少量含む 著しい硬化が見られる</p> <p>5 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径0.5~1cmの角礫を少量含む</p> <p>6 10YR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径0.5~1cmの角礫を少量含む 10YR4/4 褐色シルトブロックを少量含む</p> |
|--|---|



- |   |  |
|---|--|
| <p>1 10YR3/4 暗褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20~45%含む 場所により 10YR4/4 褐色シルトブロックを含む I a層</p> <p>2 10YR5/8 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する</p> <p>7.5YR5/8 明褐色粘質シルト層 (ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を10%含む) と互層をなす<br/>またB05グリッド以東では色調が10YR4/6褐色を呈しラミナが見られる I b層</p> <p>3 10YR2/3 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を3%含む 10YR3/1 黒褐色粘質シルトブロックを少量含む</p> <p>4 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を層状に10%含む 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを少量含む</p> <p>5 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を10%含む 径10cmを超える角礫を3%含む</p> <p>10YR3/4 暗褐色粘質シルトブロックを5%含む 10YR4/6 褐色粘質シルトブロックを5%含む</p> <p>6 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を5%含む 10YR3/4 暗褐色粘質シルトブロックを層状に10%含む</p> <p>7 10YR2/3 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を1~2%含む 10YR4/4 褐色粘質シルトブロックを10%含む</p> <p>8 10YR2/2 黒褐色シルト しまる 粘性ややあり 径1cm以下の砂礫を層状に50%含む 硬化が見られる 道路状遺構に伴う堆積</p> <p>9 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む 道路状遺構に伴う堆積</p> <p>10 10YR1.7/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を3%含む 著しい硬化が見られる 道路状遺構に伴う堆積</p> <p>11 10YR1.7/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を3%含む 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを少量含む<br/>著しい硬化が見られる 道路状遺構に伴う堆積</p> | <p>12 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を5%含む 径5cmを超える角礫を少量含む</p> <p>10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを3%含む 旧表土 III層 (黒色土)</p> <p>13 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を3%含む 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを少量含む 旧表土 III層 (黒色土)</p> <p>14 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を10%含む 径10cmを超える角礫を少量含む 旧表土 III層 (黒色土)</p> <p>15 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を10%含む 10YR4/4 褐色シルトブロックを1~2%含む 旧表土 III層 (黒色土)</p> <p>16 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を1~2%含む 径3cmを超える角礫を1~2%含む<br/>10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを3%含む III層 (黒色土)</p> |
|---|--|

第84図 SF1遺構図(3)

硬化面は他の溝より一段低い場所に位置している(第83図F-F'断面7層)。溝の埋土は最大6層が確認できる。旧谷地形の東側と同様に、主にIII層に由来する黒色又は黒褐色のシルトで構成されるが、中央の溝の一部に暗褐色、褐色、にぶい黄褐色のシルトが堆積することから、こうした土は客土の可能性が有る。埋土上面には小礫が顕著に認められる場所が多く、また著しい硬化がみられるが、なか

には硬化面を2層確認できる場所（第84図G-G'断面2・4層など）もあった。

SD8以西も含め、発掘区の東端から西端まで一連の道路状遺構と捉えるならば、その長さは65mを超える。また、BQ1グリッドで強く屈曲し、北北東に向きを変えた溝は、枝道の可能性が高い。

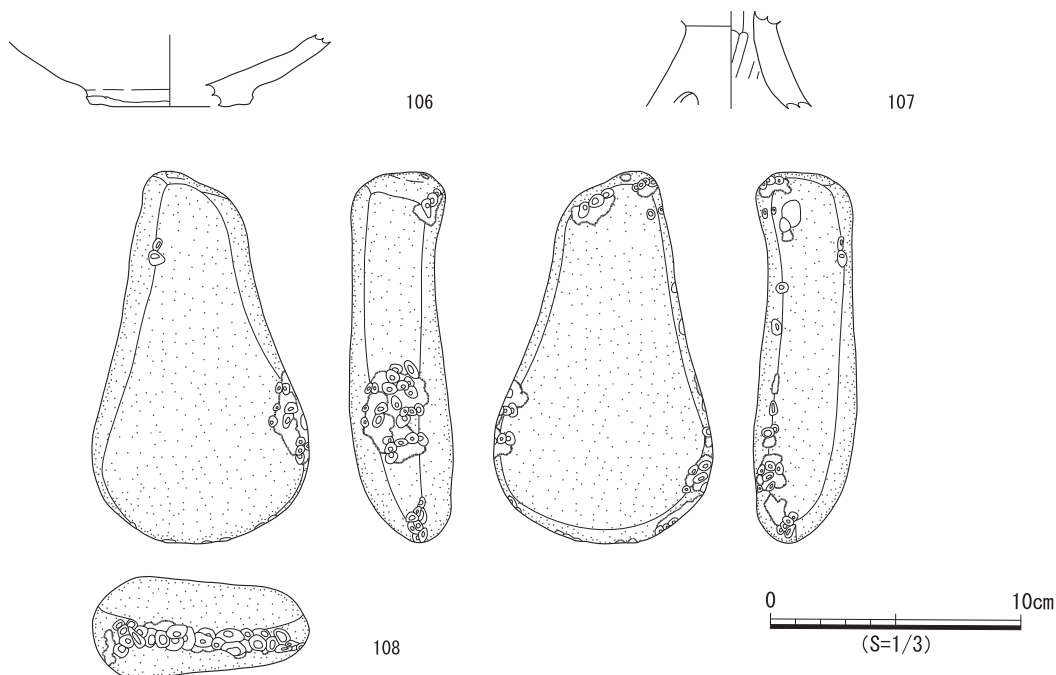
**遺物出土状況** 旧谷地形の東側からは、硬化面を伴う溝から土師器片6点と石器2点が出土し、旧谷地形の西側からは、同じく硬化面を伴う溝から土師器片3点が出土している。土師器片のうち、部位が明確なものは2点で壺106と高坏107である。

**出土遺物（第85図）** 106は壺の底部である。底部は厚みをもち、緩やかに斜め上方に立ち上がる。内外面とも摩滅により調整は不明である。体部外面に煤が付着する。107は高坏の脚部である。外面は摩滅により調整不明、内面はナデ調整を施す。2個1対の円孔を2方向に穿つ。

石器は砂岩製の敲石と花崗閃緑岩製の磨石である。敲石108はしゃもじ型で、幅の広い部分の側面に敲打痕が多くみられる。

**遺構の時期** 旧谷地形の東側ではSM1に伴う造成面Aの造成土によって、西側ではSM2に伴う造成土によって覆われていた。SM1に伴うと考えられるSD4内から15世紀後葉～16世紀初頭頃の土師器皿が出土していることから、15世紀中葉以前の遺構と考えられる。

**遺構の性格** この遺構は、山道か生活用の小径として日常的に利用され、踏み固められて形成された可能性が高い。その根拠として、硬化した層の土色と他の埋土や基盤の土色に大きな差異が認められないことがある（E-E'断面）。土色に大きな差異が認められないことは、道を構築するために外部から特別な土砂を盛っていないためと推測される。ただし、一部に客土と考えられる堆積（G-G'断面2・4層）もみられることから、主要な道として補修しながら利用された可能性が考えられる。最終的に平場に伴う造成土によって埋没し、平場の上面で硬化面を確認しなかったため、平場造成時に本遺構は廃絶したと考えられる。



第85図 SF1出土遺物

しかし、宝暦4（1754）年の『濃州方県郡洞村絵図』（第9図）には、崩落した御望山南麓の斜面上に道を確認することができる。絵図中には御望山山麓の中央やや右寄りに「池」とあり、発掘区の東にあった一村総持の小さなため池がその名残と推測される（写真14）。絵図中の道は、山体崩落による崩積性堆積土上に形成された道であるため、確認した遺構そのものではないが、位置関係は検出した遺構と類似する。山麓南側は、江戸時代には水田として利用されていたことが絵図からわかるが、第3章第1節でも述べたように、この場所は伊自良川の氾濫原にあたり、低湿な土地であったため、山麓を巡る道は、古くから継続的に利用されていた可能性が高い。



写真14 発掘区東側の一村総持のため池（東から）

## 5 火葬施設

平成27年度調査において、4基の火葬施設<sup>3) 4)</sup>を確認した。

### ST1（第86図）

**検出状況** 本遺構は、旧谷地形の底にあたるBQ5グリッドで確認し、Ⅲ層上面で検出した。検出時には、周囲の土に比べ赤みを帯びた埋土の範囲が鮮明であり、遺構の北端付近では幅約0.2mの焼礫が露出していた。また、検出面には少量の骨片や炭化物が散布している様子も確認できた。発掘区北壁の土層観察と検出時の状況から、本遺構はSM1（造成面B）の造成によって最終的に埋没したと思われる。平面形はややいびつな楕円形である。長軸1.15m、短軸0.56m、長軸方位はN-21°-Eで、旧谷地形の向きに沿っており、北東から南西方向に向かって傾斜している。本遺構は、ST2及びST3の南西に位置しており、ST2とは約3m、ST3とは約6mの距離にある。

**埋土** 埋土は、周囲の黒色粘質シルトに比べて暗褐色でしまりがなく、焼土・炭化物・骨片を多く含む。また、幅0.1~0.4mのやや大きなチャート礫を7個含む。礫には被熱痕跡がみられ、また扁平な面を上面に向けるものや、意図的に立てられたような状態のものもあるため、これらの礫が人為的に置かれたものと判断した。以上の状況から考えて、本遺構の性格は火葬施設と判断した。

土層断面からは、焼土層（8・9・11・12層）が4層堆積している状況が確認でき、3回の火葬が行われたと推測できる。まず、深さ0.25mほどの楕円形状の掘方を掘削し1度目の火葬を行い（13・11・10層）、次に、その上面（11・13層上面）に幅約0.3mの礫を設置し、2度目の火葬を行う（7・9・12層）。その後、掘方南側が意図的に掘り返され、埋め戻されている（4・5層）。4・5層は焼土、骨片、炭化物を含んでいなかった。5層の上面には幅約0.3mの礫が置かれており、この礫は大きさや設置位置から、北側の11・13層上面の礫と対をなすものと思われる。さらに北端付近を掘り返し、12層上面に扁平な礫を置き、3度目の火葬が行われた（8層）。8層の上面にはやや大きめの部位が特定できるものも含め大量の骨片が散布していた。その上層には焼土層はみられないことから、8層上面が本遺構に伴う最後の火葬と推測される。

**壁面** 平面形は不整な楕円形状をしており、明瞭な角はみられない。底面からやや急な立ち上がりを見せるが、西側・北側に比べ東側・南側は4・5層の掘削に伴う掘り込みの影響でその傾向が強い。被熱痕跡は認められなかった。

**底面** 北側では掘り返しに伴う浅い段があり、また南側も掘り返しによって当初の掘方より一段深くなっているが、当初の掘方の底面は平坦であった可能性が高い。

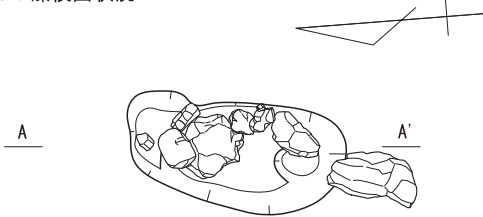
**出土遺物** 8層上面で骨片、炭化物が面的に出土したが、土器は出土していない。骨片について放射性炭素年代測定(AMS法)を行った。

**遺構の時期** 放射性炭素年代測定の結果から15世紀前半と考えられる(第4章参照)。

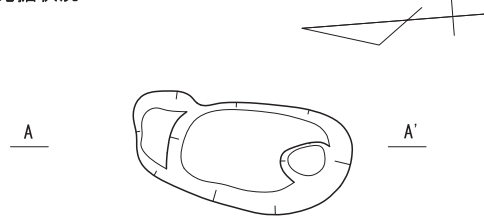
ST 2 (第 87 図)

**検出状況** 本遺構は、旧谷地形の谷底やや西寄りのBP4グリッドで確認し、Ⅲ層上面で検出した。検出面から天目茶碗が出土し、その周囲から焼土・骨片・炭化物を確認した。発掘区北壁の土層断面の観察と検出時の状況から、本遺構はSM1(造成面B)の造成によって最終的に埋没したと思われる。平面形は方形で、長辺約1.8m、短辺約1.6mである。長軸が等高線に対しほぼ直交し、長軸方位はN-19.5°-Wである。南東約3mにST1、北約1.6mにST3が近接している。北辺がSK60を削平して

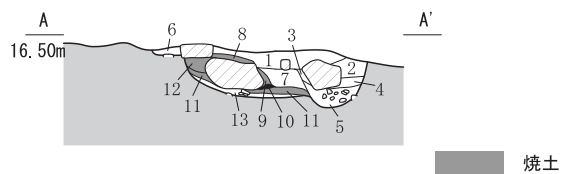
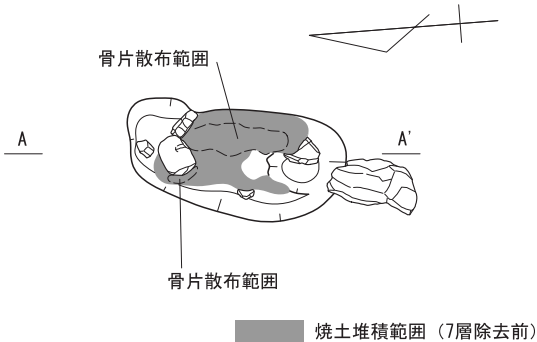
ST 1 礎検出状況



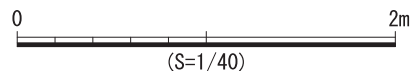
完掘状況



焼土検出状況

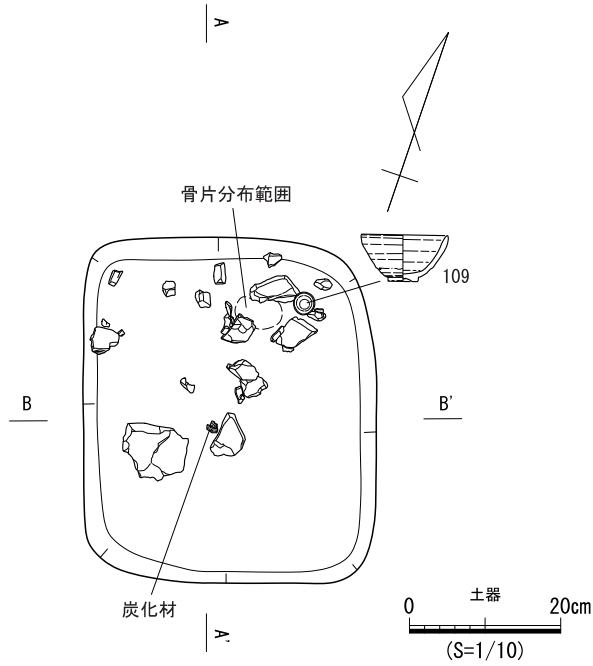


- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり<br/>径0.5~1cmの角礫を少量含む 焼土ブロック、炭化物、骨片を少量含む</li> <li>2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり<br/>径0.5~1cmの角礫を少量含む 焼土ブロック、炭化物、骨片を多く含む</li> <li>3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりなし 粘性なし<br/>径1cm以下の角礫を少量含む 炭化物、骨片を少量含む<br/>焼土は細かな粒子を少量含む</li> <li>4 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり<br/>径0.5cm以下の角礫を少量含む<br/>焼土ブロック、炭化物、骨片を含んでいない</li> <li>5 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径3~5cmの角礫を上層との境付近にまとまって含む<br/>焼土ブロック、炭化物、骨片を含んでいない</li> <li>6 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>径0.5~1cmの角礫を少量含む</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>7 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性なし<br/>焼土が部分的に混じる 炭化物を多く含む</li> <li>8 5YR5/8 明赤褐色シルト しまりなし 粘性なし<br/>表面に多量の骨片が散布する 焼土</li> <li>9 5YR4/6 赤褐色シルト しまりなし 粘性なし<br/>埋土中に骨片を含む 下層焼土</li> <li>10 2.5Y2/1 黒色 炭化物の集積層</li> <li>11 5YR4/5 赤褐色シルト しまりなし 粘性なし 下層焼土</li> <li>12 5YR5/8 明赤褐色粘質シルト しまりなし<br/>粘性ややあり 礫下の焼土</li> <li>13 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり<br/>焼土をわずかに含む</li> </ul> |
|--|--|

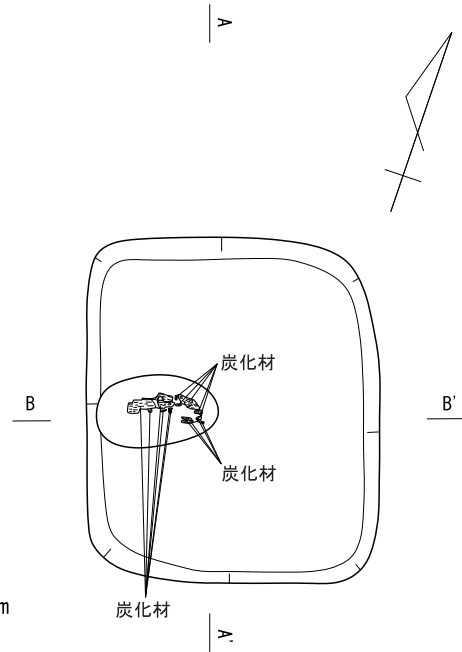


第 86 図 ST 1 遺構図

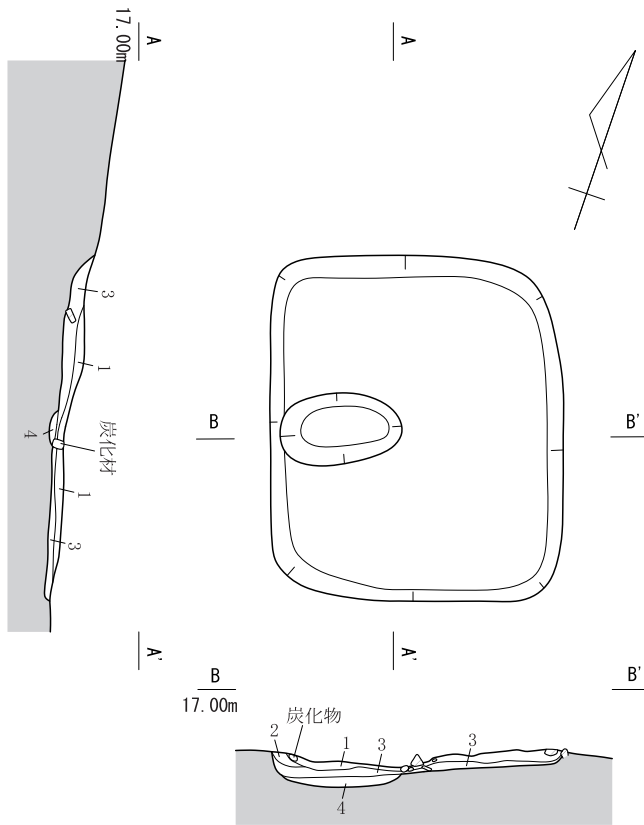
ST 2 磔及び遺物出土状況



炭化材出土状況



完掘状況



- 1 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を20%含む 径10cmを超える角礫を10%含む 焼土ブロック・炭化物を多く含む 骨片がまとまって出土している
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cm以下の角礫を10%含む
- 3 7.5YR5/8 明褐色シルトの焼土ブロックを50%含む
- 3 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 炭化物・骨片を含む
- 4 7.5YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 粒子が細かい 径1~3cmの角礫を15%含む 焼礫とそうでない礫が混在する 層上面に板状の炭化材を含む 骨片、焼土は含まない

第 87 図 ST 2 遺構図

いる。

**埋土** 埋土は、しまりのない黒褐色粘質シルトで、明褐色の焼土ブロック・焼礫・骨片・炭化物を含む。以上の状況から考えて、火葬施設と判断した。2層は掘方西側の壁際に堆積し、他と比べ焼土ブロックの混じりが多いが、骨片・炭化物は認められない。炭化物は微細なものから径5cmほどのものもある。遺構北東部では幅0.2~0.3mの焼礫がまとまっており、その中のやや大きめの3つの礫で囲まれた範囲から、骨片がまとまって出土した。これらの礫は底面直上ではなく、3層の上面に載っている。また、遺構中央から南西部にかけて、0.3m前後の礫が平坦な面を上にして置かれていた。周辺にまとまった骨片の散布はみられなかった。北東部で骨片を囲むように配置された礫は、棺台を意識したものとして推測される。中央から南西部にかけて置かれた礫については、被熱痕跡がみられないため棺台を意図したものかは不明である。

**壁面** 掘方はⅢ層を約0.08m掘り下げている（4層含まない）が、明確な壁面を作っている印象は受けにくい。また壁面に明確な被熱痕跡は認められない。

**底面** 底面は北西から南東へ向かって緩やかに傾斜しており、原地形の傾斜に沿う。底面に被熱痕跡は認められない。底面を精査したところ、遺構中央西寄りに板状の炭化材がまとまって入るピットを確認した。ピットの上面には、先述の被熱していない礫が置かれていた。炭化材は東西方向に長辺を揃えるようにまとまっており、一番西に位置するものが最も大きく、長さ約0.25m、幅約0.08mであった。鉄釘が出土していないため、木棺の一部か薪材かは不明である。4層は上層と比べやや赤みがかってみえるが、骨片・焼土は含まない。またピット底面にも被熱は認められなかった。なお、ピットについては同一遺構と判断したが、先行する別遺構の可能性もある。

**骨片散布状況** 遺構全体から出土しており、特に遺構北東部の礫に囲まれた空間からやや大きめの骨片がまとまって出土したが1体分にはほど遠い。なお、骨片は遺構掘削時に四分割した区毎にまとめて取り上げた。また骨片について放射性炭素年代測定(AMS法)を行った。

**遺物出土状況** Ⅱa層掘削時に、遺構北東部の隅部から完形の天目茶碗109が出土した。高台部分が検出面に埋まっており、正位で出土した。

**出土遺物(第90図)** 高台は削り出し輪高台で、底裏は内反りである。腰部から胴部にかけて八の字状に開き、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部をとがらせている。釉薬は鉄釉で、露胎部は無釉である。内外面に二次的な被熱痕跡が認められ、古瀬戸後期様式Ⅳ期新の古い段階に比定される。天目茶碗の出土地点に隣接する焼礫に囲まれた範囲で確認できた骨片は、1体分はないため、火葬施設を火葬施設墓に転用したとは考えにくく、天目茶碗も被熱痕跡はみられるが副葬品ではないと判断した。

**遺構の時期** 放射性炭素年代測定から、15世紀前半~後半と考えられる(第4章参照)。

### ST3 (第88図)

**検出状況** 本遺構は、旧谷地形の谷底やや西寄りのBP4グリッドで、発掘区北壁の精査中に確認し、Ⅲ層上面で検出した。検出した範囲は遺構の南端部にとどまり、その大半は発掘区外に広がる。発掘区北壁の土層断面の観察から、本遺構はSM1(造成面B)の整地土によって埋没していた。全体の平面形及び主軸方位は不明だが、南端は倒卵形に弧を有する。検出できた規模は長軸0.66m、短軸0.36mであった。南約1.6mにST2、南東約6mにST1が近接している。

**埋土** ほぼ水平な2層に分層できる。埋土には小礫をやや多く含み、上層では炭化物・鉄釘・骨片・

焼土を確認した。下層では鉄釘は出土しなかったが、上層に比べ、長さ 0.1m ほどの炭化物や、焼土・焼礫が多く混じっていた。以上の状況から考えて、本遺構の性格は火葬施設と判断した。なお、出土した炭化物について放射性炭素年代測定（AMS 法）を行った。

**壁面** 残存する部分はやや急な立ち上がりを見せるが、被熱痕跡は認められない。

**底面** 西側に緩やかなテラス状の段を持ち、東側で深くなる。

**遺物出土状況** 1 層埋土中から鉄釘 110～112 が出土した。110・112 は層上部から出土し、111 は 2 層との境から出土した。

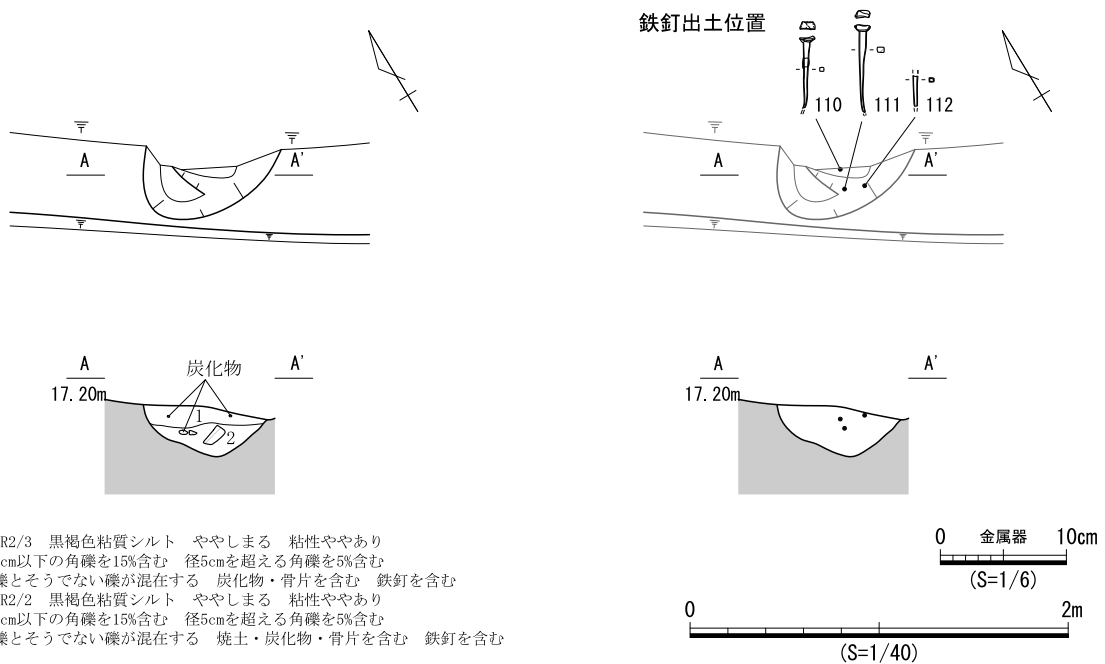
**出土遺物（第 91 図）** 鉄釘 110～112 はいずれも角釘である。110・111 は、基部上端を叩き潰して折り返し、頭部としている。いずれも基部下端を欠損している。ST 4 から出土した鉄釘と大きさ、形状ともに類似する。

**遺構の時期** 放射性炭素年代測定では 13 世紀後半という結果を得たが、試料の炭化材の部位が特定できないため、時期が下る可能性がある（第 4 章参照）。ST 1・2 が 15 世紀代に位置付けられることや、出土した鉄釘の大きさ、形状が ST 4 から出土したものと類似していることから、本遺構についても 13 世紀後半から 15 世紀代と幅を持たせて考えたい。

**ST 4（第 89 図）**

**検出状況** 本遺構は 6 号古墳の南に位置し、AS15 グリッドで確認した。本遺構の周辺では遺構埋土と旧表土（Ⅲ層黒色）の色調が酷似し遺構検出が困難であったため、基盤層と遺構埋土の土色の違いが明瞭な漸移層まで掘り下げることにした。遺構周辺の掘削を進めたところ、焼土と思われる赤褐色の土を確認したため、遺構の存在を想定し検出作業を行った。平面形は方形で、短辺が等高線と平行する。長軸 1.17m、短軸 0.79m、長軸方位は N-7° -W である。検出面では土坑の掘方に沿うように赤褐色の土が巡っていた。また、南側では短辺と平行に、上面を揃えた礫が東西方向に 2 つ並ぶのを確

ST 3

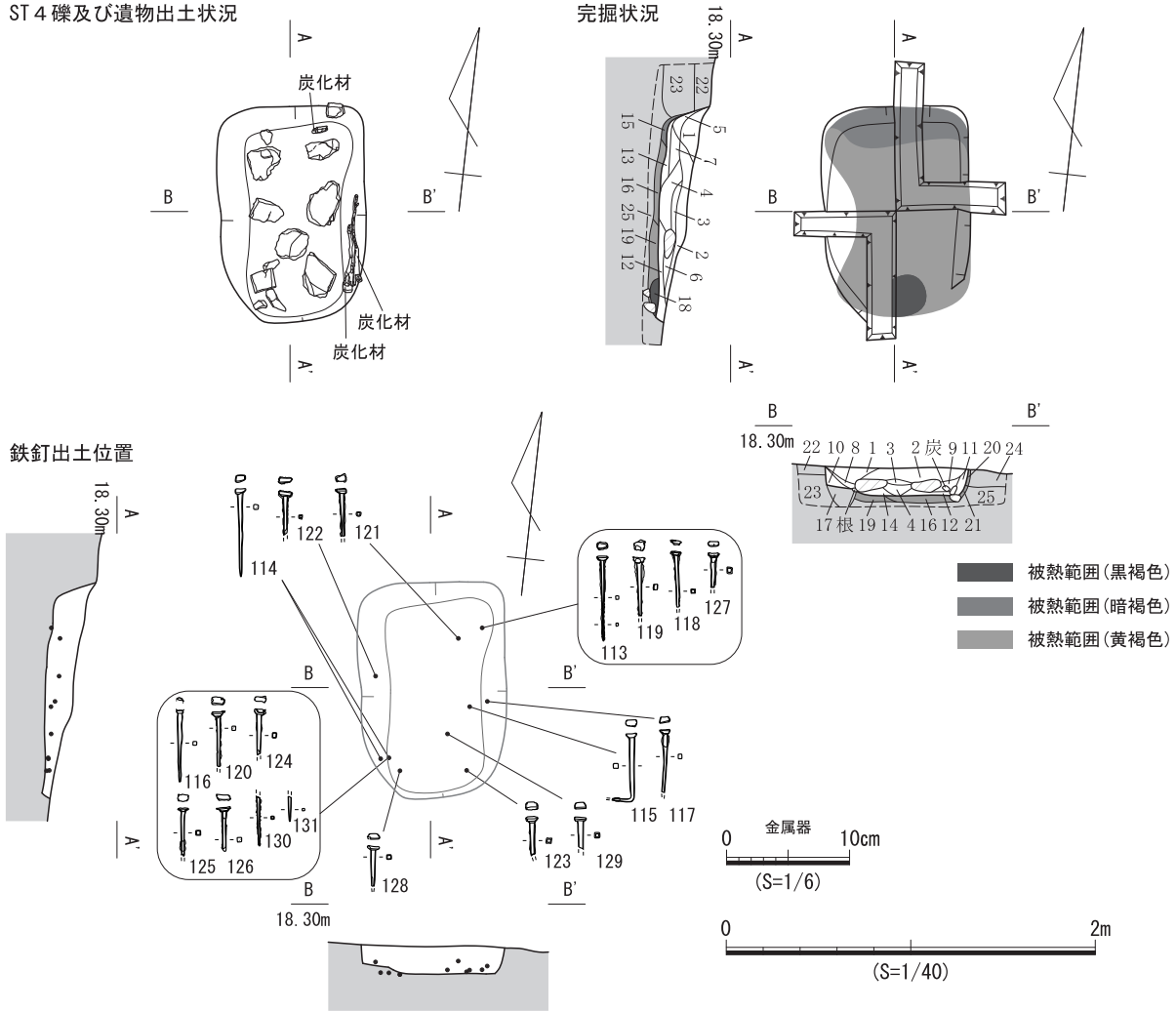


- 1 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径3cm以下の角礫を15%含む 径5cmを超える角礫を5%含む  
焼礫とそうでない礫が混在する 炭化物・骨片を含む 鉄釘を含む
- 2 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径3cm以下の角礫を15%含む 径5cmを超える角礫を5%含む  
焼礫とそうでない礫が混在する 焼土・炭化物・骨片を含む 鉄釘を含む

第 88 図 ST 3 遺構図



ST 4 磔及び遺物出土状況



- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を3%含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルトブロックを5%含む 径0.5cm以下の骨片を3%含む
- 3 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 1層に比べややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cm以下の角礫を少量含む 炭化物を少量含む 径0.5cm以下の骨片を3%含む
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を少量含む 炭化物少量含む 径0.5cm以下の骨片を3%含む
- 5 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 炭化物を少量含む 径5cm以下の骨片を大量に含む 径5cmを超える骨片も少量ながら含む
- 6 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を少量含む 炭化物を含む 骨片は含まず
- 7 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を少量含む 径5cm以下の骨片を少量含む
- 8 7.5YR7/8 黄褐色シルト ややしまる 粘性なし 径0.5cm以下の角礫を少量含む 焼土
- 9 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 炭化物を含む 径2cm以下の骨片を少量含む 鉄錆を少量含む
- 10 7.5YR5/8 明褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を少量含む 7.5YR3/1 黒褐色シルトブロックを少量含む 焼土
- 11 7.5YR3/1 黒褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を少量含む 7.5YR5/8 明褐色シルトブロックを多く含む 焼土
- 12 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 0.5cm以下の角礫を少量含む 骨片を少量含む 5YR5/6 明赤褐色の焼土を含む
- 13 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を少量含む
- 14 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を少量含む 5YR5/6 明赤褐色の焼土を含む
- 15 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~1cm以下の角礫を少量含む 細かな根が多く混じる 著しい硬化がみられる 被熱層
- 16 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を少量含む 硬化がみられる 被熱層
- 17 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を少量含む 細かな根が多く混じる 著しい硬化がみられる 植物痕か
- 18 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を3%含む 硬化がみられる 被熱層
- 19 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を少量含む 著しい硬化がみられる 被熱層
- 20 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を少量含む 硬化がみられる 被熱層
- 21 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を少量含む 硬化がみられる 被熱層
- 22 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径1~5cmの角礫を5%含む
- 23 10YR3/3 暗褐色粘質シルトを斑状に含む 倒木痕に伴う埋土か
- 24 10YR4/6 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫を10%含む
- 25 10YR6/8 明黄褐色シルトブロックを少量含む 倒木痕に伴う埋土か
- 26 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む III層 (黒褐色土)
- 27 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を7%含む III層 (暗褐色土)

第 89 図 ST 4 遺構図

認した。

**埋土** 全体的に灰黄褐色で、骨片・炭化物・炭化材・焼土・鉄釘を含む。また上面及び側面が被熱した人頭大の礫が規則的に7個配置されていた。以上の状況から考えて、本遺構の性格は火葬施設と判断した。2層は礫の上面に堆積しており骨片と炭化物を少量含む。部分的に硬化がみられ、廃絶に伴う人為的な埋め戻しの可能性がある。1・5層も埋め戻しによる堆積と判断した。3・4層は礫に囲まれた空間を掘り窪めた後に最後の施設利用に伴って堆積したと考えられる。4層は部位が特定できるやや大きめの骨片を多く含む。6～9層は礫設置後の堆積と考えられ、2度目の施設利用に伴うものと思われる。6層でもやや大きな骨片を確認した。また礫は12～14層の上面に設置されており、被熱した底面からは浮いていることから、1度目の施設利用時には設置されておらず、その後に設置されたと考えられる。

**壁面** 南側に開口した方形の掘方で、斜面上方にあたる北側及び東西の三方を掘り下げて壁としている。南側はやや掘り窪んでいる箇所もあるがほぼ床面の高さで抜けている。壁面は、東西はほぼ直立するが、北壁は外傾する。隅部は若干丸みを帯びている。西壁の一部以外は全体的に被熱して色調は黄褐色系が強いが、北壁はやや暗褐色であり、また全体に硬化が認められた。

**底面** 壁同様に被熱と硬化が認められ、全体に色調は黄褐色系であるが、北壁下では暗褐色、南では黒褐色の場所がある。北壁付近は遺構より古い倒木痕の埋土を削平しており、北壁下の色調はこれに由来すると推測されるが、南側については不明である。なお、南側の黒褐色を示す場所は位置的に焚口にあたる。

**棺台** 12～14層の上面でチャート角礫を7個検出した。そのうち6個は南北方向に3個ずつほぼ等間隔に2列で配置され、残る1個は遺構の中央やや南寄りに配置されている。礫の大きさは幅約0.1～0.25m、高さは約0.08mである。平面形は不揃いであるがいずれも平坦面を上面にして設置され、面の高さは南北方向が水平になるように揃っている。いずれの礫にも上面と側面に被熱が認められ、礫の周囲から鉄釘が出土していることから、木棺を置くための棺台と思われる。棺を持ち上げることで棺の下に空気の供給を促し、燃焼効率をあげるための工夫であろう。また、礫が骨片を含む12層上面に設置されていることから、最初の施設使用後に設置されたものと考えられる。

**骨片散布状況** 骨片は1～4・6・7・9・12層から出土しており、4・6層以外からは部位を特定できるような骨片は認められなかった。12層は棺台と思われる礫の下層にあたり少量ながら骨片を採集した。このことから、12層は最初の施設使用時に堆積したと思われる。微細な骨片しか見られないのは、大きな骨片については火葬後に取り上げたためと考えられる。6・7層は高さが揃うため、2回目の使用に際して堆積したものと推測される。6層に5cm以下のやや大きめの骨片が認められるものの、少量のため12層と同様に火葬後に取り上げられたと考えられる。その後7・12・13層を掘り込んでいる。中央部は棺から焼け落ちた骨片が多く堆積するため、施設の3度目の使用に際して掘り込まれたものであろう。4層は3度目の使用に伴うものと思われる。棺台の礫の間に厚く堆積しており、部位が特定できる骨片がまとまって出土したが、1体分には及ばない。4層の上層である1、2、3層には微細な骨片しか見られない。このことから、本遺構は火葬施設として3度使用され廃絶したと推測される。

なお、4層以外の骨片は遺構掘削時の四分割した区毎に取り上げた。また骨片について放射性炭素

年代測定（AMS法）を行った。

**炭化材出土状況** 南東部の壁際に沿って、長さ0.33m、幅0.08mと長さ0.3m、幅0.02mの炭化材を検出した。その他の炭化物は遺構掘削時に四分割した区毎にまとめて取り上げた。

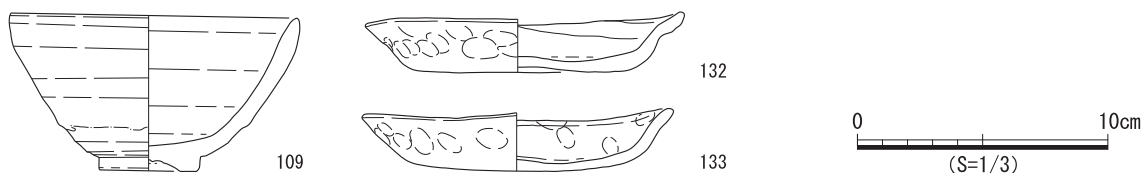
炭化物は細かく樹種同定の可能なものは少ないが、南東部の壁際で出土した炭化材は薪材の一部の可能性はある。

**遺物出土状況** 埋土中から鉄釘113～131が出土した。遺構中央部を避けて棺台の礫周辺部から出土していることから、箱型の木棺の使用が想起される。中には尖端が曲がったものもあり、鏝のようなものであった可能性もある。

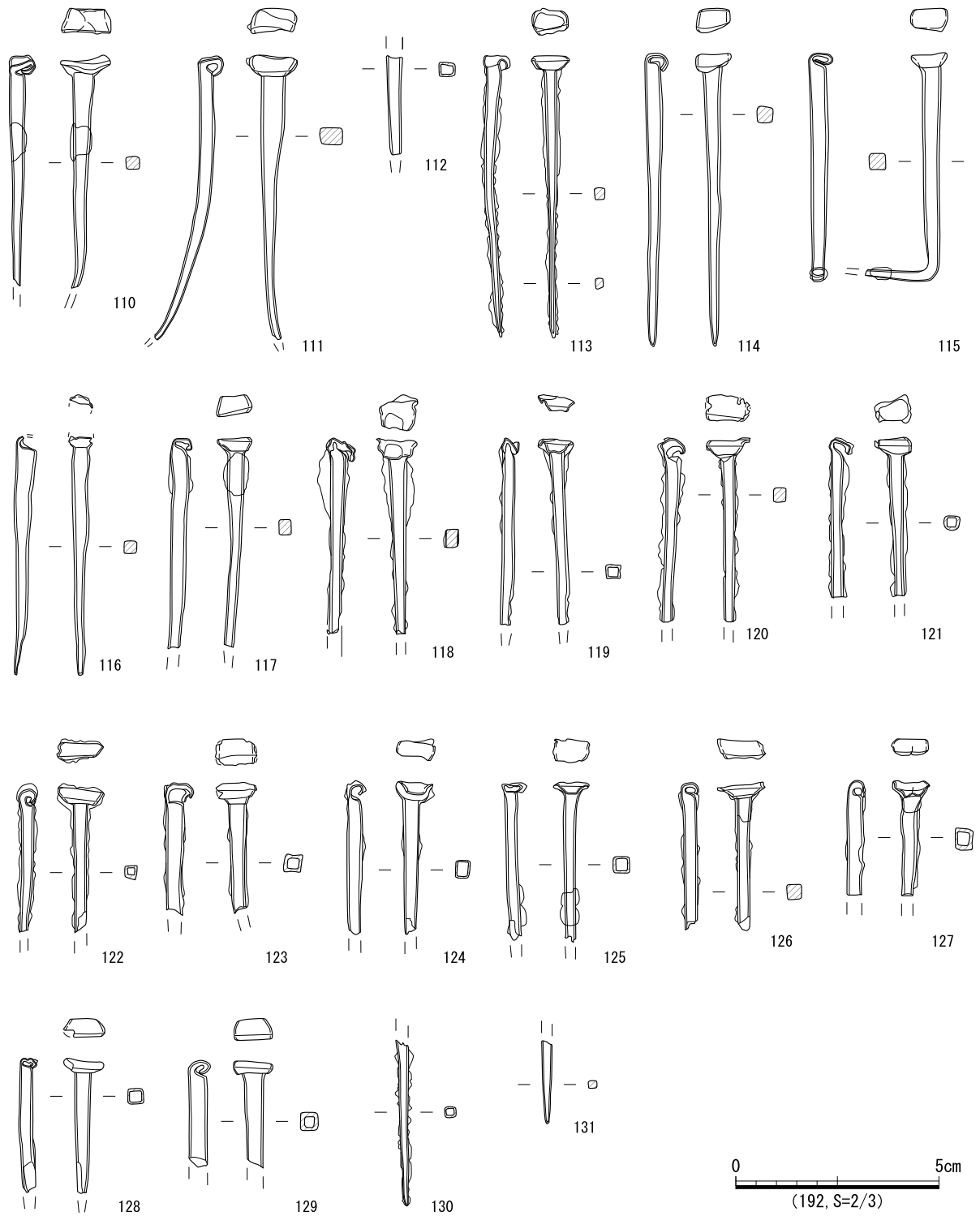
また、土師器皿132・133が、遺構の真上の地点から出土した。133が正位で、132が伏せた状態で並んで検出され、割れているものの欠損が少なく比較的良好な状態であった（図版16）。土師器皿を検出した当時は、本遺構の存在には全く気づかず、遺物包含層中の遺物と判断した。出土地点の標高値はそれぞれ18.30mと18.29mである。SD8の東側に伸びる道路状遺構SF1は、SD8によって削平されており、SD8以西については、先述のように遺構埋土と旧表土との区別が難しく、下げすぎてしまった可能性が高い。SF1西端の標高は斜面上方側の上端で17.70mであり、原地形が北西から南東に向かい緩やかに傾斜していることを考えると、2点の土師器皿が出土した地点は、道路状遺構検出面とほぼ同じ面と考えることができる。以上から、本遺構が本来は道路状遺構とほぼ同じ面から掘り込まれており、2枚の土師器皿は本遺構の上面に意図的に置かれていた可能性がある。

**出土遺物（第90・91図）** 鉄釘113～131はいずれも角釘である。頭部の残っているものは、基部下端を叩き潰して折り返している。115は頭部から約5cmのところまで基部をL字状に折り曲げている。132・133は土師器皿である。132は体部が外反し、外面にはユビオサエが明瞭である。内面は体部に横ナデ、底部に不定方向のナデを施す。133は体部が外反し、内外面ともナデ調整とユビオサエがみられる。どちらも美濃中世後期土師器皿（井川2006）のB1類に分類でき、15世紀前葉～16世紀初頭と考えられる。

**遺構の時期** 放射性炭素年代測定から遺構の利用は15世紀前半と考えられ（第4章参照）、15世紀後半から16世紀初頭には廃棄したと考えられる。



第90図 ST2・3・4出土遺物（1）



第91図 ST2・3・4出土土器(2)

6 溝

平成27年度調査で10条、平成28年度調査で2条の溝を確認した。それらのうち特に規模の大きいものや、他の遺構との関係が深いと考えられる6条について詳述する。

SD1 (第92・93図)

**検出状況** 2号古墳と3号古墳の東側（DB16、DC15～16、DD14～15、DE13～14、DF13 グリッド）において、Ⅲ層上面で検出した。ほぼ一定の幅で、北東から南西方向に直線的に延びるため人為的な溝と判断した。長軸方位はN-46° -Eである。北東側と南西側は発掘区外に延び、南西側は2号古墳の東南裾を横切るように延びている。遺構上面は窪んでおりⅠ層に由来するシルト質の土で埋没していたため、この層を除去して検出を行った。DD14グリッド付近で現代の井戸によって攪乱されていた。この辺り一帯はしまりの悪い砂礫層が堆積しており（基本層序Ⅰ層参照）、掘方の一部がこの砂礫層を削平している。

**埋土** 常時水が流れた痕跡は認められない。埋土は主に黒色、黒褐色の粘質シルトであり、周囲から流れ込んだものと思われる。B-B' 断面の3層及び、C-C' 断面の2層下部にみられるやや赤みがあった褐色の砂質土やシルト土は滞水により、鉄分が沈着したものと考えられる。1層は下層に比べ大小の礫が混在しており、廃絶に伴い意図的に埋められた可能性がある。最終的にはⅠ層によって埋没した。

**形状** 検出長 25.7m、最大幅 1.2m、深さ 0.5mで、断面形状は直方体に近い逆台形であり、底面は平坦で、標高値からは高低差がほとんどみられず、ほぼ水平である。そのため、水路ではなく区画溝の可能性が高い。壁面は垂直に近い急傾斜で立ち上がり、B-B' 断面及びC-C' 断面の1層に対応する掘方は、下層に比べて幅が広がっており、掘り直しが行われた可能性があるが、その範囲は限定的である。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** 南西側の発掘区壁面の土層断面で、2号古墳の墳丘若しくは墳丘からの流土と思われる層を削平していることが確認できるため、2号古墳の築造以降に設置されたと考えられる。

## SD 2（第 92・93 図）

**検出状況** DF 7～DF 9 及び DG 9 グリッドにおいて、Ⅲ層上面で検出した。ほぼ一定の幅で、東西方向に直線状に延びるため人為的な溝と判断した。長軸方位はN-75° -Wである。東側は2号古墳の南西から南裾部を切るように発掘区外に延びている。2号古墳の裾部に近い遺構の東側では、掘方が比較的明瞭に検出できたが、西に向かうにつれて次第に不明瞭となり消失したため、西端から3mほど西側に長さ2m、幅0.5mの下層確認用のトレンチをあけて確認を行ったが、続きは認められなかった。

**埋土** 常時水が流れた痕跡は認められず、水平に近い堆積を為している。D-D' 断面の3層がE-E' 断面の2層に対応すると思われる。上層はしまりのない粘質シルト土で、下層は上層に比べしまりがあり黒色であるが、ブロック状の混じりが見られないため、周囲からの流水による流れ込みと思われる。

**形状** 検出長 13.4m、最大幅 0.7m、深さ 0.4mで、断面形状は逆台形である。地形が東から西にかけてやや傾斜しており、掘方は東から西に向かって徐々に浅くなるが、底面は平坦で標高値からは高低差がほとんど認められずほぼ水平であるため、SD 1と同様に水路ではなく区画溝の可能性が高い。

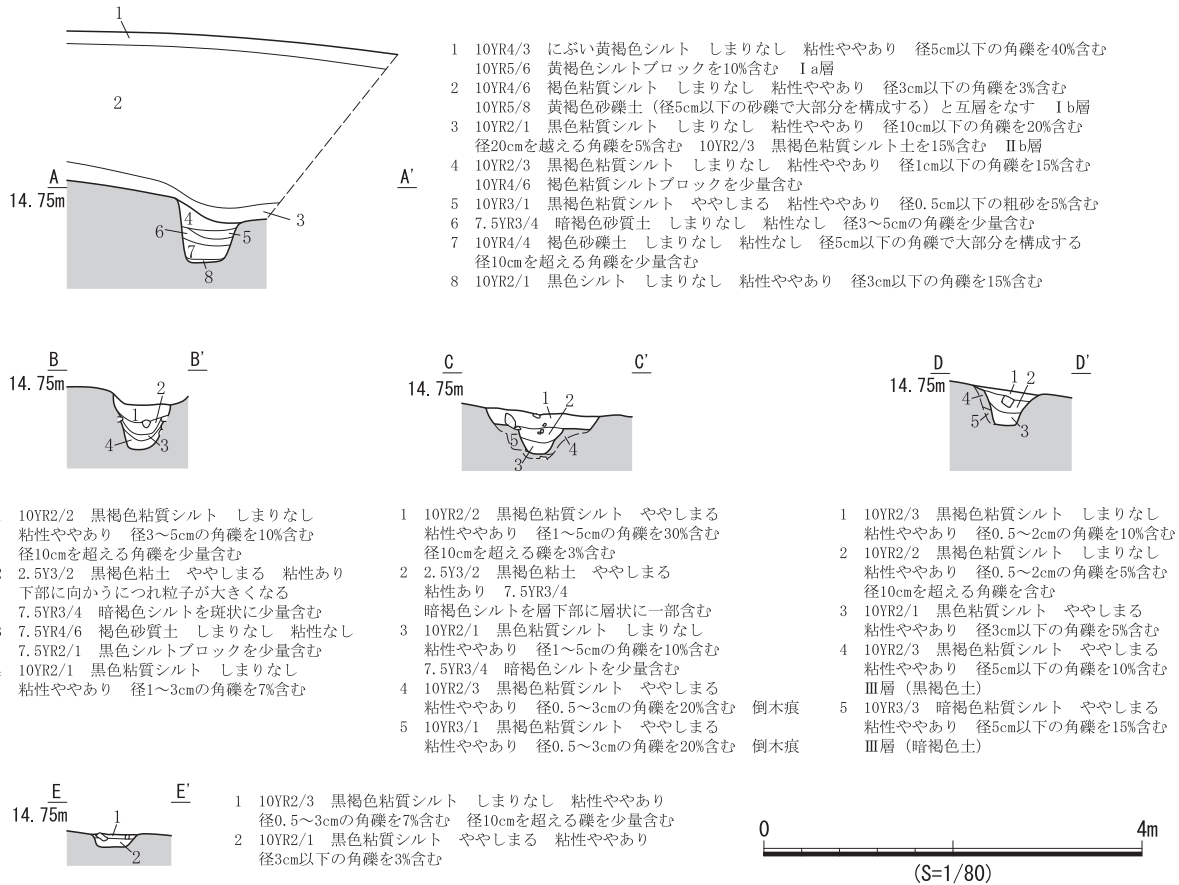
D-D' 断面では壁面が急角度で立ち上がり、形状もSD 1と類似するが、接続するか不明である。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** 2号古墳の裾部を覆うⅠ層の堆積によって埋没しており、中世以前の遺構である。



第92図 SD 1・SD 2遺構図(1)



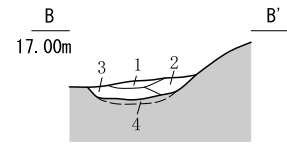
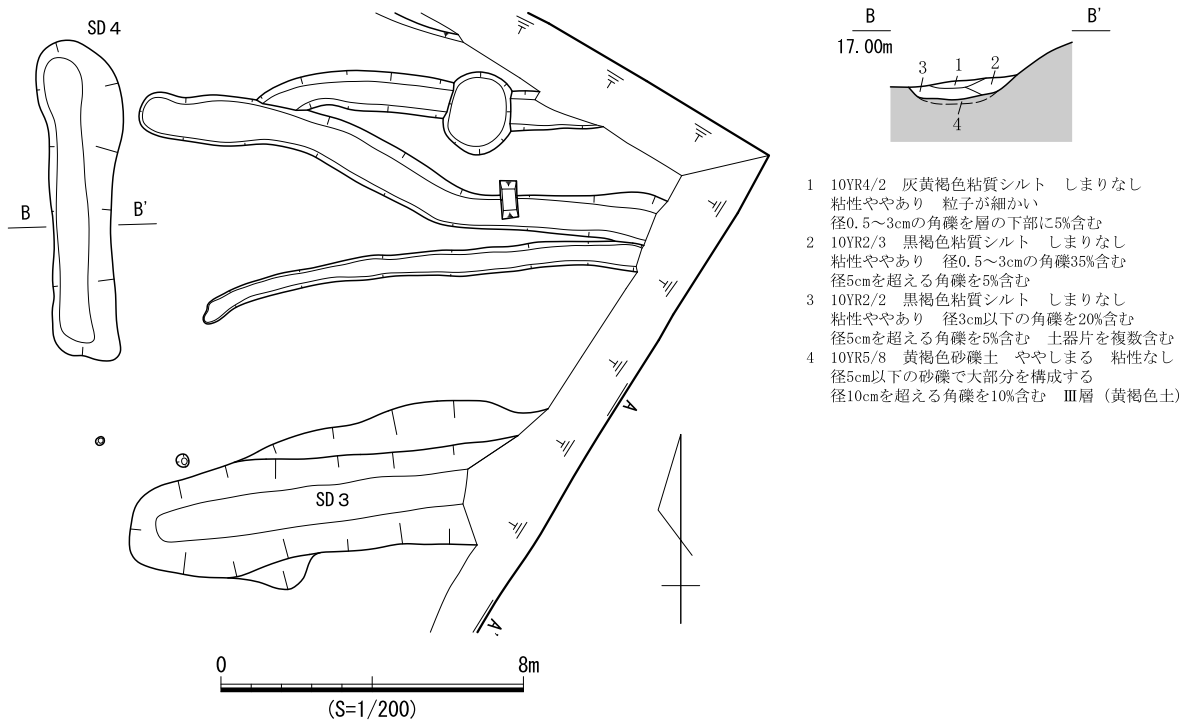
第 93 図 SD 1・SD 2 遺構図 (2)

SD 3 (第 94 図)

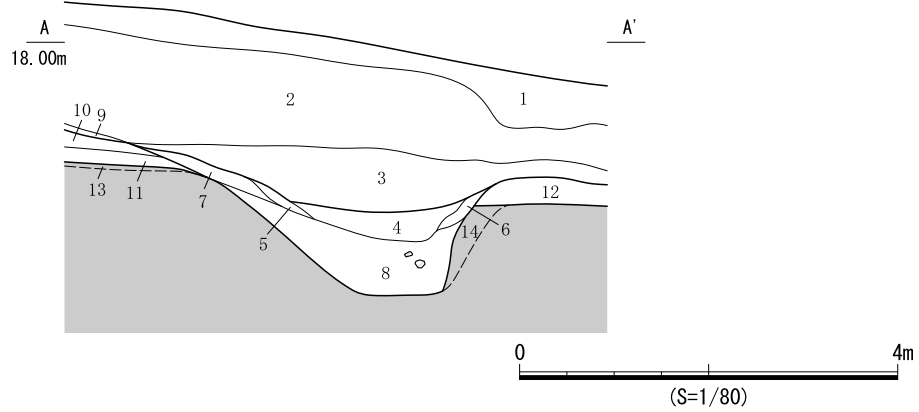
**検出状況** BS6~BS8 グリッドにおいてⅢ層上面で検出した。重機による表土掘削時に、大きく窪んでⅠ層及び流土が厚く堆積している状況を確認した。また発掘区東側壁面の土層観察から、3号古墳の周溝と重複しており、3号古墳築造以降の人為的な掘り込みであると判断した。西端はやや丸く収め、東側は発掘区外に延びる。3号古墳東側の発掘区では同様の掘り込みは確認できなかった。また、遺構よりも古い倒木痕 NR 1 を削平している。主軸方位は N-82° -E で、SD 8 及び SD 4 の長軸方向とほぼ直交する。

**埋土** 常時水が流れた痕跡は認められない。最下層 (8層) の堆積は、大小の礫が混在し黄褐色砂質土を斑状に含んでいる。また、層厚が厚いため人為的な埋め戻しか、あるいは遺構北側の平場 SM 1 に伴う整地土が崩れて埋まったものと考えられる。その上層 (5~7層) は流れ込みによる自然堆積と思われるが、4層は粘土層であるため滞水していた時期があったと思われる。3層は2層に土色が似るが粒子が細かく礫の混じりが少ない粘質シルトである。この堆積はⅠb層からの流出によるものと考えられる。

**形状** 全長 11.5m、最大幅 3.82m、深さ 1.61m (A-A' 断面) で、断面形状はほぼ逆台形である。底面は西から東に向かって少し下がるがほぼ水平で、黄褐色砂礫土の基盤層を掘り込んでいる。壁面は北壁が底面からやや緩やかな傾斜で立ち上がるのに対し、南壁がほぼ垂直に立ち上がる。また、西端はやや浅くなりながら、急傾斜で立ち上がり、近接する SD 4 とは接続しない。北側壁面の上端は3号古墳周溝埋土上面から掘り込まれるが、SM 1 に伴う造成面 A とは重複していないため、造成に伴って



- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 粒子が細かい 径0.5~3cmの角礫を層の下部に5%含む
- 2 10YR2/3 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~3cmの角礫35%含む 径5cmを超える角礫を5%含む
- 3 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を20%含む 径5cmを超える角礫を5%含む 土器片を複数含む
- 4 10YR5/8 黄褐色砂礫土 ややしまる 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する 径10cmを超える角礫を10%含む III層 (黄褐色土)



- 1 10YR3/4 暗褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20~45%含む 場所により 褐色シルトブロックを含む Ia層
- 2 10YR5/8 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト層 (ややしまる 粘性ややあり径1cm以下の角礫を10%含む) と互層をなす またB05グリッド以東では色調が10YR4/6褐色を呈しラミナが見られる Ib層
- 3 10YR4/4 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を2%含む 径5cmを超える角礫を2%含む
- 4 7.5YR3/4 暗褐色粘土 ややしまる 粘性あり 径1cm以下の角礫を層状に1%含む SD3埋土
- 5 10YR3/4 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 10YR3/2 黒褐色粘質シルトブロックを少量含む SD3埋土
- 6 7.5YR4/6 褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を少量含む 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルトブロックを少量含む SD3埋土
- 7 10YR4/4 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 10YR3/2 黒褐色粘質シルトブロックを5%含む SD3埋土
- 8 10YR3/4 暗褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を35%含む 径10cmを超える角礫を5%含む 10YR5/6 黄褐色砂質土を5%含む SD3埋土
- 9 10YR3/3 暗褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20%含む 径10cmを超える角礫を5%含む SM1に伴う造成土
- 10 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を7%含む 径5cmを超える角礫を3%含む 10YR3/3 暗褐色シルト土を3%含む 3号古墳周溝埋土
- 11 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を5%含む 径10cmを超える角礫を3%含む 褐色シルト土を少量含む 3号古墳周溝埋土
- 12 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を5%含む 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを5%含む 3号古墳周溝埋土
- 13 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を5%含む III層 (黒褐色土)
- 14 10YR5/8 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の砂礫で大部分を構成する III層 (黄褐色土)

第94図 SD3・SD4遺構図



掘削された区画溝の可能性がある。造成面Aと遺構底面の比高差は約2.2mである。さらに造成面Bと遺構底面の比高差は約2.6mである。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**遺構の時期** 3号古墳の周溝を削平していることから3号古墳造営より新しく、また大規模な崩落によるIb層からの流土によって埋没していることから、中世以前に造られたと考えられる。掘方や遺構埋土の状況からSM1造営との関わりが深く、近接し長軸方向がほぼ直交するSD4とともにSM1の区画溝を成していた可能性が考えられる。また、SD8とも長軸方向がほぼ直交することから、何らかの関係性が想起され、同時期に造営された可能性もある。

#### SD4 (第94図)

**検出状況** BQ5～BR6グリッドにおいてⅢ層上面で検出した。上層にはSM1(造成面B)に伴う造成土(Ⅱa層)が堆積していた。遺構東側の旧地形は緩斜面であり、長軸は等高線に沿う方向に直線的に伸びている。また、遺構の上端は西側に比べ東側が高い。この東側の緩斜面に、SM1(造成面A)がつくられていたことが、発掘区北側及び東側の壁面の土層観察から確認できる。主軸方位はN-1°-Wとほぼ南北方向を向く。平面形は南から北に向かってやや幅を広げながら延び、南端が矩形を示すのに対し、北端は丸く収める。粒子の細かいシルトの堆積が表層にみられ、周囲との境が明瞭であったため検出は容易であった。近接するSD3とは接続しないが主軸がほぼ直交するため、SD3とともに造成面Aを区画する区画溝の一部を成していた可能性がある。しかし、SM1(造成面B)の造成範囲は当該遺構より西に拡張されているため、これに伴う造成土(Ⅱa層)によって最終的に埋没した。

**埋土** 常時水が流れていた痕跡は認められない。SM1(造成面B)に伴う造成土(Ⅱa層)によって最終的に埋まったと考えられるが、1層は粒子が細かいシルトで層下部に小礫がまとまっており、また2・3層はブロック状の混じりはみられず礫の混じりが多い。自然堆積によって造成面Bに伴う造成前にすでに埋まっていた可能性がある。

**形状** 全長8.05m、最大幅2.22m、深さ0.51m(B-B'断面)で、断面形状は、掘方の東側の壁面が高く、西側が低い歪な逆台形状である。底面はほぼ平坦で、北から南に向かってやや傾斜している。壁面は緩やかな傾斜で立ち上がるが、南端と比べ北端が丸いためやや作りかけで終わった印象を受ける。遺構底面と造成面Aとの比高差は約0.5～0.6mである。

**遺物出土状況** 遺構の北寄りから土師器皿134～137が割れた状態でまとまって出土した。いずれも3層の上面付近から出土している。

**出土遺物(第98図)** 134は口縁がやや厚く、体部は外反し外面にユビオサエとナデがみられる。内面はユビオサエ後にヨコナデを施す。135は口縁がやや厚く、体部は外反し外面にユビオサエがみられる。内面にはヨコナデを施す。136は134、135に比べ口縁はやや薄く、体部は外反し外面にユビオサエがみられる。内面にはユビオサエとユビナデを施す。137は他に比べ口縁が薄く、体部は直線的で外面にユビオサエがみられる。内面にはヨコナデとユビオサエを施す。井川(2000)に拠れば、134～136はⅡ期のB1類に対応する。137は134～136に近い場所から出土しているため、同類の個体の可能性があるが、残存部位からはB2-b類に分類できる。

**時期** 遺構はSM1(造成面B)の造成土の下で検出しているため、SM1(造成面B)の造成以前に造られたと考えられる。出土遺物は、残りの良いものがⅡ期のB1類に対応し、15世紀前葉～16世紀初

頭に比定できることから、遺構の造営時期も15世紀前葉～16世紀初頭頃と推定できる。

#### SD8 (第95・96図)

**検出状況** AH15～AT17グリッドにおいてⅢ層上面で検出した。平成27年度調査ではAJ16～AT17グリッドにかけて調査を行い、平成28年度調査でその延長をAH15～AJ16グリッドで確認し調査した。重機による表土掘削の際に、I b層によって埋没していたため、掘方の検出が容易にできた。主軸方位は、AJ16～AT17グリッドではN-7°-Wと等高線に直交するように延びるが、AH15～AJ16グリッドでは、N-28°-Wとやや西に振る。平面形状が直線的で、幅がほぼ一定であることから人為的な溝と判断した。北側と南側は発掘区外に延びる。A016～AR17グリッドにかけて6号古墳の墳丘及び周溝を削平している。6号古墳の北側には、古墳時代以降の造成によるSM3(平場)が6号古墳を削平して造営されており、SD8はSM3の東境を成している。また、6号古墳の南側では、SF1と重複しており、これより新しい。

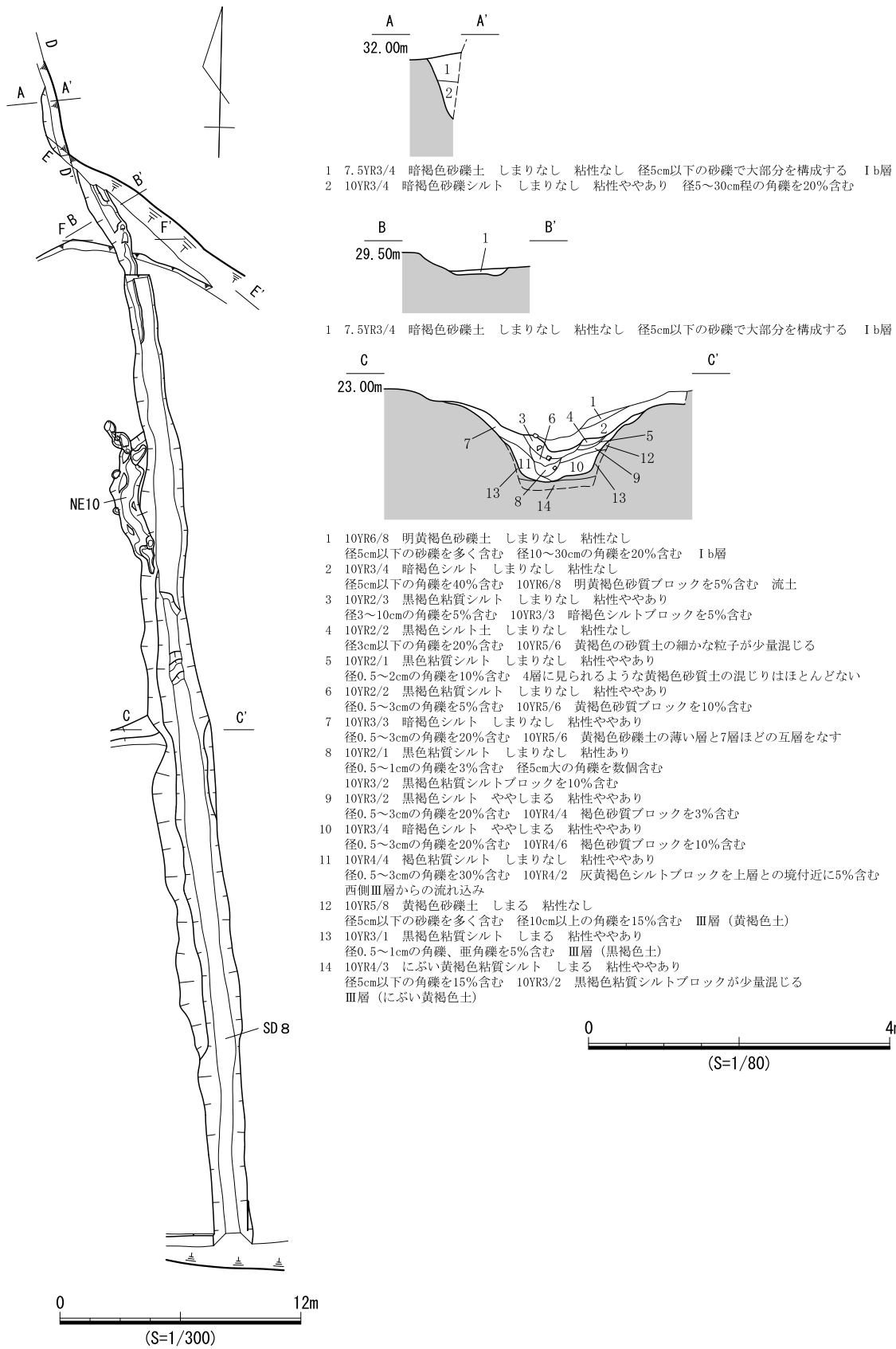
**埋土** 常時水が流れた痕跡は認められない。AM16グリッド以北では比較的浅く、E-E'断面やF-F'断面ではI層によって埋没している様子が観察できた。一方、C-C'断面の土層からは、流土による埋没と掘り直しの状況が確認できる。7・9・10・11層は基盤層と同質の土が層位をなしていることから、壁面及び遺構周辺からの流れ込みによるものと考えられる。一方、3・6・8層は、断面形状がU字形を示すため、人為的に掘り返されたあとに堆積した層と考えられる。4・5層も似た形状であるため、2回掘り直された可能性があるが、土層観察用畦を他に設定していないため、詳細は不明である。

**形状** 全長59m、幅2.7m(C-C'断面)、深さ1.1m(C-C'断面)で断面形状は概ね逆台形である。底面はⅢ層(黒褐色土)とⅣ層(黄褐色土)の互層まで掘り込まれており、崩積性堆積物の堆積状況が壁面で観察できる。壁面は底面からの立ち上がり部分では急傾斜をなすが、掘方の上端では比較的緩やかである。底面はほぼ平坦である。斜面上方では掘方は浅く、A016グリッド以南で深くなり、旧地形の傾斜より底面の傾斜がやや急である。

**遺物出土状況** 6号古墳以南では、6号古墳石室内の須恵器と同時期と思われる須恵器高坏138の破片や、壺139・S字状口縁台付甕140など土師器の細片が出土した。いずれも埋土上層から出土しており、二次的に流入したものと考えられる。

**出土遺物(第98図)** 138は須恵器高坏の脚部である。裾部に向かって強く外反し、脚端部はほぼ垂直な平坦面を形成する。外面中位に2条の浅い凹線が巡る。内外面ともに回転ナデ調整を行い、内面には絞り込み痕跡が残る。畿内6型式に比定される。139～141は土師器である。139は広口壺の口縁部である。端部の垂下拡張はみられず、上方にわずかに拡張する。端部外面に4条の凹線が巡る。140・141は甕である。140はS字状口縁台付甕B類の頸部から口縁部である。頸部外面にはハケのあたりがみえ、外面に炭化物が付着する。141は胴部である。外面にナデ調整とヘラ削り、内面に横ハケとナデ調整を施す。

**遺構の時期** 本遺構は6号古墳を削平していることから、6号古墳築造以降に築造された遺構である。また、平場SM3の東境をなしており、SM3の造成と関係が深く区画溝として同時期に掘削された可能性がある。SD3・SD4とは、平場に伴う溝という共通点と主軸方位の向きなどから何らかの関係性が想起される。また、SD12とは主軸方位がほぼ一致し、規模に共通点がみられるものの、平場を伴っておらず関係性は不明である。

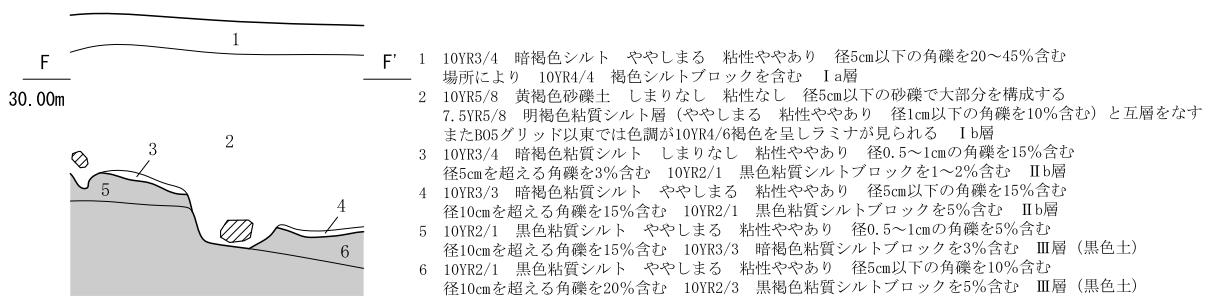


第95図 SD8遺構図(1)

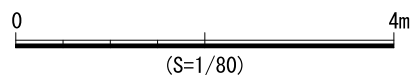


- 1 10YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を30%含む 7.5YR4/6 褐色土ブロックを2%含む I a層
- 2 7.5YR4/6 褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし 径30cm以下の角礫で大部分を構成する  
複数回の流出に伴う堆積と思われるが、厳密に分ける事は困難である。また、発掘区東端では 10YR5/8 明褐色を呈す I b層
- 3 7.5YR3/4 暗褐色砂礫シルト しまりなし 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する I b層
- 4 10YR3/4 暗褐色砂礫シルト しまりなし 粘性ややあり 径5~30cm程の角礫を20%含む
- 5 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径30cm以下の角礫を15%含む 10YR2/1 黒色粘質シルトを15%含む II b層
- 6 10YR1.7/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径15cm以下の角礫を15%含む 径30cmを超える角礫を5%含む III層 (黒色土)

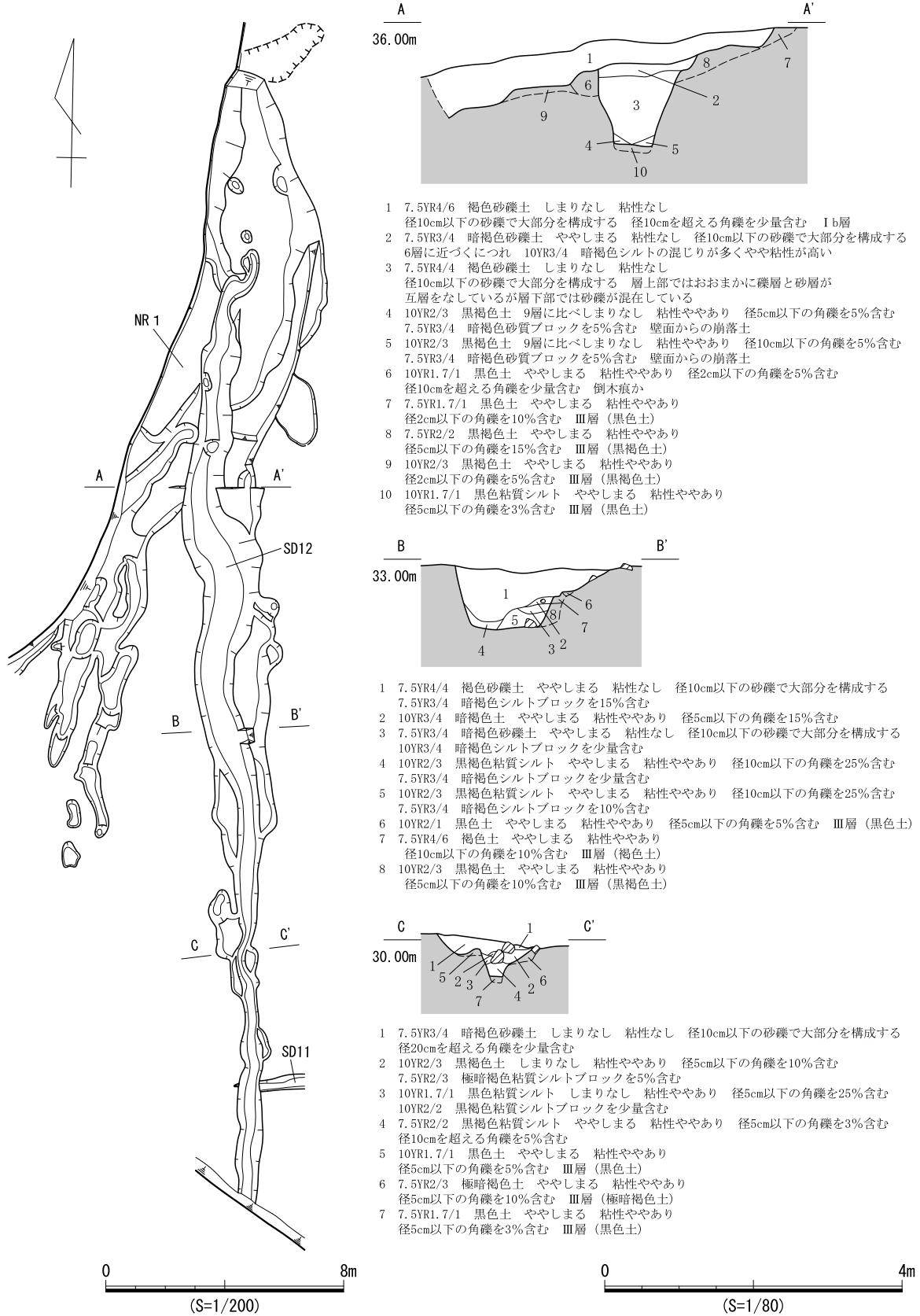
H27年度発掘区壁面土層断面図



- 1 10YR3/4 暗褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20~45%含む  
場所により 10YR4/4 褐色シルトブロックを含む I a層
- 2 10YR5/8 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する  
7.5YR5/8 明褐色粘質シルト層 (ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を10%含む) と互層をなす  
またB05グリッド以東では色調が10YR4/6褐色を呈しラミナが見られる I b層
- 3 10YR3/4 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を15%含む  
径5cmを超える角礫を3%含む 10YR2/1 黒色粘質シルトブロックを1~2%含む II b層
- 4 10YR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を15%含む  
径10cmを超える角礫を15%含む 10YR2/1 黒色粘質シルトブロックを5%含む II b層
- 5 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む  
径10cmを超える角礫を15%含む 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを3%含む III層 (黒色土)
- 6 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を10%含む  
径10cmを超える角礫を20%含む 10YR2/3 黒褐色粘質シルトブロックを5%含む III層 (黒色土)



第96図 SD8遺構図(2)



第 97 図 SD12 遺構図

SD12 (第97図)

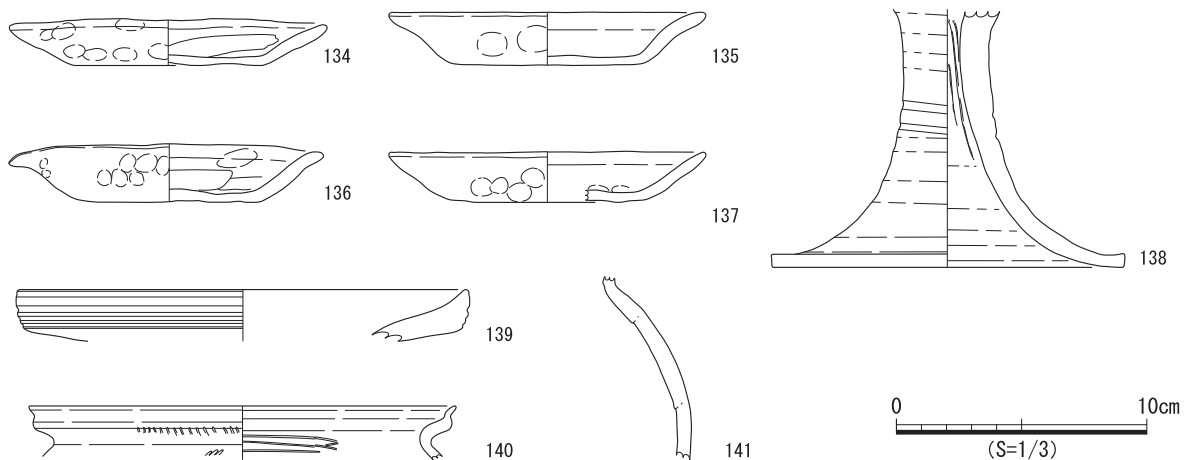
**検出状況** AF8～AM8グリッドにおいてⅢ層上面で検出した。等高線に直交する方向に伸び、AJ8グリッド以南では特に直線的で、南側は発掘区外に伸びる。AH8グリッド以北では、現況の谷によって削平されたのち、Ⅰ層によって埋没しており掘方の残存状況は良くない。主軸方位は、AJ8グリッド以南は南北軸とほぼ一致するが、以北ではやや西に振りながら蛇行する。AL8グリッドでSD11と重複しており、これより古い。

**埋土** 常時水が流れた痕跡はみられない。A-A'断面では、最下層に掘方の崩れに伴うと思われる黒褐色土の堆積(4・5層)が僅かに見られるが、大半が砂礫土(Ⅰ層)によって埋没している。礫の大きさやしまりから3層に分層できる。堆積と浸食を繰り返して現況地形となったと考えられる。B-B'断面では、堆積状況から掘り直しが1回行われた可能性があるが、A-A'断面及びC-C'断面では掘り直された痕跡は確認できなかったため、その範囲は限定的なものであろう。

**形状** 全長32m、幅はA-A'断面で1.35m、B-B'断面で2.08m、C-C'断面で1.32m、深さはそれぞれ1.08m、0.83m、0.49mである。平面形は帯状に伸びるが、幅は一定しておらず、AH8～AI8グリッドにかけて幅が最も広く、それより斜面下方では次第に先細る。AH8グリッド以北は、現況の谷によって削平されているため、本来の形状は不明である。北端はやや蛇行しながら次第に先細るようにして消滅する。断面形状は、概ね逆台形である。A-A'断面では上部を削平されているが、残存部の掘方は明瞭で、底面は平坦で壁面は急傾斜を成しており深さも1mを超える。AG8～AJ8にかけては掘方が2段となり、やや蛇行しながら幅広となるが、上段は人為的な掘方ではなく、流水によって浸食されたものと判断した。南に向かうにつれて次第に浅くなり、幅も狭くなる。底面の基盤は黒色から黒褐色土の互層であることが壁面で確認できる。またAH8グリッド以北でも削平されているため、掘方は浅い。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** SD8とは主軸方位及び規模に共通点がみられるが、立地する斜面が異なることから、埋没時期は異なる可能性が高い。SD11との重複関係から、SD11より古いのが、遺物が出土していないため、時期の特定はできない。



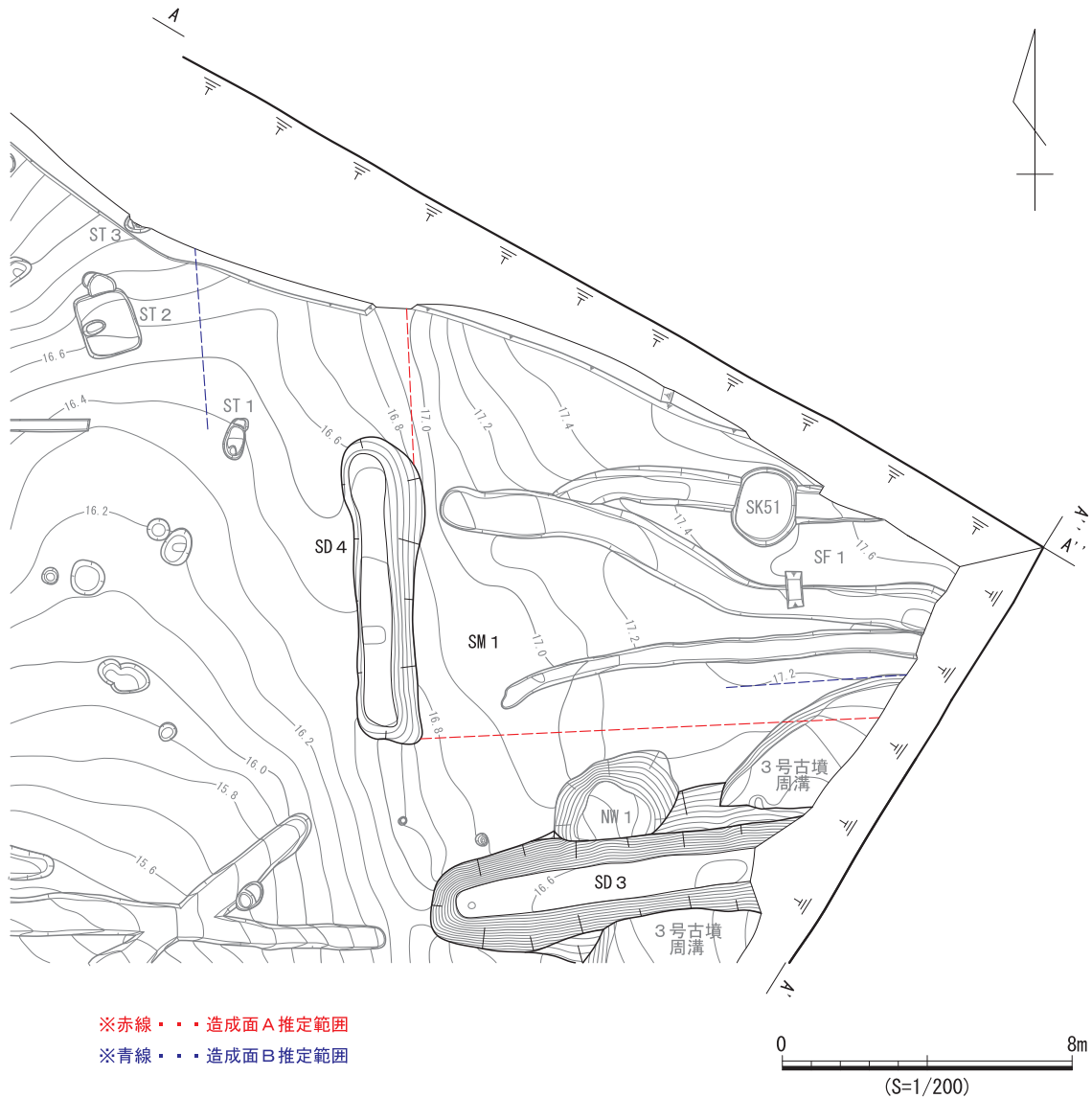
第98図 SD4・8出土遺物

7 平場

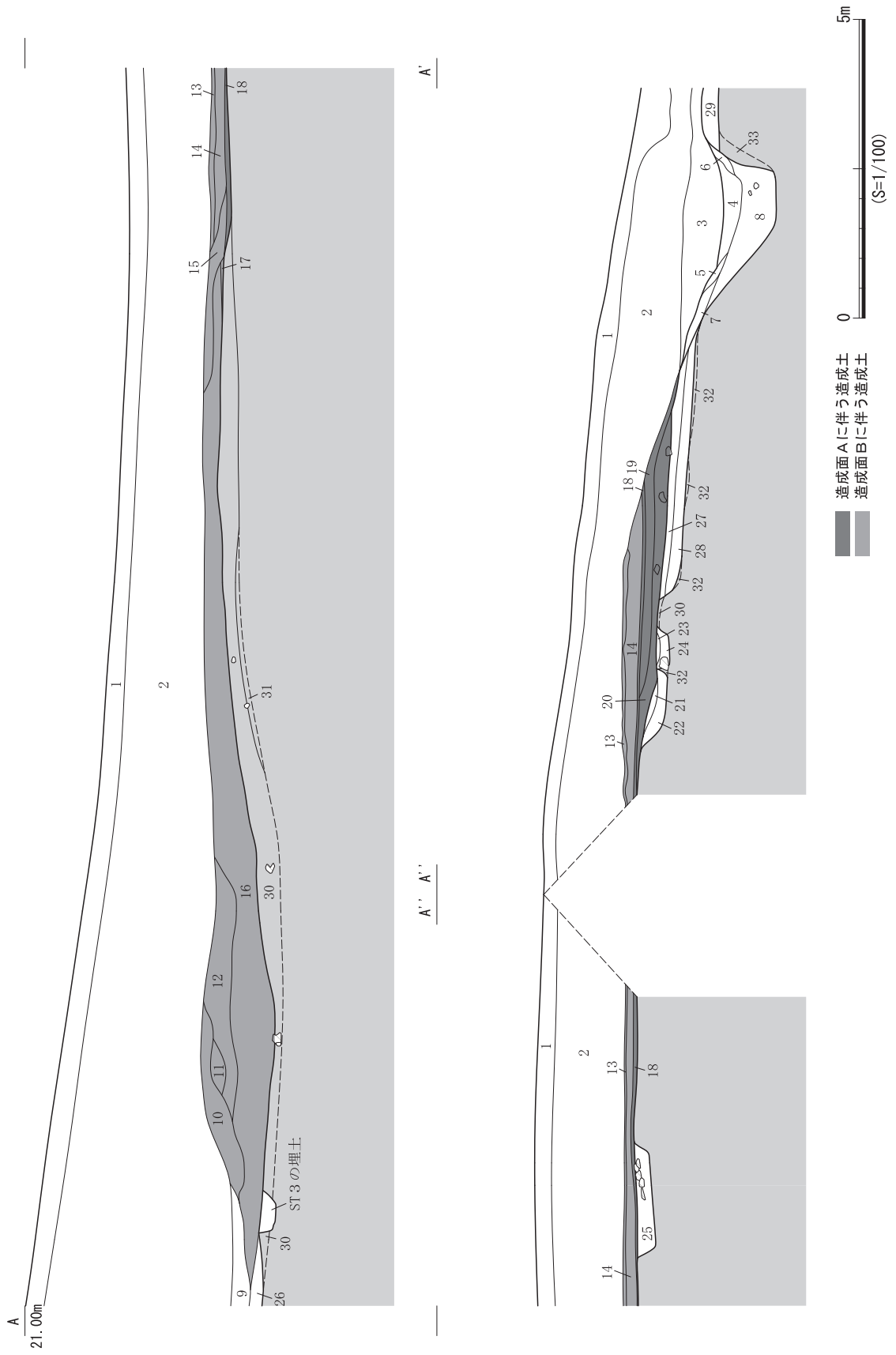
平成 27 年度の調査において、大規模な造成に伴う平場を 3 箇所 で 4 面確認した。

SM 1 (第 99~101 図)

**検出状況** 当遺構は、BP 5~7、BQ 6~9、BR 6~9、BS 6~8 グリッドで確認した。重機による表土掘削後、旧谷地形の底にあたる B0 4 グリッドから BS 8 グリッドにかけて、色調が一樣でなく礫を多く含む堆積を確認し、堆積状況から流土と判断した。この堆積は広範囲にわたっており、また層厚が厚いことが予想されたため、遺物に注意しながら重機で掘削を行った。その後、SD 3 を検出したことで、SM 3 と SD 8 の関係と同様に、溝によって区画された平場の可能性を想定した。壁面精査によって上下 2 面の平場を確認し、堆積土は流土ではなく平場の造成に伴う造成土 (Ⅱa 層) であることが分かった。この時点では既に造成土の大半が失われており、平場上面の遺構については不明である。造成範囲については、以下、下面の平場を「造成面 A」、上面の平場を「造成面 B」という。



第 99 図 SM 1 遺構図 (1)



第100図 SM1遺構図(2)



- 1 10YR3/4 暗褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20～45%含む  
場所により 10YR4/4 褐色シルトブロックを含む 表土 I a層
- 2 10YR5/8 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する  
7.5YR5/8 明褐色粘質シルト層(ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を10%含む)と互層をなす  
またB05グリッド以東では色調が10YR4/6褐色を呈しラミナが見られる I b層
- 3 10YR4/4 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を2%含む 径5cmを超える角礫を2%含む
- 4 7.5YR3/4 暗褐色粘土 ややしまる 粘性あり 径1cm以下の角礫を層状に1%含む SD 3埋土
- 5 10YR3/4 暗褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 10YR3/2 黒褐色粘質シルトブロックを少量含む SD 3埋土
- 6 7.5YR4/6 褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を少量含む 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルトブロックを少量含む SD 3埋土
- 7 10YR4/4 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 10YR3/2 黒褐色粘質シルトブロックを5%含む SD 3埋土
- 8 10YR3/4 暗褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を35%含む 径10cmを超える角礫を5%含む  
10YR5/6 黄褐色砂質土を5%含む SD 3埋土
- 9 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20%含む 径10cmを超える角礫を3%含む  
10YR4/4 褐色シルトブロックを5%含む II b層
- 10 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を15%含む 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを1～2%含む II a層
- 11 10YR3/3 暗褐色シルト しまりなし 粘性なし 径5cm以下の角礫を30%含む 10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを5%含む II a層
- 12 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を15%含む 径5cmを超える角礫を3%含む  
10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを5%含む II a層
- 13 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む 10YR3/4 暗褐色粘質シルトブロックを斑状に5%含む  
BQ9グリッド以南では10YR4/2 灰黄褐色シルトを10%含む II a層
- 14 10YR4/6 褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する 径10cmを超える角礫を5%含む  
BQ9グリッド以南では黄褐色の色調が強くなる また10YR3/2 黒褐色粘質シルト土を10%含む II a層
- 15 10YR2/3 黒褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を15%含む 径5cmを超える角礫を3%含む  
10YR4/6 褐色粘質シルトブロックを5%含む II a層
- 16 10YR2/3 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を30%含む 径10cmを超える角礫を10%含む  
10YR3/3 暗褐色シルトブロックを10%含む II a層
- 17 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を5%含む 10YR4/4 褐色シルトブロックを5%含む II a層
- 18 10YR2/3 黒褐色シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を3%含む 径5cmを超える角礫を1～2%含む  
BQ9グリッド以南では10YR3/3 暗褐色シルトブロックを5%含む II a層
- 19 10YR3/3 暗褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20%含む 径10cmを超える角礫を5%含む II a層
- 20 10YR3/3 暗褐色シルト しまりなし 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を15%含む 径10cmを超える角礫を20%含む  
10YR4/4 褐色シルト土を5%含む II a層
- 21 10YR2/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 硬化が見られる SF 1 硬化面 2 に伴う堆積
- 22 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む SF 1 硬化面 2 に伴う堆積
- 23 21層と同質 SF 1 硬化面 1 に伴う堆積
- 24 22層と同質 SF 1 硬化面 1 に伴う堆積
- 25 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を5%含む 径10cmを超える角礫を5%含む SF 1 硬化面 3 に伴う堆積
- 26 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5～3cmの角礫を7%含む 径5cmを超える角礫を3%含む  
10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを5%含む II b層
- 27 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を7%含む 径5cmを超える角礫を3%含む  
10YR3/3 暗褐色シルト土を3%含む 3号古墳周溝埋土
- 28 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5～2cmの角礫を5%含む 径10cmを超える角礫を3%含む  
10YR4/4 褐色シルト土を少量含む 3号古墳周溝埋土
- 29 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5～2cmの角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を5%含む  
10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを5%含む 3号古墳周溝埋土
- 30 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 径10cmを超える角礫を5%含む 旧表土 III層(黒色土)
- 31 10YR3/3 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を5%含む  
10YR2/2 黒褐色粘質シルトブロックを5%含む III層(暗褐色土)
- 32 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を5%含む III層(黒褐色土)
- 33 10YR5/8 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の砂礫で大部分を構成する III層(黄褐色土)

### 第101図 SM1 遺構図(3)

**造成面A** 造成面AはBP6～BR8グリッドにかけて確認した。確認できる規模は東西15m、南北12.6mであるが、発掘区北壁及び東壁の土層断面に造成土の堆積が確認でき、その範囲は発掘区外に広がる。南はSD3に、西はSD4によって区切られる。造成面Aに伴う造成土(第100図18～20層)は、黒褐色から暗褐色で礫の混入が多い。造成土の層厚は、厚いところで約0.5mである。ほぼ水平に堆積し、南側はSD3に向かって緩やかに傾斜する。造成土はSD3以北の3号古墳周溝、SF1、SK51を覆っていたが、SD3とは重複しておらず、また発掘区北壁の土層断面では、SD4の西側には堆積しないことを確認した。このことから、造成面AはSD3より北側で、SD4より東側に構築されたと推測する。

**造成面B** 造成面BはBP5グリッド以東に広がる。発掘区北壁で確認できる東西規模は19.6mであり、その範囲は造成面Aと同様に発掘区外に広がる。造成面Bに伴う造成土(第100図10～17層)は、発掘区北壁及び東壁の土層観察から、BP6グリッド以東では造成面Aの上に盛られていることを確認した。黒色・黒褐色・暗褐色・褐色で、主にシルト質の堆積であるが、造成面Aの上面には約0.1～0.3mの厚さで褐色砂礫土(第100図14層)がほぼ水平に堆積しており、意図的に土質の異なる土を敷設した可能性がある。造成面Aに伴う区画溝と考えられるSD4は、造成面Bに伴う造成土によって最終的に埋没したと考えられるが、SD3については継続して区画の役割を果たしている。造成土の層厚は、

旧谷地形の底付近では1.23mに達し、西端はST3を覆っている。ST3に近接するST1及びST2についても、検出時に色調に混じりの多い土を周辺で確認していたことから、造成土に覆われていたと推測されるが、造成土の南端については確認できなかった。

**遺物の出土状況** 発掘区北壁の精査時に、造成面Bに伴う造成土（第100図16層）から土師器皿の破片2点が出土した。

**出土遺物（第105図）** 142は口縁部がやや厚く、体部は外反するが一様ではない。外面にユビオサエがみられる。内面にはナデを施す。143は口縁部がやや厚く、体部はわずかに外反するが142より弱い。外面にはユビオサエがみられ、内面にはナデを施す。142・143ともにB-1類に分類した。

**遺構の時期** 造成面Aに伴う遺物はなかったが、SD4が造成面Aに伴う区画溝の役割を果たしていたと推測するならば、SD4埋土から土師器皿（B-1類）が出土したため、遺構の時期は15世紀前葉から16世紀初頭頃と考えたい。一方、造成面Bについては、造成土内の遺物がB-1類と比定でき、また同じ造成土によって埋没したと推測されるST2の時期も、15世紀中葉に位置付けられることから、造成面Bの構築時期は15世紀末から16世紀中葉頃と考えたい。

#### SM2（第102図）

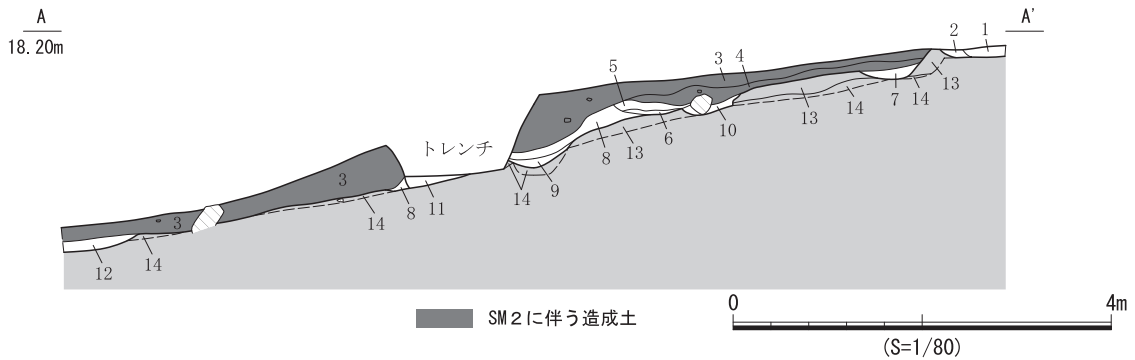
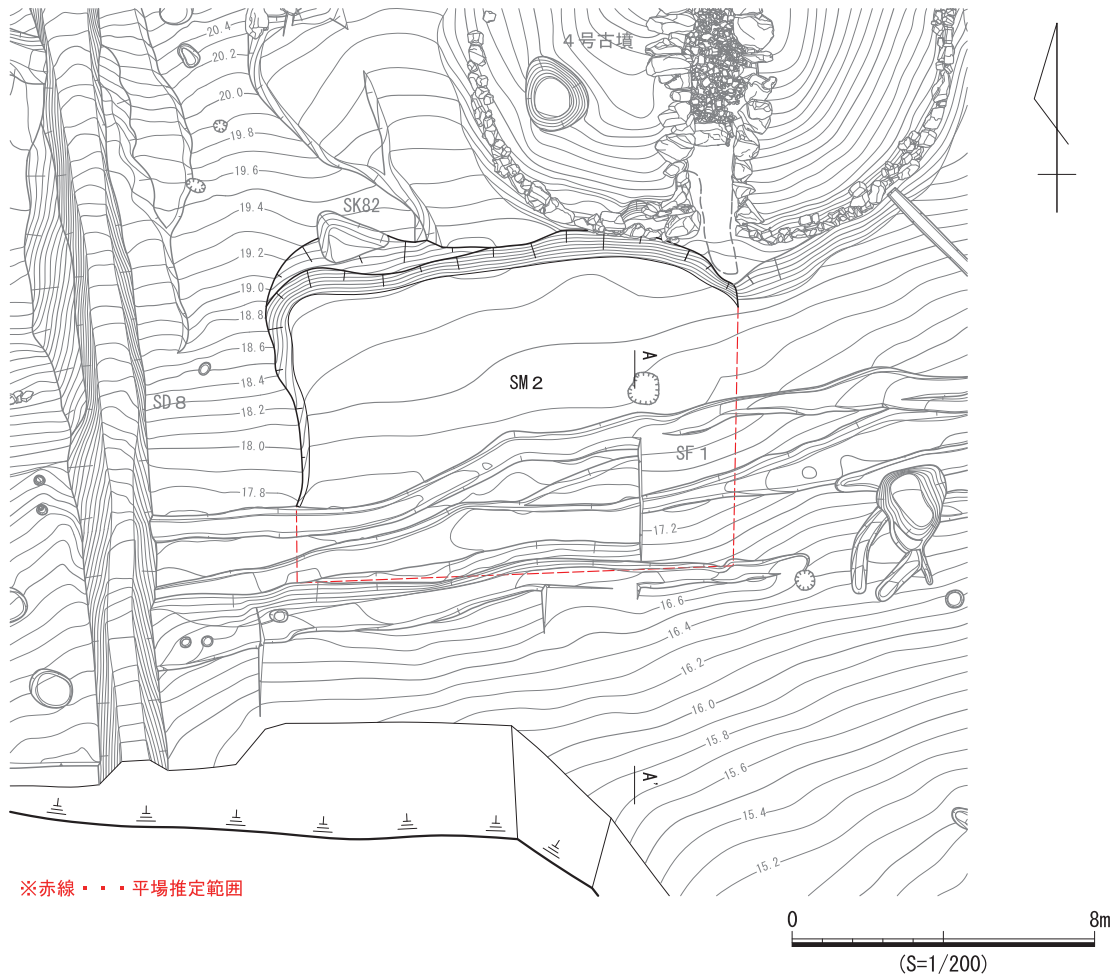
**検出状況** 表土掘削時に4号古墳の石室入口付近から斜面下方側でI層の堆積が厚くなっていることを確認した。I層を除去したところ、4号古墳の石室入口から西へ、黒色土の基盤層を掘り込んで段切り造成を行っていることが分かった。段切りによって形成された北壁は、等高線にほぼ平行で東西方向に延びており、東端は4号古墳の石室入口手前でやや弧を描きながら南方向に向きを変えている。一方西端は東端に比べ残りが良く、隅丸ながらほぼ直角に近い角度で南方向に屈曲している。4号古墳の周溝の南西端を削平しているが、墳丘南西側の外護列石及び墳丘盛土には手をつけておらず、意図的に墳丘を外していると思われる。北壁付近は、斜面上方からの流土によって緩やかに埋没していた。人力掘削で流土を除去したところ、北壁はほぼ垂直に近い形状で約1m掘り込まれており、排土は斜面下方の南側に盛り、平場の造成に利用されたと推測される。

**埋土** 平場を覆う埋土については、遺物包含層と誤認して掘削したため、記録に残すことができなかった。

**平場** 平場の規模は推定で、東西約12m、南北約8.5mである。北端から南へ約4～5mは、Ⅲ層（黒色土）の粘質シルトを削平してできた平坦面であり、西側で広い。北西部では、掘削がⅢ層（黒色土）の下層のⅣ層（褐色土）にまで達していた。南側は、段切りによる排土を造成土（3・4層）として盛って平坦面を形成している。土層観察から造成土は造成面推定ラインの南端から5m南でも確認できた。平場上に遺構はみられなかった。造成土によってSF1が埋没しており、先後関係が明らかとなった。

**遺物出土状況** 調査時には遺物包含層と造成土を区別していなかったため、遺物包含層遺物として取り上げたが、出土座標から造成土に含まれていたと考えられる遺物が、須恵器片3点、土師器片6点ある。ただし、土師器片は実測に耐えうるものがなかった。これらのうち、須恵器2点を図示した。

**出土遺物（第105図）** 144は須恵器坏身である。内外面共にナデ調整を施す。145は有台坏である。底部は平坦で体部との境に稜を有し、体部は低くやや外反しながら直線的のびて、端部は丸く収める。高台は低くハの字状に伸び、断面形状は矩形を示し、底部端からやや内側に貼り付ける。底部外



- 1 10YR5/6 黄褐色砂礫土 ややしまる 粘性なし 径5cm以下の角礫を多く含む 攪乱
- 2 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を3%含む 10YR5/6 黄褐色砂質土と互層をなす 攪乱
- 3 2.5Y2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を10%含む 径5cmを超える角礫を1%含む
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト土を2%含む SM2に伴う造成土 II a層
- 4 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~2cm以下の角礫を5%含む 径5cm大の角礫を少量含む
- 10YR4/6 褐色粘質シルトを斑状に30%含む SM2に伴う造成土 II a層
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を2%含む 10YR3/2 黒褐色粘質シルトを少量含む SF1に伴う埋土
- 6 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5cm以下の角礫を15%含む 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土を含む SF1に伴う埋土
- 7 10YR2/1 黒色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を5%含む SF1に伴う埋土
- 8 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を3%含む 10YR4/4 褐色粘質シルトを斑状に20%含む SF1に伴う埋土
- 9 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫・亜角礫を層上部に25%含む SF1に伴う埋土
- 10 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を3%含む 径20cmを超える礫を含む SF1に伴う埋土
- 11 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を5%含む 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト土を少量含む トレンチ残土
- 12 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を3%含む II b層
- 13 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cmの角礫を5%含む III層 (黒色土)
- 14 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む III層 (黒褐色土)

第102図 SM2遺構図

面には回転ヘラ削り痕がみとめられ、体部は内外面ともナデ調整を施す。美濃須衛産とみられ、美濃須衛窯編年のIV期第2小期後半から第3小期前半に比定される。

**遺構の時期** 造成土から出土した須恵器145は8世紀後半に属するが、混入と判断したため平場の築造時期の根拠にはならない。規模やSM1・SM3との類似性から、SM1・SM3と同時期の15世紀前葉から16世紀中葉と考えたい。

### SM3（第103・104図）

**検出状況** 表土掘削時に、A013からA016グリッドにかけてI層が斜面下方側で一段下がる落ち込みを確認した。AN14からA014グリッドとAN15からA015グリッドにかけて、下層確認のためにグリッド杭に沿って南北方向に幅0.4mほどのトレンチを設定し掘削したところ、SI1の南側で基盤層を急傾斜で深さ1mほど掘り込み、底面がほぼ水平に削平された平坦面を確認し、段切り造成された平場であることが分かった。段切りによって形成された北壁付近は、I層堆積以前に斜面上方からの流土によって緩やかに埋没していた。平場は北壁を北端とし、東端はSD8によって区切られ、西端は平成27年度発掘区西壁の手前で、北西の隅部とそこから南に延びる掘方を検出した。さらに、南側は6号古墳の墳丘を削平し、その排土で周溝の一部を埋めながら造成が行われていた。なお、南西端については、平成28年度調査時にも造成面の確認を試みたが、その堆積を確認できなかったため、平場の西端は平成27年度発掘区壁面にわずかに入ったあたりで終息していたと思われる。

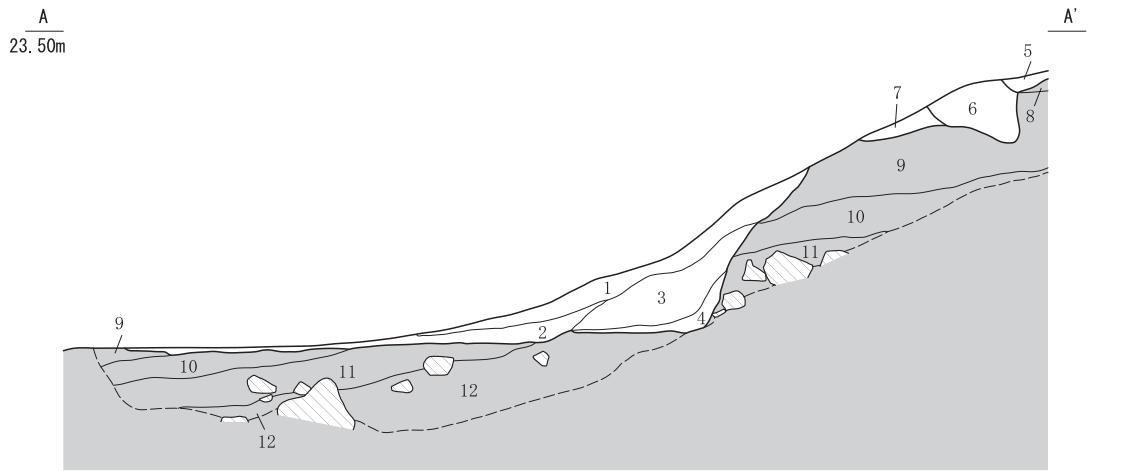
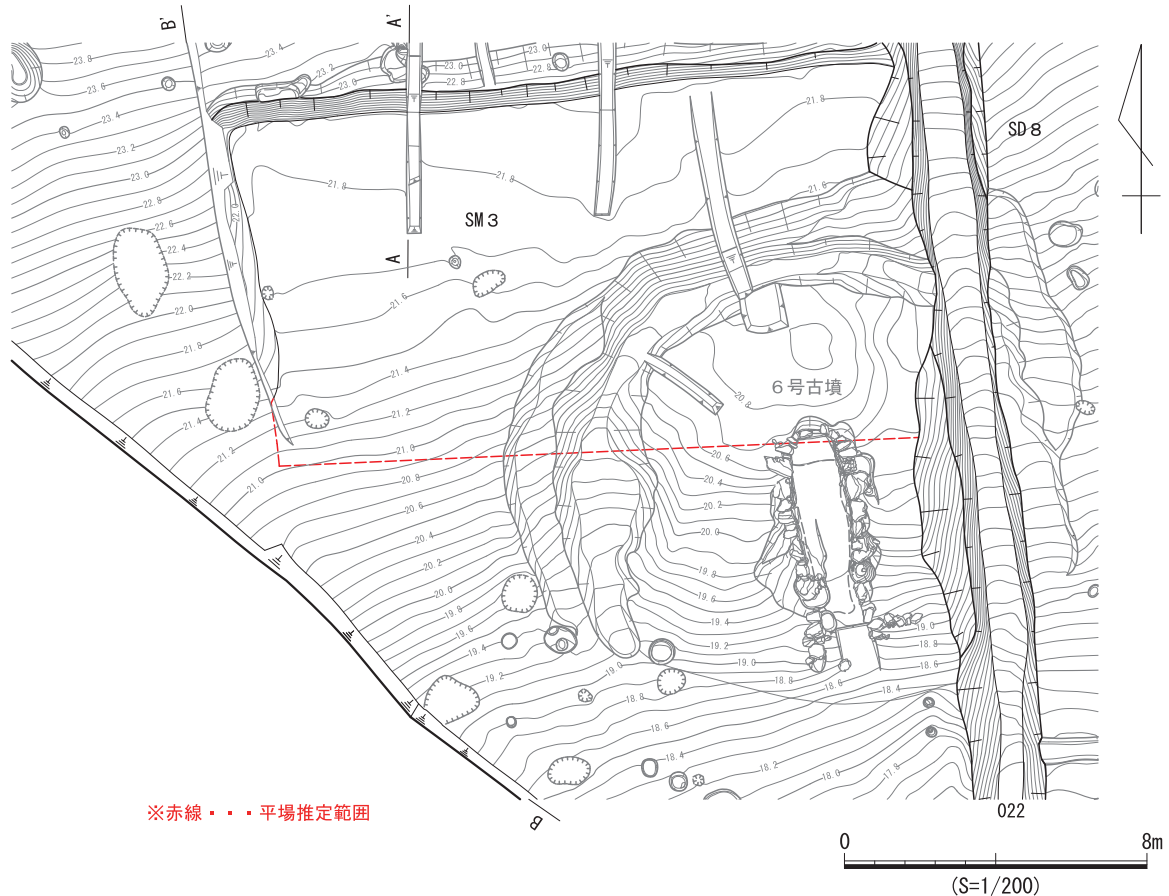
**埋土** 平場を覆う埋土については、遺物包含層と誤認して掘削したが、トレンチの土層断面から堆積状況の一部を確認できた。北壁から南へ3.5m付近にかけて、土層断面の断面形状が三角形で、基盤層に類似する黒褐色粘質シルトや黄褐色砂礫土など（第103図1～4層）が緩やかに堆積していることから、斜面上方の基盤層が浸食されて流出したものと思われる。その上層にはI層が堆積しており、平場の南部では主にI層のみによって埋没していた。

**平場** 平場の規模は、北壁際で東西約18m、南北は推定で約9.2mである。北壁付近では明黄褐色の砂礫土層まで掘り込まれており、段切りの深さは0.96mである。また、平成27年度発掘区西壁では、この造成に伴う造成土の堆積層（第104図5～7層）が、平場南端の推定ラインから南へ約8.5mの地点まで確認できる。上面では遺構は確認できなかった。北端はSI1の南端を削平し、平場の東端とともにSD8によって途切れている。

**遺物出土状況** 調査時には遺物包含層と造成土を区別できなかったため、遺物包含層遺物として取り上げた。厳密に区別できないため、遺物包含層遺物の項（第3章第4節）で取り上げる。

**遺構の時期** 遺構の時期を特定できる遺物が出土していないが、土地の改変という共通性や平場の規模、区画に伴うと考えられる溝を伴うことなどを勘案し、SM1やSM2と同時期の15世紀前葉から16世紀中葉頃に築造されたものと考えたい。

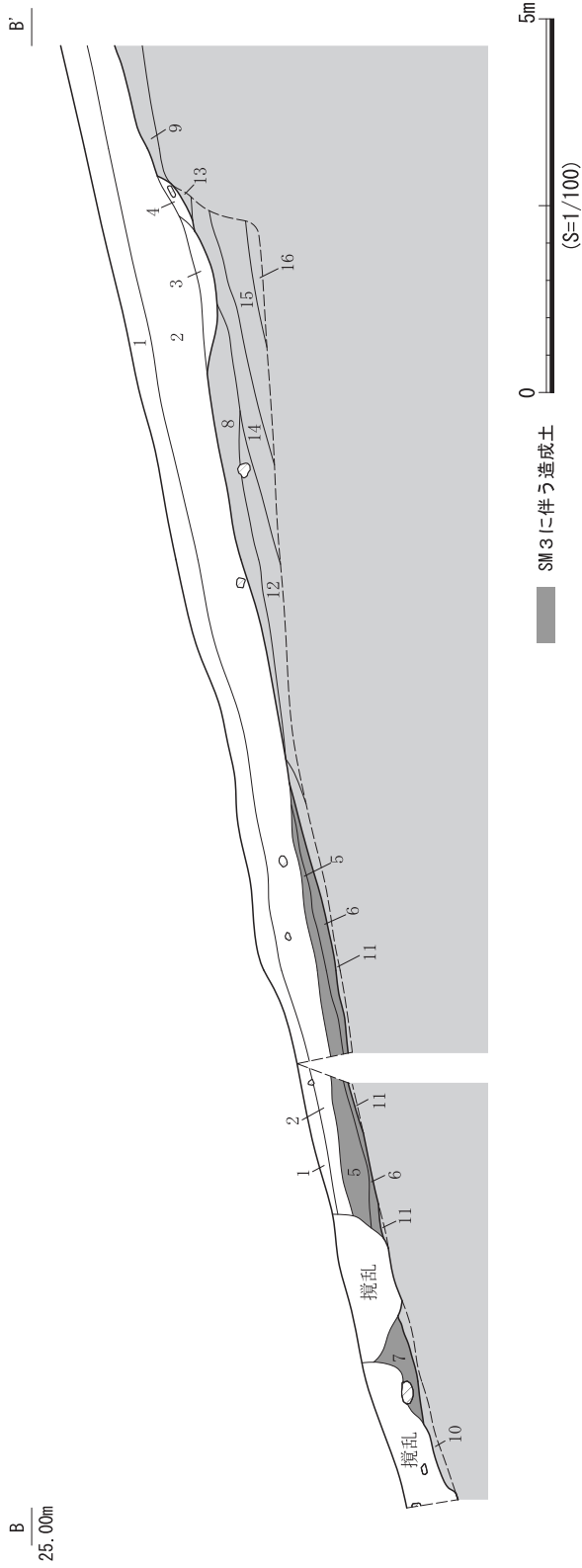
**遺構の性格** SM1～3は、規模や立地する標高が類似した平場であり、近い時期に相次いで造られたと推測されるが、平場上面で遺構を確認できなかったため、性格については不明である。しかし、平場の造成前には、周囲でST1～4のような火葬施設が造られており、この場所が古墳時代以降、墓地として利用されてきたと考えるならば、平場の造成も墓地の造営などを企図して行われた可能性も考えられる。



- 1 10YR2/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を20%含む 10YR4/3 にぶい黄褐色ブロックを1~2%含む IIb層 所々に10cmを越える石を含む
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を3%含む 10YR4/3 にぶい黄褐色ブロックを3%含む 粒子が細かい
- 3 2.5Y5/6 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性ややあり 2.5Y4/2 暗灰黄色の粒子の細かいシルトを10%含む
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 10YR5/6 黄褐色砂質土を2~3%含む
- 5 2.5Y5/6 黄褐色砂礫土 ややしまる 粘性なし 2.5Y4/2 暗灰黄色のシルトブロックを15%含む SI 1 整地土
- 6 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を3%含む 10YR4/2 灰黄褐色ブロックを2%含む 倒木痕
- 7 10YR4/2 灰黄褐色シルト しまりなし 粘性なし 径2cm以下の角礫を3%含む 倒木痕
- 8 10YR3/4 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を10%含む 10YR2/2 黒褐色粘質シルトブロックを5%含む III層 (暗褐色土①)
- 9 10YR6/8 明黄褐色砂礫土 ややしまる 粘性なし 径10cm以下の角礫を多く含む 20cmを越える石を含む III層 (明黄褐色土①)
- 10 10YR3/4 暗褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の角礫を2%含む 10YR5/6 黄褐色ブロックを2%含む III層 (暗褐色土②)
- 11 10YR4/4 褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を3%含む 30cmを越える石が点在する III層 (褐色土)
- 12 10YR6/8 明黄褐色砂礫土 17層と比べしまりあり 粘性ややあり 径10cm以下の角礫を多く含む 30cmを越える石が点在する III層 (明黄褐色土②)

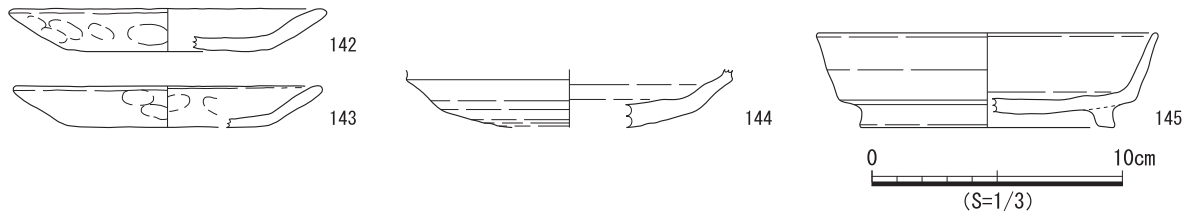
第103図 SM3遺構図(1)

H27年度発掘区西壁土層断面図



- 1 10YR3/4 暗褐色シルト ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の角礫を20～45%含む 場所により 10YR4/4 褐色シルトプロットを含む 表土 Ia層
- 2 10YR5/8 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト層 (ややしめる 粘性ややあり 径1cm以下の角礫を10%含む) と互層をなす またB05クリット以东でほ色調が10YR4/6褐色を呈しラミナが見られる Ib層
- 3 10YR5/8 黄褐色砂礫土 しまりなし 粘性なし 径5cm以下の砂礫で大部分を構成す 10YR3/2 黒褐色粘質シルト層 (しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を10%含む) と互層をなす
- 4 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり 径3cm以下の角礫を5%含む 10YR3/3 暗褐色粘質シルトプロットを3%含む
- 5 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5～5cmの角礫を20%含む 径10cmを超える角礫を5%含む 10YR2/1 黒色粘質シルトプロットを10%含む
- 6 10YR4/4 褐色粘質シルトプロット ややしめる 粘性ややあり SM3に伴う造成土 IIa層 径10cmを超える角礫を10%含む 10YR2/1 黒色粘質シルトプロットを少量含む
- 7 10YR3/4 暗褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5～5cmの角礫を20%含む 10YR2/1 黒色粘質シルトプロットを少量含む
- 8 10YR2/3 褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり SM3に伴う造成土 IIa層 径10cmを超える角礫を15%含む 10YR2/1 黒色粘質シルトプロットを少量含む
- 9 10YR2/1 黒色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5～3cmの角礫を15%含む 径10cmを超える角礫を7%含む 10YR2/3 黒褐色粘質シルトプロットを少量含む 旧表土 III層 (黒色土)
- 10 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5～3cmの角礫を15%含む 10YR4/4 褐色シルトプロットを少量含む III層 (黒褐色土)
- 11 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5～2cmの角礫を10%含む 10YR3/3 暗褐色粘質シルトプロットを少量含む III層 (黒褐色土)
- 12 10YR2/3 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5～3cmの角礫を10%含む III層 (黒褐色土①)
- 13 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5～1cmの角礫を7%含む 10YR3/3 暗褐色粘質シルトプロットを少量含む III層 (黒褐色土②)
- 14 10YR4/6 褐色砂礫土 ややしめる 粘性なし 径3cm以下の砂礫で大部分を構成する 径10cmを超える角礫を1～2%含む 10YR4/4 褐色粘質シルトプロットを少量含む III層 (褐色土)
- 15 10YR3/2 黒褐色粘質シルト ややしめる 粘性ややあり 径0.5～3cmの角礫を5%含む 径10cmを超える角礫を1～2%含む 10YR5/8 明褐色や 10YR5/8 黄褐色を呈する III層 (黒褐色土②)
- 16 10YR5/6 黄褐色砂礫土 ややしめる 粘性ややあり 径5cm以下の砂礫で大部分を構成する 径10cmを超える角礫を5%含む III層 (黄褐色土)

第104図 SM3遺構図(2)



第105図 SM1・2出土遺物

## 8 土坑

今回の調査では、113基の土坑を確認したが、その大半は遺物を伴わない。また、遺物を伴う土坑4基についても、時期・性格を判断するにいたらなかった。

### SK51・SK79・SK93・SK95 (第106図)

SK51は、BQ8グリッドにおいてⅢ層上面で検出した。SF1と重複しており、これより新しく、SM1の造成面Aの造成土によって覆われていた。平面形は円形で比較的大きく、断面形は皿状である。埋土は4層を確認した。チャート礫や土色の異なる土が混じる堆積が目立ち、被熱による割れを伴う砂岩の円礫1点を含む。SM1の造成以前の遺構であるが遺構の性格は不明である。

SK79は、AR16グリッドにおいてⅢ層上面で検出した。6号古墳の墳丘東南に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形である。埋土は2層で水平な堆積を成し、土器片を1点含むが斜面上方からの流入に伴うものと思われる。

SK93は、AR15グリッドにおいてⅢ層上面で検出した。6号古墳の墳丘と重複しており、これより新しく、6号古墳墳丘からの流土若しくはSM3の造成土によって覆われていた。平面形は円形で、断面形は皿状である。埋土は3層を確認した。埋土はしまりがなく、2層は周囲の土色と明らかに異なる。土師器片2点が出土したが、6号古墳墳丘にも同様の土師器片が混じることから、斜面上方からの流入に伴う遺物と判断した。

SK95は、AR14グリッドにおいてⅢ層上面で検出した。6号古墳周溝のすぐ南に位置する。6号古墳墳丘からの流土若しくはSM3の造成土によって覆われていた。平面形は楕円形に近く、断面形は皿状であるが、底面が不整形で根痕に伴う可能性もある。埋土は単層で均質である。土師器片6点が出土したがSK79やSK93と同様に斜面上方からの流入に伴うものと思われる。

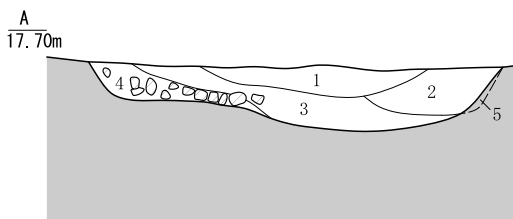
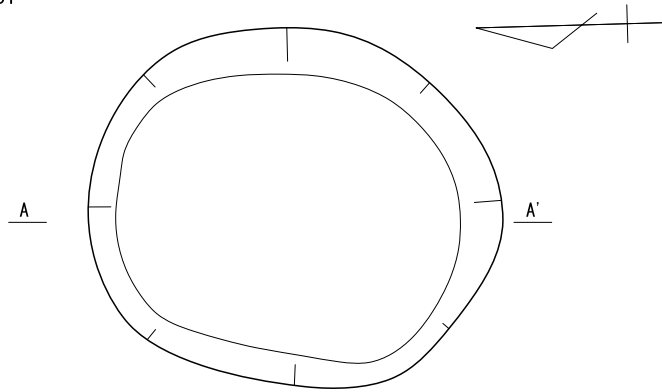
**遺物出土状況** SK51・SK79・SK93・SK95からは土師器片が出土したが、実測に耐えうるものは少なく、SK93から出土した146とSK95から出土した147を実測対象とした。

**出土遺物 (第107図)** 146・147はS字状口縁台付甕の脚台部の破片である。脚台部外面には縦位のハケ目を施し、胴部に脚台部を貼り付けた痕跡が確認できる。

## 9 試掘坑・攪乱坑・遺物包含層・表土層出土遺物 (第108～110図)

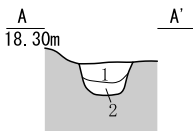
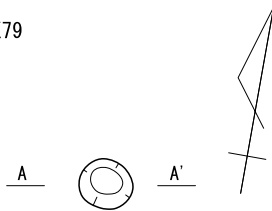
平成26年度の試掘・確認調査では、TP2から石鏃、TP5から土師器が出土したが、土師器は細片で実測対象とはしなかった。攪乱坑からは土師器・須恵器・近世陶器・石器などが出土した。遺物包含層及び表土層からは、弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・石器が出土した。遺物包含層遺物のうち80%にあたる445点は、AP13～AS17グリッドに集中しており、429点が弥生土器・土師器である。この範囲は、平場SM3の造成土の範囲と大部分重複するが、造成土を遺物包含層と誤認して掘削したため、造成土中の遺物についても遺物包含層遺物として取り上げている。なお、攪乱坑及び遺物包含

SK51



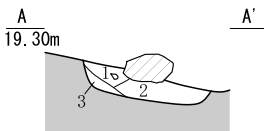
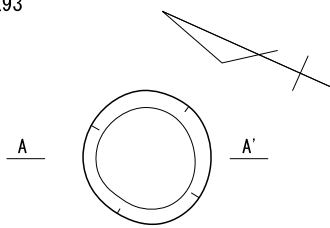
- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり  
径0.5~5cmの角礫を15%含む  
10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを3%含む
- 2 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり  
径0.5~3cmの角礫を5%含む  
10YR4/4 褐色シルトを一部帯状に含む
- 3 10YR1.7/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性あり  
径0.5~1cmの角礫を3%含む
- 4 10YR2/3 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり  
径10cm以下の角礫を35%含む  
10YR4/4 褐色シルトブロックを10%含む  
砂岩質の被熱によって割れたと思われる15cm程の礫を含む
- 5 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる 粘性ややあり  
径0.5~1cmの角礫を3%含む III層(黒褐色土)

SK79



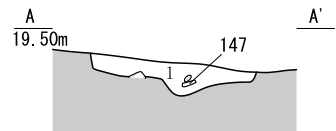
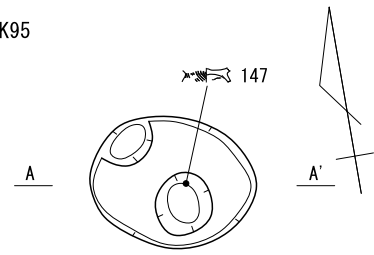
- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし  
粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を2%含む  
10YR4/6 褐色シルトブロックを少量含む
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし  
粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を2%含む  
10YR4/6 褐色シルトブロックを3%含む

SK93

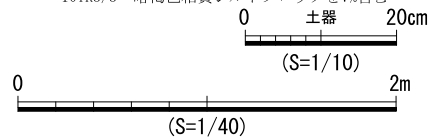


- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし  
粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を3%含む  
径5cm大の角礫を少量含む  
径20cmを超える礫を少量含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト しまりなし  
粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を5%含む
- 3 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりなし  
粘性ややあり 径0.5~1cmの角礫を少量含む

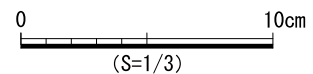
SK95



- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト ややしまる  
粘性ややあり 径5cm大の角礫を少量含む  
径0.5~1cmの角礫を7%含む  
10YR3/3 暗褐色粘質シルトブロックを7%含む



第106図 SK51・SK79・SK93・SK95 遺構図



第107図 SK93・SK95 出土遺物



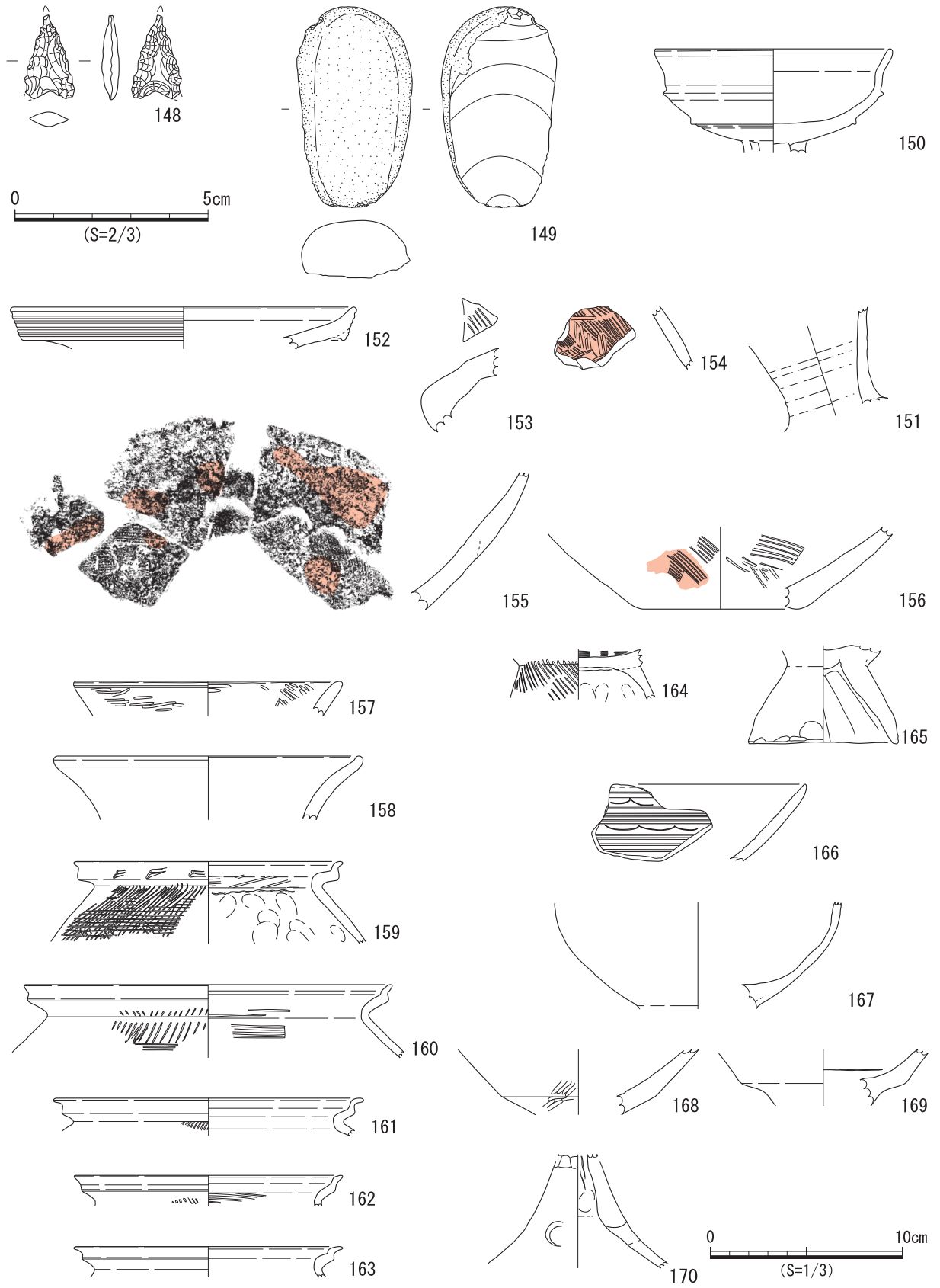
層出土遺物のうち、遺構との関連が考えられるものについては、各遺構の項において詳述しているため、ここでは省いた。

148は石鏃である。平成26年度の試掘・確認調査で出土した。横長のチャート剥片を素材とし、側縁は直線的に整えている。基部はくの字状に整え、先端は折損している。

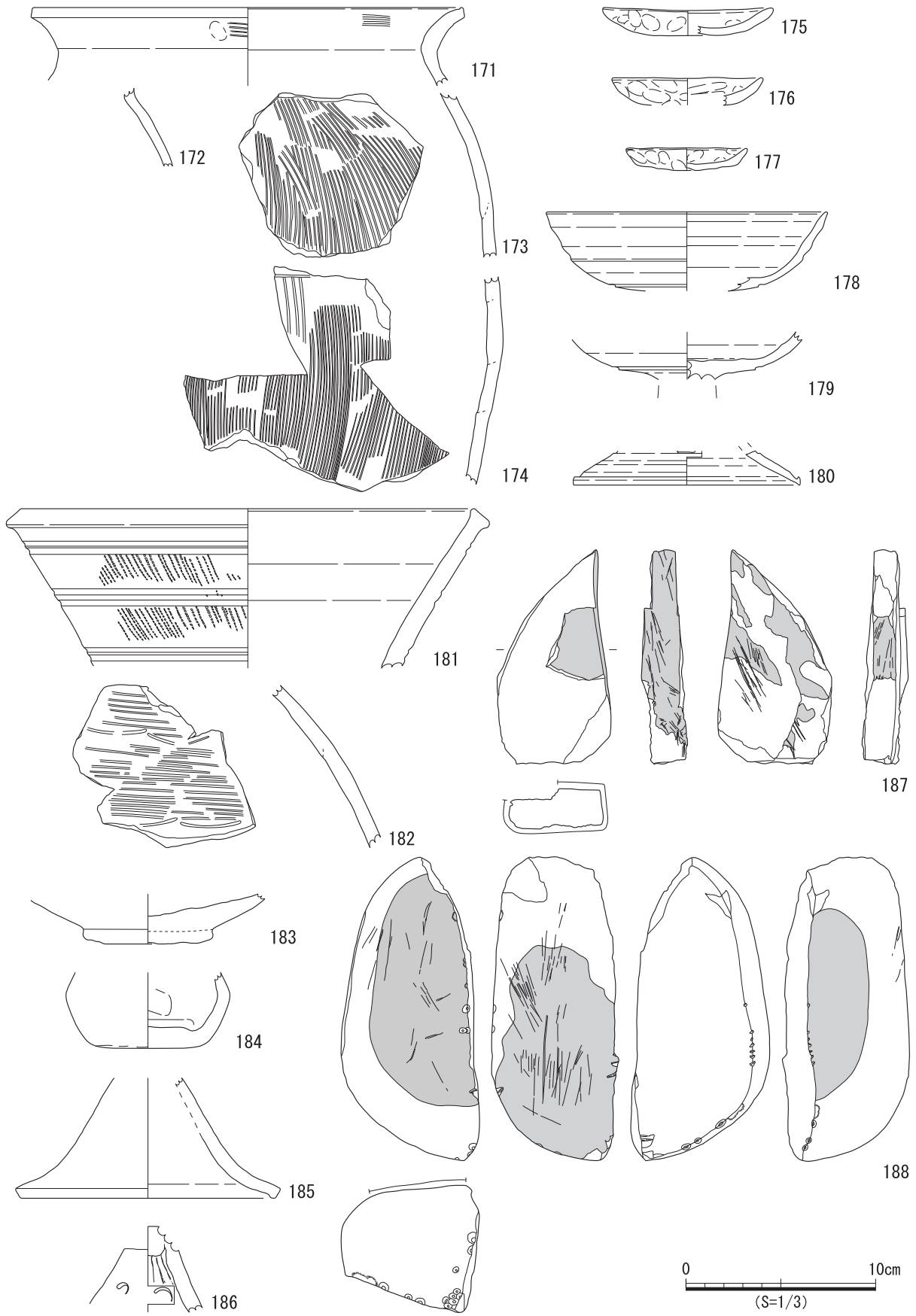
149は攪乱坑出土の敲石か。砂岩製で上下端に敲打痕が残る。

150～177は、AR14～AS17グリッドの遺物包含層から出土した。150は須恵器無蓋高坏の坏部である。外面に明瞭な2条の稜が巡る。基部に三方透かしの痕跡が残る。畿内系の明るい色調のもので、TK217号窯式期の古い段階に併行する。151は須恵器平瓶の頸部である。152・153は広口壺の口縁部である。152は端部の垂下拡張がわずかに残り、端部外面に6条の凹線が巡る。153は、口縁内面に段を有し、ヘラ描きによる斜め方向の文様がわずかに残り、また段より内側には赤彩を施していた。154・155・156は壺の体部片である。154は外面に縦位のハケ目調整ののちヘラミガキや列点文、赤彩を施す。155・156は外面にハケ目調整ののち赤彩を施す。157・158は壺の口縁部片である。157は内外面にヘラミガキ、端部は横ナデ調整している。158の口縁部は外反し、端部を丸く収める。調整は内外面とも摩滅して不明である。159～164はS字状口縁台付甕の口縁部及び底部から脚台部にかけた破片である。159はA類である。口縁部外面に押引刺突文がみられる。160～163はB類である。体部外面にハケ目が残り、164は脚台部である。外面にハケ目、内面にはユビオサエが残る。また、底部内面には横ハケが僅かに残り、165は台付甕の脚台部である。厚みがあり、内外面にナデ調整、外面端部付近にはユビオサエの痕跡が残る。166～170は高坏である。166は坏部である。外面は摩滅で調整不明であるが、内面には沈線と2段の連弧文がみられる。167は内外面ともに摩滅で調整不明である。168・169は有段高坏の坏部である。168は外面にヘラミガキの痕跡がわずかに残り、内面には煤が付着する。169は内外面とも摩滅によって調整は不明である。170は脚部で、外面は摩滅によって調整不明であるが、内面には成形時の絞り込み痕跡とユビオサエが残る。円孔が3箇所に分かれていたと思われる。171～174は長胴甕である。接合はしなかったが、近接した場所から出土しており、胎土の色調や器壁の厚さに類似性があるため、同一個体の可能性が高い。口縁部は外反し端部を上方につまみ上げる。体部外面には縦位のハケ目調整、内面には横位のハケ目調整やユビオサエ、ナデ調整などを施す。175～177は中世の土師器皿である。いずれも内外面にユビオサエやナデ調整を施す。175はB2-b類、176はC1類かC2類、177はC1類に分類できる。

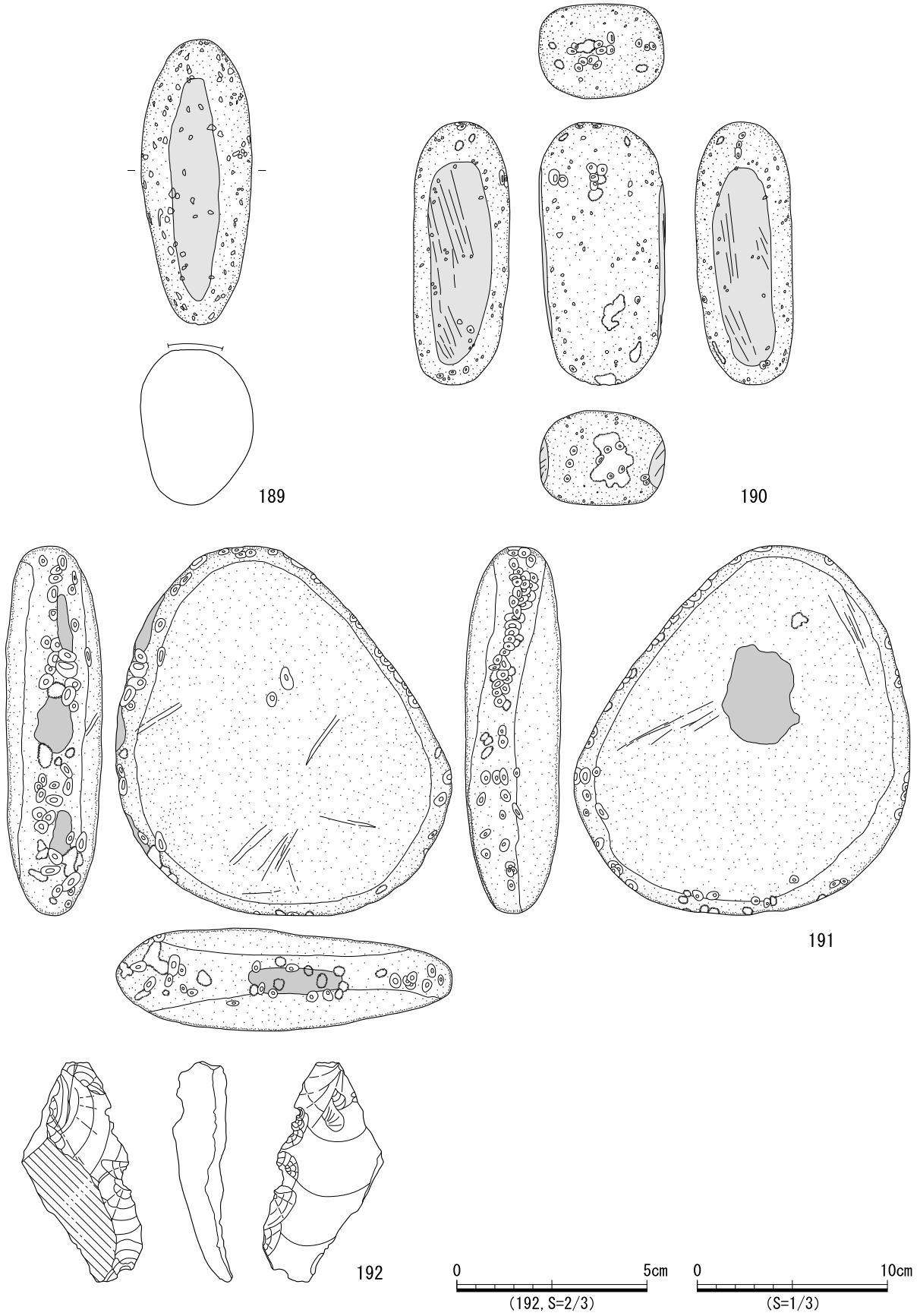
178は須恵器坏身である。内外面ともにナデ調整を施す。179・180は須恵器高坏である。ともに4号古墳のすぐ南側から出土しており、周辺から出土した須恵器の破片の中には、4号古墳出土土器と接合したものもあるため、4号古墳に埋納された副葬品の一部である可能性がある。179は坏部で、内外面ともにナデ調整を施し、外面下半に1条の凹線を巡らす。180は脚端部で、4号古墳出土の15に類似する。181は須恵器甕の口縁部である。5号古墳の西側から出土した。口頸部は外反して開き、端部は内傾する面を形成して下方に拡張する。外面に2条1組の凹線を3段に巡らせ、凹線によって区画された2段には縦位の櫛描列点文を施す。内面は自然釉が付着する。182・183・184は土師器壺である。182は体部である。外面に横位のハケ目ののち、円弧文を2段に施す。内面にはユビオサエの痕跡が残る。183は底部である。器壁が厚く底部外面はほぼ平坦で、内外面とも摩滅によって調整は不明である。184は小型壺である。BR8グリッドから出土しており、SM1の造成土に混入していた



第108図 試掘坑・攪乱坑・遺物包含層・表土層出土遺物(1)



第109図 試掘坑・攪乱坑・遺物包含層・表土層出土遺物(2)



第110図 試掘坑・攪乱坑・遺物包含層・表土層出土遺物(3)

可能性もある。上半が欠損しており、内外面にナデ調整を施す。畿内の丸底壺を真似たものか。185・186は高坏の脚部である。185は外反しながら裾部に至り、内傾する面を形成して端部に達する。内外面とも摩滅によって調整は不明である。186は内面に成形時の絞り込み痕跡が残り、2孔1対の円孔を2方向に穿っている。187～192は石器である。187・188は砥石である。いずれも9号古墳石室北側の墳丘上面で出土した。187は4箇所、188は2箇所の砥面を有し、仕上げ砥と思われる。刃物の刃を立てて研いだ痕跡も観察できる。石材は泥岩・粘板岩・フォルンフェルスの何れかと思われる。188は砂岩製で3箇所に砥面を有し、また敲打痕が残ることから、敲打石を転用した可能性が考えられる。189は安山岩の磨石で、磨面は1箇所である。摩耗痕が残る。190は流紋岩の特殊磨石である。磨面は2箇所、摩耗痕が残る。敲打痕も数カ所観察できる。191は砂岩の敲打石である。側縁部分に敲打痕が観察でき、所々に磨面も観察できる。192は2・3号古墳東側の表土から出土したRFである。石材はチャートで、縦長の側縁に連続的な剥離痕を残す。

## 注

- 1) 県内では、当センターが調査を行った関市の砂行遺跡や深橋前遺跡などでも、同様の堅穴建物を確認している。報告によれば、斜面下方側に壁際溝が巡る例はあるものの、明瞭な壁を設けている事例は確認できていない。しかし、丹治篤嘉(2013)の報告のように、掘方の掘削土を斜面下方に積んで壁としている事例も報告されている。
- 2) 各務原市の蘇原東山6号古墳では、周溝から古墳に直接関係しない平安時代の須恵器や灰釉陶器がまとも出土し、さらに石室を中世に墓坑として再利用した状況について報告されている。このような状況について渡邊博人は、「時代を超えて古墳(塚?)が宗教的な信仰の対象として、あるいは祭祀の場として意味を持ち続けた」ため、中世の段階において再び墳墓として再利用されたのではないかと推測している。  
渡邊博人1999「第9章 考察」『蘇原東山遺跡群発掘調査報告書』、各務原市埋蔵文化財調査センター58頁
- 3) 岡本直久(2001)は、品野西遺跡で検出された中世墓群について再整理を行い、土坑墓A(蔵骨器埋納か若しくは人骨が直接納められた土坑)、土坑墓B(床面及び壁面が赤く焼き締まり、人骨が多く遺存し、碗類等の副葬品・供献品が納められた土坑)、火葬施設(床面及び壁面が赤く焼き締まり人骨や陶器等をほとんど残さない土坑)の3つに分類した。そのうち火葬用土坑をそのまま墓とする土坑墓Bの形態を「火葬施設墓」と呼称しているが、副葬品や供献品が納められていなくても、人骨が多いか少ないかが土坑墓Bと火葬施設を区別する基準となっている。
- 4) 近隣では、岐阜市鷺山の鷺山市場遺跡、各務原市須衛町の船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡で類似する火葬施設が確認されている(公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団2012、財団法人岐阜県文化財保護センター2000、財団法人岐阜市教育文化振興事業団1999)。また岐阜市長良の城之内遺跡では内部に火葬の痕跡の残る墓坑が検出されており、火葬墓と推定している。